

George H. Mead のコミュニケーション論について

(修士号請求論文, 東京大学大学院社会学研究科, 1982年12月提出)

後藤 将之

〔はじめに〕

以下は、1982年12月に提出された、筆者の東京大学大学院社会学研究科社会学専攻（B新聞学コース）における修士号請求論文の全文である。この時代の学位論文は手書きであり、国立大学に提出された学位論文は国有財産とされるので、長期保存を前提して準備されていた。当時、日本語ワープロはまだ普及していない。本論のオリジナル版も、B5版の一般的な横書き原稿用紙に、ブラックのインクと極細書きの万年筆で記された。

同じ目的から、ホワイトや修正液の修正を少なくするため、書き損じた場合は、新しい用紙にその冒頭箇所から何度も書き直した。本論を執筆するのに借りた6畳間じゅうに、書き損じた用紙が散乱したのを記憶する。準備に数年間を費やしたが、執筆したいは約6か月で一気に完成された。400字詰め原稿用紙で約560枚、この時代のこの研究科の修士論文としては普通の規模だろう。収録された20枚ほどの図も、筆者がインクと各種のペンで手描したものだ（今回、一部を除き、筆者がグラフィソフトOmniGraffleでデジタル化し直した）。

本論は、同コースに提出された学位論文では、それまでで戦後第2位の評価だったと事後的に聞いた。もはや40年近く昔のことであり、明記してもよいと判断した。筆者は2019年度末をもって退職する。なお、本学位論文の主査は稲葉三千男教授、第一副査は岡部慶三教授、第二副査は浜田純一助教授（全て東京大学新聞研究所）だった。

本論の主要な部分は、ほぼそのまま、1988年『ジョージ・ハーバート・ミード コミュニケーションと社会心理学の理論』（弘文堂）として刊行された。ただし大量の「注」の一定度を省略し、G・H・ミードの伝記的事実を冒頭に追加するなど、一般性を意識した編集が行われた。分析の実質と主張は両者で同一だが、このような制約から、オリジナル版は部分的に加除され、全く同一の内容と形式で再現されたのではなかった。上述のようにオリジナル版は手書きであり、提出先のホームページでも公開されていないようだ。刊行された版も出版後数年で絶版となった。こうした事情で、本論が原型に近い形で一般に公表されるのは、1982年の完成以来、今回が最初である。上掲書の刊行後、オリジナル版の方を参照してほしいと感じる機会が多々あった。今回、40年近く経過して、その希望がかなえられた。

上記のような執筆条件もあって、オリジナル版には、表記や送り仮名の振れが、現在の基準からするとままみられる。明瞭な誤字脱字やミススペリングも残存していた。あまりにも古くなった学術表記の習慣（「より厳密」の「より」を「ヨリ」と書く、H. Blumer を Blumer, H. と書く等）もあった。執筆

時間の制約から、自明な年号などは略記し、「1927年」ではなく「'27年」としてあった（これらは当時、一般的な表記法だった）。全てそのままにすることも考えたが、読みやすさを配慮し、以上のように明記した上、現在の一般的な形式に修正できる箇所は修正した。また「ルビ」と「圏点」が重なる部分は、オリジナルでは「圏点を文字の下に付ける」対応をしたりしたが、これは現在一般的ではないので、そこだけ圏点を省略するなどした。こうして、一定数の誤字、誤記、送り仮名の振れ、略記、表示上の限界などを修正したが、その種類と総量は多くなく、内容に影響するものではない。このタイプセットにあたり、詳細な指摘を頂いたヨシダ印刷の担当者諸氏に感謝する。

この後、筆者は、1996年に、カリフォルニア大学サンタバーバラ校の社会学大学院にて、ミードの主要な公刊論文をテキスト・データベース化し、その分析に依拠した Ph. D. 論文を執筆して、Ph. D. in sociology の学位を得た。この Ph. D. 論文の方は、アメリカの大学院での学位論文なので、完成直後から学位論文複製サービス University Microfilms International に登録されており、そこから容易に入手可能である。

このような形で、自分の代表作のひとつを、40年近くを経て、引退する直前に、初めて完全版として公表できることを、筆者は心から喜んでいる。ご迷惑をおかけしている成城大学大学院文学研究科に深く感謝する次第である。

2019年11月 後藤 将之

On George H. Mead's Theory of Communication

GOTO Masayuki

Abstract

This is a full digital-format reproduction of the author's 1982 Master's Thesis written in Japanese, submitted to the Graduate School of Sociology at the University of Tokyo on the subject. The author examines G. H. Mead's most of varied publications, manuscripts and students notes, along with many later commentators' discussions on Mead's thought on the nature of mind, self, society and communication processes.

Special attentions were paid to an adequate reconstruction of Mead's own original thought system, considering as many later commentaries and discussions as possible. Relationships between Mead's own thought and the following sociological and social psychological groups' assertions on his thought are also critically examined. The author insists that Mead's thought, if related in a systematic fashion, can be shown as a wide-encompassing system of natural scientific evolutionary social thought, which includes human being's physiological, psychological, sociological and symbolic levels of existence and connects these levels all together in highly dynamic interacting ways.

This paper became the starting point for the author's 1996 Ph. D. Dissertation, an earliest example of text database analysis of Mead's writings, at the University of California at Santa Barbara, under guidance of Mead specialists Professor John D. Baldwin and Professor Tamotsu Shibutani, with two more dissertation committee members Professor John Mohr and Professor Mark Juergensmeyer of the UCSB Graduate School of Sociology.

序

思考には、客観主義的な方向と主観主義的な方向の二種が大別される。これに対して、哲学、心理学、社会学という三種の学の区別をクロスさせるならば、六つのセルが得られるだろう。

George Herbert Mead (1863-1931) の遺した思考は、これら六種類の領域にまたがる幅広い範囲からの関心を喚起し、その思考に関する大量の論述を生ぜしめた。

各々の領域の代表的論者として、客観主義哲学からは D. L. Miller, 主観主義哲学からは M. Natanson, 客観主義心理学からは L. S. Cottrell, Jr., 客観主義社会学からは故 M. H. Kuhn, 主観主義社会学からは H. Blumer という名前を挙げるができるだろう。(筆者は、Mead を論じた主観主義心理学者を知らない。なお、以上の区分はすぐれて形式的なものである。)

本論は、客観主義的な立場に拠りながら、Mead の思考の特に社会科学的側面を整理して再構成し、その「コミュニケーション」論の側面を検討しようとするものである。その問題関心と目的は、以下の本文に明示した。従ってそれについてここで語る必要はない。

しかし、筆者にそうした主題を選択させるに至った契機については、多少とも触れておくべきであろう。

筆者にこの主題を選択させた契機は、ひとつの〈異和感〉、つい数年前まで語られていた「マス・コミュニケーション」研究における「コミュニケーション」のイメージと、現在の「(マス) コミュニケーション」研究におけるそれとの間の懸隔に対しての意識に起因するものである。かつて「コミュニケーション」は、多少とも「客観的」な意味をこめて語られていた。いま、「コミュニケーション」とは主観的な、或いはせいぜいのところ間主観的な事態として語られるにすぎない。けれども筆者の日常的な感覚は、どうしてもこの概念に、多少とも客観的な意味合いを求めようとするのである。

もとより「コミュニケーション」なる事態は、人間経験の客観的位相と主観的位相の狭間において成立する現象である。従って、全き客観的「コミュニケーション」など存在する事は考え難い。同時にまた、全き主観的「コミュニケーション」とは、一種の形容矛盾にも思われるのである。

他者は不可知である、という強い意識が、ひとつの強迫観念の如くにこの社会の大きな部分を覆っている。社会的存在である研究者は、あたかもそれに呼応するかの如く、「コミュニケーション」とは相互主観的な了解の過程である事ばかりを強調する。人々は他者に怯え、他者を脅かす自らにまた怯える。こうした現実に対して、上の如き「コミュニケーション」観がおそらく適切であり有効でもあろう事を筆者は認める。しかしそれが全てであり、それで十分であるのかは極めて疑わしい。少なくとも筆者は、その事を単純に認めるわけにはゆかない。筆者が語ろうとしているものは、「コミュニケーション」であって、ただ「了解」や「解釈」にのみ尽きるものではないからである。要するに、「コミュニケーション」を語る以前に、たとえどれほど未熟であろうとも、「コミュニケーション」の存在保証が示されねばならないと考えたわけである。しかもそれは、通常の意味で実証的に行われなくてはならない。

今世紀初頭の三十年間を通じて、George H. Mead は他者の可知性を主張し続けた存在であった。

その思考を検討することにより、筆者は自らの語彙目録の中に、「コミュニケーション」の一語を再登録したいと希う。

およそ以上が、過去四年間筆者の内部に燻りつづけてきた〈動機〉である。

☆ ☆ ☆

なお、一人の人間が実質六ヶ月にわたり、ほとんど何らの拘束を受ける事もなく六畳間に自閉する自由を享受するにあたっては、諸方面からの様々な援助を受けている。

日本育英会奨学金（一般貸与）により筆者の居住空間は保証された。東京大学大学院社会学研究科新聞学コースの諸氏および外国人留学生諸氏からは様々な意味で様々な影響を受けた。東京大学新聞研究所の所員および事務部職員の方々には、過去四年間にわたり御迷惑のかけどおしである。指導教官をお引き受けいただいた同研究所・稲葉三千男教授には、多忙な所長職の合間をぬって、潜在的・顕在的な形式での様々な御助言をたまわった。最後に私事にわたるが、筆者の家族は常に筆者に最大限の自由を許してくれている。

以上、諸方面の方々の御援助に深く感謝する。ただし、結果としての本論についての責任は、構想から清書に至るまで、その一切を筆者が負うべきものである事はいうまでもない。

最後に僭越なる一言を付け加えるなら、本論中の記述のたとえ一行なりと、マス・コミュニケーション及びコミュニケーション研究の領域に何がしかの寄与をなしうる部分がもし仮に存在し得れば、筆者にとってそれは無上の幸いである。

1982年12月 後藤 将之

目次

序	4 頁
目次	6 頁
図表目次	8 頁
第 I 章 問題関心, 目的および対象	9 頁
第 1 節 問題関心と目的	9 頁
1) コミュニケーションの「交流」と「意味づけ」	11 頁
a) コミュニケーションの「交流」	12 頁
b) コミュニケーションの「意味づけ」	14 頁
2) コミュニケーションの「根拠」と「適用」	16 頁
a) 「交流」の「根拠」と「適用」	16 頁
b) 「意味づけ」の「根拠」と「適用」	18 頁
第 2 節 対象	22 頁
1) 文献の検討	22 頁
a) 公刊論文	22 頁
b) 草稿	23 頁
c) 講義録	23 頁
d) 編集作業	23 頁
2) Mead と象徴的相互作用論	25 頁
a) 相互作用論のヴァリエーション	25 頁
b) Mead と Blumer	28 頁
c) Mead と Cottrell	29 頁
第 II 章 Mead における思考と説明の枠組	31 頁
第 1 節 Mead における思考の枠組	31 頁
1) 進化過程としての自然・社会および個人	32 頁
a) 進化における「自然」と「人間」	32 頁
b) 弁証法から進化論へ	34 頁
c) Mead 進化論の性格	36 頁
2) 思考の自然科学的側面	38 頁
a) リサーチ・サイエンス：科学方法論	38 頁
b) 生理学的概念への依拠	40 頁
c) 「方法」としての行動科学	42 頁
3) 思考の人間科学的側面	45 頁
a) 社会性	45 頁
b) 主体性	49 頁

c) 「I」の行方	54頁
第2節 Meadにおける説明の枠組	59頁
1) 文明論的アプローチの問題性	59頁
a) 三つの始源問題	60頁
b) Meadにおける始源問題(i)	61頁
c) Meadにおける始源問題(ii)	64頁
2) 「社会的行動主義」の問題性	68頁
a) 「社会的行動主義」の内容	68頁
b) 「社会的行動主義」の構成	73頁
c) 「社会的行動主義」の問題	78頁
第三章 Meadにおけるコミュニケーションの論理	86頁
第1節 Meadにおけるコミュニケーションの認識と位置	86頁
1) コミュニケーションの認識	86頁
a) 「コミュニケーション」概念の使用	87頁
b) 「共感」, 「態度取得」および「コミュニケーション」	89頁
2) 「社会的行動主義」と「コミュニケーション」	91頁
a) コミュニケーションの「客観的」局面	92頁
b) コミュニケーションの「主観的」局面	93頁
第2節 Meadにおける「コミュニケーション」論：評価と批判	97頁
1) コミュニケーションの「交流」と「意味づけ」	97頁
a) コミュニケーションの「交流」	98頁
b) コミュニケーションの「意味づけ」	101頁
2) コミュニケーションの「根拠」と「適用」	103頁
a) 「交流」の「根拠」と「適用」	104頁
b) 「意味づけ」の「根拠」と「適用」	107頁
結	111頁
注	112頁
第I章への注	112 - 120頁
第II章への注	121 - 155頁
第III章への注	156 - 162頁
参考文献	163 - 172頁

図表目次

図 1	McLeod & Chaffee の共志向モデル	19 頁
図 2	Pearce & Stamm の共志向モデル	20 頁
図 3	Mead の「著作」の執筆・講義採録年代	24 頁
図 4	Mead の著作内容および再録記事	24 頁
図 5	「文明論」の枠組	60 頁
図 6	個人的「認知」と「コミュニケーション」の包含関係	115 頁
図 7	「コミュニケーション」の‘合理論’および‘経験論’モデル	116 頁
図 8	Citation Pattern From MSS in Natanson, 1956, Chapter II	139 頁
図 9	Citation Pattern From PA in Natanson, 1956, Chapter II	139 頁
図 10	Citation Pattern From PP in Natanson, 1956, Chapter II	140 頁
図 11	「社会的行動主義」と「I」の関係概念図	141 頁
図 12	Parsons モデルと Mead モデル	144 頁
図 13	Mead 的概念の発生史	147 頁
図 14	「社会的行動主義」による個人と社会の「問題解決」過程の図式化	151 頁
図 15	「社会的行動主義」による「問題解決過程」とコミュニケーション	158 頁
図 16	コミュニケーションの事実と意識	159 頁
図 17	コミュニケーションと伝達	159 頁
図 18	「社会的行動主義」における「交流」と「意味づけ」の概念図	160 頁

第I章 問題関心，目的および対象

本論は、これをその論述構成の面から眺めれば、題目の通り、「George H. Mead のコミュニケーション論について」の検討を試みたものである。

しかし、何故に Mead なのか？ すでに Mead を主題とした研究論文は数多くあり、およそ検討されるべき問題は全て検討され、その限界も明示されているように見える。にもかかわらず、ここに又、屋上屋を架すかの如き Mead 論を展開するにあたっては、それなりの理由と問題関心とが示されてしかるべきだろう。

以下、本章第1節では、Mead 論を展開するについての筆者なりの問題関心の所在とその目的とを提示し、次に第2節において、本論で検討する対象についてこれを明示する。

第1節 問題関心と目的

はじめに、マス・コミュニケーション及びコミュニケーションの実証研究史（特に、受容過程の研究）に関して、筆者が理解しているところから論を進めたい¹⁾。

1940年代に開始されたアメリカのマスコミ実証研究がその後の約20年間に提出した知見は、以下の如く要約されよう。すなわち、マスコミの送り手と受け手の間には社会的、心理的な諸々の介在要因が存在し、これら介在要因によって、しばしば〈弾丸理論〉〈皮下注射モデル〉として包括的に総称されるが如き、「マスコミ内容が大衆行動に対して直接的な効果をもたらす」といった説が、実際上まず妥当しない事を示した、ということだ。

ここに、介在する「社会的」要因とは、〈バラバラな原子ではない〉受け手の社会的な関係、階層、地位、生活時間等々であり、これがためにマスコミ内容の直接的、包括的、一意的な伝達および効果発現は妨げられる。

「心理的」要因とは、〈受動的な原子〉ではない受け手の先有傾向として総称される、主体性、能動的な認知、選択的な接触等々であり、これがためにマスコミ内容は主体的な動機に基づいて主観的に知覚され能動的に選択される結果、その効果は直接的、包括的、一意的な発現を妨げられる。

かくて、「マスコミの効果」は全否定されたとはいわずとも検証もされず、〈マスコミ無効果説〉が一時期いわばドグマ化した。

以上の経緯の一般的帰結として、次の事実に筆者は特に注目したい。すなわちそれは、二つの基本的な人間像、第一に〈「社会的」要因に基づくところの、その属する社会構造において多様な個人〉、第二に〈「心理的」要因に基づくところの、その情報選択行動において能動的、主体的な個人〉、という人間像が一般的認識として焦点を結び、強調されるに至ったという事実である。筆者の問題関心は、基本的にはこの事実（の意味すること）に帰着する。

〈弾丸理論〉が成立しえない以上、もはやマクロなマス・コミュニケーション過程をミクロなコミュニケーション過程から截然と分離することは不可能となる。ミクロな対人コミュニケーション過程なく

してマクロなマス・コミュニケーション過程を論ずることは困難となるはずだ。

結局のところ、〈弾丸理論〉は——それが現実に信奉されていたとすれば²⁾——人間行動に関する一種の〈テクノロジー決定論³⁾〉だったといえるだろう。他のあらゆる要因をネグリジブルなものとして、「マスコミ」という新たなテクノロジーが人々の行動を決定しまた支配する。こうした基本的発想の下では、(当否はともあれ)他の要因を考慮しないですむが故に、すぐれて大胆かつ一般的な仮説命題を提起することが許される。しかし、ひとたびそのテクノロジーが社会=心理的な要因⁴⁾から独立であるとはいえない事が判明するや、「マスコミ」も又、その中で人間的な生活の全てが生起する社会過程一般の一部として再配置されることになる。

かくて、社会過程と心理過程とを分析するあらゆる社会科学と心理学とに共通するあまたの困難性が、この分野の研究に於いても考慮されないではいられなくなる。

長引くマスコミ研究(主に受容過程研究)の「沈滞」や「飢饉」⁵⁾が続く一方で、コミュニケーション研究(コミュニケーション基礎過程の研究)は、この間に多様な展開をとげた。もっとも、この言明は必ずしも正確ではない。なぜなら、コミュニケーション研究を特にコミュニケーション基礎過程の研究として、つまり相異なる二人の人間のあいだに如何にしてコミュニケーションが成立するか、という問題を主題として研究するものとして把握する限り、この意味でのコミュニケーション研究は、たとえそれが意識的に〈コミュニケーション〉を研究主題として掲げてはおらずとも、実際のところ、ほとんど学的営為の全歴史を通して探究されてきたものに他ならないからである。

話を近現代に限定するにしても、例えばそこには社会科学領域における M. Weber の行為理論における「他者理解」の問題以来の伝統が存在するし、哲学および心理学領域においては、観念の客観性如何を(つまり伝達可能性)論じなかった思想家を捜す事の方が難しいだろう⁶⁾。そして、現代の我々がコミュニケーション論の視点から論及する多様な学問領域での研究者達(主に人類学、社会学、心理学、言語学、哲学およびその学際領域)は、それぞれの分野におけるこのような〈伝統〉を継承しているといえる。

こうして、〈弾丸理論〉の裏づけを失ったマスコミ研究が社会過程一般の内部に再配置されたとき、その事が意味したのは、もはやコミュニケーション過程から独立には自らを語り難くなったマスコミ研究が、コミュニケーション研究の領域を介して、前述の如き、長大な学史の残した莫大なる遺産(および、より莫大な未解決の諸問題)を継承せざるを得なくなった、という事実に他ならなかった。

ところで、コミュニケーション基礎過程の諸研究は、いかにしてコミュニケーションが(特に対面状況で)可能となるかの条件を問う。かくていまや、マス・コミュニケーションはおろか対面状況でのコミュニケーションにおいてさえ、その素朴實在論が信奉されることはむしろ稀であるように見える。いまや我々は、個人の情報選択における主体性と能動性について慎重に配慮し、意味の間主観性について多く論じ、相互主観的な伝達と了解と意味付与に基づいて相互的に維持される社会的世界について考察する。

こうした学の方角性の背後には、ひとつの基本的な人間観、〈弾丸理論〉を崩壊に至らしめたのと同じ種類の人間観が存在しているように見える。それはすなわち、〈その属する社会構造に於いて極めて

多様であり、その認知行為とその意図に於いて又極めて主体的かつ能動的な個人」という人間観である。

この人間観がすぐれて現実的かつ現代的であると感じられるが故にか、我々は今日、例えば Bridgman の格言を疑うことはない。「自分が青と称える感覚は、隣人が青と称える感覚と同一であるか」否かを問う事は「無意味な質問」であるとみなすだろう [Bridgman, 1928, 邦訳 44-5 頁]。また我々は、A. Schutz に従って、「……観察者が……行為者の心の中で生起する事柄を記述しようとするなら……観察者はその行為者の思考の流れの全体的な過程のなかに」入りこまなくてはならぬ、とする立場にも共感するだろう [Sprondel, ed., 1977, 邦訳 116 頁]。しかもなお、「汝の経験の特殊な性質は私にとってはまったく未知である」[Wagner, ed., 1970, 邦訳 155 頁] ことをも認めてはばからないであろう。(今日の我々は、上掲の基本的な人間観のゆえにか、経験論に極めて好意的であるように思われる。)

けれども、上に粗述した如き基本的な人間観に基づくと、他の領域は知らず、コミュニケーションの研究の領域には、それに特個的な困難が生じてくるように思われてならない。それはとりもなおさず、「コミュニケーション」というこの概念のうちに、常にとはいわずとも極めてしばしば相互に対立するように見える二つの焦点が存在しており、上に粗述した如き人間観にのみ依拠するとき、その焦点の一方のみが Close-up される事になりがちである、という(筆者の)認識に(或いは危機感に)起因するものである。

その焦点の一方を〈交流〉、他方を〈意味づけ〉と本項では呼ぶ⁷⁾。

1) コミュニケーションの「交流」と「意味づけ」

影響力の大きかった現象学的社会学のマニフェスト [Berger & Luckmann, 1966, 邦訳 1977 年] は、その「序論」によれば、「[知識社会学の] 系統立った理論的説明」[同書 27 頁] を目的として執筆されたものである。この著作のコミュニケーション論に対する意味は、一言でいえば、次の事だ。すなわち、この邦訳書で 360 頁を超える著作は、その中で一度たりとも「コミュニケーション」なる用語ないし概念を用いずに書かれている⁸⁾。かわりに頻出する語句は、理解、解釈、意味づけ、伝達、内在化、等々である⁹⁾。

確かにそれは、もとより表記の問題にすぎない、ともいえるだろう¹⁰⁾。しかし、それでも次の事実に変わりはない。つまり、「系統立った理論的説明」を知識社会学について、従って又その扱う「社会」に対して行うに当たって、(著者らの意図が成功している限り)、「コミュニケーション」という用語ないし概念は不要だ、という事である。そうだろうか？

「コミュニケーション」概念の特殊な問題性、そしておそらく Berger & Luckmann がこの用語の使用を避けた事理由は、1952 年に書かれた W. Schramm による「コミュニケーション」の曖昧な定義の中に明らかに読みとる事ができる。30 年昔には、このように定義することが許されたのだ。

「我々がコミュニケーションするとき、我々は誰かとの間に共通性 commonness を成立させようとしている。つまり我々は、情報、観念、又は態度を分有 share しようとしているのだ」[Schramm, 1952 in Schramm ed., 1955, p. 3, 圏点引用者]。

上の定式化には、すぐれて困難な言明が含まれている。「何らかの共通性を成立」させ、それを「分有」

する、という部分である。そのより厳密な定義は可能だろうか。二人の間に「共通性」が成立した事は、何によってどのようにして知られうるのか。「共通性」とは、「共通である」という（相互主観的に両者が認めている）意識か。（そうであるならば、適切な測定のもとにそれを知る事が可能であるかも知れない。¹¹⁾）或いは又、両者の意識の「共通性」という（神の視点から両者の意識に立入検査をした結果としての）限定詞なしの事実なのか。（であるならば、その検証は極めて困難だろう。のみならず、当事者である兩人にとっては、それは相互主観的に意識されてはいない [いわゆる「多元的無知」 pluralistic ignorance の状態¹²⁾] かも知れない。）

かくて、「共通性の成立」は極めてやっかいな要件である。しかも困ることには、「コミュニケーション」概念は、この概念の通常用法——それが専門的論文においてであれ日常会話においてであれ——に従って用いられるとき、常に多少とも、潜在的にはあっても、この「共通性」の要件を含意しているように見える、という事だ。「コミュニケーション」概念から、この「共通性」の要件を除いてしまえば、この概念は通常「伝達 transmission」と呼ばれている概念と等価になる。つまり、(コミュニケーションなり伝達なりの) 意図の有無は問題にしても、その結果いかにについては詳細に検討しない、というわけだ。

結局のところ「コミュニケーション」概念は、その行為の結果の評価において「共通性」の要件を有するが故に分析概念として特殊なのであり、しかもその「共通性」の要件が、多くの場合すぐれて曖昧な形であるにもせよ、ひとつのあたかも観察・識別可能な事実としてあるかの如く要求されている、という点において独自の困難性を持つのである¹³⁾。

この困難性について、例えば最近 Lang & Lang は次のような提言を行っている。

「<伝達> transmission という用語を用いることにより、精神の出会い a meeting of minds という意味での有効なコミュニケーションは存在するか否か、という問いから逃れることができる」[Lang & Lang, 1981 in Rosenberg & Turner eds., 1981, p. 654. 圏点引用者, <> 内は原文の強調]。

これは確かにひとつの妥当な方向かも知れない。概念の精度は増すだろう。しかし、すぐには是認し兼ねるものである。理由は言うまでもない。彼らが切りすてることを提言するまさにその部分にこそ、この「コミュニケーション」という概念の最も重要な存在意義があると考えられるからである¹⁴⁾。

以下、筆者が「コミュニケーション」概念の二つの焦点であると考ええる「交流」と「意味づけ」について各々記述する¹⁵⁾。

a) コミュニケーションの「交流」

「交流」すなわち〈ある情報内容が複数個人に客観的に同一な意味をもって共有されるに至ったという事実〉は、これを実証的に定義し測定する事が困難である。我々が他者の経験内容について知るのは、ただ相互主観的な合意ないし了解ないし測定を通してのみと考えられるからである。他者の頭の中を観察する事はできない、というのは現在ではもはや動かし難い程一般的に合意された条項であるようだ。(しかし一体、どうやってその「合意」は可能だったのだろうか?)

コミュニケーションの「交流」は、それ故、むしろその不在の相、ディスコミュニケーションの位相

において、より端的に表白される。

例えば、物理学者 Bridgman の「告白」は、その好例である。

「私は二つの態様において行動する。——一つは公的パブリックな態様において、いま一つは自分が仲間にも侵されない一個の孤立した存在であると感じられる私的プライベートな態様において」[Bridgman, ただし Sullivan, 1947, 邦訳5-6頁より引用]。

のちに Marcuse らによって激しい批判を受ける「操作主義者」¹⁶⁾ Bridgman の上掲の「告白」には、しかし大多数の人々が共感するのではなからうか。ここに示されているのは、およそいかなる人間であれその個性 individuality が成立するについて通過したであろう一種素朴な実存感覚の表出である。私と外部とが切り離されているという意識、「私的」な私と「公的」な社会（他者）との間に「交流」の途は存在しない、という意識、そうした意識の切実なる認識である。

ある意味では¹⁷⁾、この認識に忠実であったが故に、Bridgman は自らの「絶対に私的な部分」を切り捨てなくてはならなかった。かくて、彼の「公的」な部分に属しうる概念の（意味の）規定、すなわち「概念とはそれに対応する一種の操作と同意語である」[Bridgman, 1928, 邦訳18頁、強調は原文]という「操作的定義」に自らを限定しなくてはならなかった¹⁸⁾。そして現在我々は、彼の格言に従って¹⁹⁾、「自分が青と称える感覚は、隣人が青と称える感覚と同一であるか」を問うても意味がない、と言いつたされている[同訳書45頁]。今日、このような「擬似問題」を問う者はいない——もっとも、例えば A にとっての赤の感覚が共産主義への好意的イメージを喚起し、B にとってのそれが共産主義への全き敵意と緊密に関係しているとなれば、SD 法という「測定」が登場してはくるだろうけれども。

「存在する事は知覚される事だ」と Berkeley は言った。同様にして、Bridgman は言うことになるだろう、「存在する事は測定しうるという事だ」と。こちらの方が確かにまだしも開かれている。Bridgman は、彼の「公的」な部分においては一種の「交流」の可能性を樹立した。彼のモノサシを媒介として、モノサシの目盛りが多義的でない限り、私の1cm はあなたの1cm だろう。ただし、私の命が1.01cm に賭けられ、あなたの命が0.99cm に賭けられていない限りは、だが²⁰⁾。

しかしながら、Bridgman が彼のモノサシによって失ったものは、それによって彼が得たものよりもはるかに大きい。彼は、彼のいう「私的」な部分における「交流」の可能性を放棄した。彼が行った事は、コミュニケーション・メディアをモノサシ＝操作言語という極力多義性を排した経路にのみ限定することによって、encode-decode 過程での誤解読 mis-interpretation の可能性をミニマムに押さえようとした、という事に他ならない。（経験科学[物理学]の論理科学[数学]化、と言って良いかも知れない。）

この手続きを介して彼が切り捨てた彼の「私的」な部分とは、しかし、結局のところ、彼の認識が世界を分節化してゆくに従って次第に析出してきたもの、経験によって形を与えられはしたが、実際にはそれ以前から存在していた彼の（「人間」という類クラスに属する）生理的・有機的な体制にすぎない。そしてそれ自体は、「共通なもの」、従って「交流」の可能性を許すものではないのか。「交流」は、単にモノサシによってのみ得られるものではないはずである。

かつて、コミュニケーションの「交流」をすぐれて簡潔な表現で稲葉 [1975, 11頁] は定義した。

すなわちそれは、「精神的他有化による精神的我有化」である、と。この定義の示されている論文の文脈から離れていうなら、筆者はただちに問い返さねばならない。この定義の意味するところは、「精神的他有化の意識による精神的我有化の意識」であるのか、或いはまた、「精神的他有化の事実による精神的我有化の事実」なのか、と。前者の意味であれば、その測定は可能であろう。後者の意味であれば、それを知る事は困難であろう²¹⁾。

さきに引いた定義（11頁）から約20年の後、Schrammはこの定義の弁明もとれる文章の中で書いた。

「コミュニケーション研究の初期においては……コミュニケーションは、ちょうど電気回路が電子を電球に送り込むごとく、何ものかを彼らの中に打ち込める、と考えられていた」[Schramm, 1971 in Schramm & Roberts eds., 1971, p.9, 強調は原文]。

まさに〈弾丸理論〉である。しかも電気回路の比喩は、現在でもそれを基本とした図式化が時おり見受けられる、例の「コミュニケーション図式」にまさに対応する。あの図式は見る者に、情報が（ノイズや encoder と decoder を介しつつも）どんな形であれ一方から他方へ流れ込むという視覚的印象を与える。あの図式は、それ故に、「意味づけ」よりは「交流」としてコミュニケーションを想起させる。

加えてあと二つの視覚的トリックは、A, B 両人の encoder と decoder とが、各々全く同一の図形で表示され、しかもその encoder と decoder とが、A, B 両人の各個体内部に内属するかの如く描かれている事だ。

この前者の視覚表示によって、それを見る者は、A, B 両者の意味解釈枠組の相違は、たかだか程度問題にすぎない、或いは基本的に同一である、という先験的印象を受ける事になる。

さらに、後者の視覚表示は、encoder と decoder とが、あたかも A, B 両人に生得的であるかの如き印象、すなわち意味解釈枠組はそれ自体はじめから完成された形で個体内に存在するかの如き印象を与える。実際には、encoder と decoder とは、それ自体意味づけられた特個的なもの、社会化の過程を通して個体のいわば外部にそれ自体意味解釈作用を受けつつ形成された〈生活史〉という名の特個的な歪率を有するレンズの如きものであるかも知れないのに、である。

要するに、Shannon-Weaver 図式から引き出された Old-Schramm 図式は、多様（であるといわれている）な意味解釈過程を極限まで一元化して表現する。しかも情報は〈電流のように〉encoder → channel → decoder と、個人の中から個人の中へと流れ込む。これがコミュニケーションの「交流」図式でなくて何であろうか？

もし事実がこれほどに単純明瞭であったなら、「コミュニケーション」の研究が要請される理由などどこにも無い。

しかもなお、近現代の思想を通して、これほどにあっさりコミュニケーションの「交流」の可能性が認められた事も稀なことなのではあるまいか。

b) コミュニケーションの「意味づけ」

「意味づけ」すなわち〈ある情報内容が複数個人によって相互主観的に同一な意味を持つものとして

了解されるに至ったという意識)は、これを近似的に測定することが可能である。実際のところ、ある「コミュニケーションの成立」が実証的に測定された、という事で通常意味されているのは、上の如き意味でのコミュニケーションの「意味づけ」としての成立が測定された、という事以上のものではない。つまり実証的に測定しうるのは、ただ、コミュニケーションの「意味づけ」のみである²²⁾。

何故なら、個人の感覚、知覚、認知はそれぞれある状況、ある状態における各個人に特個的なもの、多様なものである限り、もし、意味が常に「知られた(感覚、知覚、認知された)意味」であってそれ以外に情報処理経路を有していないのであれば、その「知られた意味」内容も又、常に各個人に特個的なもの、多様なものでしかあり得ないからである。

さらに、全個人に対して常に同一である意味ないしそれを与える状況が存在したとしても、それを知ることによってその事自体が「知られた」意味に転化してしまう²³⁾。

Schutzをかりて言うなら、「同じ対象を知覚していても、各人の知覚にはその人独自の『ここ』と現象的な『今』に由来する陰影が伴っている」のであり、従って「私が把握できるのは、いつでもせいぜい『他者の思われた意味』という極限概念の『近似値』にすぎない」という事だ[Wagner ed., op. cit., 邦訳149, 155頁]。

この思考様式に従う限り、感覚、知覚、認知という経験/外的世界への意味付与の過程は、「コミュニケーション」をもその一部として含むより上位の概念である²⁴⁾。情報内容は、もはや個人の中から個人の中へと〈電流のように〉流れ込む事はない。それは、いつでも知られたもの、意味付与されたものとして、主体的・能動的な知覚、認知の対象として、いわば外部にある。(そしてしかも、コミュニケーション内容だけが意味付与の対象であるわけではない、それは、その対象のごく小さな一部分である。)

人は意味の世界に生きている、より正確には、人はいかようにも意味付与・解釈の可能な世界に投げ出されている、という訳だ。だから人は、「世界は意味に満ちている」と歌う事ができる。しかし又、「世界に事実はない、あるのはただ解釈のみだ」といって発狂する事もできるだろう。何気ない視線の一瞥、無意味な咳ばらいひとつに対して尽きぬ意味付与を続けるが故に、対人神経症患者は不眠の夜明けをむかえる——空転する^{デコーダー}解釈機だ。ロビンソンのフライデーは幻像であっても一向に構わなかった筈である。

意味付与に対して開かれた世界は余りにも広い²⁵⁾——コミュニケーションの「交流」など銀河の中の砂粒に満たぬものであろう。人は意味を喰って生きるのだ(ならばパンは?——それが「パン」である限り)。意味が存在しないところには、どんなところにも意味を付与するのが人間である。

このような思考様式を続ける限り、それは——何らか特別な「中断」²⁶⁾が行われないと——独我論に接近する。或いはまた、良からぬ意味での「心理主義」に、意味付与と意味解釈の枠組ばかりが肥大化して、「人」はどこにも存在しなくなるだろう²⁷⁾。

こうした理論化の方向を可能とするのが、さきに述べた、〈弾丸理論〉を崩壊に到らしめた人間観と同様の基本的人間観である事は言うまでもない。「能動的認知」が情報処理過程の全てを包摂するとき、コミュニケーションは、ただ「意味づけ」としてしか語りえないものとなるだろう。そこに於いても、私は限りなくあなたに近づいてゆくことはできる。しかしそれが全て「知られたもの」、「意識されたも

の]である限り、私はあなたに触れることは決してできない。ゼノンの逆理の如く、近づく度に遠ざかってゆく。経験は、その真なることを教える。確かに。しかし、それほどまでに人は〈切り離されて〉いるのだろうか？

極論すれば、〈弾丸理論〉はコミュニケーションの合理論である。情報は、開かれた精神のまっさらな板に書き記されてゆく。あたかも電流が流れ込むように。それは恐らく、コミュニケーションの「交流」でもありうるだろう。これに対して、現代のコミュニケーション論の多くは経験論である。情報は、私とあなたの間にある。外部に。私とあなたとは、各々、その情報に意味付与し、それを構成する。そして相互主観的な合意に達する。そこに於いて「共有」されるものは、共有に関する相互主観的な意識ばかりだろう。これはまさしく、コミュニケーションの「意味づけ」であろう^{28) 29)}。

もし「コミュニケーション」が語られるべきであるならば、そこでは「意味づけ」とともに「交流」が語られなくてはならない。しかし、それを通常の意味で実証的に語ることは可能だろうか？これが本論における筆者の第一の問題関心である³⁰⁾。それを G. H. Mead のコミュニケーション論に対して考察する事が本論における筆者の目的の第一のものである。

2) コミュニケーションの「根拠」と「適用」

コミュニケーションは社会過程の一部である。従って、コミュニケーションが「交流」として扱われようが「意味づけ」として扱われようが、それは一定程度の「根拠」を与えられ、かつ、何らかの形で「適用」されるだろう。すなわち、「コミュニケーション」概念は、それ自体説明されることが要求されると同時に、それをもって他の事象を説明する。

従って、特定論者の「コミュニケーション」概念の扱いに関して、その「根拠」と「適用」とを問う事ができるだろう。これが本論における問題関心と目的の第二のものである。

そして、前項における筆者の理解が妥当であれば、「コミュニケーション」は二つの焦点「交流」と「意味づけ」を持つから、その各々について「根拠」と「適用」とを問うことができる筈である。

a) 「交流」の「根拠」と「適用」

コミュニケーションが「交流」としてのみ語られる事は現代のコミュニケーション研究においてはまづない。しかし、多少とも「交流」を含意するような研究、或いは「交流」と「意味づけ」という二分律を回避する特殊な概念用具をそなえた研究ならば存在する。

前者の一例として、G. Gerbner のグループによる一連の「暴力プロフィール」の研究がある。すでに、村松 [1982 in 竹内・児島編, 192-197 頁] による紹介等々でよく知られている研究であるから³¹⁾、本論の文脈に関係している部分について論じる。

Gerbner グループの研究は、いわば〈弾丸理論〉への、意図されたより洗練された形式での先祖返りである。その理論化の眼目は、TV というメディアが、「他と本質的に異なるものであり、新しいアプローチを要するものだという信念」[Gerbner, et al., 1976, p. 174] に基づいて、選択的接触や能動的な知覚といった主観的個人的要因を取って捨象し、TV 内容の影響力を、遍在的・非選択的・習慣的な、

国家による文化的教化 cultivation の手段である、とする基本的発想にある。そこで彼らは、TVに描かれた世界像というシンボル環境の性格を長期の内容分析で示し、これに対する接触度（視聴時間）の相異が、個人の「教化」度の相異となって現われると考える³²⁾。「視聴パターンを決定するのにより重要なのは、番組の流されている時間であって、個人の好みや番組への選好ではない」[ibid., p. 177]から、人々はいやおうなく生活構造の許す時間帯のTV内容に「教化」されてゆく事になる。遍在するTVは「アメリカ社会における中心的な文化的権力 cultural arm」[ibid., p. 175]なのである。「全ての社会は、自分達に、又、その子供らに対して、世界を説明する方法を発達させてきた」[ibid., p. 126]。かつては宗教が、現代ではTVが、その機能を果たしている。

かくて、Gerbnerらは、遍在するTVによるシンボル環境から、人々は共通の意識を（或いは「事実」を）提供される、と考える。彼らが知る事を欲しているのは、「メッセージの全体系が教化するのはどんなタイプの共通意識なのか」[ibid., p. 180]であって、個人行動のマイナー・チェンジではない。

本論の文脈からすれば、Gerbnerらは恐らく、コミュニケーションを「交流」としてより強く意識している。「交流」の「根拠」は、TVというメディウムの圧倒的な遍在性・習慣性・累積性である。その「適用」は、国家が正当化しようとしている共通意識とは何か、を析出させる事に対して向けられている。

このような理論化の方向から当然予想される如く、Gerbnerらの調査には批判が多い³³⁾。しかもその多くが、Gerbnerらの真意を理解していない、或いは無視しているように見える。確かに、彼らの調査は、いわば批判されるべく設計されている。〈主体的個人、主観的知覚〉と一声叫べばそれで終りである。にもかかわらず、筆者は彼らの調査を（或いはその基本的な意図を）支持したいと考える。それが、現代にあってはむしろ稀な、コミュニケーションの「交流」にかかわる調査であるからである。

さて、次に、「交流」と「意味づけ」という二分律を特殊な概念用具によって回避することにより、コミュニケーションの「交流」について語ることの可能な理論化が存在する。

例えば、現代機能主義社会学がそうである³⁴⁾。

機能主義社会学には、少なくとも二つの「アリバイ保証」が与えられている。第一に、それは現実そのものではなく、あくまで現実を説明するための概念図式又はモデルである。第二に、それは「潜在的機能」概念をもつ。

一般に、機能主義社会学においては、上位システム（特に社会システム）の存立にかかわる機能的要件 functional requisites の正・逆が、下位システム（特にパーソナリティー・システム）について問題とされる。そして、下位システムの上位システムへの機能は、周知の如く顕在的機能と潜在的機能とに二大別される。しかも、潜在的機能は「一定の体系の調整ないし適応に貢献する客観的結果」でありながらも、行為主体にとって「意図されず、認知されないものである」[以上、引用は Merton, 1957, 邦訳 46 頁, 圏点引用者]。つまり、機能主義社会学は、潜在的機能という概念用具によって、「主観的意向」と「観察しうる客観的諸結果」とを決定的に³⁵⁾分離する。従って、機能主義的に考える限り、ある「コミュニケーション」がその「事実的事態」において「交流」としてあるのか「意味づけ」としてあるのかを問うことなく、その（上位システムの存立要件にかかわる）「客観的結果」としての当該

コミュニケーションの機能を論じる事が可能となる。しかもそれは、あくまで現実のモデル、概念図式として提出される。

かくして、機能主義社会学においては、コミュニケーションに関して〈自由に〉語ることが許される。実際には、例えば Bales など、コミュニケーションの「交流」に関しては懐疑的である³⁶⁾。

さらに、機能主義社会学がこうした主題を本質的に論じえない、という訳でもないだろう³⁷⁾。要するに機能主義はその人類学での起源からして、基本的に社会の存立要件を検出する目的で発達した³⁸⁾。機能主義は、従って〈上〉を見る事が好きなのだ。上空を眺めるのに忙殺されて、自己の影が地面に黒く落ちている事には概して無関心なのである。

b) 「意味づけ」の「根拠」と「適用」

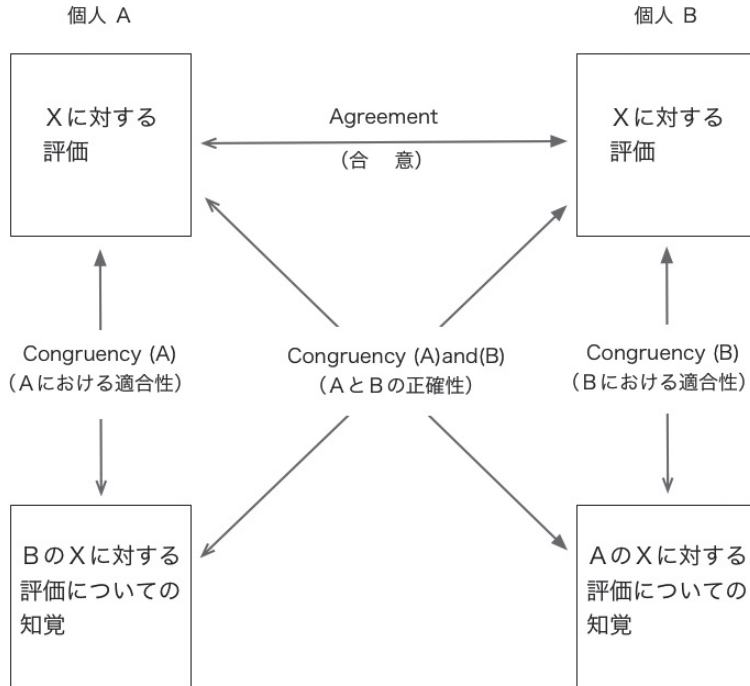
「操作主義」を選択する全ての学問領域は、コミュニケーションを「意味づけ」として理解するといって過言ではないだろう。特定の質問（刺激）に対する特定の回答（反応）をもってコミュニケーションの（「意味づけ」の）成立として〈操作的に〉定義する。こうした研究例には事欠かない。

「操作的に言えば、意見は、ある一般的な「質問」が提出される刺激事態に対して、個人が反応する言語的な「答」とみなされる」[Hovland et al., 1953, 邦訳7頁。但し、邦訳での強調（ゴシック体）を圏点に変えた。下線は引用者]。

従って、実験および質問紙法を基本的なデータ収集の手法として採用するコミュニケーション研究の全ては——つまりはコミュニケーションの実証的研究の多くは、という事だが——コミュニケーションを「意味づけ」として理解せざるを得ない事になる³⁹⁾。（この事実が強調されるようになったのは、やはり1960年代以降の、主観主義的社会学や、とくにエスノメソドロジーおよび言語社会学派、の台頭以降であるといつてよいだろう⁴⁰⁾。）

上の如き、手法に内属する「意味づけ」に関してではなく、その研究主題を「意味づけ」に向けたコミュニケーション研究が盛んになるのは、1970年前後からといつてよいだろうと思われる。マス・コミュニケーション研究領域プロパー（といつても、もはやそれはコミュニケーション研究領域と区別し難くなっていると思われるが）におけるそうした「意味づけ」の研究を二例挙げる。

まず、1970年代以降、Berger & Luckmann [op. cit.] の影響を強く受けた発想と、Newcomb の A-B-X モデルの手法とを結合させて生れた、「共志向 co-orientation」のアプローチがある。これは、McLeod & Chaffee のモデルと、Pearce & Stamm のモデルの二種があるが、基本的な方向は同じである。これらのうち、前者は次の図式で示される [McLeod & Chaffee, 1972 in Tedeschi ed., 1972, p. 50-99]。



Source: McLeod & Chaffee [1972, p.61]

図1 McLeod & Chaffee の共志向モデル

上の図式で、A、B 両人が対象Xについて各々評価を有しており、しかも、相互に相手の評価に対する知覚を有しているとき（「志向的」）に、3種類5つの関係が求められる。つまり、

- i) 「AのX評価」と「BのX評価」の関係。これが「合意」ないし「相互性 mutuality」であるが、これは「実際の両人の合意」とはまた別ものだから、「統計上の構成概念」にすぎない。
- ii) 「A (or B) のX評価」と、「B (or A) のX評価についてのA (or B) の知覚」との関係。これが「A (or B) における適合性」であるが、実際には個人的な intrapersonal なものだから、共志向の値ではない。
- iii) 「A (or B) のX評価」と、「A (or B) のX評価についてのB (or A) の知覚」との関係。これが「A (or B) の正確性」である。

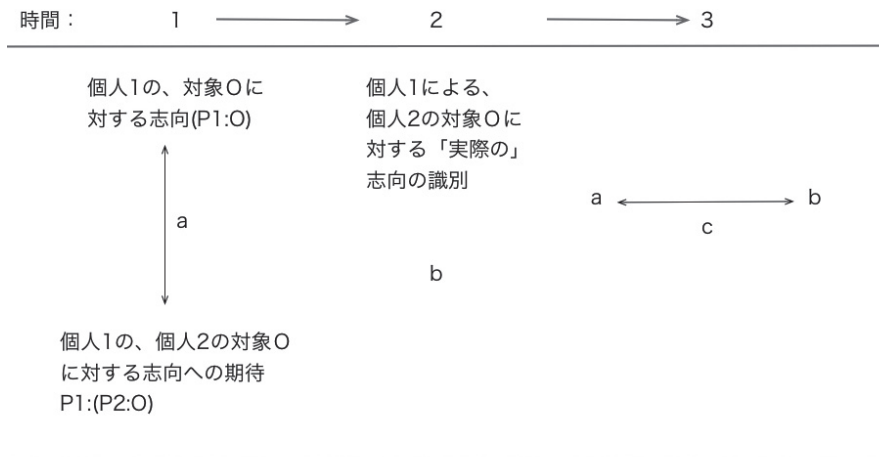
かくて、どんな共志向状況においても一個人について2種の共志向測度（「合意」と「正確性」）1種の志向測度（「適合性」）が求められ、これらの関係からコミュニケーションを理解しようとする。例えば、先在する「適合性」が、後の「合意」と「正確性」の重要な決定因となる——つまり、両者が合意していると思いついている程、意見交換は盛んになり、結果としての「合意」と「正確性」は高められる、という具合に。 [McLeod & Chaffee '72. p. 61ff]

しかし、この手続きには操作上の困難が数多くともなう。 [ibid., p. 63-65]⁴¹⁾

そこでこのモデルに触発された Pearce & Stamm のモデルが提出される。[Pearce & Stamm, 1973 in Clark ed., 1973, p. 177-203]。以下その概略のみを述べる。彼らは、McLeod-Chaffee モデルが、横断面的 cross-sectional かつダイアディックである事を批判し、プロセス的（時系列的）でモノディックなモデルを提出する。（分析単位が個人であるから、先行モデルの如き構成概念が生じることはない⁴²⁾。）

彼らのモデルを次に示した。

詳述の要はないだろうが、このモデルは、志向状態を完全に個人の頭の中に限定して、「参加者のパースペクティブから」眺めている。そして、先行する期待 (PA or PD) が、主観的な識別によって判定 (C or D) される、として、結果としての共志向状態 (PAC, PAD, PDC, PDD) を指定する。そして、こ



但し、a = 適合性congruency, 又は期待される類似性。これは、
 予期された合意 predicted agreement (PA)と、
 予期された不合意(PD)の形式をとる。

b = 個人2の、実際の志向の識別。

c = 正確性、つまり期待された類似性と識別の結果との対置。
 これは、期待を裏づけるconfirm (C)か、裏ざり(D)。

有りうべき共志向状態：

期待	識別結果	共志向状態
合意	合意	予期された合意の裏づけ P・A・C
合意	不合意	予期された合意の裏ざり P・A・D
不合意	合意	予期された不合意の裏づけ P・D・C
不合意	不合意	予期された不合意の裏ざり P・D・D

Source: Pearce & Stamm [1973, p.183]

図2 Pearce & Stamm の共志向モデル

これらの共志向状態にあるときの二者間の情報交換行動のパターンが測定される。一例として、情報を要求するメッセージは、PAD（予期された合意の裏ぎり）状態において、最も高い相対頻度で発せられる、といった具合に⁴³⁾。[ibid., p. 186]

以上の如く、共志向のアプローチは、コミュニケーションを完全に「意味づけ」として理解した上で、二者間の相互的な意味付与の一致性ないし不一致性が、その後の行動に及ぼす影響を測定する。いわば、「意味づけ」におけるズレをもって情報行動の説明変数として「適用」している⁴⁴⁾。

この理論化がただちに想起させるのは、言うまでもなく Cooley の「鏡像自我 looking-glass self」の概念であろう。そして、「鏡像自我」は無限に反映する、或いはむしろ無限後退してゆく（私が——と知っている事を彼が知っている私が思っている事を彼が……）だろうから、この理論化のひとつの困難性は明らかであろう。つまり、何次の期待を「期待」として操作化するか、という事である。（無論、「期待」が一定期間同一であれば、この問題は生じない。しかしそもそも他者の意向が未知である、との条件下の期待であるから、Pearce & Stamm の用語を用いるなら、(PA ⇔ PD) が常態であるとも考えられよう。このときに、期待を測定するのがどのような意味を持ちうるのだろうか？⁴⁵⁾⁴⁶⁾

さて、この共志向アプローチの一種として、「多元的無知 pluralistic ignorance」の研究がある。この系統の研究は、F. H. Allport によるこの概念の造出いらい、多様に（そして恐らく散発的に）行われてきた。最近ではマスコミ領域にも適用されている。それは、要するに「意味づけ」におけるズレ、McLeod & Chaffee のモデルに拠るなら「正確性」が低い、という事である⁴⁷⁾。最近の研究例としては、O'Gorman et. al. [1975, p. 313-330; 1976, p. 449-458] を挙げておく。

O'Gorman らの研究は、アメリカの白人集団というアグリゲートに関して「人種差別肯定論者がどのくらいいると思うか」という問いへの回答と、「人種差別を肯定するか」という問いへの回答との隔差を、既存調査の二次的分析から求めたものである。つまり、白人集団の、その集団に対する「多元的無知」を測定したものである。結果として、アメリカの8地方について、「想定された差別論者」の「自称差別論者」に対する比率は、約2倍から5倍弱の間にあり、全体での平均は2.6倍であった。全体を「北部諸州」と「南部諸州」に分け、これと主要な属性（デモグラフィックなものが中心）との相関をとったところ、「想定された」割合は常に「自称」のそれよりも高かった事は同じだが、「収入1万5千ドル以上」のクラスを除く全てのクラスにおいて、「南部」よりも「北部」の方が割合をより高く想定した。（自称差別論者の実数は、当然「南」>「北」である。）⁴⁸⁾

この隔差が「多元的無知」に起因するとする断定は、予想される如く、困難を伴う。例えば、「自称差別論者」という回答数は、多分実在する差別論者数をずっと下まわるだろう。要するに反応誤差が大きい。しかし、彼らはこの反応誤差は上の結果を説明し尽せない、として、ここに白人集団成員の、所属集団内における「多元的無知」の存在を認める。

そして、一方ではこの「多元的無知」の原因を、人種的態度等の要因から説明しようとする。また、他方ではこの「多元的無知」がどのような影響をもたらすかを探ろうとする⁴⁹⁾。

つまり、この研究の方向性は、（拡大解釈すれば）個々の「意味づけ」がいかにして特定の「社会的現実（空想上の差別論者）」を生み出すか、を問う一方、このような「社会的現実」——無論それは、「多

元的無知」としてある限り部分的なものだが——の、個々の「意味づけ」に対する影響＝規範的拘束力を検出しようとして「適用」されるもの、と解釈してよいだろう。

O'Gorman らの研究は、それまでの「多元的無知」の研究に比較したとき、大規模なアグリゲートを対象としている点に特色を持つ⁵⁰⁾。その長所は、それが成功したときには、「多元的無知」＝「意味づけのズレ」を媒介として、個人と集団との動的過程を把握する事が可能となるかも知れぬ、という、巨視的なパースペクティブを持つ、という事だろう。その短所は、「多元的無知」状態を産出する過程（外在化の過程）と、その状態が各個人に影響する過程（内在化の過程）との明確な（又は操作的に妥当な）区別が困難である、と思われる点にあるだろう。しかしいずれにせよ、前述の共志向アプローチよりは、期待の持ちうる方向性ではなからうか。

さて、以上、筆者の本論における問題関心と目的を提出し、あわせて、筆者のそこでの分類枠に従って、'70年代以降の（マス）コミュニケーション研究のいくつかの方向性を例示してきた。そのため〈序〉の部分が相当に長くなってしまったが、本論全体の問題関心および目的を提出するには回避し難かったものと理解頂きたい。

次節以降、Mead のコミュニケーション論を理解するための作業を展開し、本節で提出した理解にそって、それを批判的に検討してゆく。

第2節 対象

本節の2つの項において、筆者はまず、Mead の公刊された文献について検討を加え、続いて、Mead と、その理論の後継者といわれる「象徴的相互作用論」との関係について、本論の論述の基調となる〈見取り図〉を提出する。

1) 文献の検討

Mead の名が冠された書物は、現在（1982年9月）の時点で、他国語への翻訳を除き、9種類ある⁵¹⁾。これら書物の内容は、E. Stevens の bibliographical note [Stevens, 1967] の見解によれば、次の5つのタイプに分類される。i) Mead の生前に公刊された [従って彼が公刊を許したと考えられる] 記事 ii) Mead 自身の執筆になる未公刊草稿 iii) Mead の講義の速記録 iv) Mead の講義中にとられた、速記ではない学生ノート v) 編者達による章立て、分割、配列 [という編集作業]。この分類に従って、以下手短かに検討してゆく。

a) 公刊論文

Mead の自筆になり、彼自身が公表を認めえた（生前に公刊された）論文の数は、Reck [1964b, p. 1xiii~1xix] によれば総計68編、そのうちの主要なものは Mead [Reck ed., 1964a], Mead [Petras, ed., 1968a] に収められている。原理的には最も信頼できる文献といえるだろう。加えて発表年代が同定可能ゆえ、思索の展開過程をたどることができる。本編では主に Mead [Reck ed., 1964a, 以下 SW と略記] に収録された社会心理学関係の論文中心に考察する。

b) 草稿

The Philosophy of the Present [Mead, 1932, 以下 PP] の本編と補論の I～III, *Mind, Self and Society* [Mead, 1934, 以下 MSS] の数多い注の一部と補論の I～III, そして *The Philosophy of the Act* [Mead, 1938, 以下 PA] の大部分 (断片の一部は学生ノート). (但し, いずれも書名, 章立ては別.) 加えて D. L. Miller により編集公表された “Two Unpublished Papers” [Miller, ed., 1964c] および, *The Individual and the Social Self* [Miller, ed., 1982, Forthcoming]⁵²⁾, D. Rucker により編集の上公表された “Mead on the Child and the School” [Rucker, ed., 1968b], そして死後公表された “The Philosophy of John Dewey” [Mead, 1935-36].

以上が Mead の残した草稿のうち現在公表された (又は公刊が予告されている) ものの全てである.

これら草稿の第一の問題点は, 執筆年代がほとんど不詳である事である. 但し, 各冊の序言から, 以下の事実は認められる. PA を構成する草稿群は, おそらく 1930 年以前の 10～15 年間に執筆された [Morris, et al., 1938, p. v]⁵³⁾. PP の草稿部分は, Mead が 1930 年 12 月に行った Berkeley での講演のため「大部分が Chicago から Berkeley への旅のあいだに大いそぎで書かれた」 [Murphy, 1932, p. vii] ものだが, 「実質的には講演されたときと同一」 [ibid., p. vii] だという. いずれも Mead 自身には公刊の意図はなかった.

c) 講義録 (速記録および学生ノート)

MSS の本文は, 1927 年の *Advanced Social Psychology* の速記録を基本とし⁵⁴⁾, 1930 年の学生ノートで補われている. 1930 年の学生ノートは, Mead の他の講座からの学生ノートとともに, 注の形式で年代入りで採録されてもいる. 従って, 注の部分に関しては講義の年代の同定が可能であるが, 本文に関しては, 1927 年の速記録と 1930 年の学生ノートの区別が不可能である. なお, 補論の IV は, 1927 年の *Elementary Ethics* 講義の速記録をもとにしている [Morris, 1934, p. vi].

Movements of Thoughts in the Nineteenth Century [Mead, 1936, 以下 MT] は, 編集後第 XIV 章となった Bergson に関する部分の後半部を除いて, 全て速記録をベースとし, 編者によれば「Mead 氏の講義の口頭レコーディングとみなされうる」 [Moore, 1936, p. viii] という⁵⁵⁾. Bergson の章の後半部分は, 学生ノートをもとに編者が構成したものである. 速記がなされた年代は不詳であるが, 速記者を雇ったのが MSS と同一人物であるから⁵⁶⁾, おそらくは 1927～1930 年の間に行われた講義からのものであると思われる [cf: Moore, 1936, p. vii].

d) 編集作業

編集作業については, よく知られた Faris の, “Mind → Self → Society” では Mead の思想の正反対である, という指摘 [Faris, 1936, p. 810]⁵⁷⁾ をはじめとして, 様々な「批判」が存在する. [cf: Stevens, op. cit.; Tsanoff, 1937; Miller, 1973, p. 253, etc.]. しかしながら, 我国で一般に依拠しうる文献が他に存在しない以上, その枠内で作業する他にない.

以上をまとめて、Meadの公刊論文以外についてその執筆、講義採録年代を推定すると、次の如くなる。

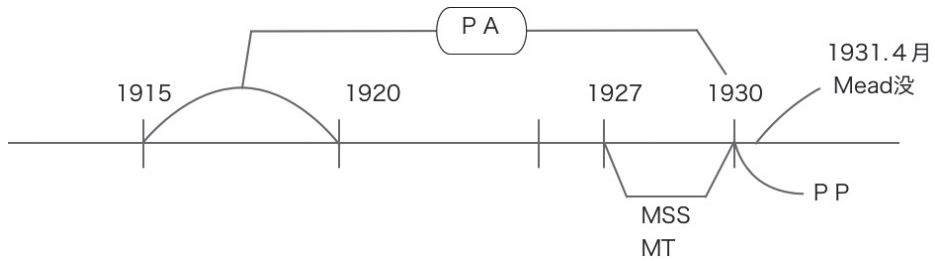


図3 Meadの「著作」の執筆・講義採録年代

さらに、生前発表されたのちに書物に収められた再録記事については、以下の表を参照して頂きたい。

以上でMeadの文献の検討を終える。本論では、Meadからの引用の大部分がMSSの、それも“Self”の諸章からばかりに偏っている、というStraussの指摘 [Strauss, 1977, p. vii] を考慮して、可能な限り広い範囲からMeadのコミュニケーション論を検討したいと考える⁵⁸⁾。

CONTENTS OF THE "MEAD'S WORK"	Strauss ed.	PA	MT	MSS	PP
Articles					
1924-5 The Genesis of the Self and Social Control					○
1926 The Objective Reality of Perspectives					○
1930 Cooley's Contribution to American Social Thought	○				
*Lecture Note from - *					
1927 Advanced Social Psychology (速記録)				○	
1930 Advanced Social Psychology				○	
no date Movements of Thought (速記録)			○		
manuscripts					
Dated Manuscripts					
NOT Dated Manuscripts (1915-1930 ?)		○		○	
1930 Manuscripts for 'Carus Lecture'					○

*Strauss (ed.) rev. 1964は、様々な素材から集めて編集されているが、前4書に含まれていないものは“Cooley's …”論文のみである故、その他に関してはここに記載することを省いた。

*MTの大部分は速記録ノートによっているが、“Henri Bergson”と題された章となった部分の後半は、通常の(速記でない)ノートを编者Mooreが文章になおしたものでおこなっている。

図4 Meadの著作内容および再録記事

2) Mead と象徴的相互作用論

Mead の理論と象徴的相互作用論 Symbolic Interactionism (以下、相互作用論又は SI と略すことがある) との関係、特にその代表的論者との関係を明らかにすることは、Mead を論ずるにあたって有効な手段だろう。この問題は、それが Mead の理論に関わってくるとされる限りで本論を通じて検討されるが、あらかじめ基本的な事実を押さえておくのが便利であると思う。そこで、本項では Mead と相互作用論の関係について、前もって幾つかの見解を提出しておく。

a) 相互作用論のヴァリエーション

一般に広く Mead 理論の正統な後継者として認められる相互作用論の学派の内実は、今日に至るまで常に多様である。これは、Mead 理論の長い「口述の伝統」[Kuhn, 1964] によるところが大であると通常認められているが、なおその事に加えて、

- 1) 現代の相互作用論者が、初期 Chicago 社会学の多彩な研究者達の影響を様々に受けている事。(例えば、1920 年代に Chicago 学派の影響を受けた精神医学者 H. S. Sullivan の論文編集者 Perry 女史は、この時期の Chicago の学的状況を、“Chicago Mosaic” と評した。[cf: Perry, 1964, p. xixff]. この時期の Chicago 社会学についての概観は、*Chicago Sociology, 1920-1932* [Faris, 1967] を参照。)
- 2) セオリーグループとしての一貫性を確立しようとする志向が (例えば Parsons のグループの如きそれが) むしろ弱かった事。等の理由が挙げられよう [cf: Mullins, 1973, chapt. 4].

このような相互作用論学派の性格から、この学派内部においても、数度にわたる学派内サブ・グループ分類の試みがなされている。以下、これら相互作用論のいわば自己対象化の軌跡を、特に Mead との関係をごどのように捉えているかを主軸としてたどってみる。

まず、よく知られた M. H. Kuhn による分類は、この種の試みの系統立った初めてのものであろう [Kuhn, 1964]。のみならず、この論文は、相互作用論の一方のリーダーとみなされていた彼の、Mead に対する立場が明確に示されたものである。

この論文で Kuhn は、相互作用論の数多いサブ・セオリーグループを、「Mead の所説の本質的な曖昧さと矛盾」から生じたものとみなし、その混乱と矛盾の多くが「Mead の総体としての視点における [決定論] と [非決定論] との間の矛盾」に要約されるものとする [Kuhn, 1964 in Manis & Meltzer eds., 1967, p. 47-48]。そこで彼は、「決定論」型の 5 種の概念化モデルと、「非決定論」型の 4 種の概念化モデルを想定し、この 9 種のモデルに当てはめて各々のサブセオリーを紹介してゆく。取り上げられるサブセオリー群は数多く、相互作用論外部の理論家 (例えば準拠集団論における Merton & Kitt) をも含み、また各サブセオリーの基本的的方法論に基づくというよりは、むしろトピック別の分類となっている点、他の相互作用論の分類と異なる。相互作用論的な発想に多少とも関係を持つ領域を網羅した形の、視野の広い分類である⁵⁹⁾。

この分類について指摘しておくべき必要のある事は、第一に、Mead の理論について、それが曖昧で矛盾を含む不完全なものである事をまず認めてしまい、第二に、その結果生じた様々な Mead 解釈を 9

種類の類型図式に当てはめて（従って変数間関係に持ち込もうという発想のもとに）理解し、第三に、各サブセオリーの検討にあたって「操作化」と実証的調査の可能性とを常に念頭に置きつつ、論じている、という事である。

これらは、よく知られた TST 自己態度テスト⁶⁰⁾を提案して相互作用論的アイデアの操作化を目指した Kuhn にとっては当然の方向性ではあるが、他論者との比較を考える際には見落とせない点であろう。

続いて、'70年には、Meltzer & Petrasによって、Chicago 学派と Iowa 学派を相互作用論の二大分派とみなす現時点でも多分最も一般的な見解が正式に表明される [Meltzer & Petras, 1970 in Shibutani ed., 1970, p.3-17]. (但し、それ以前にも同様の見解は存在していた [cf. Manis & Meltzer, eds., 1967, p. vi].)

この論文では、Chicago と Iowa の両アプローチの相違が明確に結晶化するに至った時点が 1970 年以前の 10~15 年の期間におき [ibid., p.3], 「古典的な Mead の伝統をつぐ」[圈点引用者] H. Blumer の Chicago 学派と、「この伝統の主要な分派」である Kuhn の Iowa 学派との、「実質的、方法論的相違」を明示しようとしている [ibid., p.5-6].

以下、この論文の筆者らの見解によりながら、Blumer と Kuhn の立場の相違を示しておく。

まず第一に、それは、Blumer の「人文主義的 humanistic」な視点と、Kuhn の「科学主義的 scientific」な視点との基本的な相異である [ibid., p.6].

科学の目的としては、Blumer が単に「現代社会を理解可能とする」ことを目指すのに対し、Kuhn は「社会的行為の一般的予測」を目論む。

方法論的には、Blumer は「行為者の行為は彼自身の特個的な意味にもとづいて行われるのだから、行為者の世界の内側に入り、その行為者の見ごとく彼の世界を眺めなくてはならぬ」という「共感的内観 sympathetic introspection」の基本的方針をとる。そして実験や質問紙調査などの「外部からの、距離をおいた観察」を批判し、生活史、自伝、事例研究、日記、手紙などの個人的資料の利用や参与観察法による、「直観的、了解的 verstehende アプローチ」を唱道する [ibid., p.6-7]. 他方の Kuhn は、「Iowa 学派の調査の最大の貢献」は「象徴的相互作用論の鍵概念が実証調査について操作化され成功的に利用しうる」ことを示した点にあると考え、「彼が『非実証的』と考える概念を再概念化し又は捨て去ることで Mead の概念を『実証化 [経験化]』しようとする」[ibid., p.7].

次に、Kuhn 自身が問題にした決定論と非決定論の問題 [Kuhn, op. cit.] に関して、Blumer は Mead の「I」と「Me」の区別を継承し、人間行動を、「衝動 (I) の初発と Me による行為のガイダンスとの絶えざる連続として」捉え、「社会のイノベーションの根源的源泉」としての行為の「予測不可能的、非決定論的な次元」を強調する [ibid., p.9-10]. 他方で Kuhn は、人間行為を、「自己定義を含む行為者の定義によって……決定されている」ものとし、「自我の I-Me 要素にも衝動にも注目しない」。それ故、「自我はただの Me となるから、行為は内在化された期待にもとづいて（原理的には）全く予測可能とされる」。「一言でいえば、先行条件が自我を決定し、自我が行為を決定する」事になる [ibid., p.10].

以上の比較に加えて、筆者らは、Chicago学派における「社会と自我とをともにプロセス的に考える」傾向と、Iowa学派における、「両者の構造的な概念を強調する」傾向とを指摘している [ibid., p. 11]. 自我が「相対的に安定であるという仮定」[ibid., p. 12]のもとに、例えばTSTテストも可能となる、というわけだ⁶¹⁾.

ここまで引用してきたMeltzer & Petrasの比較は、以後現在まで最も一般的な〈主流派見解〉であると評価して差しつかえないだろう。要するに、Blumerにおける「I」の強調、Kuhnにおける「Me」の強調という、よく知られた理解である。ただ、一点だけ注意しておきたいのは、さきに引いたように、この論文の筆者らが、Blumerを「古典的なMeadの伝統」を続けていると評価している点である。

さて、1975年になると⁶²⁾、再度相互作用論の学派内分類の試みが出版される。Meltzer, Petras & Reynoldsによるこの試み [Meltzer, Petras & Reynolds, 1975, chapt. 2] は、執筆者が重複していることもあって、基本的には前出のMeltzer & Petras論文と同様の分類方法をとっている。この論文では、旧来のChicagoとIowaの二大学派に加えて、1960年代から広く注目を浴びるようになったE. Goffmanの「ドラマトルギカル・アプローチ」および「エスノメソドロジー」の一派が数えいれられているにすぎない。しかも、Chicago学派とIowa学派に関する記述はほとんど1970年のMeltzer & Petras論文と変わっていない⁶³⁾。すなわち、Chicago学派を「古典的な、Mead流の伝統を続けるアプローチ」であるとし、Iowa学派を、「より折衷的な相互作用論を代表する」ものとみなしている [Meltzer, Petras & Reynolds, 1975, p. 55].

かくして、こうした〈正統派見解〉に立つとき、基本的にはBlumerがMeadの理論の最も近い後継者であるという理解は揺るぎないものの如くにみえる。果たしてその通りだろうか？

'80年代に入ると、S. Strykerによる相互作用論の内部からの分類、整序の試みが活発になる [Stryker, 1980; 1981 in Rosenberg & Turner eds., p.3-29; 1982 in Lindzey & Aronson eds., 3rd ed. (Forthcoming)⁶⁴⁾].

Strykerによる分類には二点の特色がある。第一にStrykerは、相互作用論のバックグラウンドを提供した研究者を初期Chicago社会学の内部に限定しない。Meadの影響を最も重大なものと認める点ではこれまでの見解と変わらないが、通常Meadとともに相互作用論のいわば先駆者として挙げられるJames, Cooley, Dewey, ThomasらChicagoのインサイダー達⁶⁵⁾に加えて、Hume, Hutcheson, Ferguson, Smithらスコットランド道徳哲学の思想家や、G. Simmel, M. Weberといったドイツ社会学者、さらにR. Lintonが相互作用論のバックグラウンドとして言及されている [Stryker, 1980, chapt. 2].

特色の第二として、StrykerはChicago-Iowaという学派分類に執着しない。過去にそのような分類が成立した事を認めつつも、彼の基本的な主張は「ただひとつの象徴的相互作用論者の正統派など存在しない」[ibid., p. 86]という事であり、BlumerやKuhnの業績は肯定しつつもそれらは「今や過去に属すものであり、現代の相互作用論者の努力の大部分は（彼らが師の格言を単に繰り返しているのではない限り）[BlumerやKuhnの]著作に含まれるアンチノミーを超え出ようとするものである」[ibid., p. 88-9]と見る。

Stryker 自身の意図は、一般的に「社会構造の巨視的な説明において無力であり」, 「概念の整備と研究者間の合意において不十分であって一般化図式を持たない」とその限界を指摘され、1973年には N. C. Mullins によって「知的にも社会的にもその行程を終えたのは明らかである」[Mullins, 1973, p. 98] と断じられた相互作用論の“再建”にあるからには、上に示した二点の拡張によって、いわば伝統的な Old-Type の相互作用論からの脱却を図ったものとみることができる。その事自体は本論と無関係である。

しかし、Stryker のこの〈脱却志向〉の背後には、もうひとつ、本論に関係してくる経緯が存在しているように思われる。

それはすなわち、'70年代を通して進行した〈Blumer = Mead の正統な後継者〉という恒等式への挑戦と、その崩壊である。

b) Mead と Blumer

“Symbolic Interactionism” の名付け親、H. Blumer は、またその理論の Mead 理論との関係をめぐって、少なくとも 4 回にわたる論争を相互作用論内外の研究者と展開した論争家でもある。

さきに示した Blumer = 正統派 Mead 主義者、という恒等式は、こちらの論争ではやや異なる様相を呈している。

論争の概略のみを先ず記しておこう。第 1 回は、よく知られた、1966~1967 年の AJS 誌 71, 72 巻での対 Bales 論争である。第 2 回は、J. Huber の相互作用論批判 [Huber, 1973] を契機として、1973~1974 年の ASR 誌 38, 39 巻で対 Huber 論争。第 3 回は、Lewis の相互作用論とプラグマティズムとの関係についての論文 [Lewis, 1976] に対する反論として、1976~1978 年の Sociological Quarterly 誌 17~19 巻で対 Lewis 論争。第 4 回は、McPhail & Rexroat の、Blumer の Mead 理解批判 [McPhail & Rexroat, 1979] への反論として、1979~1980 年の ASR 誌 44, 45 巻での対 McPhail & Rexroat 論争。各々の論争には、様々な立場から他の論者も参加している。

これら論争の争点は、必要な限り本論の適切な箇所ですら引照する。よってここでは詳説しない。ただ、対 Bales の有名な論争を除く残り三回の論争は、全てが相互作用論者とおぼしき研究者との間でのものであり、Blumer を Mead 理論の正統な後継者とみなす 1970 年までに成立した見解は、どうやら 1970 年代を通じて内部から揺らぎ始めていたようである。

各論者の批判は多岐にわたるが、Blumer が一貫して唱導した「共感的内観」に基づく「行為者の行為の内側からの了解」の「非定量的」な記述、という方法論に対する批判は一致してみとめられるようだ。Blumer は余りにも「経験的」な「現象」に依拠しすぎるが故に通常の（或いは支配的な）意味での科学的理論構成において弱く、また、対人状況での心的相互作用 Psychic Interaction のみを問題としすぎる、といったところが批判の中心点であるようだ。

周知のごとく、Mead の理論は、A. Schutz やその弟子 M. Natanson らを通して現代の「現象学的社会学」や「エスノメソドロジー」等の主観主義的社会学に多くの影響を与えたわけだが、これら諸派の出現と流行によって、あらためて Blumer における類似の傾向が認識され、Mead 理論との異同を論議

されるに至った、というのが実状ではなからうか。

もっとも我国では、そもそもはじめから、「特にG・H・ミードの流れを汲む、シカゴ学派の社会学は30年代からこうした〔現象学的〕傾向を示していた、……バーガーおよびルックマンが『現実の社会的構成』を書くまでは、ハーワード・ベッカーやハーバート・ブリューマーがいた……」〔山口, 1980, 木田他編, 1980, p. 173〕といった認識さえ存在している程であるから、事あらためて再説する要なきを感じざるを得ないのだが、「Meadの流れ」が一体どのように「汲」まれているのか、その関係を多少とも明確化しておく試みも全く無駄ではなからう。

ところで、ここまでの粗述に一度も顔を出して来ないながら、おそらくはBlumer批判の潜在的な推力となり、BlumerのSymbolic Interactionismに対抗して、よりMeadのオリジナルな理論に近いと主張する“Social Behaviorism”⁶⁶を唱道する研究者およびその一派が'70年代末期から活動的になってきている。実のところ、上に挙げたBlumerの論争のうち、少なくとも第3、4回の論争は、この一派に近い論者によって書かれたBlumer批判によって始まったものである。

その研究者——言うまでもなくL. S. Cottrell, Jr.である。

c) MeadとCottrell

「Mead右派」とでも呼ぶべき新・新Mead主義者の内実は、知る限りでは、やはりBlumerと同じくMeadの直弟子の一人である（但し、BlumerほどにはMeadと近い関係にあった訳ではない）L. S. Cottrell, Jr.を中心人物として、若手の相互作用論者で構成されているようだ。

'40年代を中心に、Meadの仮説を実証すべくR. F. Dymondらと組んで「共感能力empathic ability」の実験的研究を行ったCottrellは、その後、いわば典型的に相互作用論的な社会学者や社会学的社会心理学者達の背後にかくれた形で、そのMead理論の理解も、（知る限りでは）ほとんど注目される事もなかった。（この経緯の背後には、おそらく、1950～1960年の10年間を頂点とする機能主義社会学の隆盛と、これに対抗する〈Blumerの〉相互作用論、という一般図式〔cf. Mullins, op. cit., chapt. 3 & 4〕が働いていたものと思われる。）

そのCottrellの活動が活発化するのには、'71年の『アメリカ哲学学会報Proceedings of the American Philosophical Society』での論文〔Cottrell, 1971〕以降である。彼のMeadに対する立場は、以下の引用に端的に示されている。

「Mead自身の著作によってMeadの社会的行動主義を十分に把握するまでは、「象徴的相互作用論」なる一般の見出しの下にあらわれている、時に混乱し、場合によっては誤解をまねくような論文は読まぬ方がよい……。それらの論文の多くは、Meadの著作から導き出したと主張してはいるけれども、社会的行動主義の本質的な概念を見失っている」〔Cottrell, 1978, p. 153, n. 2〕。

類似した主張を他の論文〔Cottrell, 1980 in Riley & Merton eds., 1980, p. 45-65〕でも繰り返すCottrellの立場は、要約するなら、1) 相互作用論とMeadの理論とは別ものである事。2) Meadの理論は、そのまま、大幅な変更を加える事なくして人間行動の理論として有効である事。この二点となるだろう。“Return to Mead”なのである。

常識的な理解からすればいささかアナクロニックなこの主張は、しかし、一派を形成するに至ったとはいわずとも、着実に賛同者を集めているようだ。この派⁶⁷⁾に近いと考えられる研究者には、J. D. Lewis, R. L. Smith, R. O'Tool, R. Dubin, C. Varela, J. Huber, C. McPhail, C. Rexroat らが挙げられる。彼らの業績としてまとめたものは存在しないが、筆者が現在知る限りでの彼らの著作・研究の目的は、1) Blumer の Mead 理解の批判 [Huber, 1973; Lewis, 1976; McPhail & Rexroat, 1979, 1980], 2) Mead 理論の整備 [Cottrell, 1978, 1980; Lewis, 1979], 3) プラグマティズム, Chicago 社会学, そして相互作用論の理論的・歴史的検討を通しての Mead = Blumer 関係の再定位 [Lewis & Smith, 1980], 4) 主として実験形式での Mead 理論の検証 [Cottrell, 1971; O'Tool & Dubin, 1968] といったところであろうと思われる。これら諸論文についても、以下本論の適切と思われる箇所を引照する。

さて以上で、この、80年代初頭という時期における、Mead の理論をめぐる諸派の紹介を終える。役者はひと通り出揃った。

すなわち、Mead 理論の後継者とされる Blumer の “Symbolic “Psychic” Interactionism”, Mead 理論の経験科学化を目指した Kuhn の “Symbolic “Empirical” Interactionism”, (本論には直接関係しないが) 相互作用論の再建を指向する Stryker の “Symbolic “Structural” Interactionism”, Mead のオリジナルな理論を尊重する Cottrell の “Social Behaviorism”, そしてその中心点には、Mead 自身の四半世紀にわたった講座, “(Advanced) Social Psychology”⁶⁸⁾ がある。

以下、これら諸派の Mead 理解を引照しつつ、Mead の理論、特にそのコミュニケーション論的側面について考察する。

第Ⅱ章 Meadにおける思考と説明の枠組

Meadの全体としての思考を特徴づける第一の性格は、その進化論的発想への強い傾斜であり、第二の性格は、そうした進化論的発想の下に、時として相互に背反するようなものをも含めて、多様な思考の方向性が包摂されているという点である。

本章では、上に述べたMead理解に沿って、まず第1節において、彼の理論のいわば統合原理となっている進化論的発想について論じ、次いで、その下に包摂され彼の思考の素材となり、またその大枠を規定するようにみえる幾つかの思考の方向性に関して述べる。続く第2節においては、これら思考の諸方向が、Mead自身の社会心理学的説明の大枠の中で、実際にどのようにして総合されているのか、という見地からの考察を行う。

このような地点にまで遡及して論述するその理由は、のちに第Ⅲ章においてMeadの「コミュニケーション論」を考察するにあたり、こうした「思想的背景の地固め」が根拠として要請されるが故である。

さきに(第Ⅰ章2節2項)示したごとく、今日のMead理論(厳密にはMeadの仮説)の解釈には相当の幅がある。これら後続する研究者達の主張を評価するについても、まずMead自身の思考の基本的な方向性が定位されてはじめて、それは可能となるだろう。

以上の主旨で、以下Meadにおける「思想的背景の地固め」作業を試みる。

第1節 Meadにおける思考の枠組

Meadは「まず第一に自然主義者」[Miller, 1973, p.3]であり、「……全てに優先する科学的客観主義へのコミットメントを放棄することはなかった」[Coser, 1971, p. 351]. が、しかし、「Meadの著作の驚くべき性質は、その全てが系統発生的な[進化論的な]枠組の中で概念化されていること」[Meltzer, Petras & Reynolds, 1975, p. 28]でもある。実際、Meadにおいては、人間の社会、個人、精神と自我の全てが進化論的に創発 emergent してきた自然過程の一部である。このような見解それ自体はとりたてて新しいものではない。進化論を肯定する限り、当然の帰結である。ただ、このような概念化を基本的な枠組として置かれると、その全包括的な性質の故に、例えば「科学主義」と「人文主義」、「自然科学」と「人間科学」といったような、便利で手頃な二分法が適用し難くなる。Meadの思考を構成する素材的な思考のうちには、通常の意味で「自然科学」に属するもの(生理学や生物学)もあれば、「人間科学」に属するもの(心理学や社会学)もある。しかしその全てが進化論的な色彩の強い自然主義に統括されている以上、上の如き二分法的理解は、むしろ誤解を招きかねないだろう。けれどもなお、Mead自身そうした二つの方向性をもつ諸思考に依拠していることも間違いなく事実であると思われる。

本節では、このような理由から、Meadにおける進化論とその含みについて論じたのち、彼の思考の素材を、〈自然科学〉的なものと〈人間科学〉的なものと便宜上二大別して論ずるが、それはあくまで以上の経緯をふまえた上での便法である事を了解されたい²⁾。

1) 進化過程としての自然・社会および個人

Mead の思考においては、まず第一に全包括的な自然の進化過程という黄金律が貫通され、そのいわば分枝として社会と個人とが包摂されている。そのことによって一方では広大な視野がひらかれるのだが、他方では重大な問題が生じる。「進化論」という多義のかつ曖昧な仮説をもって自然、社会、個人等を理解し説明しようとする際に必ずといえるほど生じてくる問題である。先ずそれを論じる。

a) 進化における「自然」と「人間」

まず、常識的な議論を確認しておきたい。

現在、〈純粹に生物学的な立場〉³⁾ から考えられた進化論——それは同時に、現在唯一信頼するに足るだけの根拠を持った進化論でもあるが——とは、いわゆる「綜合派進化論 [以下、進化論と略す]」と呼ばれているものである⁴⁾。この立場に拠るとき、人間社会について発言しうる領域は相当に狭い。それは次の通りである。

まず、いくつかの前提を受容しなくてはならない。

第一に、進化論は生物種についての学である。それ故、それは基本的に生物個体については何ひとつ論じない。各生物個体は、それがその表現型において通常の生殖能力を有し、その遺伝子型において特別に異状（次世代を残しえない）であらぬ限り、全く等価である。種を構成する個体数が種の生存に困難をきたす程度まで激減しない限り、進化論は個体に無関心である。進化論は個体を識別しない。

第二に、進化論は目的論ではない。かつて J. Monod が力説したように [Monod, 1970, 邦訳 1972 年]、生物進化はまず、特別に安定的な遺伝子構造を前提したうえで、これに対して量子論レベルで全く偶然に発生する突然変異を原因とし、さらにこれが表現型において環境⁵⁾ の淘汰圧によって選択される結果として生じる。この過程には、結果としての合目的性（当該環境への当該生物種の適応）は含まれなくても、究極目的としての目的論は全く含まれていない。

第三に、仮に進化の目的性（Lamarck 的な）を主張するにしても（後述するように、その根拠も全くないわけではない）、進化論が認めうる目的の上限は、生物種の全体としての「生存」である。「繁栄」ではない。すなわち、進化論の目的性は、当該生物種の全体としての「生存」が（つまりそれに十分なだけの個体数が環境に適応した、という事が）達成されたその地点で消滅する。進化論は「繁栄」の学でなく「生存」の学である。

以上の前提を人間社会について適用すれば、以下の事実は論議の余地なきものと思われる。

まず、第一の前提より、進化論はいかなる意味においても人間社会における「適者生存」原則などという古い Spencer 的発想を根拠づけるものではない。一般的に「人種 race」と呼びならわされているヒト属ヒトの形質的分類は、進化論に関係する生物学的分類としては全く無意味である⁶⁾。人種、国籍、国籍アイデンティティ、文化、イデオロギーの如何を問わず、各「人種」は交雑させることが自然状態の下で可能である。しかもそれが n 世代にわたる子孫を残しうる⁷⁾ 事実は歴史がこれを明証するところである。現在に至るまで、「文化」が新たな人間の（或いは別の何かの）種を分化させたという事実は存在しない。かくて、人間社会がヒト属ヒトの人間ただ一種で構成されている限り、進化論的には、

(十分な個体数が保証されているという条件のもとに)、コーカソイド、モンゴロイド、ネグロイドのいずれが生存すべきか、などといった問いは意味を持たないし、私とあなたの(又は某大国と某大国の)いずれが例えば食糧危機の際に生き残るべきか、という問いにも答えるものではない。

第二の前提から、進化論は人間社会に何らかの目的を設定するものでもない。人間という生物種は、すでに結果としての環境に対する適応を終えている。つまり、種の生存に要求される個体数は確保されている。その先について、進化論は何も語らない。

第三の前提を(これは第二の前提を弱くしたものだが)受容するとしても、人間社会はすでに「生存」という種のレベルでの目的を達成して久しい。「生存」とは、生物個体にとっては、次世代を残すまでその生命活動を停止しない事、という以上のことではない。)従って、人間という種が「生存」という目的をすでに達成した以上、もはや現在の人間社会について進化論は何ひとつ語ることをもたない。「繁栄(より多数のより良い生活)」は、進化論の範囲を超えた問題である。

以上をまとめると、総合派進化論が人間社会について語りうることは唯ひとつ、〈それは現在の各個別社会について全く何も語らない〉という事実である⁸⁾。ここまでが、現在科学的に認められている限りでの生物学的進化論の範囲であるといつてよいだろう。

しかし、以上の議論は、よく知られているように、進化の要因論的説明であるにすぎない。進化の行動論的説明⁹⁾の余地は残されている。

その事は、かの Monod もよく認めていたところである。彼がその Lamarck 主義者の傾向を端的に示した記述 [Monod, 1970, 邦訳 146 頁以降] に従って、次のごとき展開が許される。

たしかに、総合派進化論の要因論的説明は、全く目的性を必要としない。遺伝子型の突然変異は、完全に偶然的に生じる。けれども、ある生物種の特定の行動様式は、その生物種が受ける環境の淘汰圧の方向と性質に影響を与えないだろうか。生物は、その有機的体制によって、環境の特異的な部分を選択する。環境の特定部分とその行動を通して相互作用する。両棲類がより陸性の環境を選択したという一事によって、淘汰圧はその両棲類の行動と体制とを、より陸上生活に適応するような方向へと定向的に選択した¹⁰⁾。かくて、生物の選択的な環境との相互作用の結果(すなわち行動と環境との相互作用の結果)、定向的な淘汰圧が生じ、行動の方向へ進化させる。

要約するならば、行動は進化に影響しうる。弱い形での Lamarck 説である。かくして、要因論的な総合派進化論が否定した領域、たとえば文化(という特定行動パターン)の、環境の淘汰圧の方向および性質への影響、それに基づく特定行動パターン(文化)を突然変異した遺伝子型として持つ特定の表現型の選択、といった領域に可能性が開かれる。もっとも、人間においてその行動パターンに基づく定向的選択が、新しい種を生み出した(すなわち、他の行動パターンを持つ人間との間にn世代の交雑が不可能な人種を生み出した)という事実は確認されていない¹¹⁾。現在、人間は種として極めて安定した状態(或いは周期)にあるようだ。

以上、筆者の知る限り厳密に生物学的進化論に沿って、人間社会に対する進化論の意義に関して論じてきた。

もっとも、人間科学領域でのいわゆる「進化論」の多くは、上の如き根拠に支えられたものではない。

そこではすぐれて naïve に、生物学的（又は Darwin 的）進化論から、文化や社会の「進化」が類推されている事が多い¹²⁾。

例えば Parsons の社会進化論 [1966, 邦訳 1971 年] では、その「基本的基準が生物学理論で用いられている基準と合致するように」[同訳書, 164 頁], 社会「進化」の基準を「一般的な適応能力の増大」に求めている。しかし、現代の生物学理論で、このような基準を「進化」の基準としている理論など存在しない。生物学また生物界における「進化」とは、特殊な環境への特殊な適応の程度にかかわるものである。又 Parsons は、文化の社会間伝播を主張する [同, 165 頁]。確かにより適応的な文化は社会的に「遺伝」する傾向にはあるだろう。しかしこうした社会的「遺伝子」は生物遺伝子に比して構造的に遥かに不安定である。生物遺伝子の誤読は、致死として排除され影響を残さないが、文化の誤読は、逸脱として残存し後の文化に影響を及ぼしうる。社会構造には生物構造に比肩しうる程に安定的な情報伝達機能は存在しない。「社会進化」を生物進化と同列に論ずるのは相当に大胆な試みである¹³⁾。

しかもなお、こう断定する事が現時点で恐らく妥当であるにしても、次の事実の真実性を否定する事もできない。つまり、人間の社会も個人も、自然の進化過程の結果として生じ、その分化の枝の（現時点での）末端に位置すること。しかもこの特殊な種が分化しこの惑星の生物圏バイオスフィアにおいて圧倒的に優勢 dominant な位置を占めるようになるについて、自然の諸力以外のいかなる特別な作用も働いてはいないであろうこと。

かくして、人間の社会と個人とを等しく自然の進化過程から生じたものとみなす自然主義的発想は、明白な困難性を持つ。もしその理論が、人間のすぐれて生物学的な部分にのみ関わるのであれば、それを論ずるための根拠を生物進化論は提供する事ができる。けれどその理論がひとたびその領域を超出し、人間のすぐれて人間的な部分——その社会、その文化、その個人——を対象とせんとする時、もはやそれを論ずるための根拠は生物進化論からは与えられないし、いわゆる「社会進化論」の数多い変種も、それら自体、十分な実証的根拠を有さぬが故に、それを論ずる根拠としては不十分である。ところで、上に述べた如き進化論的発想は、まさに、そうした人間のすぐれて人間的な部分をそれによって説明したいがために導入された発想に他ならないのである。要約するならば、自然の進化過程に人間的な事象を包摂する試みは、事実認識としては正当でありえても、結局のところ、論ずるべき理論を欠いた対象を導入したという一事に尽きてしまうのである。そこで達成しうる事は、実証的な理論の構成というよりはむしろ、あくまで仮設的な思弁の構築にとどまるであろうと思われる¹⁴⁾。

およそ以上が、進化論をもって自然と人間とを一元的に説明せんとする際に生じる一般的な問題である¹⁵⁾。それは、Mead の理論化の全体についても妥当な問題であろうと思われる。この点を押さえた上で、次に、Mead における進化論的発想の特色を示す。

b) 弁証法から進化論へ

MT における Hegel の章 [MT, p. 127-154] は、Hegel 思想それ自体を論じたというよりは、むしろ弁証法的発想を介して Mead 自身の進化論、科学論および問題解決の論理を展開したと考えた方がより適切な内容を持っている。彼は言う、「……Hegel は、我々の知識が、問題——つまり我々の知識にお

ける矛盾から生じた問題の発生を通して発達する、と仮定したことにおいては正しかった。しかし……この葛藤が、コンフリクト ユニヴァーサル ユニヴァーサル 普遍と普遍との間のものであると仮定したことにおいては間違っていた¹⁶⁾ [MT, p. 136]。Meadにおいて、絶対的観念論における弁証法過程は、彼の科学方法論における「普遍と普遍との間ではなく、普遍と例外との間の」すなわち「法則と特異事例との間の」矛盾へと転化させられる。この矛盾を止揚するのは「反省的知能」による「問題解決の過程」である。「法則の形で表現された理論と、例えばその正反対の法則との間には[科学的な問題は]生じない。葛藤は法則理論と特異事例との間に生じる¹⁷⁾」。このような、法則 (Mead自身のより厳密な用語では「作業仮説」と、それに対する例外との葛藤・矛盾から問題が生じ、その解決を通して、より高度の発展段階に至る、という「問題解決の論理」は、Meadの思考法の全てにあてはまる。従って、彼の論理は全て発生論的であり、又、「進化論的」である。

けれども、観念論的な弁証法論理の探求よりは、自然科学的な方法論の検討により大きな関心を持つ Meadにとって、「Hegel 弁証法は科学的方法についての説明を遺さなかった」[MT, p. 143] のであり、「結局、世界とは科学的世界なのであって、どんな哲学も、科学的方法を表現しかつそれを利用できぬ限りは不適切な哲学」[MT, p. 144] にすぎなかったのである。Hegel 弁証法が威力を失ったのは、「単にそれが実際に用をなさなかったから」[MT, p. 144] なのだ。

かくて、Meadにおいて弁証法的思考は、PeirceやDeweyと共通する「問題解決の論理¹⁸⁾」の形でその進化論的思考の基本原則となっている。それに加えて、少なくとも二つの点で Meadの進化論的思考は観念論的弁証法から強い影響を受けている。

第一に、世界を、様々の形態をとりつつも常に生成を続けてゆくひとつの過程である、とみなす動的・過程的な世界像。Meadにとって弁証法と進化論とは、ともに変化と過程の学であって、前者はKant的な、後者はNewton力学的な、それぞれ新しく生成、創発してくる形式(形態 form)を全く認めない静的、固定的な世界像に対して、これらを克服する発想として重要な意味を持っていたのである [cf: MT, chapt. VIII, 特に p. 153-155, 157-159, 160-161, 166-168]。

第二に、主体と客体(主観-客観、個人-社会、生体-環境)の、不即不離の相互作用、相互規定関係という認識。Meadの理論の中には、それだけが個別的に他から独立して動くような存在はないといってよい。一方の変化は常に他方の変化を伴う。例えば、Meadの進化論という「適応」とは adjustment(相互適応)であって、一方的で受動的な adaptation(適応)ではない。Meadにとっての進化論とは、「個人はそれ自身の環境に影響をあたえるが、同様に環境から影響もされるという進化論」[MSS, 邦訳 228 頁]を意味している。彼にとっては、それ故、「消化管が食物を作る、という事は氷河の進行が或る種の動物を死滅させ、……別の種を選択したのと同じくらいに真実」[Mead, 1922 in SW, p. 241]なのだ。そして又、「我々は自然に従うことによってそれをコントロールする」[Mead, 1929b, p. 430]のである¹⁹⁾。

かくて、以上のように、観念論的弁証法の影響を受けた Meadの進化論的発想の特色は、第一に、進化過程を生成しつつあるひとつの過程とみるプロセス的、全体論的 wholistic な視点、第二に、その過程内部に単独かつ孤立的に作用する存在はない、と考えるすぐれて関係論的 relational な視点、におい

て示されていると考えられる。

では、このような基本的性格をもつ Mead の進化論的発想は、どのように評価すべきか、それを次に検討する。

c) Mead 進化論の性格

本項 a) において筆者は、現時点で妥当的とみなしうる進化論の内容と限界について触れた。その見地から Mead の進化論を評価してみたい。

第一に、進化論は生物種の学であって個体には基本的に無関心である、という点について、Hofstadter によると、アメリカにおける進化思想すなわち Spencer 主義は、1882 年を流行のピークとし、1915 年に至ってもなおその強い影響を残していた [Hofstadter, 1955, 邦訳 58-60 頁]。Spencer 主義の特徴は、個人主義的な「生存競争」と「適者生存」の論理に求められる²⁰⁾。しかし、この論理とともに青壮年期を送った Mead の進化論には、Spencer 主義の影響はみられない。むしろ正反対である。Mead にとっての進化論とは、先ず第一に、様々な形態をとりつつも次第に発展してゆくひとつの生命過程、という全体論的なものである。その過程の究極として、自己の環境をもコントロールするに至ったのは「個人としての人間ではなく社会である」[MT, p. 168]。社会組織を通して人間は環境のコントロールを可能とした。個人とは「社会的全体の有機的部分」[MT, p. 168] である。そして個人も、その精神および自我も、このような社会的全体から「共同」の過程を通して分化してきたものにすぎない [MSS, 19, 24 章等]。以上の如き主張は、少なくとも Spencer 主義よりは現代進化論に適合的である²¹⁾。

第二に、進化の無目的性について、Mead は「生物進化にはいかなる目的もない、つまり進化論は自然についての一の機械論である」[MSS, p. 251] ことを認める。しかしそれは Newton 力学の決定論的機械論からでは証明されえない事をも Mead は力説している [MT, p. 158ff]²²⁾。Mead にとって、「変化が証明されるのはただ、個体変異 variations と [それによって生じた新しい] 状況への適応とによってのみ」[MSS, p. 251] なのである。従って、「全ての生命体がそこに向かうような目的を持ち込む必要はない」[MSS, p. 251]。以上の認識は現代進化論によく適合する。

第三に、進化論は現代の各個別社会と個人について何も語らない、という点について、MSS における、「もはやわれわれの問題を規定するような Darwin 的な意味の生物学的環境は存在しない」[MSS, p. 250] という言明は、この点とよく合致する。従って、「それ自体の進化をコントロールすることこそが人間社会発展の目的である」[MSS, p. 251] という事で、Mead は生物学的進化論と訣別した、とみるべきだろう。ここまでは現代進化論の範囲をよくとらえているという意味で評価できる認識ではある。しかし、そこでただちに問題となってくる事がある。Mead は、こうして生物学的進化論への訣別を主張する一方、(当時の)現代社会を進化論的な論理によって説明している。しかもその事を、おそらく彼は矛盾とは感じていない。なぜなら Mead にとって世界とは、「次々と相違なる形態をとってゆくひとつの生命過程」[MT, p. 127] の進化論的な発展の連続体に他ならず、しかも彼は、その基本的な世界像において、このような自然主義的な進化過程以外のどんな説明原理も求めようとはしない。その意味での自然進化過程一元論者だったからである。そこで Mead にとっては、「制度の歴史も同様に [全く生

物学的な過程として²³⁾説明しうる」[MT, p. 145]という事になる。「社会の諸制度は……中枢神経系の内部にある複雑性が、社会というスクリーンに大規模に投影されたものにすぎない」[MSS, 邦訳256頁]という訳だ。これは明らかに進化論に対する越権行為である。制度の起源を、そして言語や精神、自我の系統発生的根拠を、進化論に求める事はおそらく許される。オーストラロピテクスの社会集団における言語の発生、制度の起源を論ずることは進化論の範囲で可能であるし、現実に様々の仮説が提出されてきた。けれどもそのような仮説構成が許されるのは、Mead自身の用語でいう「Darwin的な意味での生物学的環境」の淘汰圧が作用している限りにおいて、である。さらに、Mead自身よく理解していたごとく、人間という「未曾有の種」の環境への適応を特徴づけるのは、「生理学的な分化に基づく昆虫の社会とは異なった原理」[MSS, p. 238]、すなわち生理学的にはほとんど未分化のままの諸個人が、社会組織と文化とを形成し、これを通して（自らの身体的構成はほとんど不変のまま、いわば間接的に）環境への適応を可能とした、という事実である [cf. MSS, 31章]。このような環境への適応方式が、人間ほどに徹底して行われた種は他に存在しない。その適応方式は「未曾有の」ものであるが故に、それを進化論の範囲で論じつくすことはできない。進化論は、この種の「例外」について語る言葉をもち合わせていない。現生人類の適応が或る範囲を（おそらくその適応のごく初期に）超え出るに及んで、もはやそれ以降の人間の社会および文化を、生物進化論の枠組で説明する事は不可能となったのである。確かに人間の生理学的体制はここ数百万年のあいだほとんど変化していない。それ故、現生する人間の生理学的体制は明らかにその発生当初の遺制を残すものである。だから人間のすぐれて生物学的な側面に関しては進化論はこれを論じうる²⁴⁾。しかし人間のすぐれて社会的、文化的な側面にまでその論理を適用する事は許されない。

のちに詳述するように（本節2）項b)), Meadの社会心理学的諸概念は、そのほとんどが生理学的な根拠を持ったものである。「態度」, 「身振り」, 「IとMe」, 「衝動-刺激-反応」, 「作用-反作用」, 「他者の役割（態度）の取得」等々）これら諸概念をもって人間社会のすぐれて直接的な諸局面——二者間における相互作用関係や小集団内部の協同的行為——を説明しようとするとき、Meadはいわば、その発生当初からほとんど不変のままの人間の生理学的体制に基盤を置き、それに加えて（こちらの方は発生当初から飛躍的に発展した）人間の社会秩序を——特にそのシンボリックの局面を——導入する事で、（いわば〈下〉と〈上〉からはさみ込む形で）論理を進めてゆく。彼の進化論的発想の内部で。

問題のこうした局面においては、その説明論理は一応の説得力をもつものである。

しかしひとたびそれがより巨視的な社会構造にまで拡張されるとき、もはやその論理は進化論からの裏づけを与えられる事もなければ生理学的根拠に立脚したものとも言い難いものとなる。そしてしかもMeadはその自然進化一元論の他に（例えば社会階層や地位に関する）説明論理を導入しようとはしない。何故なら、彼にとって世界とは、「様々な形態をとってゆくひとつの生命過程」以外の何者でもなかったからだ²⁵⁾。これまでにも多くの論者によって指摘されてきたMeadの理論化の弱点（「社会構造に関する適切な理論を欠く²⁶⁾」）は、結局のところ、このような強固な自然進化一元論という基本的出発点に明示されている。実際のところ、ここまで述べてきたMeadの論理の中に頻出した「様々な形態をとってゆくひとつの生命過程」という事で彼自身が想起しているのは、全ての生命体においてそ

の各細胞における代謝交換の機能は同一である事、従って、あらゆる生命体は原初の単細胞生命（「ひとつの生命過程」）が複雑に体制を分化させ（「様々なる形態」）ながら進化し、しかもその各々の生体はその全体的体制として単細胞生命と同一の機能（むろん、高度化はしているが）を果たしている、という認識の事なのである [MT, p. 162]²⁷⁾。

Mead の論述の相当部分が、このような強い生物進化の認識に影響され、いわば包摂されているという事実は明らかであると思われる。

さて、最後に残ったのが進化における行動と環境との相互作用の問題である。前述したように、Mead において生体の行動とその環境とは不即不離の相互規定関係にある。Mead にとって、「進化の問題の核心とは、その過程が、生命形態の生きる条件に従ってその形態を決定するという認識」にあった [MT, p. 166]。そこで当然、生命形態の行動と環境の条件の関係性について検討する必要があるわけだが、進化の淘汰圧が人間社会には生物界と同様の形では作用していないと考えられる（注 11）参照）以上、この関係性について、社会「進化論」の文脈で考察することは余り意味があるとはいえない。この問題はむしろ、人間の個人の行動の発達における「生得説」と「学習説」との関連で検討（以下の本論中で）しようとする。通常 Mead は「行動主義」的「学習」派、つまり経験論者と分類される²⁸⁾ので、この点と関連させて後に考察する。

以上で進化論の検討を終え、次にその下に統括される思考の素材を二大別して示す。

2) 思考の自然科学的側面

本項では、Mead の思考の素材のうち、自然科学（特に生理、生物学）的な性格を示すもの三点について各々記述する。加えて本項では、〈Mead の正統な後継者〉Blumer が、しばしば Mead のこうした思考の側面を無視ないし誤解している事実が示されるだろう。

a) リサーチ・サイエンス：科学方法論

Mead の科学方法論は、典型的には自然科学における実験法にみられる如き、客観主義的な仮説－検証の手続きを基本として、「問題解決の論理」の枠内で語られている²⁹⁾ [cf. Mead, SW, p. 171-211, p. 248-266; MT, chapt. VIII ; PA, Essay III, VI, XV., etc.]。

まず彼は「ドグマの形で与えられる自然法則はない」[MT, p. 285] と主張する。故に科学は、「自然の斉一性 uniformity」を想定し「世界は説明可能だという根本的な仮定」に立脚するが、「しかしその斉一性の仮定さえ仮説である」[MT, p. 277]。それでもなお、「自然の全てが理解可能という仮定」をとり続ける事のみが、「科学が疑う事なく受容する」立場である [MT, p. 277-8]。よって法則は常に「部分的に受容される」[PA, p. 56] にすぎず、「常に仮説である」[MT, p. 285]。

そこで研究者は仮説に対する「問題を求め……例外を発見しようとする」[MT, p. 265]。この態度が、ドグマ的な Aristotle 的 science から現代科学を区別するものとなる [cf. MT, p. 266-7; SW, p. 172-3]。

例外は、個人としての科学者によって発見される³⁰⁾。その解決過程（「問題発見」→「仮説再構成」→「仮説検証」→「問題解決」）に、Mead は厳密な条件を要請している。

「問題発見」においては、「科学的観察は単に目を開けて偶々網膜上に落ちてくるイメージとしての事物を眺める事ではない」[MT, p. 283]とし、「それを明確な問題の形で述べ」る必要を主張して [ibid.], 「問題発見」自体が、能動的かつ構成的な行為である事を要請する。

「仮説再構成」については、「[既存の] 法則との関連で例外事例を極めて注意深く定義」[MT, p. 284]せよと言ひ、「あらゆる他の類似例」を集めることを求め [ibid.], 例外事例の概念の厳密かつ十分な裏づけを持った定義を、既存の仮説を尊重しつつ、行う事を要請する。

「仮説検証」にあたっては、例外が「どんな点で例外的だったかをみるため、[観察された] 事実はすでに受容されている法則 [仮説] との関連で定義すべし」[MT, p. 285]とし、又、「他者がそれを検証にかけて有効であるとなればそれは理論として受容される」[ibid.] として、仮説検証作業における概念定義の厳密性および社会性を要請する。(なお、Meadの検証手続きとは、実験、観察に加え、「思考実験」をも含む³¹⁾ [cf. PA, p. 83-4].) つまり、例外を発見するのは個人としての科学者であるが(それ故その限りそれは個人的な経験にとどまるが)、その「例外」が研究者社会に共有された法則=その時点での最も包括的な仮説の表現を借りて定義されるとき、はじめて新しい仮説として意味性 significance を持つに至る³²⁾。

「問題解決」については、かくて受容された新しい法則も「いまだ仮説的であり」[MT, p. 285]「どんな法則も絶対かつ固定されたものとはいえない」[ibid.] とされ、故に「法則は死んだ」[MT, p. 286]と宣言され「科学のどんな言明も最終的ではない」[ibid.] と主張される。

以上の「問題解決」過程を通じて、先行仮説は尊重され、観察は注意深く行われ、新仮説の概念定義は厳密性を要求され、その検証は概念定義の厳密性をもとに社会的に(他者によって)行われるべき事が主張されている。例外の発見は個人的な営為であるから、それを他者による検証に耐え得るものとするには「厳密な定義」による概念の社会性保証が要請される訳だ [cf. SW, p. 196-7]³³⁾。

なお、以上の論点に加え、Poincaréの影響を受けた [cf. MT, p. 339, etc.] Meadの科学論には、「[研究者の] 関心が変われば、…その因果推論も変わる」[MT, p. 277] という公理主義的発想が認められる³⁴⁾。

さて、以上概略的に述べた Meadの方法論は、明らかに Blumerの相互作用論の方法論と矛盾する。Blumerの方法論は次の如く要約される。

Blumerの方法論 [Blumer, 1969, p. 1-60] は、彼のいう「三つの重要な点」[ibid., p. 23], つまり (1)「全体としての科学的探求」^{クエスト}, (2)「研究の手法」^{メソッド}, (3)「最終的、決定的な回答」^{アンサー} から成る [ibid. p. 24]. これらのうち、しばしば問題とされるのが (2) および (3) の部分である。(2)において彼は、社会科学の「4つの慣習的手法」^{ミーンズ} すなわち(i) [既存の] 科学的儀定^{プロトコール}に執着する(ii)調査研究の追試に夢中になる(iii)仮説を検証する(iv)操作的手続きを用いる事は、「真正の経験的社会科学が要求する経験的有効性を提供しない」[ibid., p. 32] と主張してこれらの手法を否定する。彼にとってこうした形式的手法は、「経験的社会的世界にダイレクトに迫る」[ibid., p. 32] ことの妨げでしかなかった。

ところで、すでに見たように、Meadは少なくともこれらのうち(i)~(iii)については明示的にそれを主張している。(iv)は、Iowa派に対する攻撃とも考えられるが、Mead自身に「操作主義」的傾向はな

い³⁵⁾。従って、少なくとも(i)~(iii)の点について Blumer は Mead と矛盾している。

次に (3) において Blumer は、「エクスプロレーション exploration」と「インスペクション inspection³⁶⁾」という彼独自の二段階型の方法論を展開する。両者とも「定義からして」[ibid., p. 40]「フレキシブルな」[ibid., p. 40, 44] 手法であるからその厳密な「定義」は難しいが、前者を参与観察や個人記録中心のデータ収集・記述の段階(エクスプロレーション³⁷⁾、後者を「注意深く柔軟な吟味」[ibid., p. 44]に基づくデータ分析および統合の段階(インスペクション³⁸⁾)と理解してよいだろう。どちらの段階でも、「経験的社会的世界の直接的検討」[ibid., p. 44]のため「自然主義的研究法 naturalistic study」の手法が貫通され、従って「ほとんど有効でない」[ibid., p. 144]形式的、操作的定義のかわりに「それに従って見るべき方向を示唆するにすぎない」[ibid., p. 148]「感受概念 sensitizing concept」³⁷⁾が使用され³⁸⁾、「行為を發展させた行為者の眼と経験を通して」[ibid., p. 139]見るごとく社会的世界を検討することが要請されるだろう³⁹⁾。こうした曖昧な方法論、特に、(i)概念の厳密性を求めず(ii)他者による検証の規準を与えない点は、Meadの方法論と矛盾する。

結局 Blumer にとって、現実の社会は操作的概念で捕捉しきるには余りにも多様なものだった。C. C. Lemertの言をかりれば、彼にとって「あらゆるものがコミュニケーションすべき意味を有していた」[Lemert, 1979, p. 114]のである。そこで彼は、第一義的には概念の社会性を放棄する事になった⁴⁰⁾。以上述べた点では、MeadとBlumerの方法論的相違は歴然としている。

上とほぼ同様(但しより詳細)な根拠から、McPhail & RexroatはBlumerと論争を行った⁴¹⁾[cf. McPhail & Rexroat, 1979; Blumer, 1980; McPhail & Rexroat, 1980]。結果は、筆者のみるところ、明らかにBlumerの旗色が悪い⁴²⁾。

結局のところ、対Blumer論争の方法論的な部分の焦点は、同じく彼と論争したHuberの次の不満に要約されるだろう。すなわち、「しかし、吟味した研究者を吟味するのは誰なのか?」[Huber, 1973, p. 798]。[cf. Huber, 1973, p. 274-284; Blumer, 1973, p. 797-798; Huber, 1973, p. 798-800; Schmitt, 1974, p. 453-456; Stone, Maines, Farberman, Stone & Denzin, 1974, p. 456-463; Huber, 1974, p. 463-467.]

b) 生理学的概念への依拠

Meadの論述の自然科学的方向を示す第二の側面は、その使用する概念の多くが、生理学的に根拠づけられている(或いはMeadはそうしようとした)という事である⁴³⁾。言うまでもなく、そもそも人間個人のいかなる振るまいも、生理学的基礎を有さぬものなど存在しないわけだが、現在に至るまで生理学は人間の行動を十分説明しつくせる程には発達していない。そこにMeadは敢えて執着しているわけだが、この事は社会学的志向の強い研究者(相互作用論は「すべての社会心理学の中で最も社会学的なもの」[Lindesmith, Strauss & Denzin, 1978, 邦訳2頁]である)には等閑視される傾向にある⁴⁴⁾。しかし、この点はMeadの体系を理解するには不可欠の部分である。以下Mead的概念の生理学的志向を示す⁴⁵⁾。

「態度 attitude」は、「諸行為に対応しつつある神経系の多様な部分の組織化されたもの」[MSS, p. 11, 圈点引用者]であり、又、「中枢神経系内の特定の細胞群の神経刺激」[MSS, p. 11, 圈点引用者]とし

て⁴⁶⁾、「全体としての行為」[ibid.]の過程に対応する。「態度とは、Meadの用法では、単純に、行為の内部的組織化のこと」[Troyer, 1946 in Morris & Meltzer, eds., 1967, p. 304, 圏点引用者]なのであり、表出されていない行為の内部的局面である。「情動的状态や……循環系の急激な変化に応答しているのが態度である」[MSS, p. 20]. そこで、Meadにあっては「悲鳴は逃走するという態度の部分である」[Mead, 1910a in SW, p. 111]といった表現がなされる。彼のいう態度とは、心理的「態度」というよりは、むしろその基底にある身体的・生理的「態度」である⁴⁷⁾。

次に、「行為」は「態度」が行動として現れたもの、態度の^{オヴナート・フェイズ}外部的局面である。(行為には幾つかの段階 Stage がある。それは後述。)その「行為」の一種として、「身振り」がある。「身振りそれ自体は……切りつめられた行為であり、行為の情動の意味合いを伝達するトルソ」[Mead, 1909 in SW, p. 102]の如きものである。その「身振り」の一種、「有声身振り」が「知性的な意味表示」[ibid.]を伝えるようになった(そこまで「切りつめられた」)ものが「言語(行為)」である。従って、「他のどんな[生物]個体の行動も、身振りの豊富さという点で人間とは比較にならない」[Mead, 1910a in SW, p. 110]という事になる⁴⁸⁾。かくて、Meadにおいては、「態度」「行為」「身振り」「言語」の全てが、いわば同列の生理学的根拠を与えられている⁴⁹⁾。その「根拠」といえば(Meadの定義は一定していないが)、「中枢神経系の神経要素があらわす有機的過程の総体」[MSS, 邦訳 137 頁]である、と一応は考えてよいだろう⁵⁰⁾。

次に「他者の態度を(又は役割⁵¹⁾)を取ること taking the attitude/role of the other」は、原理的には、全く生理学的に、「参与者の意図や自覚と無関係に」[Cottrell, 1971, p. 463, 圏点引用者]生じる過程である⁵²⁾。それは、Meadの理論化の進化論的な展開に応じて、動物段階から人間社会の段階まで、広範に適用される原理となっているが、少なくとも既存社会内での個人の発達史に関しては、間違いなく上述の生理学的な意味で用いられる⁵³⁾。幼児は、他者の態度に対して自らの身体的態度を「調整 adjustment」させ、その「行為」とくに「身振り」を「取る」ことで、「態度」を組織化し、不定型な「衝動」に対応する(それを解放すべき)適切な「刺激」を決定し始め、「習慣」形成の第一歩を踏み出す。(そしてそれは、有意味シンボルを媒介とした「遊戯」→「ゲーム」段階を経て、「自我」を形成するに至るだろう⁵⁴⁾。)

では、こうした生理学的な「他者の態度を取ること」の、その根拠は何か? そこには Mead の進化論的発想が働いている。彼は、動物における「他個体の態度を取ること」の起源を説明している。「[行為の初期段階≒態度]社会性の個体……に対しての刺激として非常に重要であり、進化の過程において刺激として特に有効になったに違いない。つまり……社会性の個体は社会的動作の初期段階[態度]に特別敏感にならなくてはならなかった」[Mead, 1910c in SW, p. 124, 圏点引用者]。かくて「他者の態度を取ること」の根拠は彼の進化論的発想において与えられているといえる⁵⁵⁾。付言すれば、「態度」すなわち神経系を中心とする人間の有機的体制の成立を可能たらしめたもの、つまり「態度」の根拠も又、同様に、生物学的な進化過程の結果として与えられている事は言うまでもないだろう [cf: MSS, p. 226, n. 27].

さて次に、「意識」「精神」「自我」について述べなくてはならない⁵⁶⁾。ところで Mead においては「行

動の目的的要因は生理学的根拠〔環境への適応、補足引用者〕を有するのであり、それは根本的にも必然的にも意識的・心的であるわけではない〔MSS, p. 100, 圏点引用者〕。それ故、「意識」「精神」「自我」は、いわば二次的に成立するに至った機能であって、常に存在している実体ではない。「刺激と反応の結合が習慣的になり、識閥下に沈む事こそが、行動の組織 economy にとって本質的」〔Mead, 1910c, in SW, p. 127, 圏点引用者〕なのであるから、「意識」が機能するのは「問題状況」においてのみである。同様に、「精神の特徴は反省的知能」〔MSS, p. 118〕であるから、精神が機能するのも、「問題状況」における「行為の一時的抑止」〔MSS, p. 90〕＝反省的思考が働いているときのみに限られる。さらに、「行為に全面的に打ち込んで」〔MSS, p. 137〕いるとき等には、「自我が介入してこないような経験もありうる」〔MSS, 邦訳 148 頁〕。

かくて、Mead においては「意識」「精神」「自我」は、遍在するというよりはむしろ、特定状況において（稀に）機能するにすぎない。「我々が最も親しいモノは、……行動において最も識別されにくいものである」〔Mead, 1910c in SW, p. 127〕。つまり、日常的な行為の大部分は、無意識かつ習慣的に達成されるのであって、そこには「精神」や「自我意識」の関与する余地はない。Mead の人間像は、この点ではすぐれて自動的な存在である⁵⁷⁾。

さて、これらの機能の生理学的根拠はどうか？「意識」は「社会的動作」^{アクト}から発生する〔MSS, p. 18〕。「精神」は「反省的知能」をその特質として持つから、これは「他者の態度を取ること」によって可能となる自己対象化から生じる。そして「自我」は、（概略的に述べるなら⁵⁸⁾）「I」と「Me」に二大別され、『I』とは、他者の態度にたいする生物体の反応、『Me』とは、他者の態度……の組織化されたセット〔MSS, 邦訳 187 頁〕である。従って、前者は明らかに生理学的概念であり、後者も又、他者の〔生理学的〕態度を「組織化」し「セット」として採り入れるその基体は、個人の、未組織な生理学的態度である。「……『Me』とは……一群の組織化された態度」〔MSS, 邦訳 199 頁〕なのだ。

かくて、「意識」「精神」「自我」という三つの機能は、全てその基体構造において生理学的根拠を与えられている。逆にいえば、こうした生理学的根拠を離れて「意識」「精神」「自我」は成立しえない。Mead における「心理的なもの」は、その基体としての「生理的なもの」の上に、（両者の相互関係の結果として）存立する⁵⁹⁾。しかも、生理的態^レ度として一定程度安定するに至った「習慣」が、人間行動の多くの部分を占めている⁶⁰⁾。

Mead 理論の「生理学的（生物学的）」な側面を、以上指摘した。こうした側面を無視ないし拒否した Mead 理論の「再構成」は、Mead の「……複合的かつ弁証法的な生物＝社会的概念化を、まったく一元論的で社会的に決定される……モデルに還元してしまった」〔Carveth, 1977, p. 81〕として批判されることになるだろう。

c) 「方法」としての行動科学

Mead の思考における自然科学的側面を示す第三の点は、その、行動科学の「方法」への依拠、という事に求められる。

通例、この事実は、Watson の行動主義に対する Mead の「社会的行動主義⁶¹⁾」、という比較の文脈

で語られる。又、MSSにおける講義の展開（或いはその編集された結果）が、このような理解を許すものとなっている事実も否めない。しかし、MeadがWatsonに[・]触[・]発[・]され、或いは[・]対[・]抗[・]する目的で、彼の「社会的行動主義」を主張した、とみなすのは妥当ではない⁶²⁾。

以上の事を理解するためには、Meadの思索における第一の目標が、独我論を回避し、「意味を公開の場に引き出し、主観性から解き放つ」[Miller, 1973, p. x] ことにあった、という事を認識しなくてはならない⁶³⁾。公開論文の年代を追いながら、Meadのこうした意図を提示してみる。

- (i) 「心的状態とその個人とは同一であるからそれが心的なものとなるのではなく、それを自分自身のものだとする彼の認識によってそれは心的なものとなるのだ」[Mead, 1900 in SW, p. 17]⁶⁴⁾
(従って、心的なもの [the psychical ≡ 主観] は、それ自体本質からして主観的であるのではない。)⁶⁵⁾
- (ii) 「自我の社会的な性格を認識することは……それまで主観に属していた内容の客観化を含む」[Mead, 1903 in SW, p. 47]. (よって、自我の意識内容は本質的に主観的であるわけではない。)
- (iii) 「対象は、硬軟大小さまざまに見える。しかしそれを照合するためのもの [対象] は常にそこに存在する」[Mead, 1907 in SW, p. 79]. (よって、多様な主観的知覚は、実際に対象と接触する事で——対象の、第一性格 primary qualities⁶⁶⁾ との照合によって——客観化されうる。)
- (iv) 「神経興奮を……意味へと変えたのは、[身振り] の他者に対する関係であり……他者がこれに対して別の [身振り] で反応する事が、コミュニケーションのための、共通理解のための……はじめの基礎を提供したのだ⁶⁷⁾」[Mead, 1909 in SW, p. 102]. (従って、意味はその発生史において本来的に社会的であり、客観的である。)
- (v) 「唯我論の可能性が形而上学的にどんなものだろうと、心理学にとってそんなものは非在である。一人の自我が存在すべきなら、そこには他者の自我が存在しなくてはならぬ」[Mead 1909 in SW, p. 103]. (独我論の否定、自我の本来的な社会性の主張。)
- (vi) 「もし我々が……厳密な社会科学を持っていたなら、自我は、そこにあるものとして as there, 物理的对象が受容されると同じ意味で受容されただろう。……自我のうちに存在するものとしての意識は、そこに as there, 内観された場の外部に与えられるだろう」[Mead, 1910a in SW, p. 107-108]. (自我および意識を、客観的な科学的対象として外部的世界に引き出すことの必要性の主張。)
- (vii) 「自我意識はまず第一に社会関係に依存する。自我は意識の中に、他者の自我の認知と定義に歩調を合わせて生じてくる」[Mead, 1910b in SW, p. 121]. (自我発生における他者との社会関係の不可欠性、独我論の発生論的な否定。)
- (viii) 「意味についての意識は……他者の身振りを解釈し統制しそれに応答するものとしての、自分の反応態度についての意識である」[Mead, 1910c in SW, p. 132-3]. (意味の、^{アクト}行為 (「身振り」と「反応態度」) に基づく定義。つまり、観察可能なものとしての意味の定義——「意味を公開の場に引き出す事」。)
- (ix) 「内的意識は、外部世界の社会組織を移入することで社会的に組織化される」[Mead, 1912 in SW, p. 141]. (独我論の否定、社会の個人に対する先在。)

- (x) 「内省された『Me』は他者の社会的行為の対象である『Me』と同じものである」[Mead, 1913 in SW, p. 144]. (従って、自我のうち少なくとも「Me」の部分は集団成員相互にとって共通の、'透明な'存在である。自我の大部分は公的なものである.)
- (xi) 「自我が私的であるのはただ非本質的に、なのであり、つまり自我は必ずしも一個人の意識経験に限定されるわけではない」[Mead, 1922 in SW, p. 241]. (従って、「その領域が、その属している個人的生物体の皮膚を限界にすることなどありえない⁶⁸⁾」[MSS, 邦訳 239 頁, 注 (25)]⁶⁹⁾のである.)

以上、「過剰引用の危険」を取っておかしつつも、Meadの興味関心がほとんど一貫して、「意味を公開の場に引き出す」事であった事を、30年以上の期間にわたる彼の論文からの引照によって示した。この事から、Meadにとって「行動科学」が有していた意義もおのずと明らかになるだろう。彼は独我論を避け、意味を客観的に定義し分析に用いる——意味それ自体を分析するのではむしろなく⁷⁰⁾——ための「方法」を求めていた⁷¹⁾。初期において、それは主として「第一性格」のもたらす「接触経験 contact experience⁷²⁾」の普遍性や、Wundtの言語理論の拡張によってなされていた⁷³⁾。こうした彼の志向にとって、「行動科学」はまさに格好の「方法」を与えるものだったといえよう。Meadにとって「行動科学」が有していた意義とは、その「方法」によって人間の内的意識経験に客観的に接近することが可能になる——つまり、「意味を公開の場に引き出す」ための〈科学的装置 scientific apparatus〉⁷⁴⁾が与えられる、という一事に他ならなかったのである。

こうして、「概念もしくは観念を行動主義であつかえる領域にもち込む可能性」[MSS, 邦訳 109 頁]を検討した結果、Meadは「内的な経験に、行動主義の観点からアプローチすることができる」という結論に達する[MSS, 邦訳 8 頁]。

Meadの意味の定義は簡明で客観的である、すなわち「ある生物体が生じた身振り[≡行為、補足引用者]の意味は、その身振りが端緒になって指示している最初の生物体の行為の完成になるだろうような他の生物体の反応のなかに存在している」[MSS, 邦訳 157 頁]。

この定義の妥当性は、いまは問わない。しかし、この定義によって Mead が意味を客観的に観察可能な領域に引き出した事は認めてよいだろう。Meadにとって、行為の意味は自明のものとなったのである。更にいえば、意味は外部から接近可能なものとなったのである。

そして、少なくともこの点に関しては、Cottrell派のLewisが批判するごとく、相互作用論者は「Meadを倒立させた」[Lewis, 1976, p. 349]と言ってよいだろう。例示すれば、すでに検討したBlumerの方法論(特にその了解 *verstehende* のアプローチ、本論 26～29 頁)は、まさに行為者の内部的意図から外部的行為を理解しようとするものであり、これは、内→外という方向性においては Mead の立論の逆を行くものであるし、内の理解が必要であると主張する点においては Mead の立論以前のものである⁷⁵⁾。又、Kuhnの場合には、自己態度(それも心理的な)を操作的に検出しようという発想それ自体が、Mead理論からすれば、逆行的なものである。更に、Roseによる相互作用論のシステマティックな要約では、「生じた意味は、二人にとって全く同一である事はめったになく、ただ類似

するにすぎない」[Rose, 1962 in Rose ed., 1962, p.7, n.4(a)] という論述部分が問題となる。結局、意味の行動科学的把握、という Mead 理論の「方法」からする限り、相互作用論の多くはまさにその逆をいっていると考えざるを得ない。

以上、三点について Mead の思考の自然科学的な側面を指摘した。この側面に関して Mead 理論と相互作用論とがむしろ一致していないという点をあわせて示した。

3) 思考の人間科学的側面

本項では、Mead の思考の素材のうち、人間科学（特に心理・社会学）的な性格を示すもの三点について各々記述する。前項と同じく本項でも、特に Blumer を中心として、Mead の思考のこうした側面と相互作用論の理論との関係が検討される。

a) 社会性

前々項において示した Mead の自然主義＝進化論的発想からすれば、全体としての「社会」と個別としての「個人」が不即不離の相互想定関係にあるという認識は当然生じてしかるべきものであるといえよう。この種の認識の直接の先駆者として、J. M. Baldwin と C. H. Cooley とが挙げられる。しかし Mead は Baldwin の心理学には同意しなかった⁷⁶⁾。そこで、1909年の彼にとって「社会学者がその社会学をあてはめるのに十分適切な社会心理学は Cooley 教授の[それ]⁷⁷⁾を措いて他にな」かった[Mead, 1909 in SW, p. 96]。

けれど、Mead は Cooley の理論化にも満足できなかった。それは「……自我の起源も……自我感情の起源も、説明できない」[MSS, 邦訳 185 頁] からであり、しかも、独我論を回避しようとした Mead の立場（前項 c）参照）からすれば、「不可避免的に内省的なものになるし、……完全な唯我論の意味あい」をともなう「Cooley の心理学は……主観主義的で観念論的な形而上学の立場に陥ってしまう」[MSS, 邦訳 239 頁] もの、つまり Mead が最も嫌った立場にコミットする事になってしまうと考えられたが故であった⁷⁸⁾。そこで Mead は、「客観的社会過程の中に生じるものとしての自我、という立場をとり、[James や Cooley の如き] 自我の内省的、心情的説明を拒否」した[Coser, op. cit., p. 351-352]。そこで彼は、「心的現象は……進化的な創発の結果であるという仮定から出発する」[Desmonde, 1956 in Stone & Farberman, 1970, p. 56]。

しかも、前述のごとく（2項 b)), 意識, 精神, 自我という機能の出現を可能とするのは「他者の態度を取る事」である⁷⁹⁾。だから、自我が出現するには他者（社会）が先在していなくてはならない[MSS, chapt. 29]。そもそも Mead においては、個人は社会の有機的部分なのだから、社会を除いて個人を想定する事はできないわけだ⁸⁰⁾。

さて、さらに重要な点として、この「先在する社会」には、「有意味シンボル」の体系、すなわち特定言語（という進化過程で「切りつめられた身振り」）の体系が存在している⁸¹⁾。「有意味シンボル」について特別な点は、その使用により、「個人は自らの刺激に対して、他者が反応するのと同じように反応する」[MSS, p. 67] という事である。「有意味シンボル」は、従って、「集団成員全てにとって同

一の、つまり共通の意味をもつ」[MSS, p. 89, 圏点引用者]. それは「普遍的」なものである.

ただし、「有意味シンボル」が「有意味 (= 普遍的)」であるのは、特定の「話想宇宙 universe of discourse」内において、である。「話想宇宙」とは、「経験および行動の共通な社会過程を達成し又それに参与する諸個人の集団により構成される」[MSS, p. 89] 世界である。だから「話想宇宙」はひとつの共有されたシンボルの世界であるが、しかし、「ただ共通の(集団的)体験がある限りにおいてのみ……共通の世界は存在する」という[MSS, p. 89, n. 19], いわば限定詞つきの普遍的意味の世界である⁸²⁾.

このような「先在する社会」に、その内部に個人は^う生まれる。そして、精神および自我は、このような「社会過程の個人内移入として」[MSS, chapt. 24] 語られる。

Meadにおける自我の発生史は、三つの移行過程を経る、と理解してよいだろう。すなわち、(i)準備的前段階から遊戯 Play 段階へ、(ii)遊戯段階からゲーム段階へ、そして(iii)ゲーム段階から「一般化された他者」の獲得へ、という過程である⁸³⁾。各々について記述する。

第(i)段階. Meadの理論化の中では、生体は、誕生の当初から、基本的に^{アクト}行動しようとする衝動をもつ⁸⁴⁾。この「衝動」が、適切な「反応」を触発するべき「刺激」を求め⁸⁵⁾。幼い個体では、反応に対応する「外部刺激をいまだ決定していない本能的な反作用が存在」しており[Mead, 1907 in SW, p. 76], これが適応性を説明する。この段階では、「態度」はアモルフな^{アクト}「行為への衝動」からなっていると考えられる。

しかし、他者の「身振り」は、(生誕当初の幼児においても)、「高度に組織化された生体であれば、部分的にあらかじめ決定された反作用を……呼びおこす」[Mead, 1922 in SW, p. 242]。そして、「この[生得的に]⁸⁶⁾特殊化された^{リアクション}反作用が個体の本性にある限り、それはいつでも、適切な刺激やその刺激を呼びおこす身振りを[この場合、幼児の側に]生じさせる傾向にある」[ibid., p. 243]。

かくて、ここに「社会的刺激の場」が成立する。すなわち、他者(ここでは多分、母親)の「身振り = 態度」に対して、幼児の「アモルフな態度 = 未組織の^{アクト}行為への衝動」は、その「身振り = 態度」を「取り⁸⁷⁾」、それによって「衝動」を触発する適切な「態度」を習得し、又、「反応」するべき「刺激」を決定する。同時に、「ある個体が身振りを^{アクト}用い、それによって他個体がそれに影響される如く影響されるなら、その個体は自分の社会的刺激に対して、他個体が反応するのと同じように反応する」[ibid., p. 243]。だから、母親の「態度」を取った幼児は、今度は、母親がその「態度」に影響されるのと同じように影響され、反応する。発達のこの段階では、多少とも安定的な自我は生じておらず、「態度の相互の取り合い」は、むしろ「身振りの相互のやりとり」といった形で進行する。

以上の準備的な前段階は、いわば「アモルフな態度」を一定程度安定したものに向けて方向づける段階といえるだろう。

さて幼児が遊戯^{プレイ}段階へと移行すると、自我が確立し始める。「自我は、個人がその意識の中で自分にとっての対象となったとき、行為の中に生じる」[ibid., p. 243]。そして自我は、「子供の通常の遊び^{プレイ}において表出される」[ibid.]。この段階において、子供は「他人によびおこすのと同じ種類の反応を自分

自身によびおこす一群の刺激」を持ち、「そういう反応をしながら、反応をひとつの全体にまとめてゆく」[MSS, 邦訳 162 頁].

つまり、他者を介しての自己対象化過程を通じての自我の析出、という事であるが、この段階から、「有意味シンボル」が、「身振り」に変わって、「態度」形成に重要な役目を果たすようになってくる。

「有意味シンボル」の特性は、前述した如く、その「集団成員全てにとって同一の共通な意味をもつ」という普遍性にある⁸⁸⁾。Mead の「意味」の概念は、既述の如く(2)項c)), すぐれて生理学的なものであるから、「有意味シンボル」の「普遍性」とは、それが(同一「話想宇宙」内の)集団成員の全てに対して同一の反作用を導く生理学的「態度」を喚起するものである、とみてよいだろう。

かくして、「有意味シンボル」という「切りつめられた身振り」は、「他者の態度を取ること」が幼児において有していたのとほぼ同様の機能を言語習得過程での子供に対して持つことになる。「シンボルが有意味となるのは、自分自身でありつつも同時に他者になれるという能力を通して、なのである」[ibid., p. 244] から、逆に言えば、「有意味シンボル」を介して子供は「他者の態度を取ること」ができ、又、その限りでの有意味なシンボルなのである。「言語シンボルは、有意味の、あるいは意識された身振りにすぎない」[MSS, 邦訳 86 頁] というわけだ。

ところで、言うまでもなく、「有意味シンボル」は「身振り」に比較してはるかに効率的である。何よりもシンボルは、「一定の諸性質を指示し……直接的環境からそれを分離し……関係だけを」明らかにしてゆく[MSS, 邦訳 130 頁, 圏点引用点]。こうしたシンボルによる思考様式が、「白ネズミの……条件反射と……人間の思考過程とのあいだに巨大な差を」作る[MSS, 邦訳 130 頁]⁸⁹⁾。

第(ii)段階。^{プレイ}遊戯段階からゲーム段階への移行を特色づける点は、複数の「他者の態度」を一度に「取る」ことが可能となる、という事に求められる。「所与の条件下で同じ対象に対して全員がとる態度が、その子供にとっての、誰もがとる態度になる」[Mead, 1922 in SW, p. 245].

^{プレイ}遊戯段階では、子供はまだ「十分に発達した自我をもっていない」。そこには「定めなく互いにあらわれてくる一群の反応」があるばかりで、「組織化された反応群」としての自我は生じていない[以上引用は MSS, 邦訳 163 頁].

しかしこれが、ゲームをする段階となると、「かれは多くの役割を組織化しなければならない」。そして「時には三人も四人もがかれ自身の態度の中に」現れなくてはならぬ[MSS, 邦訳 163 頁, 圏点引用者]。圏点部分から明らかのように、「複数メンバーの役割」が「一個人の態度の中に組織化」される。或いは又、個人の態度が、複数役割を(その各々の表出する態度を)移入することで組織化される、と言った方が正確かも知れない。

この段階の記述部分以降、Mead の自我発達論は生理学的というよりは社会的=心理的な論述に変化しているように思われる⁹⁰⁾。この段階を経て、「態度」における「Me」部分が形成される——すなわち、「他者の期待の組織化されたセット」が「態度」に移入され、それを組織化する、と Mead は考えているようである。しかし、どうしてそれが可能か、という理由づけとなると、Mead の議論はやや曖昧であるといわざるを得ない。

例えば、「Me」はどのように多様な役割を統合可能なのだろうか？ Meadの答えは、「教育と様々な経験によってそれから偏狭なものが取りのぞかれ……他者の様々な態度の相違は、その特殊性をすりへらしてしまうからだ」[Mead, 1922 in SW, p. 245]といったものである。或いは又、「さもないと、かれはゲームできない」[MSS, 邦訳 163 頁, 圏点引用者]といった類いのものである⁹¹⁾。これらはもはや、事実命題であるよりはむしろ当為命題であると思われる⁹²⁾。この事は、発達次の過程においては一層明白にあらわれている。

第(iii)段階、ゲームを通しての「複数の他者の役割の組織化」は、「一般化された他者 generalized other」の獲得によって完成する。「一般化された他者」は、「かれが属している社会集団全体の社会的態度の組織化」[MSS, 邦訳 169 頁]されたもの、或いは当該「話想宇宙」の個人の態度内における等価物であるといってよいだろう。この獲得によって、自我は「その十全な発達を達成する」[MSS, 邦訳 169 頁]という。その獲得様式は、「特殊な他の個人たちの態度のばあいとおなじやり方」[MSS, 邦訳 169 頁, 圏点引用者]で行われるという。

「他者の態度を取る事」は、具体的な相互作用場面での生理学的な過程であった(2項b)参照)。しかし、「一般化された他者」は、Natansonの批判をかりれば、「操作 manipulate することができない」[Natanson, 1956, p. 67] 対象である⁹³⁾。「一般化された他者」という実体が存在するのではない。それは「一般的で体系的なパターン」である[MSS, 邦訳 169 頁]。従って、それが、具体的な相互作用場面を介して、生理学的な過程として、「他者の態度」と「同じやり方」で獲得されるとは考えにくい。

無論、Meadの理論化においては、「有意味シンボルの体系」たる「話想宇宙」が、「集団成員全てに対して同一の[生理学的]反応を生じさせる事になっている。だから「話想宇宙」が与える「一般化された他者」のシンボリックな「態度」は、具体的他者の生理的「態度」と同じほど実体的でありうる、とも言えるわけで、従って、「話想宇宙」は具体的他者(との「有意味シンボル」による相互行為を通じての、その)「態度を取る事」と同程度、同様の直接的影響を持ちうる、とも考えられる。(恐らく Meadはそのように考えている。)⁹⁴⁾

しかし、現実問題として、「話想宇宙」の生理的反応喚起力は、それほどにまで直接的な拘束力を自我形成過程において発現させているだろうか。確かに Meadは、「自我の生物学的基盤を過小評価することはなかった」[Reck, 1964a, p. 100]し、その「客観主義的・自然主義的接近方法は、そこで自我が生じる外部的領域に対して正当な考慮」を払ったといえる[Mannheim, 1950, 邦訳 424 頁]。けれども、Meadの想定する如き生理学的に極めてセンシティブな人間像は、やはり、Carvethの指摘に従って、「神経的に過社会化された人間像に傾いている」[Carveth, 1977, p. 82]と言わざるを得ないようだ。

ともあれ、「一般化された他者」を獲得したとき、つまり、「それまで取ってきた様々な役割の態度をある意味で融合させる」事に成功したとき、「彼の人格は統一される」[Mead, 1922 in SW, p. 245]。このときはじめて彼は「社会の有機的な一メンバー」[MSS, 邦訳 120 頁]となる。そして彼の「態度」の大部分は、それが「自我」として機能するときに「Me」としてあらわれるもの、つまり「他者の期待の組織化されたセット」を(または、各「話想宇宙」に対応する各「一般化された他者」を)移入し

ているだろう。彼の「内部意識は、外部世界の社会組織の移入によって社会的に組織化」された [Mead, 1912 in SW, p. 141] わけである。

以上の議論は、相互作用論とどう関係するか？ 「一般化された他者」が現実には全ての社会集団に普遍的ではない、というのが実情である限り⁹⁵⁾、研究者の属す「話想宇宙」と調査対象の属す「話想宇宙」とは異質のものでありうるだろう。従って、研究者は調査対象の属す「話想宇宙」の内実を知らなくてはならないだろう。表現を変えれば、「ひとつの社会集団において共有された（又は、当然とみなされた taken for granted）意味の体系」を知る努力が求められる。これは相互作用論の方法論そのものであるとよい。従って、Meadの理論が不完全である、という事実認識のもとに、はじめて相互作用論の手法は正当なものたりうると言うことができる⁹⁶⁾。

b) 主体性

ヒトが人たりうるのは、ただ「社会組織の移入」によってのみであるならば、彼の主体性、独自性はいかにして保証されるのか？

この問題は、Meadに関しては、特にその自我の二側面、「I」と「Me」とに関連して多く述べられてきた。実のところ、Meadにおける「自我」とは「態度」の機能であると考えられるから、それが機能するのは、典型的には「問題状況」における思考や反省の時に限定されるだろう。ところで、少なくとも「Me」は「態度」の構成部分である。「態度」は遍在するが、「自我」は局在する。だから、「I」と「Me」とをただ「自我」の二側面として想定するのは、むしろ問題領域をごく狭く限定することにもなりかねないと思われる。

Meadにおける「I」-「Me」関係を論じた最も包括的な論文として、Lewis [1979, p. 261-287] が挙げられる。以下、これに拠りながら「I」と「Me」、とくに「I」について考察する。

Lewisは、「今日までに提起された『I』についての理解は、大部分、二つの一般的カテゴリーに分けられる」[ibid., p. 264]として、過去の「I」解釈を整理することから始める。二つのカテゴリーとは、「補償としての remedy I」と、「残余としての residual I」である。

まず、「補償としてのI」論者として、Meltzer, Morris, Strauss, Thayer, それに Lindesmith, Strauss & Denzin および Rose の論文が示され、これらは「『Me』による社会的抑制力に対抗・対立するものとして『I』を理解する」と言う [ibid.]⁹⁷⁾。そこでの「I」は、生物学的「衝動」や実存主義風「個 self」として理解されている、とする。そして、この理解の場合、「I」は Mead の理論中で、はっきりした機能、「例えば『Me』に含意される社会的決定論を回避するといった」[ibid.] 機能を有するものと考えられている、とする。

次に、「残余としてのI」論者として、有名な Kolb, および Gillin⁹⁸⁾ の名が挙げられ、この解釈は「『I』に対してどんな正当な目的も許さず」、もし Mead 理論から「I」が消去されれば、「Mead の理論はより説得力の強いものとなっただろうと主張する」[ibid., p. 265] という。

Lewisは、どちらの理解もマチガイだ、と主張する。その原因は、Mead の Social Behaviorism の理解不足による、とする。(Lewis は Cottrel 派である。)「補償」論も、「残余」論も、「I」は Social

Behaviorism のパースペクティブからは異質 alien なものだ、という仮定から始めて、Social Behaviorism の中心理論に対する付加物として「I」が考えられねばならぬ理由を説いている、とする。

そこで Lewis は、Mead 解釈の多くが MSS を典拠としている点に不満を表明しつつも、では実際に MSS において「I」がどのように使用されているか、を調べる [ibid., p. 266].

ここで Lewis が挙げた用法は、「反応 response」としての「I」、「自我 ego」としての「I」、「反応に関係するもの that which is responsible for the response」としての「I」の三種であり、ここから、さらに二種のタイプ、A : 「 $\dot{I} = \dot{\text{反}}\dot{\text{応}}$ 」と、B : 「 $\dot{I} = \dot{\text{反}}\dot{\text{応}}\dot{\text{す}}\dot{\text{る}}\dot{\text{もの}}$ 」[つまり、ego を含む。上の後二者をまとめたタイプ]とを、MSS 中の十数種の文章から導いてくる(但し、文例の選択基準は不明)。こうして、MSS における「I」の性格づけには「全くの不整合」がある、と結論される。つまり「 $\dot{\text{反}}\dot{\text{応}}\dot{\text{と}}\dot{\text{し}}\dot{\text{て}}\dot{\text{の}}\dot{I}$ 」と、「 $\dot{\text{反}}\dot{\text{応}}\dot{\text{す}}\dot{\text{る}}\dot{\text{もの}}$ 」[つまり $\dot{\text{反}}\dot{\text{応}}\dot{\text{自}}\dot{\text{体}}$ ではない]としての I」という両者の不整合である。

ここで Lewis は、Mead の公刊論文において多く一貫して用いられているのは A タイプの、つまり「I = 反応」という概念化である、と主張し⁹⁹⁾、この定義を選択する。そして以下、Social Behaviorism の枠内でいかに「I = 反応」という概念化が整合的に使用しうるか、を示してゆく [ibid., p. 266-271]。彼の図式を要約してみよう。

Lewis の図式は、「有意味シンボル」、「態度」、「反応」の三者の関係が、「社会的行為についての Mead の社会的行動主義理論の下位の構造を形成する」と考える [ibid., p. 268]。そして Lewis は、Mead が「有機体の態度とその反応をはっきり区別した」事を強調する [ibid.]。「態度」は、社会的行動に関する限り、「有意味シンボル」によって、常に決定論的に形成される。「態度」は、それが共同体成員全てに共通であるという意味では、常に「社会的態度」である。ところで、「態度」は行為の内部的局面だが、「反応」は外部的な物理的行為に至る [反作用として現れる] ものである。「態度」は何らかの「反応」を用意する [以上 p. 268]。従って、「態度」が決定論的なもので、しかも「反応」を決定論的に導くなら、「反応」も決定論的な行為として現れるだろう。

ここで Lewis は、2つの〈不確定性要因〉を提起する。第一に、条件次第では、「態度」=「反応」間にフィードバックが働き、「反応」を抑止する。第二に、たとえ「反応」が行為に移ったとしても、「人体組織の機構上の不完全性」の故に、「反応」は常に同一の行為として達成されはしない。つまり、同一「反応」は同一「行為」として結果しない。

かくして、「態度」の(「有意味シンボル」に関する)決定性、「反応」の、i) それ自体としての非決定性、ii) 結果としての非決定性、を Lewis は示す。ここで、「態度」=「Me」、「反応」=「I」という等式を Lewis は置く。すると、決定論的な「Me」と、不確定的な「I」とが与えられる [ibid., p. 269]。以上の議論を Lewis は、思考過程において、一瞬前の意識されぬ(しかも論理的な仮説的前提としての)「I」が、次の瞬間には意識された「Me」となる、という Mead [1913] の議論¹⁰⁰⁾をもって補強する。すなわち「I」は Mead の理論において不可欠である、と [ibid.]。

筆者は、ここまで示してきた Lewis の議論に全面的には同意し難い。しかし、Lewis 批判は後回しにして、Lewis の「残余論」「補償論」批判の方を先にみておこう。

まず、「残余論」者として Kolb [1944 in Morris & Meltzer, ed., 1978, p. 191-196] を批判する。Kolb

[p. 191-192] は、「I」を「態度」ないし「衝動」とみなしている。しかし、実際には「I」は「反応」であって「態度」でも「衝動」でもない。Kolbの例を引くなら、我々は通常、野球選手の「Me」を知っているから、彼がしようとすることを予測することができる。しかし、彼の実際の「反応」は予測できない。しかも、「態度」が「反応」を生じさせているとき、その個人は「反省」していない（「我々が対象的世界に熱中し心を奪われているとき、^{アウェアネス}自覚は消失する」[Mead, 1913 in SW, p. 145]）から、野球選手は返球時の自分の「反応」を意識できない。しかし、それは他者にとってはその現れ（「返球」）として即座に観察しうる。一瞬後には選手自身にも、そこで、返球のミスは彼の野球選手としての「Me」の変化（「下手だ」）として結果する。たしかにKolbのいうように、多様な不確定要因による「I」の予測不可能性それ自体は直接の社会学的関心の対象とはならぬだろうが、そうして変化した結果としての「再統合 reintegrate」された「I」は、社会学的関心の対象たりうるし、それを知るには、「I = 反応」概念が不可欠だ [ibid., p. 271-273]。以上、LewisのKolb批判。

次に、「補償論」者への批判。「I」を「反応」として考えず、「衝動」としてみるのは（「残余論」と同じく）誤りだ。「I」と、Freudの「イド」とは別ものである。Meltzerが、両者を別ものとした[Meltzer, op. cit., p. 19, n. 3]ののは正しいが、Meltzer自身の「I」理解は不明瞭だ。多分彼は「I」を先験的自我と見たかっただろうが、そこでは正確な定義も与えられていないし、概念として使用できない [ibid., p. 273]。

以上に加えて、LewisはKuhnを「残余論」者、Blumerを「補償論」者とし、ChicagoとIowaの両派の誤てるMead理解によって、Social BehavioristとしてのMeadはほとんど見失われてしまった、と主張する。（それ故、Meadへ戻れ、と。）

およそ以上がLewisの「残余論」「補償論」批判である。Lewisが検討したKolb、Meltzerのうち、後者は前者に依拠するところ大であるので、ここではLewisとKolbの理解について考察する。

まずLewisの基本的な理解から検討する。彼の「補償論」と「残余論」という理解は、恐らく適切である。程度の違いこそあれ、両者とも「I」の理解に苦しみ、そのMead理論の他の部分との関係づけに悩んだ、という事は間違いない。そこで、Lewisの「Me」=「態度」、 「I」=「反応」という説であるが、これには筆者は同意できない。第一に、「Me」=「態度」説については、「態度」の全てが「Me」であるのか（社会化は完全に行われるのか）という点に疑問が残る。完全な社会化（態度=Me）と考えると、この場合、「態度」に主体的な部分が求められないから、Lewisの如く、「反応」⇔「態度」のフィードバックや、「反応」と「行為」の状況要因による偶発的不一致に、主体性の契機を求めなくてはならなくなる。しかも、「I = 反応」が「再統合」される、といったナンセンスな議論が現れる。（「再統合」されるのは、つねに、一瞬前の「I」を「統合」した「Me」の方である筈だ。）

仮にMeadが主張した如く、「一般化された他者」が「態度」に内在化されることが事実達成されたとしても、その事じたいは、「態度」の完全な社会化（「態度」=「Me」）を何ら意味しない。Meadにとって、「未成熟な動物個体の適応性が意味するのは、その個体内に、外部刺激をいまだ決定していない反応¹⁰¹⁾が存在する、という事」であり、「経験を通して適切な刺激[適応的な刺激]が決定される」[Mead, 1907 in SW, p. 76]のだった。だから、適応性が存在する限り、そこには「刺激を決定していない反応」

が存在する。つまり社会化されていない態度部分である。すると、生誕当初の、「アモルフな態度」が「他者の態度を取る事」によって社会化された部分（「態度」の「Me」部分）と、いまだ「刺激を決定していない反応」部分（「態度」の「I」部分）とが存在しうるだろう。

前者は行為の習慣的（無意識的）な部分を処理し、それ自体、習慣が有効な限りで固定的である。習慣が有効でなくなると（問題状況）、後者つまり「刺激を決定していない反応」を可能とする「態度」部分が働きます。

さらに、機能主義心理学の発想からすれば、「環境」に対して適合的に「衝動」を解発すべき「刺激」を「反応」が選択する、ということになっている¹⁰²⁾。だから、「I = 反応」と置くのは一応は問題ない。しかしその「反応」とは、「態度」と相互排他的なものではなく、「態度」の社会化されていない（刺激を決定していない）部分である。そうしないと、Lewisの議論の如く、「社会化された態度 = Me」から生み出された「反応 = I」が、この反応の基体である「態度」との間でフィードバック（内的リハーサル）を行う、という議論になってしまう。この立論では、「そもそも社会化されている Me」が、そこから生じた「やはり社会化されている I (!)」と対話するというおよそ弁証法的とはいいいかねる、「社会化された Me」と「社会化された I」との「弁証法」過程なる、奇妙な事態が避けがたいものになってしまう。その原因は、結局、「態度 ⇄ Me」という理解に起因するものだろう。「Me → 態度」は成立しても、逆は成立しないのだ。

さて、ここまでの議論を要約して、修正 Lewis 見解としての Mead 理解を次に示す。

- i) 新生児は、「行為へ向かうアモルフな態度 ≡ 衝動」と、「他者の態度を取る」生理的能力（「社会的本能」）とを生得的¹⁰³⁾に持つ。ただし、「衝動」が解発されるのは、「反応」が適切な（環境に対して適応的な）「刺激」を見出したときに限られる。
- ii) 「アモルフな態度」は、「他者の態度を取る」能力により、はじめは具体的な他者、次いでシンボリックな他者（有意味シンボルの体系の個人へのあらわれ）を媒介として、社会的に組織化され、「Me」となっていく。この過程を通して、「反応」は「衝動」解発について適切な「刺激」を決定していく。
- iii) 「一般化された他者」の「態度」≡ 当該「話想宇宙」の「有意味シンボル体系」を内在化させるに至った個人では、「態度」の大部分は社会化された「Me」となる。その時点で、「衝動」解発について適切な「刺激」を決定していない「態度」部分が「I」=「有機体の反応」である。
- iv) 環境が安定している状態では、「Me」（≡ 習慣）だけで自動的な社会的行為の調整・達成がなされる（無問題状況）。このとき精神・自我は機能していないが、常に、例外的な事態への注意は払われている（問題探求）。
- v) 環境が変化し、「Me」の「習慣」だけで自動的な対処が不可能となると（問題発生）、「I」が機能する。このとき「I」は「衝動」を解発する適切な「刺激」を見出していないから、「行為」は抑止され、結果、自発的注目、反省的思考、感情が生起する（仮説再構成）。この過程で精神・自我が機能し、「態度」の「I」と「Me」部分は、自我における「I」と「Me」の対話過程と

して機能する。

- vi) 適応的な「刺激」が見出されると、「I」は「衝動」を解発する。「衝動」は「Me」の検閲を経て「行為^{アクト}」として外在化し、変化した環境に対して試される(仮説検証)。「行為^{アクト}」が適応的であるとすれば、新しい「刺激」が決定され、「Me」は部分的に「再統合 reintegrate」される(問題解決)。再び、新しい「Me」による習慣的な行為が始まる。「I」は依然として、未決定な「態度」部分として残る。なぜなら、「刺激」を決定した「I」は「Me」に含まれるようになってしまったから。

以上の要約は、Lewis の理解の第一の問題点、「態度 = Me」説を修正した(それに筆者のいくつかの Mead 理解を補った)形での、「態度」を中心とした「I」-「Me」関係の図式化である。実はまだこれだけでは全く不十分なものなのだが、一応この図式化をもって Kolb の批判¹⁰⁴⁾ に対処してみよう。

- i) Kolb の批判の第一の点への反論。Kolb はこの批判で問題状況/無問題状況を区別していない。通常は無問題状況では、行為は「Me」の「習慣」により自動的・受動的・無意識的・全く生理的に達成される。このとき、行為主体は意識していない。しかし、行為としてあらわれたものは他者にとってのその個人の「Me」である。無問題状況での「Me」は行動主義的にみて自明である。

もし状況が問題的となれば、行為は抑止され、「I」と「Me」とが自我として機能するだろう。この思考過程は他者には見えないし、当の個人にも、「Me」しか知りえない。しかし、思考の結果(仮説)が検証されるとき、行為は変化しているだろう。そこで、以前の行為と変化した行為とを比較すれば、問題状況を経て「Me」がどう変わったかは行動主義的にみて自明である。Kolb の基本的な誤解は、「I」と「Me」とが常に対話的に機能していると考え、思考における自我機能としての「I」と「Me」を中心にイメージしたため、「Me」は常に他者にとっては自明である、という点を見過ごしたことにある。

- ii) Kolb の批判の第二点への反論。まず、「I」は「衝動」でも「態度」でもない。「衝動」を適応的に解発する「刺激」を決定する「反応」である。男(M)が女(F)を殴るのをある人(A)が目撃する。これが日常茶飯事(亭主関白)なら無問題状況だから、Aは無意識に事態に対応する。(M, F, Aにとって「Me」は共有されている。)もし、「問題探求」をおこたらないAの知覚が「例外(殴り方が常と違う)」に気付けば、Aの自我が思考機能を始め、結果、新しい「Me」が行為にあらわれる(仲裁に入る、ポリスを呼ぶ、etc.)。ここでは「Me」はまだ共有されていないが、この新しい「Me」が適応的(「その場がおさまる」)ならば、それはAの新習慣となり、M, Fにも共有される「Me」となる(「度を越した殴打はポリスへの連絡につながる」)。結果、M, F, Aに共有された新しい「Me」が成立する。Aの独自性(例外発見)によって、新しい「Me」が慣習となった。そもそもFを殴るMという事態が問題状況であれば、ただちにAの思考が機能する。そのときのM, F, Aに共有された「Me」が、「仲裁に入る」ことならば、Aの「仲裁行為」

は慣習の維持であり¹⁰⁵⁾、Aの「何もしない事」はAの \dot{A} の \dot{I} = 新し \dot{I} 「 \dot{M} e」の創発（「Aは他
所事に無関心な人である」）となる。逆についても同様。

Aの、その妻（FA）に対する関係についても同様に考えることができる。

どちらかの場合にも、オヴァート・アクション 外部的行為は、各々の場合について、 \dot{A} の \dot{I} として帰結しうる。

iii) Kolbの批判の第三点への反論。まず、「野球」を例とした事が誤りである。Meadは \dot{I} 自我発達段
階（「 \dot{G} e \dot{m} e」段階）の例示として「野球」の状況を用いた。しかし、成人したプロの野球選手
による通常の「野球試合」は、Meadの例示とは別の状況である。第一、通常それは何らの「問
題状況」をも含まない。「暴投」も「バナナの皮」も、全て、「野球試合」の「話想宇宙」にあら
かじめ含まれている。この点ではLewisの批判も同様であって、確かに「暴投」の連続はその
選手の「 \dot{M} e」を変化させるだろうが、それ自体、「野球試合」の「話想宇宙」に含まれたことだ。
「暴投」の連続が彼の選手生命を終わらせたとき、解雇金として定められた金額に彼がイエスと
答えなかったなら、はじめて「問題状況」が生じる。「野球試合」の「話想宇宙」に対して彼が
その「 \dot{I} 」の「予測不可能性」を発現させようとしたら、（特に「野球」システムの如く「普遍性」
の高い「話想宇宙」の場合）、上のような行為に及ぶ（或いは、気に入らぬ審判員をバットで殴
り殺してもよいが）しかない。極めて高度かつ統合的な「話想宇宙」では、その規範の包括性が
高いために、「予測不可能性」はそもそも排除されてしまっているのが常である。Archimedes
がただ入浴するだけで彼の「 \dot{I} 」を物理学の「話想宇宙」に対する「予測不可能性」として発現
させたのは、当時の物理学という「話想宇宙」が、（西欧的近代科学としてみたとき）いまだ
その体系性を完全なものとしていなかったからに他ならない。

より包括性・普遍性の低い「話想宇宙」（例えばMeadが生きた時代のChicago市の）において
は、「 \dot{I} 」＝「生存・適応を求める反応」の「予測不可能性」は（良かれ悪しかれ）十分に与え
られている筈である。

以上、Kolbの批判に対してさきに示した修正Lewis見解で答えた。批判（の表面）に対する反論と
しては一応成立していると思われる¹⁰⁶⁾。しかし、まだ十分とはいえない¹⁰⁷⁾。

筆者はここまでの記述を、さきに示した修正Lewis見解に拠って行ってきた。Lewis見解への筆者
の第一の「修正」は、「態度 = \dot{M} e」という理解についてのものだった。

ここで筆者は、Lewis見解への第二の批判を行う。すなわち、「 \dot{I} = 反応」ではない、と。

c) 「 \dot{I} 」の行方

Meadにおいて、「 \dot{I} 」は必ずしも「反応」ではない。さきに引用した如く、LewisはMSSでの「 \dot{I} 」
の用法を二つのタイプ、「反応」と「反応するもの」とに分けた。Lewisは、この前者を彼のMead理
解に用いたわけである。

しかし、ではLewisが捨てた用法、「反応するもの」という用法の方はどうなるのか？「反応するもの」
とは即ち「反応の主体」である。つまり客体（ \dot{M} e）に対しての主体（ \dot{I} ）である。まさにこれこそが「 \dot{I} 」

なのではないだろうか？ Lewisは概念の操作化に急なあまり、せっかく「反応であるI」と「反応するI」という二つの用法を見出しながら、それを利用しようとしなかったようである。

Meadにおける「I」概念を理解するには、彼の1913年の論文“The Social Self”から、以下の部分を考察するのが適当であると思う。長い引用になるが、敢えて示す。

「しかし、こうした内観状況の説明は、意識の多少とも一貫した特性を見過ごしているように思われる。その特性とは、……刺激の領域についての意識からは区別しうる、自分のしている事についての^{アウェアネス}の^{アウェアネス}の絶えざる流れといったものだ。この『^{アウェアネス}覚識』こそが、多くの人々を次の如き[誤った]假定へと導いたのだ。つまり、自我の本質とは主体と客体とをともに意識すること——^{オブジェクティブ}対象的世界に対する行為の主体でありつつもなお同時にこの主体を主体として直接に意識すること——なのであり、『他にどんな事を思考しようが、それと共に自分の存在について思考する』ことなのである。と、そこでJames教授の指摘によれば、このような共時的意識^{コンシャスネス} con-sciousness は意識^{シヤスネス} sciousnessとして——つまり意識内容 content というよりは含み implication である思考者 thinker として——想定された方がより論理的だ、という事になる。それで、「Me」とは意識の流れの中の一片の対象内容にすぎない、となる。けれどもこの [James の] 論理的な説は、意識^{シヤスネス} consciousnessに見出されるものを正しく評価していない。[なぜなら] 実際の刺激・反応およびそれらの記憶像に加えて、意識の中には必然的に、「Me」を作り上げる^{オーガニック}器官系の興奮と反応とがある。そこには我々の意識的経験の大部分、いやそれどころか自我意識と呼ばれる全てのもの、つまり我々が行い、言い、考えるだろう事への^{シヤスネス}反応、がつきまどっているのだ。……脳裏において我々は、他者[の意見]に対する[自分の]指摘についての[自分なりの]返答を、又、他者に対する自分の身振りや態度に^{シヤスネス}応答する[自分なりの]身振りや態度を導くだろう^{シヤスネス}神経刺激を、意識しているのだ。

我々のあらゆる自己意識的行為についてまわる^{オブザーヴァー}観察者は、だから、その人自身の性格 propria personaによる行為に関係する実際の「I」ではない——それ[観察者]はむしろ、人が自分の行為に対してなす^{シヤスネス}反応である。我々が他者に与える社会的刺激に続いて生じる、この我々の[自分に対する]反応を、我々の行為に暗に含まれた implied 主体と混同したことが、自我はそれ自体を作用し作用されるものとして直接に意識しうるのだという[誤った]仮定の心理学上の根拠となっているのだ」[Mead, 1913 in SW, p. 144-145, 強調は全て引用者].¹⁰⁸⁾

以上の引用部分の意味するところは重要である。ここに示されているのは、i) Jamesの「意識の流れ the stream of thought or the stream of sciousness」といった純粹自我の概念の否定、ii) 否定の根拠としての有機体の体性感覚および反応の重視、iii) Mead流の「I」の理解、である。逐次検討する。

- i) まず、上の引用に見られる如く、Jamesは(『原理』の「自我意識」の章において)、J. F. Ferrierの「他に何を考えていても、常に自己の存在について考える」という「共時的 (con-) 意識 (sciousness)」を批判し、これに対して、「対象を思考し、そのうちの何がしかをその『Me』と呼ぶものとなし、かつは、それ自らの『純粹』なる自我をば、抽象的、仮説的また概念的なる流儀においてのみ^{シヤスネス}覚識 aware する、純粹にして単一なる意識 sciousness の流れ」[James, 1952,

p. 196, 圏点引用者] を想定するのがより正確である, とする¹⁰⁹⁾. そして, この「流れ」の「部分 section」が「意識ないし知の断片 bit」であり, そこに「Me」が含まれる, とする. さらにこの「意識」を「思考者 the thinker」とし, その存在が我々に与えられるのは, 論理的前提 logical postulate としてよりはむしろ「我々がそれを具有する事を自然的に信ずるところの精神活動 spiritual activity の直接的・内的知覚」としてである, とする [ibid., 圏点引用者]. つまり, ここで James は, Ferrier の主張を批判しつつ修正拡大し, 自らを直接に意識する「純粹自我 pure self」としての「意識の流れ」を想定する. これに対して Mead は反論し, 意識には常に身体的・生理的な反応が含まれているのだから, それらを切り捨てた「純粹自我」はありえない, とする.

- ii) その根拠として Mead が提出しているのが, 「Me」= 生理的態度を構成する「器官系の興奮や反応」, 「身振りを導く神経刺激」である.

Mead は, この 1913 年論文において, 表象はさされている (「I」ではなくなっている) が, しかし「Me」に統合されるには至っていない主/客の中間状態 (無論すぐにそれは「Me」となるが) を想定し¹¹⁰⁾, その内容は「[[自-他の] 会話を主導した心象と, 表出 [行為] にもなう運動器系の興奮, 加えて臓器系の興奮および主導された活動に対する全身系の反応」である, としている [Mead, 1913 in SW, p. 143].

このような生理的な内容が「どうしても perforce」意識についてまわっている限り, 自らを純粹に抽象的に, しかも直接的に覚識する「意識の流れ」を想定し, そうした「純粹自我意識」をもって「I」となすことはできない, というのが Mead の James への反論である.

- iii) そこで, 「観察者」つまり直接に自己を意識する「純粹自我 pure self」は¹¹¹⁾, 個人の独自な行為を導く「実際の『I』」ではない, と主張される. そもそも「純粹自我」として James が想定しようとしたものは, 実際には, 「人が自分の行為に対してなす反応」と考えられねばならないから. かくて, 「純粹自我」はありえない, 或いは, いわば生理的体性反応に格下げされる¹¹²⁾. そこで, 「純粹自我」= 「I (主体)」を否定した Mead は, 「I (主体)」について, 二つの見解を提出する. 第一, それは「行為に暗に含まれた implied」ものであり, 「反応」(ここでは「Me」の「反応」と混同されてはならない. なぜなら, 「反応」は常に「行為」の達成後に, それに対して生じるものだから. 第二, 「I (主体)」が自己を「作用し作用されるものとして直接に意識することはありえない. (それは常に, 他者に又「Me」に媒介されてのことである.)

以上が, 前記引用部分の主張である. (と筆者は理解する.)

かくて Mead は, i) James の「純粹自我」は, 「I (主体)」ではない (ありえない) 事を, ii) 生理的感覚 (有機体の反応) が意識に常時介入している事を根拠に, 「純粹自我」を事実上否定することによって示し, iii) 「反応 (= 『観察者』 = それ自体として成立しえない『純粹自我』)」と, 「I (主体)」

とが混同されてはならぬことを主張している¹¹³⁾。

さて、すると、当然生じる疑問は、「我々の行為に暗に含まれている implied」と Mead がいう「I (主体)」とは何なのか、という事である。

この点については、次の引用を示すしかない。

「それ故に『I』は意識の中に対象としては決して存在しえないが、しかしまさに我々の内的経験の対話的性格……こそが、身振りやシンボルに^{アンサー}応答する、場面の背後の『I』を^{含意}implyしているのだ。『I』とは Kant における先験的自我であり、James が、場面の背後にあって観念の周辺にすがりつき、それに強調という付加利益を与えると考^ええた魂 soul である。自我意識的な、^{インターコース}社会的交際における実際の自我とは、絶えることなく進行し架空的な『I』をつねにそれ自身の視界の外に^{含意}imply しつづける反応の過程を持った、客^体 objective としての『Me』……なのである。」[Mead, 1912 in SW, p. 141, 圈点引用者]¹¹⁴⁾。

そこで、「I (主体)」とは、常に「Me」の外部に含意 imply されている、Kant の「先験的自我」、James の「魂 soul」だ、という事になる。

James は、『原理』の「自我意識」の章において、三つの自我意識に関する理論を自身の理論と関連させてのべた。すなわち、1) 靈魂説、2) 連合主義の説、3) 先験主義の説、である [James, op. cit., p. 220-240]。

そこでの James の、「靈魂説 Soul Theory」に対する評価は、靈魂ということで意味されるのは「現在の思考の背後にある何か、別の種類の実体」という事であり [ibid., p. 221]、それは彼自身の理論に照らしたときには、「全き余計物 a complete superfluity」であるとして [ibid., p. 224]、最終的には、それはそれ以上の「何もかも説明せず、かつ又、保証もしない」が故に、「以降本書『原理』より魂なる単語を捨て去っても」全く構わない、と結論した [ibid., p. 225]。(但し、もしこの単語が使われるとしても、それは「全く曖昧にして通俗的な流儀で」の事だ、との条件付きで [ibid.]¹¹⁵⁾。

Mead が James のこの部分に依拠していたとすれば¹¹⁶⁾、「Kant の先験的自我、James の魂」というたとえで Mead が意味していた「I (主体)」がどのようなものかは明らかだろう。

要するにそれは、先験的に措定されざるを得ないが、それがそれ自体としては経験的対象として表象も分析も不可能な、究極的な「主語」である、という事だろう。それは常に、「Me」の視界の外部に含意されつづけるのみである。

しかしながら、であるからといって、この Mead の「I (主体)」を、「純粹自我」、「意識の流れ」、「純粹持続」、「超越論的主観」等々の、(いわば Bergson = James = Husserl 路線の) 諸概念と同列に位置づけるのは、Mead 自身の意向を必ずしも正当に反映するものとは言い難い。(無論、そうした「解釈」に対して反論するいわれは全くない。注 113) 参照。) Mead 自身の発想は、恐らく、もっと単純なものだ。

というのも、実のところ、こうして追及されてきた Mead の「I (主体)」は、すでに彼の行動論的な発想の第一の与件として与えられていたものに他ならぬからである。すなわち Mead にあっては、有機体は、先験的に、行動するものとして与えられている。つまり、(すでに示した引用を繰り返すならば、)「最初から、生体には行為が存在している。説明されねばならぬのは、行為ではなく、行為のとる

方向である」[W. L. Troyer, op. cit., p. 304, 圏点引用者]. すなわち, 「……この行為の原因は追及されない」[Faris, op. cit. p. 810, 圏点引用者] ののである¹¹⁷⁾.

かくして, Mead における「I (主体)」は, 実はその理論化の起点における「生体=行為するもの」という規定において, その「背後に」, 「暗に含まれて imply」いる. Mead はそこから逆行して, その根拠を問う事はしない. それは語られない. それは理論化の起点に置かれた仮説だ. 生体である限り, 必ず, 行為する, そして「I (主体)」は, 常にこの「行為」に含意 imply されたものだ. 従って, 「I (主体)」の根拠が問われるべき必要も理由もない.

表現を変えれば, 決して「I (主体)」は, 「Me (客体・共通の態度)」の中には含まれ得ないが, 「Me (態度)」がその外部的局面, 「行為 (アクト)」に移行したときには, 常にその「行為」には, 「Me (態度=規範)」に加えて, 「I (主体性)」が含意されざるを得ない. Mead の先験的「主語」は, 常に「行為」という「述語」のうちにおいてのみ開示するものであるからである.

その意味では, 「I (主体)」は, 「Me」が与えられる遥か以前から, 生体の「行為」の中に伏在している, といわなくてはならない¹¹⁸⁾. 「I」は, だから, Mead の理論化の始点として考えられねばならない¹¹⁹⁾.

さて, 以上の議論から, 「I」に関する二種類の用法が示唆される. 第一に, 「I」は, 先に (本項 b)) 暫定的に示した如く, 「反応」として理解される. しかし, Lewis の見解のような「I = 反応」説には, 「主体性・独自性」を意味するような 'activity' は含まれ難い. そこで, 第二の用法として, Lewis が拒否した「I = 主体」という理解が検討された. それが常に「行為」に含まれている, という Mead の主張が確認された. では, この二つの「I」は, どのように結びつくのか?

それは, すでに示した Dewey [1896, op. cit.] (注 102) 参照) および Mead における機能主義心理学的発想において, であると考えられる. 例えば Mead はいう. 「行為とは, 生命過程が必要とする種類の刺激を選択することにより, その生命過程を維持する衝動である. ……刺激は衝動を表出させるキッカケである」[MSS, p. 6, n. 5]. これに「反応はその刺激を決定する」[Dewey, op. cit., p. 363] という部分を加えれば, 次のような, 「主体としての I」, 「反応としての I」, 「衝動」, 「刺激」, 「反応」, 「行為」についての機能主義心理学的関係が与えられる.

- i) 生体は行為する (前提). すなわち, 生体には「行為」への「衝動」(≡ 「I (主体)」) が含まれる. 但し, この「I (主体)」は, いまだ「行為」に至っていない, 従って意識されない.
- ii) 「衝動」は, 「I (反応)」の形で, 環境から適切な「刺激」部分を「切り取る cut out from¹²⁰⁾」ことで, 適応的な環境の「刺激」部分を決定する.
- iii) 「I (反応)」が決定した「刺激」によって, 「I (主体)」の「衝動」が解発される. 「行為」が達成される.
- iv) 達成された「行為」には, 「I (主体)」が含まれる.
- v) 「I (主体)」は, 「行為」達成後の反省 («Me」の「反応」) によって, 媒介的に知られる.

以上の図式的関係¹²¹⁾によれば、「I (主体)」と、「I (反応)」とが、環境に対する「I」の二様のあらわれ(機能)であることが理解されよう。こうして、「I」は、i)「行為」への「衝動」として機能するとともに、ii)「刺激」を選択する「反応」としても機能する、という事になる。なお、「Me」について付言すれば、それはi)無問題状況において自動的=無意識的な「行為」の相互的調整にかかわる「他者の期待のセット」として機能するとともに、ii)問題状況において「精神」および「自我」の「反省的思考」(「行為」の内的リハーサル)に関わる一方、「I (主体)」の「行為」を検閲し、その達成された結果としての「行為」に対して評価・是認といった「反応」を与える(「行為」を知る)ものとして機能する。

以上が、筆者の「I」に関する理解である。すなわち、Meadにおいて「I」は、Lewisが検出した通り、二様の機能、第一に、^{インプリシット}伏在的な「反応主体」として、第二に、^{エクスプリシット}顕在的な、「選択反応」としての、機能を持つ。このうちの前者のみを強調したのがKolbらの理解(おそらくはMeltzerなども同様)、後者のみを強調したのがLewisの理解だった。両者とも不適切な理解である。

さて、以上、主として「I」と「Me」をめぐって、Meadの思考における人間科学的な側面を検討した¹²²⁾。この側面についても、Meadの理論と相互作用論のそれとの間にむしろ隔たりの存在することを併せて示した。

ここまでの記述をもって、Meadの理論化の基本的な部分に関しては一応これを提示したものと考える¹²³⁾。その過程で相当程度、思考の「素材」相互の関係にも言及することとなったが、全く断片的に「素材」のみを列記してゆくのは、却って筆者の理解を伝えるさまたげともなりかねないと考えられたが故である。

次節では、これら思考の諸方向の関係を検討して、次章への架橋とする。

第2節 Meadにおける説明の枠組

前節において筆者は、Meadの思考の基本的な部分について、そのいわば「素材」的諸方向を示した。本節では視点を変えて、こうして示された思考の諸方向が、実際にMeadの理論化において、どのように統合され、又はどのような限界、問題性を持つのか、という見地からの考察を行う。

まず第1)項においては、Meadの「文明論的」また進化論的な論理に内在する問題を考察する。

続く第2)項において、Meadのいわゆる「社会的行動主義」という理論化に関して、その問題点を考察する。この作業を通じて、Meadの理論化を多少とも整理して提示し、それに対する筆者の暫定的所見を最後に付す。

1) 文明論的アプローチの問題性

Meadの思考様式が、自然主義的・進化論的発想に貫かれていることは前節に示した通りである。こうした思考様式に基づく説明方法は、文明論的志向を内在させる事を避けられない。MSSを一読すれば、この事実は自明であろう。従って、最も大きな、しかも第一に検討すべき問題は、こうした文明論的アプローチという大枠に関してのものであると考えられる。

a) 三つの始源問題

地質学的時間は^{ヴァーティカル}垂直に流れるが、歴史学的時間は^{ホリゾンタル}水平に流れる。言うまでもなく、進化系統樹の表現と、歴史年表の表現との相違である。この比喻¹²⁴⁾をさらに進めるなら、垂直の時間流が水平の時間流に方向を変えた地点が、〈ヒト〉という種の誕生した時点であろう。この時点は正確に確定されていない。十万年から百万年（時に千数百万年）のオーダーでの過去のことであり、いずれにせよ、この時点から以降、ヒトの生理学的体制は変化していない¹²⁵⁾。次に「文明」が発生する。数千年オーダーでの過去のことであり、といわれている。「文明」にはすでに、分化・析出の程度はともあれ、「社会（規範）」と「心理」とが含まれているだろう。そしてこれらは、いま仮に19世紀的な社会「進化論」に拠るならば、何らかの測度をとったとき、高度化、多様化、複雑化してゆくだろう¹²⁶⁾。

つまり、「社会」と「心理」との時間は、再び垂直的にも流れはじめるという事になる。ここで例えばParsons流に、有機体システム→パーソナリティ・システム→社会システムというシステム階層をとり、各々表現をかえて、生理→心理→社会、という秩序を想定する。そうすると、次の図に示した如き進化論的關係が与えられる事になるだろう¹²⁷⁾。これは現在の、より洗練された社会「進化論」からすれば、きわだって^{リアル}単線的な発展モデルである。

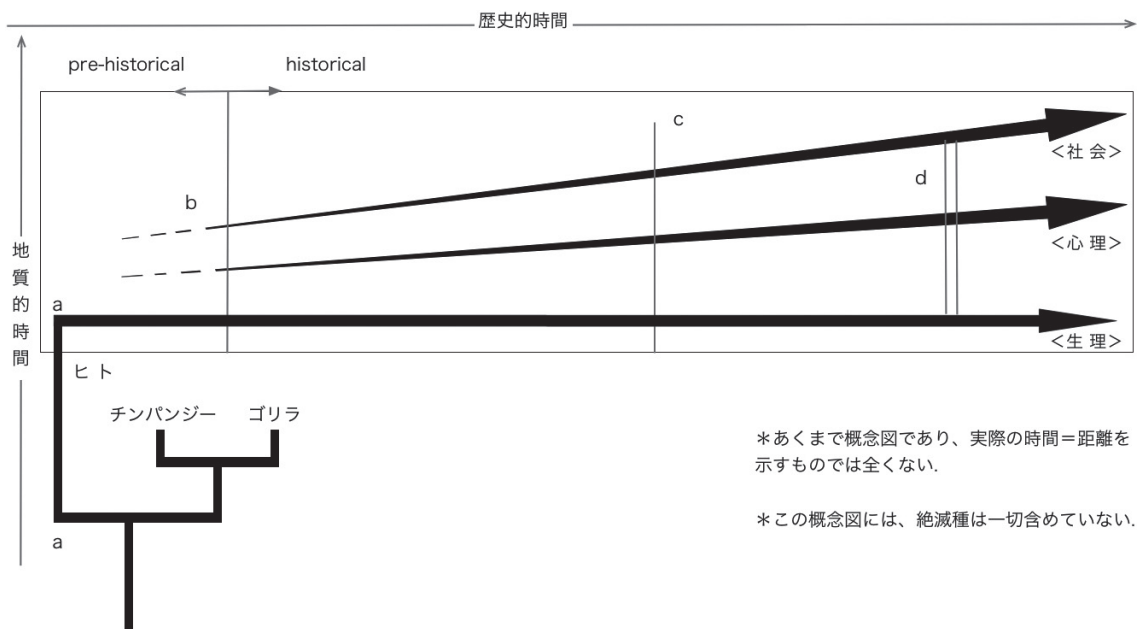


図5 「文明論」の枠組

しかし、この単純なモデルにおいてさえ、いくつかの問題点が認められるだろう。それは、主として、幾つかの〈始源〉にかかわるものである。上の図中で、

aは、現生人類と同じ生理的体制を有した霊長類の出現を示すものである。〔図中では表記の都合上、二つの点になっているが、実際にはこの距離はゼロに近い。〕この〈始源〉点は、タンパク質およ

び染色体の解析によって、今後より精確な同定が可能となるだろう。従って、この〈始源〉に関して問題はさほど存在しない。

bは、「文明」と呼ばれるものの発生を示す〈始源〉点¹²⁸⁾である。(a-b間には、十～百万年のオーダーでの距離がある。)

cは、ある社会の成立、ないしある社会への移行(或いは消滅)を示す〈始源〉点である。社会科学領域で、「体制」の「変動」、「発展」などと呼ばれている対象領域は、主にこのような〈始源〉点に関わる。

dは、特定社会内への個人の出生を示す〈始源〉点であり、以後、当該個人は社会化過程を通じてその自我を析出させ、行為主体として当該社会内・外で社会生活を営む。社会および心理学領域で、「自我」の「発達史」と呼ばれている対象領域は、主としてこのような〈始源〉点の周辺に関わる。

このようにして、上のごく単純な社会「進化」の図式においても、少なくとも四つの〈始源〉に関わる問題が存在する。すなわち、a) ヒトという種はいつどのようにして発生したのか、b) 人間の「文明」はいつどのようにして成立したのか、c) あるひとつの社会は、いつどのようにして成立したのか、d) あるひとりの個人の自我はどのようにして析出したのか、の四つである。そして、社会および心理学領域で特に問題となるのは、b, c, dに関わる三つの〈始源〉問題であろう。いずれにせよ、社会と個人とを進化論的発想から説明しようとする文明論的アプローチは、少なくとも以上の〈始源〉問題にかかわらざるを得ないだろう。多くの進化論的発想は、このような見地から考察することができる。

では、Meadにおいてこのような〈始源〉問題はどのように処理されていただろうか。

b) Meadにおける始源問題(i)

まず、四つの始源問題のうち、aとb、「ヒトと文明の発生」にかかわるものについて検討する。

Meadの思考においては、「他者の態度をとること」という生得的「社会的本能」が「活動への衝動」とともに仮定されていた。そのような「生理学的能力は……生物学的な進化の過程の所産」[MSS. 邦訳239頁、注(27)]であった。すなわち、これらは〈始源〉点a(ヒトの発生)においてすでに〈生理〉レベルで与えられているものである。同じく〈生理〉レベルで与えられていると考えられるものが他に(中枢神経系を除いて)少なくとも二つある。発声を可能とする口腔部の組織、および細かな対象操作manipulationを可能とする手の構造、である。この後二者は、「a = ヒトの発生」において直ちに機能するとは考えられていないようだが、〈生理〉レベルがa点から以後、変化していない(新生児のもつ可能性はa点でもb点でも同一である)と考えられる以上、a点で与えられている筈であろう。

かくて、「a = ヒトの発生」において〈生理〉レベルには少なくとも四つ(中枢神経系を除く)の能力が与えられているようだ。つまり、i) 「他者の態度を取る」という「社会的本能」、ii) 行為への衝動、iii) 発声能力、iv) 手の対象操作能力、である¹²⁹⁾。(これらは又、d点、例えば現代人の自我の析出、においても同一の〈生理〉レベルでの能力であろう。)

さて、ではa点における〈心理〉および〈社会〉レベルには何かが(例えば〈心理〉レベルでの精神・自我、〈社会〉レベルでの「話想宇宙」といったような)与えられているだろうか。

Mead の記述は、このあたり必ずしも明瞭ではない。まず、自我（自己対象化機能）については、「それは……おそらく [人間という] 種の生活史において次第に発達してきたものと考えられる」[Mead, 1922, SW, p. 243, 圏点引用者] から、a 点においてはまだ生じていないだろう。又、「シンボルが意味となるのは、自分自身でありつつも同時に他者になれるという能力 [他者の態度をとる能力¹³⁰⁾] を通じてなのである」[Mead, 1922 in SW, p. 244] から、その能力が与えられた a 時点では、「有意味シンボル」も、その体系 = 「話想宇宙」も存在していない（しているとしてもごく限定されている）と考えるべきだろう¹³¹⁾。

従って、Mead においては、人間の個人は、人間の社会に対して先在する。つまり一見して、「社会の個人に対する先在」という Mead の主張と正反対の関係となるようにみえる。（これが、いってみれば a 点にかかわる始源問題である。）

しかし、この始源問題は、単に表面上でのものにすぎない。というのも、Mead における「社会の個人に対する先在」が意味するところは、〈社会〉レベルにおける社会関係や社会的相互作用の存在が、〈心理〉レベルにおける精神・自我の機能に対して先んじているという事に他ならず、このことは、社会性の群居動物（例えばヒト）においてはむしろ当然のことであるからだ¹³²⁾。ここでの真の始源問題は、そのような群居動物の社会的相互作用から、いかにして「言語」に基づく「有意味シンボル」の体系たる「話想宇宙」と、それに応答する個人の「精神、自我」が発生してきたか、つまりいかにして「文明」は生じたのか、という、「b = 文明の発生」にかかわるものと考えられるべきであろう。すなわち、a-b 間の数十万～数百万年の期間に、〈社会〉および〈心理〉レベルに何が起きたのか、という問題である。

この問題を論じる前に、Mead における「意味の意識に対する先在」を強調しておかねばならない。既述（1 節 1）項 b)) の如く、Mead の「意味」とは、「身振り」と「反応」との関係で、つまり〈生理〉レベルにおいて与えられていた。（A の身振り、その身振りが示す行為の結果、B の A の身振りに対する（その完成へ向かう）反応。）そこでは、「意識は意味が存在するのに必要ではない」[MSS, p. 77]、つまり、「意味とは社会的行為の一定の局面 [例えば身振り] の間の関係として客観的にそこにあるもの something objectively there が発達したもの」[ibid., p. 76] だった。アリの社会にも、だから、Mead 流の「意味」は存在する。しかし、「意味についての意識 [意味の意識^{アウェアネス}]」は、勿論アリにはない。なぜなら、「意味についての意識とは……他者の身振りに応答するものとしての、自分の反応態度についての意識」[Mead, 1910c in SW, p. 132, 圏点引用者] である、という再帰性を特性とするものだから、「自らの刺激に対して、他者が反応するのと同じように反応する」[MSS, p. 67] ことを可能とするような、「有意味シンボルが人間の社会経験の過程の中で発達するようになるまでは、事実上、意味は意識されない」[MSS, p. 80, 圏点引用者] からである。従って、「意味が意識されるのは、ただ、意味が [有意味] シンボルと同一視される場合のみ」[ibid., 圏点引用者] という事になる。

かくして Mead にあっては、「意味」は「意識」と関わりなく、〈生理〉レベルにおいて与えられ、〈心理〉レベルでの「意識」機能は、〈社会〉レベルでの「話想宇宙」すなわち「有意味シンボル」の体系による媒介を経てはじめて「意味についての意識」として成立する、という事になる。

以上より、「a = ヒトの発生」、に先行して「意味」は存在している。そこから「b = 文明の発生」に

至る期間に、〈社会〉レベルでの「話想宇宙」、〈心理〉レベルでの「精神・自我」（つまり「意味についての意識」を含む反省的機能）、はどのようにして生じたのか？

Mead はいう、「[環境への適応は] 人類の進化的低い水準では身振りによって、より高度の水準では有意味シンボルによって起こる」[MSS, p. 75, 圏点引用者] と。ここで「人類の進化 human evolution」の意味するところが、「ヒトへの進化」ではなく、「人間（の社会と個人の）進化」であるならば、Mead は、a-b 間（≡^{プレヒストリカル}先史時代）に、二つの一般段階、i) 身振りによる人類の環境への適応、ii) 有意味シンボルによる環境への適応、を想定していると考えられる。先述したように（前節 I）項 b)), 「身振り」は「情動的意味合いを伝える」特殊な行為^{アクト}カテゴリーであり、その「身振り」が発声を伴うものが「有声身振り」、さらにその「有声身振り」が「知性的な意味表示」^{シグニフィケーション}を伝えるまでに圧縮されたものが「言語（行為）」であった。「有意味シンボル」は「言語」を中心にして体系化されている。すると、上に示した Mead に於ける「先史時代」の「適応段階」は、i) 「身振り（無声、有声）」を中心とする段階、ii) 「言語（有意味シンボルの大きな部分）」を中心とする段階、という二段階に言い換えてもよさそうである。これはまさしく、個人の自我の発展段階（具体的他者の態度から「一般化された他者」の態度へ）に対応するといえよう。つまり、Mead においては「個体発生は系統発生を」繰り返す¹³³⁾。

「身振り」、 「有声身振り」、 「言語」の各々は、程度こそ違え、その全てが、「相手に与えるのと同じ刺激に対する反応を自分の中にも要求する」という再帰的性格を持つ¹³⁴⁾。「身振り」および「言語」は、両者とも、「他者の態度を取る事」という「a = ヒトの出現」以前の進化段階において自然淘汰の結果生得的となった本能的メカニズムに作用して、自己対象化 = 自我の析出を促進させる。すると、「適応」の第一段階、「身振り中心の適応」段階において、〈心理〉レベルに精神、自我が多少とも漠然とした形式においてではあれ、（ヒトという種が a 点で発生して以来はじめて）析出／創発 emergent するに至っている、という事になるであろう。（この自我は、言うまでもなく、単に自己対象化の能力として機能するにすぎない¹³⁵⁾。）つまり「自我」の〈心理〉レベルでの創発は、「先史時代」の第一段階に於いて、であるという事になる。

さて、次の適応段階（「言語」段階）に入ると、〈社会〉レベルにおいて「話想宇宙」が与えられなければならない。なぜなら、「言語」を媒介しての自我発達過程は、その前提として、先在する「有意味シンボル」の体系 = 「話想宇宙」を必要とするからである。従って、適応の第二段階（シンボル局面）に入る以前に、第一段階の過程のどこかで、大規模な抽象作業（「有意味シンボル」体系の造出／創発）が起きていなくてはならない。ひとたびそれが造出／創発されてあれば、個人はそれを〈生理〉レベルで「態度」内に移入させることができるし、「I（主体）」が「有意味シンボル」の形で（「Me」の検閲を経て）表現される限り、常に適応的に発展してゆくだろう（とされている）。けれどもこの場合には、全く新しく「話想宇宙」それ自体が、（やはりヒトの発生以後はじめて）造出／創発せられなければならない。（しかも、生得的な「文法構造」が中枢に存在していると仮定されているわけでもない。）これがいわば「b = 文明の発生」にかかわる始源問題である。すなわち、いかにして「話想宇宙」は〈社会〉レベルに創発してきたのか？

これに対する Mead の（推測される）回答は（すでに示唆しておいたように）、ヒト以前の霊長類（おそらくは絶滅したヒト属の別種）における「話想宇宙」の存在およびシンボル操作能力の具有を認めて、これとヒトの「話想宇宙」との連続性を主張する、というものとなるだろう。この場合、「話想宇宙」は、「a = ヒトの発生」以前から存在（但し、異内容のものとして）しており、これをいわば土台としてヒトの「話想宇宙」が a-b の間の期間に創発した、という事になる。（つまり、適応の第一の段階（身振り段階）においても、「話想宇宙」は何らかの内容をもって存在していた、という事だ¹³⁶⁾）

Mead 的な進化の連続的・関係論的想定（前節 1）項 c）参照）からすれば、確かにこの理解はより妥当的なものと考えられよう。この場合、ヒト以前の霊長類とヒトとの間に特別な不連続はなく¹³⁷⁾、精神・自我と「話想宇宙」とはいわば歩調をそろえて「進化」してきた、ということになる。実際、Mead は、1907 年の動物知覚に関する論文では、「人間知性とより低次の動物知性との間に明確な一線を画すこと」は可能かを検討し、次の如く結論している。「どんな知覚された物も、それが知覚された限り、可能な目的へ向けて認知された手段なのであり、こうした知覚的意識とより抽象的ないわゆる推論 reasoning の過程との間にはいかなる確固たる境界線を引く事もできぬ。知覚をする生体は皆、その限り、行為内部で意識的な媒介過程を実行している。そして意識的な媒介 [過程] とは推論 ratiocination のことだ」[Mead, 1907 in SW, p. 80-81, 圏点引用者]。このような、進化的連続への強い傾斜を示す Mead の発想を考えると、上に示した「話想宇宙」に関する理解は一層妥当的に思われてくる^{138) 139)}。

しかしそれでも次の事は未解決のまま残る。身振り言語を中心として構成されたヒト以前の霊長類および「適応の第一段階」におけるヒトの「話想宇宙」は、いかにして、「言語」というシンボル体系によってのみ大部分構成されている「適応の第二段階」以降の、特に「b = 文明の発生」以降の「話想宇宙」に変化することが可能だったのか？ 筆者には、Mead がこの点を十分に検討した論述部分が見出せなかった。それ故、（筆者にとっては少なくとも）この点は、「b = 文明の発生」にかかわる始源問題として残されたままである、と言わねばならない¹⁴⁰⁾。

c) Mead における始源問題(ii)

次に、残る二つの始源問題、「c = 個別社会の成立」、「d = 個人自我の（個別社会内への）析出」について考察する。この両者は実のところ緊密な関係にある、つまり概括的表現をすれば「社会と個人とは同じコインのウラオモテ」であるが故である。

しかしながら、Mead における「個別社会」と「個人自我」の問題は、必ずしも明確な形で定式化されているとは言い難い。ここでまず明らかにしておかねばならぬ事は、社会と個人との関係を考察するについて Mead が導入した説明原理の事実上全てのものが、すでに本項 b) における a - b の期間、すなわち「ヒトの発生から文明の誕生へ」と移行する期間を説明する際に導入されており、以後の全歴史は、全く同様の説明原理のみで理解されている、という点である。つまり、Mead は人類の「先史」を説明する枠組を、そのままその「全歴史」についても適用する。Mead 的概念の全ては「先史」において与えられており、あとはその「自然的進化過程」の進展が続くのみである。すでに指摘した、「自然」

と「社会」と「個人」とを全く同一の進化論的発想の枠組内で説明しようとする理論化に必ずつきまとう困難性（前節1）項 c)）が、この地点において顕在化する。

Mead の自然進化的発想が、すぐれて全体論的かつ関係論的であることは既述した通りである（前節1）項 b)）。そこでは、自我（個人）の変化は直ちにその所属集団（社会）の部分的解体と再統合をもたらし、過去のものとなった所属集団に対しての全く新しいものの創発を導く、と想定されている。すなわち、個人が問題状況に直面すると、抑止された行為への衝動^{アクト}≡「I（主体）」は、自我の「Me」部分（として機能する「態度」部分＝旧秩序の規範体系）との間に思考＝反省を行い、「I（主体）」は「I（反応）」として外部環境（「Me」を含む）に対して「自然的な注目」を行って「適応的反応」の可能性を新しい環境部分に求める。「I（反応）」が適応的「刺激」を環境部分に見出し、「I（主体）」の「衝動」が適応的に解発されると、結果、個人の「Me」部分は再統合される。この個人「Me」の変化は、「自分自身でありつつも同時に他者となれる能力」＝「複数『話想宇宙』に同時に属することのできる能力」＝「社会性 sociality」によって、旧「話想宇宙」に統合され、新しい「話想宇宙」、新しい「社会」秩序を生み出す。すなわち、『I [主体]』の反応は適応を含むが、その適応とは、ただ自我に影響するのみならず、その自我を構成するのを助ける社会環境にも影響を及ぼす」[MSS, p. 214] ののである。そして「最も現代的かつ高度に進化した文明形態」においてさえ、個人は、「その思考や行動においてどれほど独創的かつ創造的」であろうとも、その属する「社会の生命過程 the social life-process に明示され、それを特徴づけている、経験と行為の一般的な組織化されたパターン [当該「話想宇宙」] と……常に必ず、決定的に関係している」[MSS, p. 222] とされるのである。

このような Mead の「社会」イメージが、その進化論的発想における、「次々と相違なる形態をとって発展してゆくひとつの生命過程」という原型的イメージに直接対応するものであることは明らかだろう。全体論的、関係論的な「連続体としての進化過程」のイメージである。

だから Mead にあっては、「氏族つまり部族組織とは、家族組織の直接的な一般化であり、国家すなわち民族の組織とは、氏族つまり部族組織の直接的な一般化」[MSS, p. 229] である、とされる。「歴史上の紛争」でさえもが、「より広大な社会組織に結果するのが通例である」[MSS, p. 303] と考えられるのである。Mead における第三の始源問題、「c = 個別社会の成立」は、従って、より広い社会組織一般の進化過程という文脈内での、統合と一般化の過程の一断面という意味合いが強い。そして、このような Mead 的意味での「c = 個別社会の成立」を支える根拠は、「個別社会」の「話想宇宙」の、個人内における対応物たる「一般化された他者」の「態度」が、社会過程における相互作用によって、絶えず拡大し一般化してゆく（べき）ものである、という基本的な想定（前節3）項 a)）において与えられている。「最終的な『Me』が共同体成員全ての態度を反映する程度に応じて彼は成功する」のであり、そこで生じているのは個人の精神・自我の変化に限定されない「偉大な協同的な共同体の過程」なのだ、という事になる [MSS, p. 187-188]. 「それ [[Me]] は、すぐに特定集団の境界を越える。民の声は神の声なり、である。……『万人にとって常に真なるもの』が残される。ことの始めから、その形態は普遍的なのだ」[Mead, 1922 in SW, p. 245, 圏点引用者] というわけだ。

かくて Mead にあっては「c = 個別社会の成立」は、基本的にはより包括的な社会組織への一般化

(拡大)として語られており、それを可能とするのが、各社会集団成員における「一般化された他者」の「態度を取る」能力である、という理論化が示されている。

勿論 Mead は、MSS の「Society」の諸章において、このような理論化がしばしば現実の事態に適合しない点について、断片的ながらも注意を払っている。自己の理論化が一種の理想に向けての当為命題を含むことを認めている [例えば、MSS, chapt. 41]。MSS の実質的な最終章 (41 章) の結語は、何よりもよくそうした Mead の事実認識を明示している。すなわち、「自分自身の特殊な機能を遂行することで自分が影響を及ぼしている人びとの態度にだれでもが参入できないかぎり、人類社会の理想は夢物語である」[MSS, 邦訳 340 頁] と。

そこでただちに次の事が問われねばならない。一方では相当に厳密な方法論を展開した (前節 2) 項 a)) Mead が、何故に、自らの理論に関しては、その方法論に必ずしも忠実とはいえず。T. V. Smith の言をかりれば「何も適切な根拠づけを持たぬ」[Smith, op. cit., p. 302] 当為命題までをも含んだ理論化を行ったのか、と。

この疑念に対する「知識社会学」的な回答は、すでに数多く存在しているようであるから、ここでは Mead の理論化の存在被拘束性をあらためて問うことはしない。むしろ視野をあくまで Mead の理論に限定して、そこでの論理的要求の帰結として、この問題を捉えてみようと思う。三点ほどの理由が考えられる。

第一に、それは、自然進化一元論的な発想の限界によるものである。この事は、すでに再三にわたって指摘した。本項 b) に示した如く、Mead 的概念の大部分は人類の「先史」を記述するに際して導入されている。そしてしかも、Mead は人類の「歴史」を語るための何ら特殊な概念用具をそれ以降導入していない。確かに Mead は「階級」や「奴隷制」や「機能的分業」や「民主主義」や「宗教と経済」等々に関して触れてはいる。しかしそれを説明するための概念用具は、「先史」時代に導入されたそれを拡大使用しているのにすぎないといえる。こうした領域に関しては、対象問題に対して説明概念が適用されるというよりはむしろ、説明概念に見合う形に対象問題が適用されている、という感がある。全包括的な自然進化の絶えざる過程がまず先にあって、その中に対象問題が参照 refer されてゆく。それは、T. W. Goff の言をかりるならば、「社会形態に反映される自然の進化過程の要求するところへの……還元」[Goff, op. cit., p. 67, 圏点引用者] に他ならない。Mead においては、「進化論的発想」という彼の「Me」が、その「Me」を革新するはずの、「別の説明原理の導入」という彼の「I」の創発を許さない (或いはそもそも彼のそうした「Me」は「問題状況」に直面していなかった)、のである。

第二点として、それは、社会的「話想宇宙」と個人内の「態度」との緊密な一意対応的、生理的な関係性、という概念化に起因するものと考えられる。Mead における「話想宇宙」の「有意味シンボル体系」は、既述した如く (前節 3) 項 a)), 「集団成員全てにとって同一の生理的な意味をもつ」ものであった。それは、各個人の「態度」の「Me」部分にまさに対応するものである。両者は密接な相互規定関係にある。一方の変化は他方の同様な変化をともなう。〈社会〉レベルと〈生理〉レベルの関係性である。かくして「社会の再建と自我ないし人格の再構成との関係は、相互的にして本質的また根本的なもの」[MSS, p. 309] であるとされるが、その理由は、「諸自我ないし人格 [ここでは「Me」の意味で使用さ

れている]が、その相互の組織化された社会関係から構成されている以上、……同様にその相互の組織化された社会関係から構成されている所与の社会秩序〔話想宇宙〕をも……再構成することなくして、その自我ないし人格〔Me〕を再構成することはできない〔MSS, p. 309〕からである。

要約すれば、社会秩序〔話想宇宙〕の統合が維持される限りでのみ自我〔Me〕の統合が保証され、自我〔Me〕の統合が維持される限りでのみ社会秩序〔話想宇宙〕の統合が保証される。そういう論理形式が、「〔Me〕と〔話想宇宙〕との緊密な相互規定的関係」という基本的概念化から、論理的に要請されざるを得ないような理論化になっている、という事に他ならないのである¹⁴¹⁾。

だから Mead には、全く破局的な「社会の解体」を論ずることはできなかった。それは、Mead の理論化内にあるのは、直ちに、その社会の全構成員の自我の全く破局的な崩壊に結びつくものだったから。同様に Mead は、今日の我々が親しんでいるような、その内部にあまたの亀裂を宿した「分裂症質」の、或いはボーダーライン・ケースの自我を想定することもできなかった。自我分裂は、そのまま社会秩序の崩壊に結びつくものだったから¹⁴²⁾。

さらにこうした自我と社会の破局的な解体は、まさに、Mead の進化過程への信頼を否定する事態に他ならなかったが故である¹⁴³⁾。確かに Mead の「自我」(より一般的には「態度」とは、常に変動してゆく緊張関係を内在させた動的なものではあった。けれどもその内部に全き不整合、全き異和が生じることが、その基本的な理論化の方向からして容認しえぬ(或いは有り得ない impossible) 可能性だったのである。

最後に第三点として、さきに指摘した通り(注83)後半)、Mead の「自我」には、深層心理学・精神医学における防衛機制に類する種々のメカニズム、例えば「解離 dissociation」, 「反動形成 reaction formation」, 「転移 transference」等々を生み出す余地が与えられていない。この点、Mead の「自我」はきわめて透明なのである。Mead の「自我」と Freud の「自我」の表面的な類似性は、大部分、真実のものではない、とする Meltzer の理解〔Meltzer, op. cit., p. 19, n. 3〕は妥当である。Swanson の表現をかりるなら、「Mead が語るのは、いかにして衝動が対象と関係するようになるか……であり、Freud が説明しなくてはならぬのは、どうして或る人々は衝動の表出ができぬようにみえ、又、他の人々は対象との出会いの結果としてその行動を形成することができないのか、という事」〔Swanson, 1961 in Manis & Meltzer, ed., 1967, p. 35〕なのである。

もし何らかの、「意図に反する」行為を組織的に生じさせる自我機能が措定されてあれば、上に第二の問題点として述べた如き事態は回避される。(但し、同時に、「話想宇宙」と「態度」との関係性はよりゆるやかな規定関係に変わるだろうが¹⁴⁴⁾。) Mead は Freud の行ったようには自我の深層部分を定式化していない。Mead の「自我」は、基本的には抑圧にも精神的外傷にも拘束されないが故に、変化する環境に対して流動的に対処してゆくことができる。しかし、まさにその深層を欠くという性格の故に、そして又、「話想宇宙」との緊密な相互関係性の故に、それは理論内在的に、自我内部の全き不整合性の存在を許されないものとなり、変動はしえても解体は生じえないものとして想定されざるを得ないのである。

以上、三点にわたって、Mead がその方法論とむしろ矛盾するような理論化を行ったことの、理論内

在的な諸理由を指摘した。ここまでが、Meadにおける始源問題の第三、「c = 個別社会の成立」にかかわる筆者の理解である。

さて、最後に残された始源問題、「d = 個人自我の個別社会内への析出」については、すでにここまでの記述に至る間に多く論じてきたので、以下、要点のみを記すことにする。

第一に、Meadは「自我の析出」の説明原理を、進化過程で獲得された、新生児における生得的かつ能動的かつ生理的な、「他者の態度を取る」能力に求めている。従ってMeadの「自我」に関する説明は、完全な経験論＝学習説ではなく、受動的な模倣説に対抗し、「心理主義」的な説明を要さないものである¹⁴⁵⁾。

第二に、それは上に述べた如く、深層心理学的な防衛機制に類するメカニズムを持たないものである¹⁴⁶⁾。それは、理論的要請からして、崩壊・解体することが許されていない。

第三に、その析出過程は、初期においては具体的他者の、後期においては抽象的他者の「態度を取る」ことによって可能となる。

以上、「文明論的アプローチ」に内在する始源問題の各々について、Meadの理論に依拠しつつ、これを検討した。その過程で、Meadの理論化のいくつかの限界が示された。

次項では、さらに視点を絞り、いわゆるMeadの「社会的行動主義」を考察する。

2) 「社会的行動主義」の問題性

Meadの理論化に与えられる包括的なラベル「社会的行動主義」は、前節に示した如き多様な思考の方向性を内在させている。これら多様な思考の方向性は、ではいかにして相互に関係づけられていたのだろうか。本項では、このような視点から、いわゆるMeadの「社会的行動主義」について考察する。

a) 「社会的行動主義」の内容

ここで「社会的行動主義」の内容を検討するに先立って、前節2)、3)項に示したMead理論における多様な思考の方向性の主たるものを要約的に示しておく。

- i) まず、科学方法論としては、概括的には「問題解決の論理」の形式で、より詳細には自然科学実験を例として使用することに明示されているが如き、客観主義的かつ厳密な手続きが主張されていた(前節2)項a))。ただしそれは、「実験室実験か個別事例研究か統計調査か」といった、特定手法を限定的に(排他的に)唱導するものではなく、手続き一般の客観性・厳密性を主張するにすぎない。
- ii) Mead的概念の多くは、特に「行為」および「態度」(実は両者は連続的なものだが)を中心として、生理学的に根拠づけられたものだった(同. 2)項b))。現代の生理学的研究の水準と比較したとき、その「曖昧さ」は否定できないだろうが、しかし、Meadにおいて生理学また生理学的心理学を重視する傾向が存在していた事は軽視されるべきではないだろう。
- iii) 「行動主義心理学」は、Meadにおいてはひとつの「方法」として使用されている。それは、「客

観的に観察可能なもの」をデータとして用いる「方法」である(同. 2)項c)). 従って、「客観的に観察可能なもの」の領域が拡大すればそれだけ、「行動主義」の「方法」は有効なものとなる。

- iv) 個人の自我は、あらかじめ与えられてあるのではなく、社会的相互作用の結果産物として、「先在する社会組織の移入」によって、後天的に成立する、という「自我の社会起源説」(同. 3)項a)).
- v) 生体は、「環境」に「適応的」な形で「衝動」を解発する「刺激」を選択する、という「機能主義心理学」的発想。そこでは、精神および自我は、環境への適応のための機能として捉えられる(同. 3)項b)).
- vi) 各個人の主体性および独自性は、第一義的には「生体は行動する」という大前提のうちに含意 imply され、より具体的には、「問題状況」における思考 = 「I」と「Me」の会話を通して、既存のシステムへの変革(新しいシステムへの再統合)をもたらす「創発」として発現する(同. 3)項c)).

ごく大雑把に示せば、以上の如き諸々の思考が、さらにそれらを包括する自然主義 = 進化論的発想(同. 1)項c))のもとに統合されているのが、Meadのいわゆる「社会的行動主義」であるといえよう。それでは、これら思考の「素材」はどのようにして統合されているのか？

基本的には、「社会的行動主義」の内実とは、機能主義心理学の理論を「大胆に拡張」[Swanson, op. cit., p. 29-30]し、これを行動主義心理学の手法で捉えようとしたもの、つまり機能主義心理学の理論と行動主義心理学の方法との結合態として考えることのできるものである。加えて、理論面ではJ. M. Baldwin, C. H. Cooleyの流れる汲む自我の社会的起源説が補充され、方法面では、生理学的概念化が重視されている。Meadの基本的な理論化の方向は(それは後年、より拡張はされてゆくが)、これに尽きているといってもよいように思う¹⁴⁷⁾。つまりひとことでは、Meadの「社会心理学」として知られる「社会的行動主義」とは、「拡張された行動主義心理学の方法で記述された、拡張された機能主義心理学」に他ならない¹⁴⁸⁾。Meadの理論化は、だから、「社会的行動主義」とはいいながら、「行動主義心理学」の理論とは別ものである。Mead自身の言によるならば、「我々は、個人の経験と〔彼をとりまく〕状況〔との関係〕を、可能な限り共通の用語で記述しようとしているのであり、この目的のためにいわゆる行動主義心理学が重要なものとなるのである。行動主義は、新しく導入されて旧来の理論体系にとって変わるような新たな心理学〔理論〕ではない」[MSS, p. 39, []内の補足・圏点は引用者]というわけだ。

さて、存在と意識の二元論的立場に立てば、一方に物理的・生理的な事実、他方に意識上の事実がある。およそあらゆる心理および社会科学は、この両者の関係について何らかの結着をつけなくてはならない。Meadにおいてそれは、すでにその三十年間にわたる公刊論文を引照して示しておいた通り(前節2)項c))、主観的意識を極力客観的事実として提示し分析する、という最も基本的な意図として示されていた。つまりそれは、「〔個人の意識とその生じる状況という〕経験の二局面を相互に可能な限り

近接させること、もしくは、それらをどちらの領域にも共通する言語に翻訳すること」[MSS, p. 39-40]の努力である。Meadは「一方では特定の物理的事実についての言語、他方では特定の意識上の事実についての言語、という二つの言語を求めない」[MSS, p. 40]。この両者を共通に説明する「言語」が彼の「社会的行動主義」であった。では、それはより具体的にはどのような手続きをもって行われたのか？

端的に言って、それは、主観的意識の領域に從來属すると考えられていた諸々の概念を、〈下〉に向けては生理学的「客観性」に、そして〈上〉に向けては社会学的「客観性」に、それぞれ移し変え、しかるのちこの両「客観性」間に、社会・生理学的な「客観的」関係を指定する、という手続きによって遂行されている。すなわち前項の〈生理〉、〈心理〉、〈社会〉という秩序を^{オーバー}こでも使用するならば、〈心理〉レベルを〈生理〉レベルおよび〈社会〉レベルによって、〈下〉と〈上〉からはさみ込む形で把握しようとするのである¹⁴⁹⁾。

以下、この手続きの具体的な記述に入る前に、補足的に指摘しておくべき事がある。すなわち Mead は、外部的世界の実在を決して疑わない、その意味での実在論者だった、という事である。Mead は、「思考を行うことにおいて、……厳密な知識は知の対象の存在を保証することを確信して」いた [Mead, 1910a in SW, p. 107]。しかしこの外部的世界は、それに応答する生理的体制を有する生物種との関係において存在するものである。「私は、直接的経験の対象を、その環境をそれら対象が形成している生物学的かつ社会的な諸個人との関係において存在するものと仮定する」[Mead, 1922 in SW, p. 240, 圏点引用者]。この外部的世界の実在性は、遠距離感覚（第二感覚）と接触感覚（第一感覚）との、つまり視覚と触覚との照合によって保証される、とされている。Mead は第一感覚（特に慣性抵抗 resistance）の客観性、実在性を疑わない。「対象は、硬軟大小さまざまに見える。しかし、それを照合するためのものは常にそこに there ある」[Mead, 1907 in SW, p. 79]。さらに、こうした照合が行われるためには、生物種は一定程度進化してはならない。ある行為が対象について行われるとき、対象の「知覚 perception」と行為の「完遂 consummation」¹⁵⁰⁾との間に、対象を“いじくり”、第二感覚を第一感覚に照合させる過程が介在してはならない。獲物（被捕食動物）についての「知覚」が直接に獲物の捕食＝摂取という行為の「完遂」に結びついていたのでは、第二感覚が第一感覚に照合される過程が存在せず、従って「対象についての意識」も生じえない。この文脈で導入されるのが、いわゆる Mead の「行為の段階」論である [PP, p. 119ff; PA, p. 3 ff]。この発想自体は、既述の如く（注 72）参照）、G. F. Stout の動物心理学から得られ、1907 年の論文ですでに展開されている。つまり、行為の「知覚」段階と「完遂」段階との間に、視覚と触覚とを照合させ、「対象についての意識」を生じさせ、対象の現実性を検証する、「操作 manipulation」段階を想定するものである¹⁵¹⁾。動物において、「操作」段階は人間よりも未分化である。なぜなら第一に、動物では「操作のための器官は、操作それ自体のための形態および機能に関して、人間ほど十分に適応されて」おらず、第二に、「下等動物の接触経験 [≡「操作」段階] は、……あまりにも直接的に^じ摂食、闘争、休息等々であるため、『もの』についての意識が、こうした本能的行動から分離される」とは信じ難いからである [Mead, 1907 in SW, p. 79]。

以上から、外部的世界＝対象は、それに対して「操作」段階での遠距離感覚と接触感覚との照合に基

づく実在性の検証を行いうるまでに発達した生物種についてのみ、「対象についての意識」として成立しうる、という事が主張される¹⁵²⁾。そして、このような「接触経験こそが、……異なる遠距離感覚の内容をそれに対して照合させる、同一の核部分を与えるものであるとされる。「多様な経験に応答しながらも同一でありつづけるのがこの核部分である。我々が物理的对象を知覚する必要条件こそ、この核部分なのである」と [Mead, ibid., p. 78-79].

すなわち Mead において外部的世界の実在性は、これも又、進化論的かつ生理学的に、行為の「操作」段階における遠距離感覚の接触感覚への照合、更に後者の同一性、という事実において与えられているのである。

さて、(補足が長びいたが)、大概以上の論理によって外部的世界の実在性保証を行ったのち、Mead はより主観的な意識を「客観性」の領域に「引き出して」くる。

まず第一に、〈心理〉レベルを〈生理〉レベルの概念で捉えなおす。「意味」は、すでにみた如く(前節2)項c)、本節1)項b))、「意識」と無関係に生体の行為とそれに対する反応との関係として〈生理〉レベルで与えられていた。「意味」が「意識」されるのは、「有意味シンボル」=〈社会〉レベルを介してのことだった。

さらに、「意識¹⁵³⁾」、「精神」、「自我」は、各々、問題状況下において典型的な、「態度」の機能的あらわれとみなされる。「思考」、「感情」、「自発的注目」等は、「精神」、「自我」の営む適応に向けての機能である。これら機能の基体は、〈生理〉レベルにおける「態度」≡「行為」であり、これが適応的に「衝動」を解発する「刺激」を求めるとき、そうした〈心理〉レベルの機能が営まれる。〈生理〉レベルを構成するのは、「社会化された態度」=「Me」と、「未組織の態度」=「アモルフな衝動」=「I (主体)」である。「未組織の態度」は適切な「衝動」解発の「刺激」を決定していない「態度」部分であり、適応性が存在する限り、この部分が失われること(完全な社会化)はありえない。以上が、〈心理〉レベルの〈生理〉レベルへの移し変えである。

なお、さらに付言すれば、Mead は「意識」という用語に、二種類の用法を区別している。すなわち第一に「一定の内容への接近可能性」、第二に「一定の内容それ自体の同義語」、である [MSS, p. 30]。つまり第一の用法は「他者の頭の中はわからない(近づけない)」という一般的な認識に対応し、第二の用法は「他者の頭の中の内容それ自体」に対応する。この区別を導入して Mead が主張しようとした事は、第一の用法での「意識」とは、何ら「意識の主観性」を意味するものではない、という点に他ならない。「あなたが自分の身体の部分について持つ経験への[あなたの]接近可能性という単なる事実」は……脳内部かどこかに位置をもつ意識の中に、それら身体部分[についての経験]を、宿らせるものではない。それが意味するのは単に、他の誰にも近づけない或る対象に、あなたは近づける、というだけの事だ。……私が主張したいのは、ただ、単なる接近可能性は、本質的には、何か意識に属しているという事の証明とはならない、という事だ」[MT, p. 400, []内および圏点は引用者]。さらに Mead は続けていう。「歯の痛みや味覚の快樂が一人の個人にとっての対象である、という事の理屈は、唯一人の個人しかいない部屋の中でマッチを擦ってもその炎はその個人にとっての対象でしかない、という理屈と本質的に同じものである。他者を含むような経験から対象が除外されているからそれが

主観的になるのではない。それが主観的となるのは……複数自我が生じているのに、それが一人の個人によって彼の自我に〔のみ〕参照せられるがためである」[Mead, 1922 in SW, p. 241-242, [] 内と圏点は引用者]。かくて Mead は、「接近可能性」としての「意識」の主観性を否定する。そこで、「自我が私的なのは、ただ非本質的になのであ」る事が主張される [Mead, 1922, in SW, p. 241]¹⁵⁴⁾。

さて、それでは「意識」の用法の第二、つまり「意識の内容それ自体」についてはどうか？ Mead は「決定的に私的」な「意識内容」として、「個人の意図」と「或る種の心像 mental imagery」とを挙げ、これらは「共有財産ではない」と認める [MT, p. 401]。しかし、そうした意識内容も、「必ずや公的となる行為の部分である」と直ちに主張される [MT, p. 402]。では、それはどのようにして「公的」となり、あるいは「客観性」の保証を与えられるのか？

ここで検討されるのが、〈心理〉レベルの〈社会〉レベルへの移し変えの手続きとなる。

Mead における〈心理〉レベルの〈社会〉レベルへの移し変えは、「問題状況」下の「自我」の「思考」機能が適応的「創発」として生み出した新しい「行為」パターンが、「Me」の直接的対応物たる「話想宇宙」の「有意味シンボル体系」を革新し、新たな〈社会〉レベルでの創発＝新しい「話想宇宙」への統合をもたらす、という文脈において、〈心理〉レベルでの創発が（〈生理〉レベルでの「態度」＝「行為」を媒介して）〈社会〉レベルにいわば同化吸収される、という形で行われる。

さきに示した如く（前項 c)), Mead においては個人の「Me」とその対応する「話想宇宙」間に、主として「有意味シンボル」による厳密な生理学的・一意的な関係が想定されていた。この関係性を通して、個人の〈心理〉レベルの私的、主観的な領域は、〈社会〉レベルの「成員全てにとって共通な生理的反応を生じさせる」ところの「話想宇宙」において客観化されるのである。Mead の表現を引用するならば、「『I』の反応は適応を含むが、その適応とは、ただ自我に影響するのみならず、その自我を構成するのを助ける社会環境にも影響を及ぼす」[MSS, p. 214] という事であり、つまりは「個人と彼の住む共同体との間には常に相互関係が存在する」[MSS, p. 215] という事である。個人の適応的な創発的变化は、常に必ず、その属する共同体の変化として結果するとされるのである。そこで、個人の「決定的に私的」な領域でさえも、「必ずや公的となる行為の一部」であるとされる。「個人の内部で進行している過程とは、ただ単に、集合体の内部で最終的には達成される過程の始まりであるというにすぎない」[MT, p. 402] のだ。確かに「個人にしか接近できない物事もあるが、それすらも、意識それ自体を同一視することはできない。なぜなら、我々はたえず、そうした〔私的な〕ものを、この世界を作り上げるのに使用している〔客観化している〕からである」[MT, p. 404, [] 内・圏点は引用者]。以上が、〈心理〉レベルの〈社会〉レベルへの移し変えである。このような大胆な社会性の主張が可能となるその背後には、「Me」と「話想宇宙」との緊密な一意対応性が想定されている、という事実がある事は、あらためて繰り返す必要もないだろう。

以上述べてきたような手続きをもって、Mead は、〈心理〉レベルの主観的なものを、〈下〉に向けては〈生理〉レベルの「客観性」に、そして〈上〉に向けては〈社会〉レベルの「客観性」に置き換える。そして次には、この両「客観性」間に、「客観的」な対応関係を与える。言うまでもなくそれは、「共同体成員全てに対して同一の生理的反応を生じさせる」ところの「話想宇宙」と、各個人のそれに対応す

る「態度」部分 = 「Me」との一意対応的關係に他ならない（前節3）項 a），本節1）項 c）参照）。

かくて、「私は、個人とは客観的なものを取り上げてそれを主観的なものとしていくのだ、という暗黙の意味あいを無効なものにしたい」[MSS, p. 188] と望んだ Mead は、（事の成否はともあれ）、まさにその発想に忠実な理論化を行ったわけである。すなわち、主観的な〈心理〉レベルを、「客観的」な〈生理〉レベルと〈社会〉レベルとに置換し（つまりは生理 = 社会的な用語に置きかえ）、この両レベル間に「客観的」な社会・生理的一意対応関係を設定したのである。この手続きを経て、〈心理〉レベルは外部から観察可能なものに転換される——すなわち「^{アクト}行為」に。（或いは又、「話想宇宙」が充分に「普遍的」であるか、又は当該「話想宇宙」に研究者が属す限り、その「有意味シンボル」の体系へ、と¹⁵⁵。）

その故にこそ、「客観的かつ厳密な」方法論が主張されうるのだし¹⁵⁶、「行動主義心理学」の「方法」が適用されうるのもである。

こうして Mead は、「一方での物理的事実」、「他方での意識上の事実」の両者を共通に説明する彼の「言語」= いわゆる「社会的行動主義」、を得たのである。

以上が筆者の「社会的行動主義」の内容に関する理解である。それでは、このような内容をもつ「社会的行動主義」は、実際にはどのように構成されていたのだろうか。それが次に考察される主題である。

b) 「社会的行動主義」の構成

「社会的行動主義」の systematic な要約を試みたものとして、Meltzer [1964, op. cit.] は、いわば古典的な位置にある。しかし、すでに本論の何か所かに指摘した通り、その理解は必ずしも妥当的とは思われない。（何よりも、Mead の機能主義心理学的発想や生理的「態度」概念を見落としているのが決定的な欠陥である。）

Mead の生理学的概念の重視を強調したという意味では、Cottrell, Lewis らの理解は適切であるが、しかしこれらも、Mead における「操作的定義」の発想を強調したり（前節2）項 a），注 33), 35)), 「態度 ⇔ Me」, 「反応 ⇔ I」といった等式をもって「I」-「Me」関係を理解したり（前節3）項 b), c)) という具合に、必ずしも妥当的とは言いかねる主張をしている。（相互作用論プロパーについては、少なくとも Mead の理論化にそくして見たときには、——確かに機能主義社会学よりは Mead 的ダイナミズムを重視した事は評価できるにしろ——その〈正統な〉後継者とはいいかねる部分が余りに多い。）

こうした意味では、Miller [1973] や Goff [1980], あるいは Swanson [1961, op. cit.]¹⁵⁷, Troyer [1946, op. cit.] 等々の、むしろ相互作用論プロパーとは言いきれぬ論者の理解の方が、より適確に Mead 的発想を捉えているともいえるだろう。いずれにせよ筆者は、これら諸論者の Mead 理解を参考としつつ、できる限り整合的な形で Mead 的発想をこれまで捉えようとしてきた。（その当否は識者の判断にゆだねるしかない。）

そこで本項のこの部分でも、筆者はこれまでも部分的には提示してきた筆者の Mead 理解に基本的には依拠しつつ、「社会的行動主義」の構成を論じてゆく。以下筆者は、「社会的行動主義」の i) 大前提, ii) 基本概念とその働き, iii) 基本概念による人間行動の理論、をこの順に提示する。

i) 大前提. 人間個人とは、絶えず変動する「環境」に対して常に適応し、発展してゆこうとする「社会」という全体の有機的部分である。個人は常に必ず、「環境」適応に向けて行為する。個人の適応性が失われることはない。ここに「適応」とは、(社会・個人)有機体とその「環境」との「相互適応 adjustment」の意味である。個人有機体にとっての「環境」とは、物理的外部環境(自然)、社会的な外部環境(社会)、社会=生理的内部環境(「Me」)を含むものである。「社会」の「環境」への適応過程は、自然進化過程の一部である。

ii) 基本概念. これは、〈社会〉、〈心理〉、〈生理〉の三つのレベルに分けて考えるのが妥当である。

〈社会〉レベルには、「話想宇宙」すなわち「その構成員全てに同一の生理的反応を生じさせる有意味シンボルの体系」が存在する。それは、理想(又は当為)としては唯一普遍の存在であるが、現状(Meadの理論化の当時)では複数存在する。その働きは、その構成員の〈生理〉的「態度」に直接影響し、その行為を制御すること、及び、個人の創発的行為パターンを同化吸収して常に変化し、その個人的な創発を構成員全てに普遍的なものとするところにある。

〈心理〉レベルには、「意識」、「精神」、「自我」という機能(実体ではない)が存在する。このうち、「精神」、「自我」は特に「問題状況」下での「思考」、「感情」、「内省」、「自発的注目」等々の精神活動にかかわる機能である。「意識」には少なくとも、「他者についての意識」、「自我についての意識」、「物的対象 physical thing についての意識」、「意味についての意識」が存在するが、全て、「精神」、「自我」による自己対象化機能の発達をまって、生じる。又、「自我」は基本的には「I」と「Me」との二つの部分からなる。この区別は〈生理〉レベルの「態度」の区別から生じたものである。

これら機能の目的は、「問題状況」を解決するべく「衝動」を適応的に解発する「刺激」を選択し決定することにある。

〈生理〉レベルには、「中枢神経系を中心とする有機体の全体的体制」たる「態度」が存在する。「態度」のうち、「他者の期待の組織化されたセット」を内在化させた部分が「態度」の「Me」部分、いまだ組織化されておらず、「衝動」解発の適応的な「刺激」を決定していない「アモルフな態度」部分が、「態度」の「I(主体)」部分であり、「行為への衝動」の同義語である。なお「意味」はこの〈生理〉レベルにおいて与えられている。ここに「意味」とは、「Aの行為の初期段階が示すその行為の達成に向けてのBの反応」である。(補言しておけば、〈心理〉レベルの「意識」の対象は全て〈生理〉レベルにおいて与えられている。——他者、自我 [Me]、物的対象、意味等。)

「態度」が行うことは、「行為」、〈心理〉レベルの精神活動各種、「(具体的/抽象的)他者の態度を取ること」である。ここに「抽象的他者」とは「話想宇宙」の「有意味シンボル体系(≡一般化された他者)」に他ならない。

以上が、三つのレベルにおける諸概念とその規定である。

- iii) 基本概念による説明。これは、〈新生児の社会化されてゆく過程〉と、〈成人（「Me」ないしは「一般化された他者」を内在化させた個人）の社会的行為〉に二大別し、後者をさらに〈無問題状況〉と〈問題状況〉とに大別して論じるのが適切である。

〈社会化過程〉（前節3）項、本節1）項c）等参照

- (i) 新生児は四つの能力を持つ。アモルフな「行為への衝動」＝「I（主体）」と、生得的・能動的・生理的な「他者の態度を取る」能力、加えて発声能力と手の対象操作能力である¹⁵⁸⁾。
- (ii) 新生児は、「衝動」を解発する適応的な「刺激」を全く決定していない。彼は、まず、身近な人（多分母親の）「態度」を「取り」、その「態度（組織化されている）」に基づいて、〈生理〉レベルで、「衝動」解発の適応的な「刺激」を決定しはじめる。アモルフな「態度」が「Me」部分を形成しはじめる。彼はまだ「習慣」＝「無問題状況」を持たぬから、事実上、つねに「問題状況」的である。ここで、わずかに組織化された「態度」＝「Me」部分と、アモルフな「態度」＝「I（主体）」部分との間に、「精神」、「自我」機能が働きはじめる。自己対象化機能が働き出すので、まず、漠然とした「他者についての意識」、次いで「対象についての意識」、「自我についての意識」が〈心理〉レベルに生じる。「意味についての意識」は、「自我についての意識」が生じたのちに生じる¹⁵⁹⁾。こうして、身近な他者の「態度を取る」ことによって、彼のアモルフな「態度」は次第に「Me」部分を形成しはじめる。この段階では、「他者の態度を取ることは、「身振りのやりとり」の外観を呈す。主として「身振り」に基づく段階である。
- (iii) 自我機能が確固としたものとなるのは、「遊戯」^{プレイ}段階でのことである。「意味についての意識」が生じ、「身振り」に加えて「言語」＝「有意味シンボル」が使用されはじめる。しかし、中心なのは「具体的他者の態度を取ること」であり、「言語」使用は必ずしも「有意味」ではない。この段階で、自我機能は「想像」を行いはじめる。加えて「思考」や「自発的注目」も生じる。過去の経験は「心像」として「Me」の形成にあずかる。「予期された事態の空想（泣けば助けにくる母親）」も機能を始める。アモルフな「態度」は「Me」に形をととのえ、「習慣」が生じる。
- (iv) 「ゲーム」段階に移行すると、「言語」＝「有意味シンボル」＝「抽象的他者の態度を取ること」が支配的となる。その属する「話想宇宙」との生理的一意対応関係が始まる。「態度」は「話想宇宙」の「有意味なシンボル体系」を内在化させ、「Me」（又は複数の「Me」とそれらの一般化である「一般化された他者」¹⁶⁰⁾）を形成する。「態度」の大部分は組織化された「Me」となり、無意識な、自動的な「習慣」による行為遂行が社会的相互作用過程の一定部分を占めるようになる。この段階においても、適応性が個人から失われぬ限り、「衝動」解発の適応的「刺激」を決定していない「態度」部分が残存する。それがアモルフな「態度」＝「行為への衝動」＝「I（主体）」である。

〈成人における無問題状況〉

「無問題状況」下の成人の「行為」^{アクト}は、すでに「環境」に対して適応的な「習慣」＝「態度」の「Me」部分によって達成される。この過程は無意識的かつ自動的に進行する。このとき「精神」、「自我」は機

能していない。この状況での「行為」が「意識」されるのは、「無問題状況」の平衡が破れて、「思考」が働くときの、「過去の想起」によってのみである。この状況での「I（主体）」は、適応的「刺激」を決定し「Me」として集団成員全てに共有されるようになった「行為」パターンに含意 imply されてある。すなわち、集団成員全てに承認された彼の「習慣」的「行為」パターンに彼の「I（主体）」は含まれている。但し、「習慣」的「行為」パターンが「環境」との間の平衡を乱すと、「I（反応）」が「自発的注目」の形で「問題」の有無を探し、「衝動」を適応的に解発しようとする。平衡の乱れが「問題状況」に至らぬ限り、「習慣」による「行為」パターンが続行される¹⁶¹⁾。「社会」は絶えず「環境」への適応を続ける（「拡大してゆく」）ので、いずれ必ず、この平衡は破られる。

〈成人における問題状況〉（前節3）項b), c) 参照)

- (i) 「環境」と「社会」との平衡が崩れると、それまで適応的だった「話想宇宙」に統合された「有意味シンボル体系」に「問題状況」が生じる。従って、個人は「話想宇宙」の直接的対応物たる彼の「態度」の「Me」部分では適応的に行為することが不可能となり、彼の行為は抑止される。以上は、「社会」の変動に起因する「問題状況」の発生である。これ以外にも、個人が何らかの「例外的事実」に直面した際に、彼の行為は抑止される。この場合は、個人（の「I（主体）」）に起因する「問題状況」の発生（問題発生）である。このとき、もはや旧「Me」での適応的な行為は不可能だし、「I（反応）」はいまだ適応的な「刺激」を決定していないから、行為は抑止される。
- (ii) 即座に〈生理〉レベルの「態度」における「Me」部分と「I」部分とが、〈心理〉レベルの「精神」、「自我」として機能し、「思考」、「内省」、「感情」、「自発的注目」等の精神活動がはたらきだす。これら〈心理〉レベルの精神活動は、その限り、「意識」の「私的な内容」である。従って、この段階では外部から知る（近づ^{アツキス}く）ことも予測することもできない。（そもそも「自我」の「I（主体・反応）」じたい、「Me」に再統合されるようにならない限り、当の他人にさえ「意識」されないのだ。）これら〈心理〉レベルの精神活動のうち、最も中心的なのが、「思考」または「内省」である。そこにおいて、旧秩序を代表する彼の「自我」の「Me」部分つまり旧「話想宇宙」（〈社会〉レベル）の「有意味シンボル体系」が〈生理〉レベルで内在化されたもの（旧「規範」と、「衝動」つまり「I（主体）」の、適応的な解発「刺激」を未だ決定していない「自我」部分＝「I（反応）」との間に、「内面化された会話」という対話的・弁証法的過程（行為の「内部的リハーサル」、「思考実験」）が生起する。「衝動」＝「I（主体）」はまた、「自発的注目」の形で（「I（反応）」として）、「環境」から適応的な「刺激」部分を「切り取り cut out」、それにより「環境」の適応的な「刺激」部分を選択しようとする。こうして、行為の抑止にともない、内に向けては〈心理〉レベルでの「I（反応）」と「Me」とのシンボリック「対話＝思考」が、外に向けてはやはり〈心理〉レベルでの「自発的注目」が生じている（仮説再構成過程）。
- (iii) 「思考」および「自発的注目」の過程から、新しい適応的行為パターンが創発すると、それは、「同時に複数のシステムに属しうる能力」つまり「社会性 sociality」によって、旧秩序＝「Me」を革新し、新しい秩序＝創発した「Me」を生み出す。創発的な行為パターンは、「環境」に対して〈生

理) レベルの「行為」として試される(仮説検証過程)。それが「環境」に対して適応的である＝行為が継続しうるならば、「I (反応)」は新しい「刺激」を決定し、〈生理) レベルの「態度」の「Me」部分に、新しい秩序＝創発した「Me」として再統合される。なお、この新しい「行為」には「I (主体)」が含意 imply されており、「行為」のための「刺激」を選択した「I (反応)」は、「行為」達成後に「Me」からの「反応」によって「意識」される。

- (iv) 「行為」が適応的でなければ、再び(iii)の過程が繰り返される。「行為」が適応的であれば、〈心理) レベルの創発は〈生理) レベルに再統合され、〈心理) レベルの精神活動は機能を(次の「問題発生」まで) 停止する。
- (v) 〈生理) レベルに創発した個人の新たな「態度」の「Me」部分は、その「社会性」によって、又、個人の〈生理) レベルの「Me」と〈社会) レベルの「話想宇宙」との緊密な一意対応的・社会＝生理的關係性によって、ただちに、旧「話想宇宙」を革新し、新しい「話想宇宙」を創発させる。「話想宇宙」の「有意味シンボル体系」は、成員全てに共通のものであるから、この段階に至って、かつての(「仮説再構成」段階の)〈心理) レベルにおける「意識」の「私的な内容」は、結果的、事後的に、成員全てに「^{アクセシブル}接近可能」なものとなる。かくて再び、「環境」と「社会」との平衡は回復され、「習慣」による行為が続けられる。個人の〈心理) レベルの創発が〈社会) レベルの「話想宇宙」の創発をもたらし、この「話想宇宙」が成員全てを社会＝生理的にコントロールする。(「態度」の「Me」部分に内在化された「規範」として。)そして「社会」は「環境」へのさらなる適応的拡大化・一般化を続けるから、すぐに新しい「問題状況」が生じる。「習慣」が有効なのは、それまでの間だけである。なお、新しい「Me」を創発させた個人の「自我」の「I (反応)」に相当するその「態度」の「I (主体)」＝「衝動」部分は、すでに「態度」の創発した「Me」部分に統合されてしまっているが、個人が適応性を失わない限り、社会化されていない「アモルフな態度」部分は必ず存在しつづける(問題解決¹⁶²⁾)。

さて、およそ以上が、「社会的行動主義」と呼ばれる理論化に基づく人間個人と社会と環境との説明である。もしこのような理解が妥当であるならば、Meadの理論化において、〈生理)、〈心理)、〈社会) という三つのレベルが必要不可欠なものである事が理解されよう。

従ってまた、〈生理) レベルを切り捨てることで成立している現代の相互作用論(ChicagoおよびIowa派)は、Meadの全体としての理論化を継承しているとは言い難いのである。さらに、Cottrell派はこうした欠を補うものではあるが、そのMead理解は、さきに示した如く必ずしも妥当的ではないようだ。Meadの人間像は、Blumerがみるほどには規範から自由ではなく、Kuhnのみたほどには規範被拘束的ではなく、そしてLewisのみるほどには主体性を欠いた存在ではないと言ってよいだろう。

それでは、(以上の筆者のMead理解が妥当である、との前提のもとに——実際、そう考えるしかないのだが)、このようなMeadの「社会的行動主義」と呼ばれる「理論化」は、どのように評価されるべきだろうか？ それを次に考察する。

c) 「社会的行動主義」の問題

Meadの理論は「曖昧」である、という主張は、Meltzer [1964, op. cit.]をはじめ、無数にある。他方では、Miller [1973] や Cottrell [1980, p. 53] の如く、「少しも曖昧ではない」とする主張も少数ながら存在する。実際のところ、「曖昧」という包括的な評価それ自体がすぐれて曖昧なものである。各論者は、自己の意向に即して Mead を評価しているわけだから、「実証に耐えない」ことをもって「曖昧」と呼ぶ（例えば kuhn）事もあれば、概念や理論化や表現の不整合、不明瞭なることをもって「曖昧」とする（例えば Meltzer）こともある。Meadの理論に関する Secondary な論述は、じっさい、多様な意味で、多様である。

筆者がここまで、可能な限りテクスチュアルに、Meadの全体的な理論化を再構成して提示しようとしてきた。Meadを「哲学者」とも「生理学的心理学者」とも「社会心理学者」とも「行動主義者」とも「社会学者」とも想定しなかった¹⁶³⁾のも、そのためである。ラベルよりは原著の内容であろう。無論、全く単純な意味でも、Meadの論述は必ずしも一貫していない。（例えば、「I」と「Me」の「定義」を公刊論文の年代順に比較してみると良い。）しかも困ることは、筆者の知る限り、Meadが自説をひるがえしたのはただ一度、1910年の論文において、1903年の論文“The Definition of the Psychical”を、「やや曖昧かつ無効果的¹⁶⁴⁾だった」とみなしている [Mead, 1910a in SW, p. 106] 箇所だけである。Meadの思考には知る限り、ドラスチックな転回は見られない¹⁶⁵⁾。そのかわりに、確定的な体系に収斂してゆくこともないようなのである。しかもその論じた対象領域は広い。

従って、筆者の提出した Mead 理解も、勿論、ごく部分的なものであろう。それを認めたくえて、以下、Mead 理論の問題点と筆者が考えるものを指摘する。

まず、筆者は、Meadの基本的な立場、その自然主義的進化論的発想に関しては、前項にすでにその限界を指摘したこともあり、これ以上論じようとは思わない。むしろ、本項で提出されたその理論化に関して、i) 各概念規定の妥当性、ii) 理論体系の整合性について検討しようとする。

i) 概念規定の妥当性

Meadの理論化における「概念」規定の第一の特質は、その〈生理〉レベルの重視にあるといつてよいだろう。表現を変えるなら、Meadの「概念」規定は、(或る意味では Spencer を継承する)、生物学的社会学(および、生理学的心理学)の流れに属しているという事だ。同時代の社会学者(例えば Cooley や Thomas¹⁶⁶⁾) および心理学者(例えば Watson) が経験主義=学習説への傾斜を強め¹⁶⁷⁾、特に社会学領域における関心の焦点が〈生理〉レベルから〈心理〉、〈社会〉レベルへと移行してゆく時代¹⁶⁸⁾ にあって、Meadのこうした〈生理〉レベルへの執着は、むしろ異端的でさえあったといえる¹⁶⁹⁾。そしてその理由は、恐らく、人間の個人と社会とを等しく「客観的」に捉えようという Meadの基本的意図によるものだろう。

Meadが〈生理〉レベルに規定した概念は、「行動」、「態度」、そして「意味」である。このうち特に問題となるのは後二者であろう。

Meadにおける「態度」の概念規定の曖昧さについては、すでに述べた。それを「中枢神経系を中心

とする有機体の全体的体制」と規定しても、実のところ何も定義したことにはならない。有機体論者の立場に等しいのである。Meadの〈生理〉レベルの議論には、神経伝達物質に関する記述も、神経系とホルモン分泌による代謝平衡ホメオスタシスに関する記述も含まれていない。しかしながら、であるからといってその「態度」概念を容易に否定し去ることもできない。「態度」の一定部分が「習慣」の移入によって「組織化」される、という議論にせよ、「態度」が「行為」の「内部的局面」コヴァート・フェイスであるという議論にせよ、結局のところ人間の全活動の基体はその生理学的体制にのみ求められねばならぬ以上、たやすく否定しえないのである¹⁷⁰⁾。ここで筆者がMeadの「態度」概念について言えることは、それが〈生理〉レベルを重視しつつもなお、Watsonismに典型的な、奇妙な還元主義に至らなかった点を評価する事程度である。もし人間が〈生理〉レベルの何ものかに還元されるのなら、それは生物=物理=化学的に行われるべき事であって、SおよびRという記号表現に、ではないはずである。Meadの「態度」概念は、それをその全体的理論化の中においたときに、もう一度考察する。

次に「意味」の〈生理〉レベルでの規定について。「意味」を〈生理〉レベルの「行為」≡「態度」との関係で定義することによって、Meadは「意味」に付随する「主観性」を払い去ろうとした。その結果が妥当的なものであるか、と問われれば、否と答えざるを得ないだろう。Mead的「意味」は、その全体としての理論化が妥当である限り、確かに有効ではあろう。「話想宇宙」が成員全てに共通の「意味」を与え、そこでは諸個人の共同的な「環境」への「適応」という、そのことの「意味」までが一意的に与えられている、という限りにおいて、「諸個人の共同的な環境への適応」であるところの、「Aの行為の完成に向かうBの反応」は、確かに「意味」の定義たりうるだろう。例えば、「理想的に健全な家庭の夕食」状況において、Aによる「塩の容器に手を伸ばす」行為のはじめの徴候は、Aのこの行為の完成（塩を取る）に導くBの反応（Aに替わって塩を取ってやる）をもたらすであろう。かくて「家庭」という集合性の全体としての環境適応的な行為が達成される。意識されずとも、「意味」は一定の客観的結果をもたらした。（無論、再度強調しておけば、これは「意味」がMead的意味で「有意味」である限りにおいて、である。）現実にごうした状況が存在しうるかも知れぬ事を筆者は否定しない。しかしそれで全てが尽きるだろうか。じつは、尽きてしまうのである。

同様の例を挙げよう。「理想的に健全な家庭の夕食」状況において、Aが塩の容器に手を伸ばす「態度」を示す。Bはすぐさま塩を取り、自分の皿に振りかけてしまう。この場合、A、B間には不和が存在するのかも知れぬ。Bの行為によってそれを知ったAは「問題状況」に直面するから、前述のプロセスを経て、それを解決する。結果、Bの行為は「家庭」にとって「適応的」だった。あるいは又、A、Bは、塩の過摂取が健康を害す、という情報を共有していたのかも知れない。この場合、Bの行為によってAはその事を想起し、結果、Bの行為は「家庭」にとって「適応的」となる。あるいは、健康管理に余念のないAは、その日いちにち塩を摂取せずに頑張ったため、その生理的体制は不足状態のナトリウムを必要としている。それを知らなかったBは、Aの抗議から、「問題状況」に直面する。前述の過程を経て、それを解決する。Aは塩分を摂取することを得、結果、Bの行為は「家庭」にとって「適応的」だった。あるいは、云々。

要するに、Mead的「意味」は、それを支える大前提＝「人間は共同的に環境に対し適応的に行為する」

と、「話想宇宙」シンボル体系の「意味」の「有意味」性つまり一意性、によって、その妥当性を保証されているに過ぎない。「意味の意味」の心理的説明を不要と断定した Mead が行った事とはいえば、すなわちそうした「意味」や「メタ意味」の複合的な体系を、「話想宇宙」という「普遍的」意味性の世界にひとまとめにして投げ込んだ、という事に他ならないのである。そしてしかも、この「普遍的」意味性の世界＝「話想宇宙」の規範体系が、どのような文法構造を持つのか、その「創発」はどのように旧体系に統合されるのか、そうした問題について Mead は語らない。「全体社会を適応に向かわせる構造」といってみても、それは同語反復にすぎない。

さらに、「意味」はその通常の用法において常に「価値」を含むものである。Mead 理論における第一の「価値」は、「全体社会の環境への適応」である。（筆者はそのこと自体に反対しようとは考えない。）そこで、Mead における「意味」つまり「Aの行為を完成させるBの反応」という「環境への共同的適応」は、すなわち Mead の「価値」に他ならぬ。従って Mead は、その「意味」の規定において、「意味」一般を、その「価値」に一元化させた、といいうるだろう。Mead の「意味」とは Mead の「価値」である。そこでは、その「価値」＝「環境への共同的適応」に見合わぬものは、「意味」として成立する事を許されないのである。

またさらに、すでに示した（注88）ように、Mead においては「概念」と「聴覚映像」とは区別されない。話シコトバの「意味」はすなわちその話シコトバ自体である。（そうでない限り、「言語」による「他者の態度を取る事」は不可能だ。）ここでも又、「意味」は極めて高い一意性を与えられている。「適応」という名の一意性である。

以上が〈生理〉レベルの概念規定の問題である¹⁷¹⁾。

次に、〈心理〉レベルに移ると、「意識」、「精神」、「自我」の各々が、「思考」、「感情」、「自発的注目」等の機能を遂行する事になっている。これらを機能として捉えることは認めるとして、では、それが機能する「問題状況」とはそもそも何なのか。「行為が中断される状況」であると Mead は言うだろう。では、「行為の中断」が生じない限り、人間は「思考」し「感情」をもち「自発的注目」をする事はないのか。慣れた自家用車を運転する事は全くの「無問題状況」であろう。しかもその運転者の〈心理〉レベルでは、「思考」、「感情」、「自発的注目」が絶えず生じているだろう。或いはそれとも、そうした〈心理〉機能が生じているという事は、「無問題状況」の中に小さな「問題状況」が絶えず生起しているという事か。であるならば、大小の「問題状況」はどう関係づけられるのか。

人間は複数の処理系を同時に（或いは極く高速のタイム・シェアリングで）処理する情報処理システムである。Mead の「問題状況」／「無問題状況」の区別は、こうした人間の情報処理能力に比較したとき、余りにも大雑把でありすぎる、或いは余りにも単線的^{リニア}でありすぎるようだ。これが、〈心理〉レベル全体にかかわる「機能主義心理学」的発想への疑問である。次に、「自我」については、すでに指摘した如く、それが「深層」を欠くこと、従って基本的に抑圧からも精神的外傷からも自由であり、変動に対する流動的な対処が可能である事、逆にいえば発狂する自由が奪われている事、を第一に挙げる。第二に、これは筆者の Mead 理解にも相当かかわる事であるが、Mead の言によれば、「自我」の「思考」は「内面化された会話」である、という。ところで筆者の提示した Mead 理解では、「自我」の「I（反

応)」部分は社会化されておらず、「Me」部分は社会化されている、としてある。「自我」が完全に社会化されては、主体性の契機が失われるからである（前節3）項b）、c）参照¹⁷²⁾。もしこの理解が妥当であるなら、「自我」における「内面化された会話」とは、「社会化されたもの」と「社会化されていないもの」との間に生じる事になる。果たしてそれは「会話」であろうか、或いは、「会話」として成立しうるものだろうか¹⁷³⁾。勿論、「I（反応）」に対して「Me」が承認を与える、というのだから、或る意味ではそれは「会話」的である。しかし知られうるのは常に「Me」（および「Me」になりかけている「I」[注110]とそれの本文部分参照）だけである。「I（反応）」は「会話」が終わったあとでのみ知られる。すると、一瞬前の「会話」の結果をいまの「I（反応）」は見ているわけで、これはトライアド関係となり、ダイアド=対話関係ではない。すると、「内面化された会話（対話）」という表現は必ずしも適切ではない事になる。第三に、「Me」ないし複数の「Me」と「一般化された他者」の関係が不明確である。それが、例えば階層的に一般化してゆくものであるのなら、その階層化の原理が示されねばならない。およそ以上が、〈心理〉レベルの概念規定にかかわる問題である。

次に、〈社会〉レベルには、「話想宇宙」がある。その構造、規模、変化過程の実際、統合原理、等々は一切不明確である。（この不明確性と、同じく「問題状況」の規定の曖昧さを利用して、筆者がKolb「批判」を行った（前節3）項b））のは、御明察の通りである。）

それはその集団成員全ての「態度」の「Me」部分と密接な〈生理=社会〉的一意対応関係にあり、諸個人を共同と適応に向けて統制するとともに、どんな諸個人の「創発」的行為パターンも同化吸収して流動的に変化する。現状（Meadの理論化当時）ではそれは複数存在するから、各「話想宇宙」の関係と、その間を移動する個人の問題が説明される必要がある¹⁷⁴⁾。以上が〈社会〉レベルの問題である。なお付言すれば、この〈社会〉レベルに他のどんな明確な概念規定も示されていない事が、もうひとつのこのレベルにおける問題である。

ii) 体系の整合性

筆者はそもそも、Meadの論述を「可能な限り整合的な形で」提示しようとしてきたわけであるから、ここでその体系の不整合を指摘したとしても、それがMeadの理論化に内在するものか筆者の理解に起因するものかは筆者自身には判別し難い。以上の限界を再度強調したうえで、Meadの（筆者の理解による）体系の整合性を考察する。

およそ或る論理体系が「不整合」である、というとき、その「不整合」性なるものは、その体系を構成する諸概念の規定が明確であるという条件下に、概念相互の関係性に矛盾や不一致が認められる、ということの意味するものだろう。概念規定が明確であるほど、体系の「不整合」を明示することも容易となる。規定が曖昧であればそれだけ、体系の矛盾を指摘することも困難となる。（要するに、各個別命題の真偽判定が可能であるという条件下に、命題相互の関係性の真偽判定も可能となる、という事だ。）

この意味では、Meadの理論化の体系に「不整合」を指摘するのは難しいといえる。そもそも概念規定が極めて広義のものであり、しかもその多くが（例えば「態度」≡「行為」概念の如く）、意図的に

広義の規定を与えられているものであるからだ。Mead の機能主義心理学的な理論化は、その有機体論的志向の故に、理論に内在する「不整合」を指摘する事が困難である。こうした理論化に対する批判の方法としては、(i)各概念の規定の曖昧さを(理論化の意図とは無関係に)追求する、(ii)経験的事実に照らしてみたときの非妥当性を(つまり有効でない事を)提示する、といった方法が考えられる。しかしこのどちらも、体系の「不整合」それ自体を明示化したことにはならない。従って、それを行うことはしない。

以下、筆者が気付いた限りで、体系の「不整合」と思われる点を示す。

まず第一に、個人の主体性を保証する「創発」概念は、定義からして予測不能のものである。ところで他方、この「創発」は、必ず共同体全体の「適応」をもたらしものとされている。つまり予測可能のものである。従って、個人の主体性を裏づけるときの「創発」概念と、社会の「適応」を裏づけるときの「創発」概念とは矛盾する¹⁷⁵⁾。前者は予測不能であり、後者は予測可能である。しかし、これは実は矛盾とはいえない。Mead の理論化の大前提「個人は必ず共同的に環境適応的に行為する」を受け入れるかぎり、個人の主体性を保証する「創発」は、そもそも、環境適応的な限りでの予測不能性である。従って、大前提を受け入れる限り、矛盾は生じない。(但しこの場合、「創発」の概念規定が問題となる。しかしそれは体系の「不整合」に直接関係する問題ではない。) Mead においては、犯罪者は「他人に属する財産を奪うが、かれ自身は財産権を認め、それを保護している社会には属していない」[MSS, 邦訳 279 頁, 圏点引用者] のである。確かに Mead が示そうとした事は、「個人が創造的たりうるのは、ただ彼が社会的であるからに他ならぬという事」[Miller, 1973, op. cit., p. 148] だったといえる。しかし、Mead の文脈にいう「社会的」「適応的」という概念規定は、すぐれて広義のものである故に、事実上、「反社会的」「反適応的」でありうる事が困難なのである。従って(これは必ずしも体系の「整合性」にかかわるものとはいえないだろうが)、次の事が直ちに問題となる。すなわち Mead は、「社会的」であることの程度を区別していない。「すぐれて社会的」である個人に比較して、「わずかに社会的」である個人とは、すなわち「相対的に反社会的」である事が論じられていない¹⁷⁶⁾。この点は、「態度」の「Me」部分(又は「話想宇宙」)の内容構成の分析が示されていないという概念規定の曖昧さに起因する。

第二に、Mead は、「思考」は「行為」が「不適応」となり中断されたときに生じる、とする。ところで「思考」とは「精神」ないし「自我」の営む働きであり、すなわち「態度」の機能であるから、実のところ「行為」である。従って、「行為」は中断されていない。

勿論、これもやはり、体系の「不整合」ではない。外部環境に直接働きかけるという意味での「行為」が、「思考」行為にシフトしたというだけの事である。前者が例えば手の操作機能を必要とするように、後者は「精神」や「自我」の「反省」機能を必要とする。そして両者とも、「態度」をその基体とする。

つまり Mead にあっては、全てが「態度」によって語られる。そしてこの「態度」は、それ以上還元されえないものとされている。果たしてこれは何かを説明したことになるのだろうか? 行動主義者にとって「意識過程」が一種の Black Box だったとするなら、Mead の Black Box は「態度」である。その内容も構造も明示されない。そして行動主義者が Black Box を介した「刺激」と「反応」を測定す

ることで満足するとすれば、Meadは全てをBlack Boxで語ってしまう事で満足するのである。(勿論、この表現は極端すぎる¹⁷⁷⁾。しかも、これは体系の「不整合」にかかわる問題ではない。)

第三に、「他者の態度を取る事」の問題がある。Meadが想定した「他者の態度を取る」能力や、その自我の発達段階説を全て認めるとしよう。「他者の態度を取る」〈生理〉レベルの能力は、年齢に関係なく一定不変のものなのか。それとも例えば「態度」の組織化(「Me」化)に逆比例して失われてゆくものなのか。或いはそれ自体は一定不変の能力だが、例えば「態度」の組織化に比例して潜在化し、能力として発現し難くなるものなのか。

もしそれが一定不変のものであるのなら、「一般化された他者」(或いは複数の「Me」でもよい)を内在化させるに至った子供ないし青年は、二種類の他者つまり具体的他者(例えば対面状況の相手)と抽象的他者(つまり共同体の共有された規範体系)との両者の「態度を取る」能力を持つことになる。これは「態度を取る」能力の過剰ではないのか？

つまり、両者が「一般化された他者」を内在化させている限り、相互に相手の「具体的態度」を取り合わなくても、「相互調整」は自動的・無意識に進行する(「無問題状況」)だろう。従って、相手の具体的「態度を取る事」の必要はない。それをを行ったところで、そこに認められるのは、すでに自分が内在化させているのと同じ共同的な行為パターンであろう。或いはそれとも、「Me」が提供する共同的な行為パターンとは、いわば概括的なプランにすぎず、それが具体的場面で「実行」されるときには、やはり具体的他者の「態度を取る事」が(例え無意識にでも)必要とされるのだろうか。

もし、具体的他者→抽象的他者への「態度を取る事」の変化が、「具体的他者の態度を取る」能力の「抽象的他者の態度を取る」能力への変化、ないし後者による前者の潜在化、を意味するものであれば、この「二重の態度取得の過剰性」は生じない¹⁷⁸⁾。この場合、成人の相互作用過程は、相互の「Me」および「話想宇宙」を介した純粹にシンボリックな局面から構成される。

要するに、新生児における如き「他者の態度を取る」能力はどうなってゆくのか？

Meadはどうも、前者の結論、つまり「二重の態度取得」の方を想定しているように思われる。この場合、「話想宇宙」を介してのシンボリックな「抽象的態度取得」がいわばバーバルな局面、相互の「Me」を直接に取り合う「具体的態度取得」がいわばノン・バーバルな局面をそれぞれ構成する事になる。両者の不一致は「無問題状況」では生じえない筈だから、この二重性は明らかに過剰である。一方、後者の結論をとると、「具体的態度取得」は生じない事になるから、少なくとも「無問題状況」下では、ノン・バーバルな局面が利用される事はない。つまり、いずれの場合にも、バーバルな情報がノン・バーバルな情報によって豊富化されることは生じえない。

これが「問題状況」に一人が直面した場合だと、その相手は、バーバルな局面(それまで共有されていた「Me」と、ノン・バーバルな局面(行為が抑止され、「思考」が生じているその相手の「具体的態度取得」との照合から、彼の相手に対する情報は豊富化される事になるだろう。(但し、「思考」それ自体に対して彼は接近可能性を持たないから、「思考」内容は、「問題解決」後の相手の「具体的態度取得」か、「話想宇宙(創発している)」の「抽象的態度取得」にたよるしかない。)いずれにせよ、「問題状況」を考えると、前者の結論＝「二重の態度取得」能力の方が適切であるようだ。従って、「問題

状況」下で、「二重性」が有効である（相手に対する情報を豊富化する）との条件下に、この「過剰性」は必ずしも体系の「不整合」とはいえない事になろう。

第四に、「再帰性の過剰」といった難点が考えられる。つまり、注134)にも示したように、Meadにおける自我の析出原理＝「自分の刺激に他者が反応するのと同じように自分も反応すること」＝再帰性は、行為の全てのカテゴリーにおいて生じうるとされている。これら多様なカテゴリーに属する再帰性が、どのようにして一個の自我を析出させるべく統合的に機能するのか、は、Mead自身が論じていないので、検討しようがない。しかし、再帰性がこれほどに「過剰」であり、その個別的性質が問われないのであるならば¹⁷⁹⁾、それはほとんど、「キッカケ」にすぎない。Meadは自我の発生基盤を「態度」＝生理的体制に求め、それを生じさせる実際の誘因を社会過程に求めている[MSS, 邦訳239頁, 注(27)]わけだが、この「社会過程」が実に広くとられているのである。Meadのこのあたりの議論は、概して、動物行動学における「生得的解発機構 innate release mechanism」, 「鍵刺激 key stimulus」の議論を連想させるのである。(無論、「鍵刺激」は一度与えられて生得的能力の解発因となれば、それでよい。Mead的「再帰性のための刺激」は、持続的に与えられねばならない筈であろう。) 少なくとも、Meadにおいては、「態度」はほとんどどんな刺激に対しても、いわば「再帰性」を見出そうとするかのようなのである。そしてこのことは、筆者には少なくとも、生得的な「態度を取る」能力という概念化とあいまって、Meadの体系の全体的な経験主義的構成とむしろ相容れぬ、合理論的発想と考えられてならないのである¹⁸⁰⁾。そしてその事は、Meadの〈生理〉レベルの重視を考えに入れるとき、又、本能論への執着を想起するとき、一層強く感じられる事でもある。Meadの体系は、たとえよしその全体が経験論＝学習説として位置づけられうるものであるにしろ、その内部に相当程度の合理論＝生得説を抱え込んだものであると筆者は考える。

以上、体系の「整合性」に関連して四点ほど述べたが、結果、体系の「不整合」を指摘するには至っていない。筆者の理解不足はもとよりの事だが、少なくともその若干の要因はMead的概念規定の「広さ」また「曖昧さ」にあるようにも思われる。

さて、ここまで、概念および体系に関してMeadの理論化を検討してきた。その過程で筆者は、この理論化の全体としての実用性を考察することを行わなかったし、又、Meadが詳細に論じてはいない(と思える)部分の詮索や批判も行わなかった。本章を通じて、筆者は可能な限りMeadの理論化を理解、再構成し、その内在的問題を提示しようとしたに過ぎない。さらに、その試みがもとより部分的なものである事は自明であろう。

これをもって、極めて不十分な形ながら、Meadの思考と説明の大枠を検討した本章を終えるが、結論的に幾つかの見解を提示しておきたい。

第一に、Meadの理論化は、個人の主体性と社会性をふたつながら保証しようとした試みである。一個人の主体的「創発」は、「話想宇宙」によって社会性を与えられ、共同体成員に分有されたものとなる。社会性の存する限りにおいて主体性が成立し、主体性が成立する限りにおいて社会性が革新されうる。原理的には、この体系は全く決定論的ではない。(「適応」という一元的価値を除いては。) ただし、この体系がworkableであるためには、集団成員全てに、相当に高い「行為」へのポテンシャルが要求さ

れている。個人は「創発」を生み出さねばならないのだ。紛れもなくこれは、変動期の社会の産んだ理論化であろう¹⁸¹⁾。

第二に、この体系は、その全体が極めて濃密な関係性によって満たされている。個人のどんな小さな「創発」も、その属する集団成員の全てに影響を与え、集団を変化させる。個人のどんな主観的「意識」も、必ずや「行為」^{アクト}として客観化される。この世界には、「逃げ場」がない。“心地よく秘密めいたところ”が存在しないのだ。「主体性」と「社会性」とが等しく保証されるかわりに、「私的」な領域^{プライベート}は極めて切りつめられている。この世界は、影もなく明るい。

第三に、この体系は、主体性と社会性とをともに保証しつつも、その全体がさらに「社会性」に包摂された体系である。主体性には常に「共同適応的」なる限定詞が冠される世界である。確かに Mead 的「適応」をたやすく否定し去るいわれはない。筆者は Mead 的な「自我」の強い一貫性^{コンシステンシー}には非常な反発をおぼえるものである。加えてその理論化が、「自我」に対して「発狂する自由」を与えない点は、決定的な欠陥であると考え。しかしながらなお、狂うためには生きていなくてはならない事は疑いえない。自己の「生」の認識を喪い、奪われ傷つき飢えて死ぬためにも生きていなくてはならない。Mead 的「適応」が認めうるのはただこの範囲においてのみである。それに依拠した社会「進化」の発想は、大衆規模でのロバクトミーとは言わずとも、性的^{たち}悪い幻想である事は間違いない。

第四に、その多くの難点にもかかわらず、Mead が〈生理〉レベルを重視した点は評価されるべきであろう。どれほど「社会的現実」が個人の意識を左右し、どれほど「個人的生活史」が個人の意向を無限に多様な陰翳で彩ろうとも、人間はヒトである事を止めはしない。少なくともこの1982年冬、人間はまだヒトである。このことは忘れられてはならない。

第五にそして最後に、この体系は「話想宇宙」と「態度」に関する理論化である。そこでは、^{サブスタンシャル}実体的な「社会」について、その構造、その体制、その階層、その「話想宇宙」との関係、といった内容は、体系的にはほとんど扱われていない。さらに個人の「心理」について、その「思考」の綾^{あや}、その「認識」の翳り、その「感情」の襞、そうした一切のものに関する体系的な扱いを持たぬ理論化である。主知主義的な視線がそれらを透視して、そこに「話想宇宙」と「態度」とに関する社会的適応の理論を見出したものである。そこでは「意識」「精神」「自我」の全てが「適応」に向けて動員される機能と考えられる。従って、誤解を恐れつつ敢えて奇矯な表現にうったえるならば、G. H. Mead が通常の意味では語らなかったもの——それこそが“Mind, Self, and Society”に他ならない。さらに加えて Mead が語らなかったものがある。すなわち「コミュニケーション」である。

次章で Mead の「コミュニケーション」論を考察し、本論の結論を提示する。

第三章 Mead におけるコミュニケーションの論理

前章において、Mead の社会心理学的な枠組の基本的な部分に関しては、これを提示したものと考える。

そこで本章では、前章の理解に依拠しつつ、Mead の思考における「コミュニケーション」論について検討する。しかし、すでに前章の末尾において触れた如く、Mead は通常いわゆる「コミュニケーション」論という形式では「コミュニケーション」について語っていない。前章の本文および注において、筆者は Mead からの引用を相当箇所で行ったが、「コミュニケーション」なる語が含まれる引用は努めてこれを避けた。そうして記述された筆者の Mead 理解が多少とも妥当的である限り、それはすなわち、Mead の理論化は「コミュニケーション」なる用語また概念を使用することなくして多少とも妥当的に提示しうるものであることを意味するだろう¹⁾。事実、Mead の社会心理学的な公刊論文においては、「コミュニケーション」なる用語が使用されることは極めて稀である。ところで他方、MSS においては、この用語は頻出するとさえ言ってよい。

この相違は何によるものなのか？ すなわち、Mead の「コミュニケーション」論それ自体を考察するに先行して、まず Mead における「コミュニケーション」論の認識が問われ、定位されねばならないのである。本章第 1 節は、こうした試みに充当される。

続く第 2 節において、このようにして定位された Mead の「コミュニケーション」論を本論第 I 章第 1 節において提示した問題関心にそくして評価検討し、本論全体の結論を提出する。さらに、本論の全体がもとより不完全な一試論の域にとどまるものである事は言うをまたない。従って、結論部分において筆者は、今後の展望と課題をも併せて提起することになるだろう。

第 1 節 Mead におけるコミュニケーションの認識と位置

「コミュニケーションとしてみる見方をとるからこそ、それがコミュニケーション現象としてとらえられるのである」[岡部, 1973 in 内川他編 1973, 9 頁]。

適切な見解であろう。それ故、ある著作が「コミュニケーション」概念を使用するとき、それがどのような「見方」から「コミュニケーション」として「とらえられ」ているのかが問われるべきであろう。本節第 1) 項では、Mead において「コミュニケーション」がどのように「とらえられ」ているのか、すなわち Mead における「コミュニケーション」の認識とはいかなるものなのかを考察し、続く第 2) 項において、そのような「コミュニケーション」概念が、Mead の体系の中でどのように位置を与えられてあるのかを検討する。

1) コミュニケーションの認識

本項において筆者はまず、Mead における「コミュニケーション」なる用語ないし概念の使用の実態を主としてその社会心理学的論文に拠って示し、続いて Mead における「コミュニケーション」の認識

について考察する。

a) 「コミュニケーション」概念の使用

Meadの社会心理学に関する公刊論文から‘communication’類似の用語²⁾を、その使用文脈とともに抜き出してみる³⁾。

1907年の動物知覚に関する論文（「操作」概念が導入されている論文）では、‘communication’類似の用語は使用されていない [Mead, 1907 in SW, p. 73-81].

1909年の論文には、これが「社会心理学」の位置を論じている他論者への批判論文であることもあって、数ヶ所に‘communication’類似の用語がみられる。

「思考は、Royce教授によれば……intercourseから生じたものとされ……」 [Mead, 1909 in SW, p. 95].

「ある人々は、communicationの^{メディアウム}と、それに依存する思考との中に、反省的意識それ自体の起源を見出す [しかしそれは正しくない]」 [ibid., p. 97].

「social intercourseが生じたのは個人が表現すべき^{イデア}観念と意味とを持っていたからだ……と仮定することはできない。」 [ibid., p. 97].

「意味についての意識はsocial intercommunicationを通して生じた」 [ibid., p. 98].

「人間のcommunicationの始まりは共同にあるのであって模倣にあるのではない」 [ibid., p. 101].

「ここに於いて我々はcommunicationと反省作用の^{メディアウム}媒介物を得る」 [ibid., p. 101].

「[自分の身振りに相手が身振りで] 反応することが、communicationのための……第一の基盤を与えた」 [ibid., p. 102].

この論文に見る限り、‘communication’類似語のMeadによる使用は必ずしも一貫してはいない。ただ、概して、‘communication’類似語は、i) それがいかにして生じたか、ii) それから何が生じたか、という発生論的文脈において扱われている。上の引用から、Mead自身の主張のみをまとめれば、「communicationの起源は共同、そして身振り言語にあり、そのcommunicationを通して意識が生じる」ということになろう。

1910年の、パラレリズム批判の論文は、「他者の態度を取ること」については相当の言及がみられるが、communication類似語は使用されていない [Mead, 1910a in SW, p. 105-113].

同1910年の、教育心理学的主題の論文には、「生徒と先生、また生徒間の、personal intercourse」 [Mead, 1910b in SW, p. 118-9] という表現が見られるのみである。

同1910年の、意味についての意識の発生を論じた論文では、次の表現がみられる。

「動物の……interplayでさえ、その動物たちを相互にen rapportさせ、……人間のintercourseに対応するような、相対的に独立した諸活動へ導く」 [Mead, 1910c in SW, p. 124]. ここでen rapport = intercourseなら、つまり「共鳴、交感、一致」 = 「精神的交流」であろう。そしてこれらは身振りの場を構成する、とされる [ibid., p. 124].

次に1912年の社会的意識のメカニズムについての論文には以下の表現がみられる。

「この身振りの場は……彼を、他者の、その時点ではただ徴候でしかない行為に対して en rapport させ、これら社会的諸活動に対して適切な本能的反作用を生じさせる」[Mead, 1912 in SW, p. 136]. この 'en rapport 交感' は、そのまま、「態度を取る」に置換できるだろう。

「social intercourse における、自我意識的な実際の自我とは……『Me』ないし『複数の Me』である」[ibid., p. 141]. これは、「対人 communication」で置換できるだろう。

1913 年の「社会的自我」に関する論文での用法は、

「他者の自我をひとつの自我として^{アウェア}覚識するという事が意味するのは、intercourse のために……我々が誰その役割を演じた、ということだ」[Mead, 1913 in SW, p. 146] となっており、この 'intercourse' を 'communication', 「役割云々」を「態度を取る」と置けば、「communication のために相手の態度を取る」となる。つまり、ここでは、「他者の態度を取る事」は、いわば「コミュニケーション」の根拠となり、両者は同一の事態を指すのではない。

1922 年の「有意味シンボル」を論じた論文には、'communication' 類似語は現れていない。ただし、次の表現がみとめられる。

「互いに相手の役割に自分を置くという、sympathetic placing を通して……そうでない限り非知性的な身振りは……^{シグニフィケーション}意味表示に内包される価値を得る」[Mead, 1922 in SW, p. 246]. つまり、「他者の態度を取る事」には 'sympathy 共感、同情' 的なものが含まれるということだろう。

1924-25 年の、Mead の公刊論文中最も重要なものとされる「自我の発生と社会統制」に関する論文には、しかし、「他者の態度を取る事」は頻出しても 'communication' 類似語は使用されていない。[Mead. 1924-25. SW. p. 267-293]

最後に、Whitehead [例えば 1925, 邦訳 1981 年] の影響を受け、「他者の態度を取る事」が「他者のパースペクティブに入る事」に変化する 1926b 年論文においては、次の用法がみられる。

「communication, 思考、そして実在的な意味を、自然の中に位置づけるような行動主義心理学のある局面……」[Mead, 1926b in SW, p. 307].

「各々のアリやハチの各パースペクティブから、このような [全体の] パースペクティブが成り立つ、というのは全くありえない。なぜならそこに communication が存在するどんな証拠もないからだ。communication は社会過程であり、その自然誌は、それが共同的諸活動から生じたことを示す。その内部では、[身振りが、] 社会的行為の相手がやるべき部分を実行させるための、相手への刺激となる。身振りが、それを行った個人に、それが相手の内部に引きおこすのと同じ反応を生じさせる傾向を持たぬ限り、それは十全な意味での communication とはならない。つまり、このとき刺激は有意味シンボルとはならない」[ibid., p. 312].

「communication 過程において、個人は彼自身であるより先に他者である」[ibid., p. 312].

「未開人は、魔術の儀式や祭式の形態での会話によって、その道具や武器と en rapport をたもつ」[ibid., p. 313].

「人間知性は communication の初期段階において生じる。そこでは生体は自らの中に他者の態度を生じさせ、それに^{アドレス}話しかけ、かくて自らに対する対象となり、換言すれば自我となる」[ibid., p. 313].

以上が、Meadの主要な社会心理学的論文における‘communication’類似語の使用例の全てである⁴⁾。みられる如く、次第にMeadの‘communication’概念は明確な形を整え、1926b年論文においてははっきりした形式で論じられる。

すなわち、Meadにおいて「コミュニケーション」とは、i) 社会過程の一部として、ii) 人間の共同行為の中から、iii) 「有意味シンボル」による普遍的な意味をもった「他者の態度を取る事」が発生することによって、成立するものである。換言すれば、「コミュニケーション」とは「有意味」な「態度取得」を根拠として成立する社会過程の一部である。そしてそれはまた、「意識」や「[反省的] 知能」を生じさせるものでもあった。

ところで、前章での理解では、「意識」や「反省的知能」の根拠は「他者の態度を取る事」にあった。そして「他者の態度を取る事」の根拠は「先在する社会過程」であった。すると、「コミュニケーション」はどこに位置をもつのか？ 要するに、「態度取得」と「コミュニケーション」とはどう関係しているのか？

さらに、「他者の態度を取る事」は、上の引用では、‘en rapport 交感’や‘sympathy 共感、同情」とも何がしか関係しているものらしい。そうすると、これら諸概念と「他者の態度を取る事」とはどう関係しているのか？

かくして、以上の公刊論文における用法比較から、「共感」(に表現を統一した)、「態度取得」、「コミュニケーション」の相互関係が問われるべきことになるだろう。

b) 「共感」、「態度取得」、および「コミュニケーション」

Meadが‘en rapport’というとき、また特に‘sympathy’というとき、これら概念の背後に、Theodor Lippsの「感情移入Einfühlungの原理」が想定されていたかどうかは定かでない。但し、MeadはPAおよびPPの草稿において、Lippsの「心理主義」的心理学また美学における「感情移入説」に対して、自らの「態度取得」説によるその説明を試みている。従って、Meadにおける「共感」類似の用語が、その背後に多少ともLipps的なものを想定していると考えても全く不自然というわけでもないだろう。それ故ここでは、Lipps的「感情移入」説とMeadによるその批判的理解について述べることで、「共感」的なものに対するMeadの立場を示すことにする⁵⁾。

Lippsの心理学では、知られる如く、三種類の対象すなわち物、自我、他の自我について、各々に対応する三種類の認識の源泉、すなわち感性的知覚、内部知覚(自我の反省的把捉)、感情移入、が想定され、この「感情移入」がより広義の認識原理として使用されている。「感情移入」とは「ある私とは違った対象に於ける私の客観化」一般である[Lipps, 1909, 邦訳310頁]。

それはある対象「に対して」の認識ではなく、或る対象「に於いて」の認識であり、この対象に於いて「自己」が「客観化」される、と主張される。「……私の定性をば直接に私とは違った物の定性として、この対象に属するものとして体験する。[これが]自己客観化……、最広義に於ける『感情移入』である」[同訳書、311頁。但し訳文を新字、新カナに変えた]。そしてさらに、「客観化された自分の自我、或いは自己客観化によって私に現れる他我は直接に客観的に現実的」であると主張される[同訳書、326

頁. かな使いを変更, 強調省略].

Lipps の理論において重要なことは, この「感情移入」が, 他の二種の認識の源泉とならんで, 「もはやそれ以上還元し得ない『本能』の事柄である」[同訳書, 327 頁. かな使いを変更, 圏点引用者]とされていることである. すなわち, 「心理主義」者 Lipps において「感情移入」は純粋に〈心理〉レベルでの概念として想定されている⁶⁾.

これに対して Mead は, これを「態度取得」説で置きかえることで, それを〈生理〉および〈社会的なものに「還元」しようとする.

Mead において「感情移入」は「物理的対象についての意識」との関連で検討されている. すなわち物理的対象が空間を占有する, ということは, 「対象に反作用するという[個人の側の]働き」のみならず, 「対象それ自体がその働きに与える抵抗についての経験」をも含むと言われる. 従って「このことは, 個人とその対象との同一視を意味する」[PA. p. 427]. そしてこのことは, 「両手の経験の……対象への転移 transfer ということでこれまで説明され, Lipps の, 感情移入の原理においてより広範な説明を与えられた」[ibid.]. しかしこの経験の転移という事実は, 「まずはじめに, 他者の反作用に対する適応という, 原初的な社会的態度において生じた」と仮定するのが適切である」と主張される [ibid., 圏点引用者].

すなわち Mead においては, すでに前章にみたように, 「他者の態度を取る事」によって個人は自我を析出させ, 対象としての自我に働きかける. そして「このメカニズムには, 個人による自我と他者との同一視が含まれている」[ibid.]. ここから「他者についての意識」が生じ, 続いて, 「物的対象についての意識」が生じてくる. つまり, Mead にあっては, まず「他者の態度を取る事」があり, そこから「他者についての意識」の「派生物」として, 「物的対象についての意識」が生じる. そこで, 「物質の内的性質を, 生体による, その働きかけの感覚の, その物体内部への投射とみなすのは誤ちである」[PP, p. 123] ということになる. つまり, 感覚は対象に投射され, それ「に於いて」意識されるのではなく, 「態度取得」過程を経て, 「対象についての意識」として生じるとされるのである.

かくして Lipps 的「感情移入」は, Mead にあっては, その「態度取得」による「他者についての意識」の成立ののちに, (つまり先行する社会関係を前提とし, その内部から), 生じてくる自我析出過程の一局面として位置づけられている.

以上の理解から, Mead における「共感」的なものは, あくまでその「態度取得」説の内部に, その一局面として与えられているものと考えられることができるだろう⁷⁾.

次に, では, 「態度取得」と「コミュニケーション」の関係はどうか?

すでに前章に示した通り(前章2節1)項, Mead の理論化の全体は一種の文明論的枠組の内部に与えられ, その中では, 「個体発生」は「系統発生」と類似の過程を通して発達・進化する. ヒトの「先史」において「自我」「言語」「思想宇宙」が創発してきた過程は, 注 140) に図式化して示した通りである. ところで, Mead のいう「コミュニケーション」とは「有意味シンボル」による「態度取得」にその根拠をもつものだった. つまり「コミュニケーション」は, 集団成員全てに対して同じものを意味する(「有意味」である)シグニフィカント^{シグニフィカント}ものであると想定されている. そしてそれが, ヒトの適応的進化の段階とし

ては、主として「言語」という「有意味シンボル」による「態度取得」が中心的役割を果たすようになる「適応の第二段階」（前章2節1）項において、先在する社会過程から創発したものであることはいうまでもない。

つまり、「系統発生」において、「コミュニケーション」という「社会過程」それ自体が先在する（主に「有意味」とは限らぬ「身振り」による）「社会過程」から創発してくるわけである。そこで、「コミュニケーション……が可能となる以前から、諸個人は社会過程内部で本質的な関係に入っていないわけではない」[MSS, p. 49, 圏点引用者]わけである⁸⁾。

同様のことが、幼児の「個体発生」的発達においても妥当する。但し、この場合には、通常、「話想宇宙」と「コミュニケーション」過程は先在している。そこで、幼児は、前章に述べた発達過程、つまり具体的他者→抽象的他者へと「態度取得」を続けることによって、その属する「話想宇宙」の「有意味シンボル体系」を「態度」に内在化させ、その所属集団における「普遍的意味性」を有する社会関係＝「コミュニケーション」過程に参加するようになる。Mead 的「コミュニケーション」においては、「シンボルは他者の中に生じさせるものを自分の中にも生じさせなくてはならない」[MSS, p. 149] という「普遍的」なものであるから、集団成員はこうした「コミュニケーション」過程に参加することで、その集団の「普遍的意味性」を獲得することになる。

かくして、「態度取得」は先在する「コミュニケーション」過程を根拠として幼児を社会化するが、その「コミュニケーション」過程じたい、成人の「(シンボリック) 態度取得」によって支えられているものである。従って、個人の「態度取得」は社会の「コミュニケーション」過程に依存し、逆も真である。(勿論、これは「有意味シンボル体系」の生じるに至った社会についてのみ、であるが。)

さて、およそ以上が「共感(的なもの)」、「態度取得」、「コミュニケーション」の関係である。要約すれば、「共感」は「態度取得」によって説明され(従って Mead の理論化内に必要ではなく)、個人の「態度取得」と社会の「コミュニケーション」過程は相互に依存しあう。或いはむしろ、同じひとつの過程の個人的／社会的側面である⁹⁾。

これが Mead における「コミュニケーション」の認識であると思われる。前章においてこの概念が要請されなかったのは、その記述において、「コミュニケーション」過程を「態度取得」、「話想宇宙の有意味シンボル体系」、「普遍的意味性」といった、いわばその構成部分を用いて記述したからに他ならない。

さて、それではこのような「コミュニケーション」概念は、Mead の理論化の中にどのようにして位置づけられてあるのだろうか。

2) 「社会的行動主義」とコミュニケーション

Mead の「社会的行動主義」は、前章において示したように、これをヒトの進化過程として時系列的に考察することも可能であるし、より個別的限定的な特定社会(例えば今世紀初頭の Chicago 市)に対応する理論化と考えることもできる。本項では、前者の「文明論」的アプローチではなく、後者に近い、いわば、a-historical な理論モデルとしての「社会的行動主義」について、その理論内部における「コ

コミュニケーション」概念の位置について検討する。ここまでの記述に明らかなように、Meadの「コミュニケーション」概念は、送り手-受け手の相互に、共通な反応が「有意味シンボル」によって喚起される、という極めて一意性の高い伝達過程として想定されている。

従って、まずその「客観的」局面について粗述したのち、「主観的」局面を考察する、という手続を踏むのが順当であろう。

a) コミュニケーションの「客観的」局面

Meadの理論化の内部では、ほとんどあらゆる事物が「客観的」であるか、又は少なくともそうなる可能性を持っている。前章に示した「社会的行動主義」の理論化（の筆者による理解）に依って、この理論化内部でのコミュニケーション過程をみてみよう。

〈社会化〉過程でのコミュニケーションの果たす機能についてはすでに述べた。新生児は、その「他者の態度を取る」能力により、はじめは具体的な、次に抽象的な「他者の態度を取る」ことによって、成人の構成する「有意味な」コミュニケーション過程に参入する。換言すれば、新生児は、先在する社会過程に媒介され、それに参与することによって、その社会過程の構成員となってゆく。この過程をへて、新生児の精神、自我、意識が発生することは言うまでもない。

次に、〈成人における無問題状況〉下での社会的相互作用においては、精神、自我は機能していないので、コミュニケーションは、「態度」に内在化された「有意味シンボル体系」による無意識的、習慣的な「共同的相互調整」の形式を取る。この過程は、必ずしも意識される要はない。いわば、〈生理的〉「態度」に内在化された「有意味シンボル」を媒介しての「態度の取り合い」である。但し、「問題状況」の発見を怠らない「I（反応）」が、この過程をチェックしているから、「無問題」の平衡の乱れが感知されるとき、それは「意識」される。

さらに、「有意味シンボル体系」が適応的に機能している限り、その「話想宇宙」内には、「他者についての共有された（有意味な）意味」、^{シンクス}「事物についての共有された（有意味な）意味」が含まれている。従って、この状況下では、「相手についての共通の反応を与えるシンボル」と^{シンクス}「事物についての共通の反応を与えるシンボル」とが共有されている。以上を通常のコミュニケーション論的な文脈に置換するならば、Meadの「コミュニケーション」論が、i) 状況、ii) 送り手⇄受け手、iii) 対象、iv) シンボル（相手について、又、対象について）をその部分として持つことは明らかであり、「対象知覚」と「対人認知」とを等しく含んでいることはさらに自明であろう。¹⁰⁾

そして次に、〈成人における問題状況〉下でのコミュニケーションがある。

これは、いま二者関係に限定して考えるとき、(i)一方のみが「問題状況」にある場合と、(ii)両者ともに「問題状況」にある場合に大別されよう。

第(i)の場合。この場合、一方（A）に行為の抑止が生じ、精神、自我が「思考」を始める。コミュニケーションは中断されるが、それは他方（B）の「問題状況」に直結はしない¹¹⁾。この間、Aの「思考」その他意識過程の進行はBにとって「接近」^{アクセス}不可能である。しかし、それが結果として生み出した「創

発」は、その「社会性」によって、それまで適応的だった「有意味シンボル体系」の表現をとって、社会的に表出される（発話される）ので、Aの「創発」はBにも「接近」可能となり、共有される。Bの「創発」は「話想宇宙」の「創発」をもたらす、結果、「無問題状況」の平衡が回復される。かくて、コミュニケーションは継続される、

第(ii)の場合、A、B、両者が「問題状況」に直面するので、コミュニケーションは完全に中断される。A、B両者の「問題状況」は各々に「私的」なものであるかも知れず、又、「共通の」ものでもありうる。いずれにせよ、両者のコミュニケーション行為は、各々の意識過程にシフトする。両者は相互の意識過程に「接近」不能である。この間に、両者の思考に「創発」が生じ、「発話」行為の形で、「社会性」を持って表出される。それが適応的であれば、「無問題」の平衡が回復される。Aの「創発」がBにとっても「適応的」であらぬ限り、平衡は回復されないから、そうした「共同適応的」な地点まで、この「問題解決」的コミュニケーションが続けられる。この過程は、両者の、いわば「独白の連続」（≒ズレの著しい相互主観的「コミュニケーション」）とは決してならない。なぜなら、両者はその「態度」に内在化された「有意味シンボル」をもって常に語るからであり、両者の「創発」が「社会性」を有する限り、それは、かつての「有意味シンボル体系」と新しい「有意味シンボル体系」とに共属するものであるが故である。

すなわち Mead においては、その「問題解決型（「議論」）コミュニケーションにおいても、i) その出発点で一意的なシンボル体系が共有され、ii) 私的「創発」がその「社会性」によって、一意的なシンボル体系を破壊することなく革新すると想定されているが故に、iii) コミュニケーションは常に「客観的」であり、iv) その結果は常に「共同適応的」な帰結をもたらすのである。そしてこの「共同適応」の平衡が達成されると、「無問題」のコミュニケーション過程が再開される。或いは、コミュニケーションは終了する。（そして、他の社会過程に移行する。）以上が、Mead の理論化における「コミュニケーション」論の概要である¹²⁾。

このようなコミュニケーション観は、Mead [1913, in SW, p. 148-149] に展開されている如く、Mead 自身の科学的客観主義の立場から要請されているものでもあった。つまり、上述の如きコミュニケーション過程が全く不可能であるならば、研究者の「私的」な「例外的発見」が、「先行仮説」との連続性を維持しつつもなおそれを革新するような「創発」へとつながることは有りえず、「科学的仮説」が「普遍性」を持って「有意味」に、研究者集団に共有されることもないだろう。すなわち、Mead の理論化は、それ自らによって自らを正当化しようとするものであるとも考えられよう。

以上、Mead の「社会的行動主義」における「コミュニケーション」論の「客観的」局面に関して粗述した。このような理論化の妥当性いかにについては、（すでに前章においても考察したが）、次節をまつこととし、次には、Mead における「コミュニケーション」の「主観的」局面について検討する。

b) コミュニケーションの「主観的」局面

Mead の理論化、とくにその「コミュニケーション」論の内部に、「主観的」局面を見出すことは困

難である。なぜなら Mead 的「コミュニケーション」にいう「シンボル」とは、常に「有意味」であり、従って成員の全てに同一の反応を生じさせるものとして想定されているからである。(そしてしかも、Mead の論に従うなら、そうでない限り、人間は自我を持ちえない、従って、反社会的、個人的でさえありえないからである。)

確かに、個人的意図の「主観性」(接近不可能性)を Mead は認めていた。しかし、それとても、必ずや行為として外部的に現れるものとされるのである。Mead はだから、古典的な「内観法」には同意しなかったが、「内観」を否定してはいない。すなわちそもそも Mead の理論化によれば、「内観によって明らかにされるものは内観法にたよらずに記述しうる」[Desmonde, op. cit., p. 57, 圏点引用者]のであり、「『観念』を進行中の行為の中の『内部的』な、又は『私的』な局面とみるならば、内観の自然主義理論が構成可能となる」[ibid., p. 57, 圏点引用者]わけである。

このような理論化のどこに、コミュニケーションの「主観的」局面を見出すことが可能であろうか。Mead の「自我」には常に必ず「私的」でありつづける領域は殆ど存在せず、それが行為として現れる限り、必ずや集団成員全てにとって共通の、「客観的」生理的反應を生じさせるものと考えられているのである。

しかし、このような強い「客観性」の主張は、Mead の理論化においては、ひとつの当為命題として与えられているものである事もまた事実である。そしてその限り、Mead の現実認識が適切であるならば、その事実命題と当為命題との間には隔差が存在している。Mead の「コミュニケーション」論に「主観的」局面を求めるなら、この点にそれを求めるのが妥当であろう。

例えば Mead の理論化においては、「コミュニケーション」は、「有意味シンボル」によって、送り手-受け手に同一の反応(意味)を生じさせるものとされている。従って、通常の「コミュニケーション」論の文脈からいえば、encoder-decoder の機能は相当に限定的なものと考えられている。或いは少なくとも、記号化とその翻訳された結果とは極めて高い一致度を持つものと想定されている。それ故、筆者は前章を通して、「解釈」といった用語をまず使用することなく Mead の体系を記述した。(その当否は、識者のご判断に待つしかないが。)

ところで、実際には Mead は、しばしば「解釈」という用語を使用している。例えば、

「我々が、自分自身の反応や反応傾向によって他者の身振りを解釈 interpret している事を意識しているという事実……」[Mead, 1910c in SW, p. 130, 圏点引用者].

「……社会的刺激のひとつの解釈としての、我々自身の態度についての意識……」[ibid., p. 131].

とくにこの 1910c 年論文には「解釈」という語が多用される(少なくとも五か所)のだが、「身振り」の「意味性」は、意識されずとも、一意的に「態度」に対して与えられる、という Mead の基本的な理論化からすれば、この「解釈」という発想はむしろ奇妙である。無論、「解釈」が介在しても、その「解釈」の仕方じたい、社会的に一意的に決定されているのであれば、Mead の全体としての理論化との間に不整合は生じないし、実際、そのように理解するのが適当であろう。Mead の理論化においては、「知覚」さえもが社会的に方向づけられるのであるから¹³⁾。

しかし、そうすると、この「解釈」過程(decoding)は、事実上、同一コードによる翻訳を意味する

ことになり、もはや、「解釈」の名に値しないものとなろう。確かに、個人の「例外発見」という「私的」な事態においては、「対象」に関する「解釈」が要請されているわけだから、この概念は、個人の主体性と創造性を保証するのに不可欠ではある。けれども、先に述べたように、Mead 的「コミュニケーション」が Mead 的「有意味シンボル」に拠っている限り、そこに「解釈」の必要はない。「身振りが解釈」されるべき必要は存在しない筈である。この不整合は何に由来するものなのか？ 筆者にはそれは、Mead における「現実認識」と「理想」との隔差に起因するもののように思われる。当為を含む理論化から帰結したもののようにみえる。

であるならば、このような「理論」と「現実」との隔差の狭間に、Mead におけるコミュニケーションの「主観的」側面を見出すことが可能であろう。Mead のコミュニケーション論は、Mead 自身にとってもひとつの当為、ひとつの理想として考えられていたのである。

同様の事実が、行為の再帰性に関する記述にも認められる。Mead の理論化にあっては、「自己の刺激に他者が反応するように自己も反応」しない限り自我は析出しない、という事になっている。そしてこの再帰性こそが「有意味シンボル」の、従って Mead 的「コミュニケーション」の根拠を与えるものである。

ところが Mead はいう。

「……個体は、自分の社会的刺激に対して、他個体が反応するのと同じように反応するか、またはその傾向にある」[Mead, 1922 in SW, p. 243, 圏点引用者].

「[自我が] 生じるのは、個人が他者のとるだろう態度を取り……それに対して自分でも反応し、ないし反応する傾向にあるときである」[ibid.].

このような、弱い表現への言い換えは何を意味するのか。もし、他者が反応するように自分も反応しない限り自我が生じえない、という Mead の主張を認めるならば、「他者が反応するように自分も反応する傾向にある」だけでは、自我は生じえない。同様に、「コミュニケーション」も「有意味」たり得なくなるはずではないのだろうか。（そしてその場合、「コミュニケーション」過程は極めて多義的な意味「解釈」を内包させるものとなろう。）すなわち Mead にあっては、「再帰性」の、二者間における機能的同一性の程度が、必ずしも明確に示されているわけではないのである。自我析出に要求される「再帰性」の機能的同一性は、時に完全に「機能的に同一」であることが求められ、又時には「同一である傾向にある」ことで満足されている。そして、この後者の場合にも自我析出が可能であると Mead が認めるなら、その場合のコミュニケーションは、多くの「主観的」局面を内在させるものとなるだろう。（そしてしかも、このことは Mead 自身の「コミュニケーション」論に反してしまう——シンボルは有意義たり得ない——のである。）

この点も、Mead における「現実認識」と「理想」との懸隔についての Mead の認識に起因するもののように思われてならない。（もし Mead の「理想」が多少とも「現実」に反映されてあったなら、このような「弱い主張への言い換え」は不要だったのではないか。）

であるならば、Mead の記述のこうした部分において、Mead の意識内での「コミュニケーション」についての、その「主観的」局面を見出すことも不可能ではないだろう。

Mead の表現は、時に、その事実認識の故にか、自らの理論化を裏ぎっているように感じられるのである¹⁴⁾。

さらに同様のことが、「私的」なものは常に必ず「社会的」に「共有」される、という主張にも当てはまる。例えば、集団内利害対立について Mead は述べている。

「注目は……主観的な場に移行してしまう。その結果、我々は相手の自我の用いる主観的表現を使って対立する目的を述べるし、道德問題は自他いずれかの自我を犠牲にする形をとるようになる」[Mead, 1913 in SW, p. 148, 圏点引用者]。

かくてここにも、Mead の「コミュニケーション」の「理想」に背反する事実が述べられている。コミュニケーションの「主観的」局面が記述されているといわざるを得ない。

たしかに、「社会的に条件づけられた有機体から、道徳的に自由でしかも責任のある行為者を導き出す事に Mead が成功したかどうかは疑わしい」[Pfuete, op. cit., p. 242] かも知れない。しかしながら、ここに示した記述部分が端的に示しているように、そして又 Mead の社会問題への積極的な関与が明白に代弁しているように（前章注 134）参照）、Mead の「理論」が「理想」を含みつつもなお「現実」との緊張関係のうちに構成されたものであったことは忘れられてはならないであろう。確かに Mead の理論化には、「どんな欺瞞も、どんな憎悪も、どんな冷淡さも存在しないように見える」[Duncan, 1962, p. 102] であろう。しかしながらなお、そうした一見極めてオプティミスティックな理論化が、背反する「現実」との深いかわりの内部から、四半世紀以上にわたって主張され続けた事実は強調されねばならない。

「理論」の「^{タイプ}型」は、そもそも研究者自身がすぐれて社会的存在なるが故に、しばしばその属する「現実」を反映する。存在被拘束性なる概念を導入して語る必要すらないほどに、「理論」にとって、「現実」に^{おもね}阿することはむしろ容易である。しかしそれは「理論」の名に値するものであろうか。

Mead の「コミュニケーション」論は、「理想」論でしかない。少なくとも今世紀の「現実」を正しく反映——或いは模写——した「理論」ではないことは明らかであろう。けれどもそれは、「現実」を睨み据えつつ主導された「理想」論的「理論」である。この点は評価されねばならない。「理論」とは恐らく、エレガントに構築された骨格標本の類であるよりはむしろ、内に骨格を納めつつも、メスで切開されれば鮮血を奔出させる類いの存在である筈だからである。さらに、そうであるがゆえにこそ、「理論」とは「常に仮説である」[MT, p. 285] と主張されうる存在でもあるのだろう。それは又、或る意味で、「理論」の社会的「健全性」の証であるとも言えないだろうか¹⁵⁾。

以上で本節を終える。次節では、Mead の「コミュニケーション」論を、本論第 I 章の問題関心にそくして検討し、本論全体の結論を提出する。

第2節 Meadにおける「コミュニケーション論」：評価と批判

Meadもまた、「人は意味の世界に生きている」と言った [Mead, 1926a, in SW, p. 294]. しかし Meadにとって、「人が見たり聞いたりするものは、その人が手に取って扱う筈のものを意味する」[ibid., 圏点引用者] のであった。本論のここまでの記述を通して、筆者は、Meadにおいて「意味」が、そして「コミュニケーション」が、「行為」との関連を通して「客観的」に理解しうるものとして捉えられている事を提示してきた。そのコミュニケーション論は、当否はさておき、全くの自然主義的客観主義の中から導出されたものであり、しかも「コミュニケーション」の「客観的」局面を大胆に強調するものであった事をも示した。

かくして定位された Mead の「コミュニケーション」論を、本節において筆者は、本論冒頭に示した問題関心にそくして評価・批判する。さらに、その「コミュニケーション」論が現在のコミュニケーション研究、マス・コミュニケーション研究に対して有するであろう意義を提示し、今後の筆者の展望と課題について触れる。

1) コミュニケーションの「交流」と「意味づけ」

本論冒頭の問題の項において、筆者は本論全体を貫く問題関心を示した。要約的に示せば以下の通りである。i) 同一事象を指示するのに二種の概念名称はいらない。ii) 「コミュニケーション」概念が「伝達」概念と区別されうるのは、前者が指示する事象は、後者が指示する事象に加えて、「共通性」の要件をも内包するが故である。iii) 「共通性」の要件は、「共通であるという相互主観的意識」という弱い形式と、「共通であるという客観的事実」という強い形式を持つ¹⁶⁾。iv) この前者は「伝達」概念にも内包されうるが、後者はただ「コミュニケーション」概念にのみ含まれうると考えられる。v) 従って、「伝達」概念から「コミュニケーション」概念が区別されうるためには、「コミュニケーション」概念は「二つの焦点」、すなわち「共通であるという相互主観的意識」および「共通であるという客観的事実」を有さねばならない。vi) この後者の「焦点」が与えられないとき、i)～vi) に従って、「コミュニケーション」概念は放棄されねばならない。同じく後者の「焦点」に対応する事象が存在し得ないと証明された場合にも、「コミュニケーション」概念は放棄されねばならない。vii) 「二つの焦点」の前者を「意味づけ」、後者を「交流」と言い換えるなら、「コミュニケーション」概念がそれ自体の権利において正当に使用されうるのは、ただ「コミュニケーション」概念に「交流」要件が包含されるか、現実の「コミュニケーション」に「交流」という事象の存在が認められる限りにおいてのみである。viii) 結論的に、「コミュニケーション研究者」が彼自身の権利において正当に「コミュニケーション研究者」たり得るのは、ただ、彼が「コミュニケーション」概念に「交流」要件を認めるか、現実の「コミュニケーション」に「交流」事象の存在を認めるかのいずれかの場合においてのみである。そうでない限り、彼は「コミュニケーション研究者」を正当に称しえない。ix) 補足的に、「交流」のみでは「意識されぬ「共通」であるという事実」の可能性を残すので、「コミュニケーション」概念が十全なものとなるのは、「交流」に加えて「意味づけ」要件が満たされた場合、すなわち「コミュニケーション」概念が「二つの焦点」をともに持つ場合のみである¹⁷⁾。x) 以上を認めるとき、「交流」要件はいかにして実証的に測定しう

るか？¹⁸⁾

「マス・コミュニケーション」および「コミュニケーション」の研究を志向する筆者にとっての、以上が本論における第一の問題関心であった。この観点からするとき、Meadの「コミュニケーション」論はどのように評価されるべきであろうか。

a) コミュニケーションの交流

Meadもまた、Platonicな夢を見た——ただし、より現実的リアリスティックな表現をもって。

「もし仮に二人の生体が、シャム双生児のように、各人の器官がお互いの中枢神経系に接続するようにして結合されていたなら、二人は同一の苦痛や快楽の対象を経験するであろう」と [Mead, 1922, in SW, p. 241]. それ故 Mead にとっては、「歯の痛みや味覚の快楽が一個人にとっての対象であるという理屈は、唯一人の人間しかいない部屋の中でマッチを擦っても、その炎はその人にとっての対象でしかないという理屈と本質的に同じ」 [ibid.] ものにすぎないのだった¹⁹⁾。それは単なる「接近可能性」の相達にすぎない。個人の「主観性」は、本質的なものではないのだった。「自我」はまず第一に社会的・客観的なものとして生じ、次第に「主観的」な「自我についての意識」として、「私的」になってゆくにすぎないのである。「意識はもはや孤立した島とはみなされない」 [Mead, 1910a in SW, p. 112] のである。

Mead は、およそ三つの段階で、「コミュニケーション」の「交流」を保証しようとしている。

まず第一に、生得的機能的同一性としての、特定の進化段階にあるヒトの全体的な生理的体制の存在が挙げられる。それは全てのヒトに共通のものである。その共通性によって、全てのヒトは基本的に同一の「接触経験」を体験し、通例、これと「遠距離経験」とを照合させることで、「接触」が与える「抵抗」の同一性を「核」として、対象の実在性を検証する。「接触経験」は「普遍的」であり、「客観的」である。これはいわば、〈生理〉レベルにおける「交流」の保証である。

さらに、生得的機能的同一性は、全てのヒトに対して、「他者の態度を取る」能力を保証している。この能力は、全てのヒトにとって同一の経験、つまり「他者」の「態度」に自らの「態度」を「調整」させることによる、「他者の態度」の「体験」を与える。彼は自分を知る（「自我についての意識」を生じさせる）以前に、他者を「知る」——すなわち他者の「態度」になる。この原初的な「他者経験」は、全てのヒトにとって同一であり、「客観的」である。人間は、環境に自らを調整 adjust させることでそれをコントロールする。同様に、ヒトは他者に自らを調整 adjust させる（より正確には、adjust してしまふ）ことで、「他者になる」。このあたり、Mead の想定する「個人」は極めて敏感な体性感覚に包まれている。それは、「個人」というよりはむしろ“原形質的”な感受性を具えた。まさに「裸形の bare」有機体を想わせる。この「他者の態度を取る」感受能力 sens-ability により、基本的な〈生理〉 = 〈社会〉レベルでの「交流」の可能性が保証されている。

さて第二に、このような生得的機能的同一性を基体として、獲得的機能的同一性が保証される。これが二段階に細分化されている。

いうまでもなく、主として身振り言語による具体的他者の単一・連続的な「態度取得」過程と、主と

して有意味シンボルによる抽象的他者の複合的な「態度取得」過程とである。

「具体的他者の態度取得」が可能にするものは、それによって「具体的他者」の「態度」を「取得」したとき、その「態度」状態から、その「他者」の「刺激」に対する「反応」様式を「知り」、他者の「態度」が逐次「移入」されてゆくことで、「自我」が対象化される事である。そしてこの「自我」は、他者の「態度」から自分の「身振り」を見る、つまり自己の刺激に対して他者と機能的に同一の反応をする。すなわち、「身振り」は自分に対して、他者に対してと同一の反応を生じさせる。自分の刺激に、相手と同一の影響を受ける。要するに、このとき相手と自分とはひとつの刺激に同一の反応を示す。二者間において、刺激は「客観的」である。様々な相手との間に、「客観的」な刺激が「対話的」に共有されている。つまり、各個別他者との間に〈生理〉＝〈社会〉レベルでの「交流」の成立が起きているわけである。

最後に、「抽象的他者の態度取得」が生じる。この段階では、主として言語中心の「有意味シンボル」によって、「話想宇宙」という先在するシンボル体系の「一般化された他者」の「態度」が取られる。「話想宇宙」の「有意味シンボル体系」は、集団成員全てに同一の〈生理〉的反応パターンを与える。従って、「無問題状況」下では個人は自分の言語的な刺激に対して集団成員全てと同一の反応をする。「話想宇宙」を媒介として、成員全てにとって刺激は同一の反応を生じさせる²⁰⁾。つまり、集団成員全てとの間に〈生理〉＝〈社会〉レベルでの「交流」が成立していることになる。集団内のどんな個人間においても、「共通であるという客観的事実」が成立しているというわけだ。

さらに、個人のどんな独自の「創発」も、必ず「話想宇宙」に同化吸収されて、成員全てに「客観的」に共有化される。

およそ以上が、Meadによるコミュニケーションの「交流」の保証である²¹⁾。では、この理論化は、どのように評価されるべきだろうか。

まず、本論の問題関心からみたときの、この理論化の肯定的評価を示す。

Meadの理論化の特徴は、すでに度々指摘してきたように、それが「態度」と「話想宇宙」という、〈生理〉＝〈社会〉レベルの関連を強調し、〈心理〉レベルは局在的機能とされ、実体視されていない、という点に求められる。

そのため、少なくとも「無問題状況」下においては、個人が〈心理〉レベルに有する「解釈」機能を介することなくして、〈生理〉的「態度」相互間に、直接的・一意的な「有意味シンボル」によるコミュニケーションの「交流」が可能となる。Meadにおけるコミュニケーションの「交流」とは、実体的なもの想定され、主観的・構成的な〈歪率〉を特徴的に有する〈心理〉的「意味解釈機構」を媒介しない、〈生理〉的「態度」間での「交流」である。そしてこの〈生理〉的「態度」に、通例コミュニケーション論が許容するよりはるかに多くの能力が与えられてるのである。

加えて、「話想宇宙」という、(内実は不明確ながら)極めて整合性の高いシンボル体系が〈社会〉レベルに存在し、この「話想宇宙」と「態度」との間に極めて強い一意対応的關係性が想定されている。従ってMead的な個人は「話想宇宙」との關係性が保たれる限り(共同適応的である限り)、その「態度」がどのようなコミュニケーション・メッセージを発しようとも、常にそれは「話想宇宙」を介して、(或

いは「一般化された他者」を——無問題状況下では——介して)、〈生理〉的「態度」間の「交流」と同じほど直接的・一意的に「交流」として与えられるのである。

ところで、「話想宇宙」の維持が可能となるのは、先在する社会過程の中から生じるに至ったヒトの「態度」という〈生理〉的体制に拠ってのことであるから、結局のところ、Mead 的「交流」の可能性保証とは、この〈生理〉的「態度」によって与えられているものに他ならない。各個人の〈生理〉＝〈社会〉的に決定される反応の機能的同一性により、「交流」の事実が可能となるとされるのである。

以上の事実は、「問題状況」においても基本的に変わりはない。「創発」が「社会性」を持つ限り、個人内の思考過程は、常に必ず「有意味」なものとして結果的に「態度」レベルにおいて「客観化」される。すなわちコミュニケーションの「交流」が与えられる。

要するに、Mead 的「交流」とは、その理論化における、極めて広い領域にわたる能力を与えられた「態度」概念によって、コミュニケーションの全ての範囲において保証されているものにすぎない。換言すれば、Mead 的な「態度」および「話想宇宙」に関する概念規定が現実的であると認められうる限りにおいて、Mead 的なコミュニケーションの「交流」は保証されるのである。そしてすでに述べたように、Mead 的な「態度」と「話想宇宙」に関する理論化は、たやすく否定しきれないかわりに、検証するのも困難である。いくつかの研究報告 [O' Toole & Dubin, 1968; Cottrell, 1971] は、Mead 的概念化の現実妥当性を支持しているようである。けれどもこれらの実験結果のみでは、Mead の全体的な理論化が検証されたとは到底いえない。しかも、この領域の研究は、もはや生理学ないし医学領域に接近している。或いは、ヒトに関する生物学が受け持つべき領域であろうと考えられる。

Mead の理論化は、好意的に評価すれば、不幸にもその全体を検証すべき測定技術の発達にはるかに先んじた理論化であった。現在なお、その全体を検証しうる測定技術が存在しているか否かは極めて疑わしいといわざるを得ない。そしておそらくこのことは、当の Mead 自身も承知していた事である。1909 年にすでに Mead は書いている。「[社会心理学と生理学的心理学の] どちらの場合にも、意識のある局面の生じる条件は、もう一方の科学によっても研究されねばならない。なぜなら……意識とは、それ自体とその過程の先行条件である諸対象・諸過程を前提としているからだ」と [Mead, 1909 in SW, p. 103]。

けれども学の進行は、必ずしも Mead 的な期待に沿うものではなかったようだ。Spencer の生物学主義への反動から出発したともいえるアメリカの社会学および心理学は、多く、それ自体において社会的なもの又心理的なものの分析と相互連関に注意を払い、主として、〈社会〉＝〈心理〉レベルの研究に力を注いできたといえるだろう²²⁾。この事は、例えば、Mead において「態度」類似語として使用された「役割」が、Linton の比較的固定的な「役割」、Turner による「役割立場 role-standpoint」[Turner, 1956, op. cit.] や「役割形成 role-making」[Turner, 1962, op. cit.] 概念の導入をへて、Goffman による「役割距離 role-distance」概念へと、すぐれて〈社会〉＝〈心理〉的な、特に〈心理〉レベルに焦点を合わせた方面へ移行してきた事実にも明らかである。そして、その事が、コミュニケーションの「意味づけ」ばかりを重視する現在の方向にもつながっているであろう事は容易に推察される。1909 年になされた Mead の提言が、その望んだ方向へ進んできたとは言い難いのではないか。

社会規範に支配される「過社会化された人間像」に対抗すべく現れたのは、自己の印象管理に忙殺される「過意識化された人間像」であったかのようにも思われる。そして、「過社会化」されているという意味では、後者も前者とさしたる相違はない。前者の意識は規範に支配される。後者の意識は規範から距離を置こうという一種の「規範」に支配される。

同様に又、マス・メディアに支配される「受動的個人」に対抗すべく現れたのは、マス・メディアを積極的に利用し選択する「認知的に能動的な個人」だった。マス・メディアを意識し、その存在を常に脳裡に置いて行為するという点では、両者間に大きな相違は存在しない。両者とも、等しく或る意味でマス・メディアに「支配」されている事に変わりはない。

Meadの「コミュニケーション」論は、検証されてはいないし、その現実妥当性も疑わしいものであろう。けれどもなお、それが現時点で評価しうるとすれば、その理論化において〈生理〉＝〈心理〉＝〈社会〉の三秩序のどれひとつとして切り捨てられることもなく、〈生理〉レベルを基体を持つ、「全体としての人間」が提出されている、という点を筆者は挙げる。Meadによるコミュニケーションの「交流」の保証は、ただ検証されぬ理論化の地位に止まっている。それは実証されたとはいえない。従ってそれは、本論の問題関心にそくしたとき、十分なものとはいえない。

しかしながらなお、その理論化が、全くの自然主義的客観主義の中から、大胆な「交流」の主張を行おうとした点は評価されなくてはならない。人間はただ「意味づけ」によってのみ相互作用し合い、「社会的現実」と「状況の定義」によってのみその「意識」を決定される「過意識的」な存在であるとは考えられないからである²³⁾。

b) コミュニケーションの「意味づけ」

Meadが描いた現実的なPlato的夢想は、より生々しい事実によって裏切られている。実在した「シャム双生児」は、しばしば全く対照的な性格を示し、'死が二人を分かたず'互いに反目しあい、絶えず外科手術による「分離」の可能性を求めた²⁴⁾。Fiedlerが伝えるところによれば、よく知られたChangとEngのシャム双生児の場合、前者が酒と濃い味の中国料理を好む「色好み」の男だったのに対して、後者は酒を一滴も飲まぬ菜食主義者でより慎重かつ博学だった[Fiedler, 1978, p. 204-205]。両者は口論を避けるために会話をしない習慣になった。両者は各々結婚して子供をもうけたが、別々の家庭を構え、三日度に各々の「自宅」を往復したという[ibid., p. 213]。同じく有名なVioletとDaisyのHilton「姉妹」の場合、「それを知るのが必要にならない限り、ひとりが何をしているのかをもう一人は知らないようにする事を習得した」というインタビュー回答が残っている[ibid., p. 206]。いずれの場合も、数回にわたり、外科手術による「分離」を求め、結局、反目し合いながらその生を終えた。

こうした事例は何よりもよく、近代人における「私的」な領域の必要性を例証するだろう²⁵⁾。確かにMeadの主張する如く、つながれた体は同一の感覚を経験しうるだろう²⁶⁾。しかしながら、個人が常にいつもそれを望むとは限らない。個人の個性性は、他者からの、そしておそらく「他」なる全てのものからの分離によってのみ完結するのである。加えて、使い古された逆説の示す通り、個人であるためには、常に、決定的に、他者を必要とする。人は多く、「でない」事の認識において自己の「である」

事を確認する。「である」事の即自的な認識は恐らく有り得ない。

Meadのコミュニケーション論は、「私的」な領域を個人に対して与えない。そこでは全てが「客観性」に満ちている。「主観的」要素がそれ自体で存続する可能性は、少なくとも理論構成からは、無限小である。同一の「Me」を共有する集団成員にとって、すべてのコミュニケーションは「交流」である。ただし、であるからといって、この全コミュニケーションが「意味づけ」でもある、すなわち十全な意味において「コミュニケーション」であるとは限らないだろう。「無問題状況」に典型的であるように、「習慣」は多く意識されないのである。従って、そこには「『意識されないコミュニケーション』の事実」があふれている、といえる。この事態は、現代のコミュニケーション論の多くが想定する「現実」、つまり「『意識されたコミュニケーション』の非真実」=「多元的無知」状況の氾濫、という事実認識のまさに逆をゆくものである。Meadの世界には「真なる理解」があふれている。ただ、誰もそれを取えず知ろうとしないのだ。なぜなら恐らく、この世界に住む人々には、それは自明の事であるからである。この点において、Meadのコミュニケーション論は、あまりにも見事に現代の多くのコミュニケーション論と点対照的な位相にある。前者は「意味づけ」を欠き、後者は「交流」を欠くのである。さらにいえば、前者は「疑惑」を欠き、後者は「信頼」を欠くのである。

確かにMeadの理論化においては、「Me」、「複数のMe」、「一般化された他者」の相互関係が不明瞭である。従ってそこに、コミュニケーションの「意味づけ」の存在を見出すことも可能であろう。しかしそれとても、「Me」が常に拡大、一般化してゆく、というMeadの「当為としての理論化」を許容する限り、単なる一時的なすれ違い、というに過ぎない。「問題状況」下の個人の「思考」過程についても同様のことがいえる。それは常に「Me」として共有化され、コミュニケーションの「交流」に入り込む。

物理学者Bridgmanは「自分が仲間にも侵されない一個の孤立した存在であると感じられる私的な^{フライヴェイト}領域の存在を自らに対して許した。そして概念の「操作的定義」を唱えた。

Meadには「操作的定義」を唱導する必要がなかった。かわりにMeadは、その全体系を挙げて、「私的」な領域が必ずや「公的」となり、「客観化」され、コミュニケーションの「交流」に入り込む事を主張したのである。従って、それはMead自身の科学的客観主義の立場から要請されたものでもあった訳である。

筆者は記述のこのあたりで、Meadの「コミュニケーション」論に対する筆者の問題関心からする評価を下してもよいだろうと考える。

筆者の第一の問題関心からするとき、(筆者の理解する)Meadの「コミュニケーション」論は、不十分なものである。それは現時点で実証されておらず、その検証は、筆者の手の届く領域にはまかされていない。さらに、たとえそれが検証されうるとしても、それに要されるだろう期間は相当のものであるだろう。

加えて、Meadの理論化がたとえよし現実に適合的であると判定されたとしても、それが社会に対して持つであろう意味は、あまりポジティブなものとは予想されない。いかに「コミュニケーション」の「交流」の事実が実証的に保証されようとも、人々がコミュニケーションを「意味づけ」としてより大

きく捉え続けるであろう事はまず間違いない。社会から「疑惑」が消え去る事など有り得ない。人は知る事を望む。しかし知られる事はこれを恐れるのである。「私的」な領域は、近代人の存在の多くの部分を占めている。人は他からの「切断」によって生きている。Meadの理論化が受容されるには、社会それ自体が変化しなくてはならない。Meadの理論化は「変革のための理論」である。それは近代人の個人的意識に正面から対立している。この理論化が、現在に至る半世紀の間、様々な議論を呼び起こしてきたのも無理からぬことであろう。その「自我」、「態度」、「コミュニケーション」の認識はあまりに異形である。その意味では、この理論化は、まだ死んではいない。

以上がおおよそ、筆者の結論の「公式見解」部分である。

「非公式見解」としては、筆者はこの理論化の「コミュニケーション」にかかわる基本的な部分を受容したい「気分」にある。この理論化は、ヒトの〈生理〉レベルを重視して、そこにコミュニケーションの「交流」の基体を求めている。こうした方向性は、たとえよしそれが「実証的」たりえないものであるにもせよ、少なくとも〈心理〉＝〈社会〉レベルに偏向したコミュニケーション論の欠を補うものではなかろうか、と考える。おそらく、正当な敵意は適切な理解を前提とし、不合意は合意に関する同意を必要とし、そして憎悪は愛の妥当な定義から始まるものだろう²⁷⁾。かつて精神医学者 Sullivan は言った、全ての相違を認めたくて、なお、人間は他の何であるよりも先ず第一に、人間である、と。MeadとSullivanの理論形式の類似はしばしば指摘されるところであるが、両者の決定的な類似は、おそらくこうした基底認識にある。Sullivanの用語でいえば、〈共人間の有効妥当性確認 consensual validation²⁸⁾〉である。筆者は「話せばわかる」とは毛頭考えない。しかし、「そもそもわからないのが話だ」とはさらに考えない。

「信頼」を失うとき、「懐疑」は「疑惑」に墮す。Meadの「コミュニケーション」論が現代の多くのコミュニケーション論に対して持つ価値は、おそらくこの一点にあるだろうと思われる。コミュニケーションの「交流」は、全く有り得ない可能性であるわけではない。それはヒトの「態度」において、少なくともひとつの実証されていない理論的可能性として与えられている。この地点まで、筆者はMeadの理論化を評価してよいだろうと考える。

以上、筆者の問題関心の第一のものにそくして、Meadの「コミュニケーション」論を検討した。次項では、問題関心の第二のものにそくして、同様の検討を行う。

2) コミュニケーションの「根拠」と「適用」

本論冒頭の同題の項において、筆者は本論における第二の問題関心を示した。要約的に示せば以下の通りである。i) コミュニケーションは社会過程の一部である。ii) 従ってそれは、それによって何かを説明するとともに、それ自体説明されることが要求される（つまり、「基礎論」と「応用論」をもつ）。iii) 第一の問題関心が適切であれば、コミュニケーションは「交流」として又「意味づけ」として捉えられる。iv) 従って、この両者について、「根拠」と「適用」を問う必要がある。

以上の問題関心にそくしたとき、Meadの「コミュニケーション」論はどのように理解しうるか。これが本項で検討されるべき点である。

しかし、すでにここまでに至る記述において、筆者は相当程度この問題に言及してきている。Meadの理論化を提示するという手続き自体、いかにしてコミュニケーションが可能となり、それがどのような機能を果たすのか、という事の記述を行う事に他ならないからである。従って、本項では「問題関心」それ自体からする論述は必要最小限にとどめ、むしろ Mead 的発想の現実的「応用」について、従って主として今後の課題と展望を中心として論を進めたい。さらに、本項の末尾においては、本論全体に関連しての、筆者の今後の問題と方向とを提出する。

a) 「交流」の「根拠」と「適用」

Mead の「コミュニケーション」論は、「交流」を大胆に主張する。その「根拠」は、すでに示してきたように、i) 〈生理〉レベルでの人間の「態度」の生得的機能的同一性において先ず与えられ、ii) 次いで、〈生理〉=〈社会〉レベルでの、「具体的／抽象的態度取得」における「有意味シンボル」の再帰的性格に基づく「反応」の獲得的機能的同一性において保証されている。その「適用」は、系統発生的かつ個体発生的な意味での、人間の「精神」、「自我」、「意識」そして「社会」の発生と発達過程の説明について行われ、さらに、「理想的社会」建設へ向けての指導原理ともなっている。以上が Mead における「交流」の「根拠」と「適用」である。

このような Mead のコミュニケーションの「交流」の認識が、実際的なコミュニケーション研究に対して与えるものは何か？

言うまでもなく、Noelle-Neumann 的に表現すれば、「影響力の強いマス・メディア」という概念化の復活である。Mead 的「無問題状況」下では、情報への能動的な選択や接近は生じない。「問題状況」を生起させぬ限り、メディア内容は〈電流のように〉個人の内部に流入する。そして諸個人の「Me」を変化させるだろう。この変化は、それが「問題状況」的とならないという条件下のものだから、ごくゆっくりとした変化であろう。しかも、その変化は「意識」されない²⁹⁾。「問題状況」が生じたとき、はじめて長期累積的なマス・メディアの影響が「オヴァート・アクション外部的行為」に現れる。それから、諸個人は自己の行動変容を「意識」するのである。Mead 的「問題状況／無問題状況」の区別は余りに大雑把であり、その限り、より精密化されねばならぬものだったが、しかし、「無問題」の「習慣」的「無意識」的「合理論」的な認知過程は、上の如き〈弾丸理論の部分的（あくまで部分的）復活〉を可能とし、また要請する。Mead の理論化は、第 I 章に触れた Gerbner グループの研究に支持的背景を与え、又、例えば Sears & Freedman の「選択接触」への疑義 [Sears & Freedman, 1967] に根拠を与えるだろう。

「マス・メディアの偏在」が主張され、「情報環境」の成立が論じられてすでに久しい。これを換言すれば、或る意味で、「マス・メディア」は「問題状況」的ではなくなっている、という事になるだろう。従って、特殊な事態が生じない限り「マス・メディア内容」が諸個人の「意識」や「思考」機能を生じさせる事もない、というわけだ。そこで生じているのは無関心な「単なる接触 mere exposure」だ、という事になる。（対人神経症患者を別にして、一体誰が唾液を嚥下することに「問題状況」を見出すだろうか。或いは情報を「呼吸」する事に。）勿論、上にいう「特殊な事態が生じない限り」という限定の内実を明らかにしなくてはならない。そして、それは Mead 的な「問題／無問題」の区別、つまり「行

為の中断」＝「問題発生」という大雑把な分類では不可能な事かも知れない。加えて、Mead 的「態度」概念をそのまま実証研究に持ち込むには難があるだろう。問題のこうした局面は、また別の理論、別の方法で補われなくてはならない。それは自明である³⁰⁾。

それでもなお、Mead の理論化が、次の事を（マス）コミュニケーション研究に対して示唆しているのは間違いない。すなわち「マス・メディアは人間行動に対して強い影響力を持つ」という基本的発想は妥当なものである、と。Mead の理論化と、いわゆる「情報環境論」とから導かれる推測は、メディアは人間の行動（認知のみに限らず）に直接に影響しうる、という認識に他ならないのである³¹⁾。

さらに、「情報の環境化（マス・メディアの「無問題状況」化）」とは、すなわち、「話想宇宙」の「有意味シンボル体系」に「マス・メディア内容」が組み込まれてしまっている事実を予想させる。つまり「話想宇宙」のマス・メディア化という事態、さらに、諸個人の〈生理〉的「態度」の「Me」部分のマス・メディア化という可能性を示している³²⁾。この後者の「可能性」は、勿論、Mead 的諸概念を仮に認めた場合の話に過ぎないが、しかし単なる空想としても、戦慄すべきイメージを喚起するものである。いまや、幼児の「不定形な態度」は、「マス・メディア内容の移入によって組織化される」わけである。さらにイメージを喚起するべく話を続けば、諸個人の「中枢神経系を中心とする全体的な体制」が「マス・メディア内容」によって形成されるのである。メディアはそれでも「無効果」であり、或いは単に個人の「認知枠」をセッティングするに過ぎない「多くの介在要因によってその直接的影響を阻止される」存在なのであろうか？ M. McLuhan の亡霊が、十年前とはやや異なる不吉な相貌をたたえて再流行したのが、まさにこの1982年という時代においてであった事は、単なる「大衆の気紛れな選好」によるものに過ぎないのだろうか？

勿論筆者は、かつての「大衆社会論的マスコミ論」と同様の過ちを繰り返そうとは思わない。Mead の理論化からいっても、「態度」が組織化されるのは、まず第一に、具体的他者との間の相互的「態度取得」によってである。そして Gerhard Maletzke が指摘したように、「マス・コミュニケーションにおいては、そうした役割交換はない」[Maletzke, op. cit., 邦訳186頁]のである。さらに、「物的対象（例えばメディア）についての意識」は、「他者についての意識」から派生的に生じる。こうした指摘は、先述のややヒステリックな論調を緩和するだろう³³⁾。

であるからといって、現代社会の「話想宇宙」が多く「マス・メディア内容」を同化吸収している事実を忘れる事も危険である。いまや人々は多く「マス・メディア言語」をもってコミュニケーションの「意味づけ」を行っているといえる。つまりメディア言語は少なくとも人々の相互主観的「合意」の手段となっている。このような「メディア言語」を同化吸収するに至った「話想宇宙」の構造が解明される必要がある。

表現をかえるなら、特定情報環境内のあらゆるメディアを貫通しての、マクロ・レベルでの内容分析の試みが要請されている、という事だ。「無問題」として受け入れられている taken for granted 「話想宇宙」の構造は、しかし、Mead が想定した（或いは想定しようとした）程には無害で「理想」的なものとは限らないからである。

さらに Mead 的発想をこの領域に「適用」してみる。所与の社会集団に共有された或る「Me」が「共

同適応的」であるならば、当該集団はその「Me」に従っていわば自動的に行為する。それは「問題状況」が「Me」を改革するまで続行される。ここで、当該「Me」に、特定マス・メディア内容の指令的情報に対して無差別的にその指令を実行するような内容が含まれていたとする。このとき、「無問題」の均衡が破られない限りで、当該指令的情報は自動的に実行され続けるだろう。いま仮に、一例として、タレント歌手Aの「ファン・クラブ」集団を想定し、その「共同適応的」な「Me」内部に無差別的指令実行指令「歌手Aに関連するメディア全てに接触せよ」が含まれるとする。すると、成員全ては、おそらく第一にラジオ・TVの歌謡番組全てのサーチからはじめて、当該歌手の出演するあらゆるメディアに接触するだろう。この時点で、当該「Me」が「共同適応的」であり続けていれば、その「ファン・クラブ」成員Bによる「個人的創発」＝〈歌手Aは歌手Cと「デキて」いるらしい〉によって、この「創発」が「共同適応的」である限り、過去の「Me」における無差別的指令実行指令の内容はさらに「一般化」し、「歌手AおよびCに関連するメディア全てに接触せよ」が自動的に実行される。そしてさらに成員Dによる「創発」が、云々。

ここで「共同適応的」なる形容の内実が、「連帯を求める孤独な疎外された精神」に求められるのか、「より多くの当該メディアに接触する事がファン・クラブ内での地位の上昇に、従ってクラブ代表として歌手Aに直接接触する可能性を高める事に、つながるといふ『実利』的動機」に求められるのかは問わない。重要なのは、上のやや冗談めいた（必ずしも冗談ではないから恐ろしい）「価値一般化過程」において、それに接触する事が実際上何らの主体的な「満足」をも保証しないようなメディア内容までが、「利用」されるに至る、という点である。しかもこれは、「集団圧力」や「社会関係」への受動的な服従の結果としてではなく、「意識」される事なく自動的に〈臨界点〉＝「共同適応性の喪失」にまで至る。「不満」なり「剥奪」なりの「意識」は、その後からはじめて生じる³⁴⁾。

以上から、一般性の高い価値が「Me」として共有された集団成員は、「満足」と無関係にメディアを「利用」する。（それは、成員の「認知」や「行動」には影響を与えない——「共同適応的」な「Me」とはならない——内容のものであるかも知れない。けれども、ビデオ・リサーチのミノルメーターがそんなことに無頓着である事はいうまでもない。）

言うまでもなく、上の「思考実験」は必ずしも Mead 的な理論化に忠実であるとはいえない（例えば「無差別的指令実行指令」の想定）し、しかも現実を必ずしも良く反映しない（例えば、「不満」は全てが終わったのちはじめて「意識」されるという想定）かも知れない³⁵⁾。しかしながら、上の如き事態は必ずしも非現実的とは見えないであろう。筆者の目的は、Mead 的理論化が、メディア接触行動に対してどのような説明を与えるかを例示する事であった。上の例では、「意識されない接触」という可能性を提示したわけである。

従って、この「意識されない接触」が、現実に存在するのか、或いはさらに、「無問題」的なものとなった「情報環境」内部のどの部分がどのカテゴリーの人々に対して、「意識的／無意識的な接触」を行わせているのか、といった条件がより特定化されねばならない。

勿論筆者は、上に例示した如き可能性がただちにしかも容易に計測されうると考えてはいない。筆者は、（筆者の理解する）Mead の理論化から、どのような視点が得られるかを示唆しようと試みたにす

ぎない。

しかしながらここに示した発想は、今後より実証的な形で追求されてゆくべき筆者の課題また展望の一部を成すであろう事も事実である。

b) 「意味づけ」の「根拠」と「適用」

Meadの「コミュニケーション」論においては、少なくとも理論上は、「意味づけ」の事態が生じる局面はごく限定されている。それが生じるのは「問題状況」下においてであり、これに二種類が区別される。

- i) 同一「Me」を持つ集団成員の一人ないし数人が「私的」に「問題」を「発見」し、「思考」機能を働かせているとき、この「意識内容」は他者からは「接近」できないから、このとき「伝達」が生じるとすれば、それは「意味づけ」以上では有り得ない。「意味づけ」が成立するのは、相互的に「自発的注目」を向け合っている場合である。ただし、「問題」が「共同適応的」に「解決」されたときには、「意味づけ」は「有意味シンボル」の「客観的」性格によって、直ちに「交流」に移行する。
- ii) 相異なる「Me」を持つ複数の集団成員が出会った場合、「問題状況」が生じ、この際、両集団の成員間に相互的な「自然的注目」が生じれば、コミュニケーションの「意味づけ」が成立する。ただし、「Me」は常に拡大、一般化してゆくから、この「問題状況」は何らかの「創発」により「解決」され、より一般的な新しい「Me」が複数の集団を合一させる。複数のパースペクティブが一つに融合する。このとき、「意味づけ」は「交流」に移行する。Mead的「問題状況／無問題状況」の区別を受け入れる限り、「コミュニケーション」が十全の意味でコミュニケーションである（二つの焦点をともに持つ）のは、「無問題状況」下で、「I（反応）」がその平衡の乱れを感知している場合（「意識」機能が働く）に限られる。このとき「無問題」的な他者との間には、「交流」と「意味づけ」が成立し（コミュニケーションが成立し）、「問題」的な他者との間には「意味づけ」が成立している。

以上が、コミュニケーションの「意味づけ」（およびコミュニケーション）が生じる状況である。ここから、Meadにおいて、「意味づけ」の「根拠」は、i) 諸個人が「問題状況」に対して独自に（或いは「共同適応的」な限りで「合理的」に³⁶⁾それを「解決」しようとする「主体性」において第一に与えられ、ii) なかでも、他者との間に相互的な「自発的注目」が生じるという事態において明確に、与えられている。その「適用」は、i) それによって「問題状況」下での「意識」された予測的行為（例えば、集団Aの成員：「へるぷ、というのは救助を求めているらしい」、集団Bの成員：“Ima-Iku-Zou'may be the word for him to help me.”）が可能となり、ii) さらに、それによって「問題解決」がもたらされ、「Me」がさらに拡大化、普遍化し、iii) 最終的に「理想的社会」が成立する、という範囲にまで行われる。

この「根拠」と「適用」は、「解釈」、「思考」、「能動的認知」を含み、典型的に相互作用論的なプロセスである。ただし、Meadの理論化内では、それはそれが常態であるとは想定されていない。

さて、それではこのような Mead 的発想はどのように実際のコミュニケーション研究に生かされるべきか？

端的に言って、Mead 理論のこの局面は、すぐれて相互作用論類似のものであるだけに、まず考えられるのは、相互作用論的手法のコミュニケーション過程への適用、という事であろう。例えば、Shibutani の流言研究は、主として個別事例^{ケース}の分析に基づく、〈流言の生態学〉と呼べるような内容のものであり、「流言」を「問題状況（例えば災害）」下における人々の「共同適応的」な行為のために要求される非公式な経路でのニュース、'即興のニュース Improvised News' であると把握するすぐれて相互作用論的なコミュニケーション論が展開されている [Shibutani, 1966]。さらにこの研究で興味深いのは、通例、それほど「危機的」ならぬ「状況」を想定して行われている「情報の流れ」研究（例えば *Personal Influence*, 1955）に対して、その相互作用論的な解釈と拡張を行っている部分が多くみられることである³⁷⁾。この Shibutani の研究それ自体は、実質的には、'机上の'^{ケース}事例分析に終わっているが、この方向を推し進めて、より「現象へ」接近したマスコミないしコミュニケーション過程へのアプローチを考えることも可能であろう。

無論すでに触れたように、相互作用論の方法論は「主観的」に流れるきらいがある。けれども特に Chicago 学派に顕著だった「現場」の意識は忘れられてはならないであろう。マスコミ研究に関連して言えば、相互作用論の方法ないし基本的姿勢は、例えば限定された一地域内での受け手研究や、或いは制作過程の研究に対して効果的であろうと思われる。

次に、Mead 的「Me」ないし「話想宇宙」を複数認めてしまうなら、これは、第 I 章に触れた「多元的無知」のアグリゲートな研究に対応するものであろう。要するに、相異なる「話想宇宙」に属する人々が、集団として、相手集団をどのように自己集団との関連で評価した「意味づけ」を行っているか、を問う方向である。一例として、過去に、ある特定化しうる意図のもとに製作されたフィルムを、「広告制作者」の「話想宇宙」に属する人々と、「主婦」の「話想宇宙」に属する人々に見せ、各々について、i) 質問に対する自己の評価、ii) 質問に対して相手の「話想宇宙」に属する人ならどう評価するかの推測、を行わせ、これらを、フィルムそれ自体の意図を中立点として、比較する。各々の「話想宇宙」内の成員の評価の分散が小さい程、当該「話想宇宙」の統合度は高く、この条件が満たされているときに、両「話想宇宙」間の「多元的無知」その他が検出しうるだろう。この例では、さらに多く操作上の問題が存在するが、基本的な発想としては、いわゆる送り手-受け手関係を実証的に測定するものとして、有効ではなかろうか。

勿論いうまでもなく、Mead 的発想にあくまで忠実であろうとすれば、上の例では「フィルムへの接触と質問への回答」が「問題状況」からの「創発」を生じさせるかも知れず、測定には限界があることになる。けれども、そもそも複数の「話想宇宙」の存在を認めている、つまり「創発」の「社会性」が不完全であるとの仮定をおいているのであるから、この限界はすでに仮定に含まれているものにすぎないであろう。いずれにせよ、完全に Mead 的な発想を「適用」することは極めて困難である。現時点で

は、例えば上例の如き、その部分的撰取いがいに方法はないと思われる。

そして、それでもなお、このような「話想宇宙」相互の「意味づけ」の研究は、(さきに述べた「話想宇宙」内部の構造の研究とともに)、マスコミおよびコミュニケーション研究の今後の展開に対して有効であると考えられるのである。それは又同時に、筆者自身の今後の展望にもつながるものである事は、再度強調しておく必要もないであろう。

以上、本項では主として「応用」に重点を置いて記述を進めてきた。これをもって、未熟極まりない形式ながら、本論を終えることになる。

最後にいわば最終的な結論として、本論を通じて筆者に残された問題について触れる。

およそ三点の問題が、現時点での筆者に残されていると考える。

第一に、Meadの理論化それ自体に対する筆者の理解は甚だ不十分であると正直に告白せざるを得ない。本論では、Meadを理解する立場を、基本的に「客観主義的」なものと自己限定して始めたわけだが、その内部でも、論じ尽くしていない問題、理解し得ていないMeadの文章は、余りに多い。また、筆者が一応は妥当的とみなした理解も、おそらくは浅薄であったり全くの誤解であったりするであろう。殊に、Meadの思考の哲学的部分に関しては、筆者は本論で一切触れていないといえるだろう。本論執筆の準備段階において、筆者は、Meadの主要な社会心理学関係の公刊論文の全文を忠実に日本語に置き換える作業を通じてのMead理解から始めたが、意味のとれないセンテンスの数は考えたくもない程度である。しかしながらその過程で、いくつかのセンテンスの「理解(誤解?)」に達した時の奇妙な興奮は得がたいものであった。今後も筆者は、なお意味不明のセンテンスを「理解」する事に同じ興奮を感じ続けるだろうと思う。いずれにせよ、筆者のMead理解はまだ開始されたばかりである。時間の許す限り、その作業は続けられるだろう。

第二に、筆者はMeadの論文を読み進む過程で、前世紀末から今世紀初頭の、いわばアメリカ的な心理学および社会学の成立期に登場する多くの〈古くさい〉Big Nameたちに関心を抱いた。(そのごく部分的なものは、本論にも主として「注」の形で反映しているだろう。)「学史」の記述は「大家」がやるものと相場が決まっている。筆者にそんな大望はない。けれども100年近く昔の文章を、その初出誌のままで読む事は、一種の「タイムマシン経験」であった。(筆者はどうも、MessageよりはMediumに感応する型の間人であるらしい。)この方向での興味は、伏在的な形で今後も継続してゆくだろうと思われる。Mead的に言えば、歴史は絶えず再構成されるべきものである。そしてこの「再構成」の作業は少なからず魅力的なものでもあるようだ。この作業も、わずかずつでも進めたいと考えている。

第三に、結果として本論では、筆者はその問題関心を不十分なままに残している。マス・コミュニケーションおよびコミュニケーションの「主観的」位相と「客観的」位相に関する議論は、今後も大いに筆者を悩ませてくれるだろう。本論のこの項において、筆者は不十分な形ながら、この問題に関連する実証的な方向を提出した。こうした提起が妥当的であるか筆者にはおぼつかない。しかし、そうした基本的な発想を踏まえて、マス・コミュニケーションおよびコミュニケーションの実証的研究を展開したい。そもそも「序」に記した通り、本論の全体は、筆者の今後のそうした方向への土台となるべきものとして始められた。結果的にその目的が十分果たせたとはい底言いがたいが、一定の「希望」は持て

たように思う。そして実質六ヶ月にわたるテキストへの自閉は、筆者の Mead 的「態度」に、「社会過程」への「参与」を渴望させている。筆者はいま、「現場」に飢えている。本論に提起した方向性が妥当なものかは疑問である。しかし、多少ともそうした方向を意識しつつ、筆者はマス・コミュニケーションとコミュニケーションの「現場」に立ち向かいたいと思う。

以上が、本論の最終的な「今後の課題」に関する言明である。そしてそれが「今後の」ものである限り、それが「最終的」なものである筈がない。本論が「科学」の名に値するか否かは大いに疑問とされるべきものではあるが、Mead からの以下の再引用をもって、本論の本文部分の結びとする。

「科学のどんな言明も、最終的ではない」

[George Herbert Mead, *Movements of Thought in the Nineteenth Century*, p. 285.]

結

コミュニケーションは、「共通であるという相互主観的意識」であり、かつ、「共通であるという客観的事実」である。

以上が、本論を通じて筆者が確認したいと願った命題であった。George Herbert Meadの思考は、筆者の理解するところでは、この命題の後半部分を全くの自然主義的理論化の中から主張しようとしたものであった。それは現時点で実証されるに至ってははいないひとつの可能性である。しかしその可能性の持つ意味は大きいだろう。筆者が本論を通して行いえたのは、ただその可能性を強調するという一事にすぎなかったといえる。

本論はもとより一試論であり、従って「結」を付される性格のものではない。しかしながら、「序」を持ちながら「結」を欠くのはどうにもおさまりが悪い。この記述部分は、「結」という名の「蛇足」である。

「社会的現実」という共同管理された意識が、「客観性」と呼ばれる領域の多くを占有しているであろう事は筆者も重々承知している。しかしながら、存在の全てが常に必ず、「知られた存在」であり、その限り常に個人に特個的な意識でしかないのなら、もはやどこにも「コミュニケーション」の存在証明は求められないのではないか。

我々は何故これほどにも「コミュニケーション」を語り続けるのか。それが失われていると意識されるがゆえだろう。世界はその全てを挙げて、「コミュニケーション」を希求している。そうして差し伸べられる怯えた指は、いつも狭間の虚空をまさぐるばかりだ。人は不安な世界の中で、ただ〈認知的自由〉という名の頭の中の世界にのみ享楽を見出す。生身の人間はどこへ消えたのか。学者が何と呼ぼうが、「スポーツ」は「健康管理」の「手段」として、「フィットネスへの熱狂」を呼ぶにすぎない。

George Herbert Meadは、そしてHarry Stack Sullivanは、同じく不安な時代に、「コミュニケーション」の可能性を訴え続けた存在だった。両者とも、その「現実」に積極的に関与し続けて死んだ。前者の理論は今なお議論を呼び、後者を越えた精神医学者は今なお現れていない。Meadの、或いはSullivanの主張は、特別の意味での「学」というもののひとつの社会的健全性を示しているように思われてならない。

本論の暫定的な「結」は以下の通りである。すなわち、「学」はおそらく「懐疑」に始まるが、「信頼」を失うとき「懐疑」は「疑惑」に墮す。そして「懐疑」を欠く「信頼」とは「狂信」の別称である、と。

われわれはいま、「明るい絶望」を抱いて「コミュニケーション」に向かわなくてはならないのではないか。

1982年12月21日

「注」

1. 本論における「注」の役割について
2. 本文第Ⅰ章への「注」 112 - 120 頁
3. 本文第Ⅱ章への「注」 121 - 155 頁
4. 本文第Ⅲ章への「注」 156 - 162 頁

☆本論における「注」の役割について.

完全なる論文には「脚注」は要されず、完全に独創的なる論文には「引用」すら存在しない。本論は不完全にして独創性を欠くものであるが故に、大量の「注」を付されるものとなった。本論で筆者は、可能な限りテクスチュアルに Mead の理論を理解しようとしたので、これに適合しない部分の多くが、「注」に投入された。本論の「注」は、i) 通常の意味での「補注」、本文を補うもの。ii) 筆者の目的に適合しないが、重要と思われたもの。iii) Mead の理論を理解する助けとなった背景に関するもの。iv) 本論自体からすれば蛇足的ながら、必ずしも無意味とは思われないもの。v) 予想される反論への応答。以上である。当初は「注」の数字記号で以上の区別を行うことを考えたが、複数の目的を持つものもあるため、敢えて一元化して示すこととした。なお以上に加えて、「注」においては「引用」の「制限」がさほど厳しくないであろう事を期待した、という事がある。Mead からの断片的な引用は困難であり、時として意味をなさなくなる。筆者は、「注」部分での Mead および他論者からの引用の長さに関しては、一切注意を払っていない。このような方法をとらぬ限り（全ての引用を書名／頁ノンプル／行ノンプル／単語ノンプルに置換することが許されるなら話は別であるが）、Mead のテクスチュアルな理解は少なくとも筆者には極めて困難であると思われたが故である。以上、了解されたい。

第I章

- 1) ここでは「マスコミ受容過程の実証研究史」それ自体の記述を目的としているのではない。従って、本論の「問題関心と目的」に関係する限りで論じる。以下本論における筆者の理解は、特記しない限り、次の文献からの知見によっている。Klapper [1960, 邦訳1966年], 竹内 [1977], 岡田 [1977], 竹下 [1978], 竹内 [1982 in 竹内・児島編1982], Rogers & Kincaid [1981, 特に chapt. 2]。いずれも、受容過程研究に関する批判的レビューである。
- 2) Lang & Lang は、「第2次大戦以前のまともな社会学者で、のちに『皮下注射モデル』と呼ばれたもの」と取り組んでいた者は、いたにしてもごく少数だった」と主張して、「皮下注射モデル」というラベルを、「実在しなかったモデル the model that never was」だと反論している [Lang & Lang, 1981 in Rosenberg & Turner eds., 1981, p. 655]。
- 3) 〈テクノロジー決定論〉なる表現は、かつて W. Schramm が M. McLuhan を批判して用いた言葉「テクノロジー決定論者 technological determinist」から借用した [Schramm, 1973 in Gumpert & Cathcart, eds., 1979, p. 171]。
- 4) 表記上の便法から、以上の記述では「社会」と「心理」とを区別したが、両者の相互規定的な関係は言うまでもない事である。ここまでの記述では、慣習的な「社会(学)」と「心理(学)」との領域分離に従った、という事にすぎない。
- 5) 特に、竹内 [1977] を参照。
- 6) 無論、「他者理解」にしろ「観念の客観性」にしろ、そのまま「コミュニケーション」の問題と等置さるべきものではないだろうが、対象領域としては非常に接近している [cf: 今田, 1962; 江藤他編, 1973, 第1巻]。
- 7) 造語の使用には慎重であるべき事は承知しているが、他に適切な表現が見当らなかったので敢えて使用した。類似に見える区別は、例えば、加藤 [1974a, p. 80ff], 栗原 [1982, p. 207-221] 等にみられるものであるが、後の定義に明らかなように、この両者のいずれとも異なるものであるように思われる。前者では「伝達」と「交わり」という区別を、コミュニケーションの「道具的」機能と「目的的」機能という周知の機能的分類に対応させ、後者では、「交信」および「解釈」という特性を、どうやら主観主義社会学の立場ないし方法論と、客観主義社会学のそれとの中間的な立場ないし方法論を代表するものと考えているようである。筆者の区別は、「コミュニケーション」概念をどのように研究者が理解するか、という見地からのものであり、その限り、後者により近いともいえるが、しかし、内実は全く別であるように思われる。
- 8) 実際には、筆者の引照した Penguin 版 [Penguin Books, 1979] では、9か所で10回 “Communication” “Communicate” が使用されている [ibid., p. 3, 52, 53, 57, 75, 159, 161, 172, 180]。各々の邦訳は「意志疎通」[38頁], 「伝達」[64頁], 「(何かを) 伝えようと」[67頁], 「電話による意思伝達 [telephonic communication, 電話通信] [72頁], 「航海通信」[73頁], 「意思疎通の過程 [communication process]」[100頁], 「意思を伝え」[235頁], 「意思疎通」[238頁], 「非言語的な意思疎通」[257頁], 「意思疎通」[271頁] となっており、「電話通信」、「航海通信」という技術的用語を除けば、8回この語が使用されている。そしてこの8回の使用も、むしろ偶発的・散発的であって、論述の他の部分と密接に結びついて使用されているというわけではないように考えられる。(但し、巻末の ‘Notes’ と ‘Index’ は除外して考えている。)
- 9) 各々、原文では、‘understanding,’ ‘interpretation,’ ‘signification,’ ‘transmission,’ ‘internalization’ 等々となっている。これらの語句は、この著作を通じて頻出する。

- 10) 例えば、著者らのドイツ語圏の出自を重要視するならば、「Kommunikation (コミュニケーション) ということばはドイツ語としては慣用語となっていないし、学術用語としてもごく緩慢に受け入れられている」とか、「コミュニケーションの無数の問題は……ドイツではことばの研究のわくの中でおこなわれてきた」といった Maletzke の指摘 [Maletzke, 1963, 邦訳 27, 32 頁 ルビ強調は原文] を参考として、学の地域差にその理由を求めることもできるだろう。(Maletzke がこう書いたのは、Berger & Luckmann に先行すること三年、ほぼ同時期にあたる。) けれども筆者には、この点はより基本的な立場の相違に根ざすもののように思われてならない。その理由は以下の本文中でも検討されるが、本論全体の最も基本的な問題関心に直接かかわってくるものである。瑣末主義ともとられかねない‘用語’の問題にこだわった事にも、一応筆者なりの理由が存在している。
- 11) 後に触れる「共志向の co-orientation」のアプローチは、典型的にこのような測定を試みるものといえる。
- 12) F. H. Allport によって造語され、Merton の準拠集団論 [Merton, 1957, 邦訳 342 頁以降] や Shibusani の流言研究 [Shibusani, 1966, p. 92ff] 等でも使用されている「多元的無知」(一言でいえば、ズレた相互主観つまり‘思い込み’の事) の概念は、特に 1970 年代以降、マスコミ・プロパーでも注目されている。後述する。
- 13) もちろん、個人の行為、発言、態度、意図、意識、等が全て一貫しているのが常態であるのなら、このような困難性は生じないだろう。現実には、これらはしばしば不整合的でありうる。
- 14) 経験的実証科学に徹する、という学の方向を理想とするならば、こうした主張は恐らくナンセンスなものでしか有り得ないだろう。しかし、筆者は決して感情的になってこの主張を述べているつもりはない。もし「コミュニケーション」概念が「伝達」概念と同価であるのなら、混乱を招きかねない「コミュニケーション」概念など放棄されるのが妥当である。同一の事象を二種の概念名称で表現する必要はない筈である。
- 15) ここでは特に、コミュニケーションの結果に議論の重心を置いている。その意図、媒体、対象等については特に問題としていない。
- 16) Bridgman 自身は、「操作主義」を唱道したわけではない。物理学における測定の問題を論じた彼の著作は、心理学および社会学(例えば Homans [1967, 邦訳 1971 年]) に対して多大な影響を与えたが、彼自身は「概念の操作的定義」を提唱したにすぎない。
- 17) 以下本文中の理解は、筆者の臆測にすぎない。Bridgman の提案それ自体は、全く、当時の(相対論以降の)物理学の動向との関係でのみ考慮されるべきものであるのは明らかである。但し、何故に彼がそれを一冊の著作の形で公刊したのか、となると、臆測の余地も許されるだろう。
- 18) その事によって、特に心理学領域にもたらされたといわれる新展開のことは、ここで論じている事とは特に関係していない。
- 19) 操作的な発想は、Bridgman の独創というわけではない [cf. Roback, 1952, 邦訳 25 章]。
- 20) つまり、知られる如く、「操作的定義は論理的に無限後退 infinite regress する」。操作的定義-内-操作的定義-内-操作……という具合に、1945 年の *Psychological Review* 誌上で組まれた「操作主義についてのシンポジウム」でのこの問題に対する Bridgman 自身の回答は、操作内操作をくり返す事は、最終的には「口頭言語の域を超え、……1 つの操作を指さし、それを真似る事しかできない状況」にまで到達するだろう、と言いながら、「近似の良さが一定点までは改善され」る、という事で満足する、至極プラクティカルなものだった [Bridgman, 1945, p. 247]。その後、「操作的定義」がどのような論理によって正当化されたかは筆者は知らない。その批判については Roback 前掲書参照。

- 21) なお付言すれば、上に述べた状態に加えて、次の如き非対称的な状態が考えられよう。すなわち、「精神的他有化の意識による精神的我有化の事実」および、「精神的他有化の事実による精神的我有化の意識」である。ここから、「双務的交流」「片務的交流／片務の意味づけ」「双務の意味づけ」という三つの局面を導く（そして「精神的搾取」を論じる）という発想は不可能だろうか。
- 22) 或いは、もしかしたら、実証的に測定された「意味づけ」（相互主観的合意の成立）の中には、「交流」（客観的合意の成立）が含まれている事が有り得るかも知れない。しかし、それを識別する事は難しいだろう。いま仮に、当該「コミュニケーション」の値、およびそこでの「意味づけ」の値、の各々が操作的に検出されたとするとき、前者の値＝後者の値であれば、当該「コミュニケーション」は全く「意味づけ」ばかりで構成されている事になろう。そしてもし、前者の値から後者の値をマイナスしたとき、一定の値が残存するのなら、それをもって「コミュニケーション」の「交流」部分の値と考えられはしないだろうか。
- 23) 従って、この過程は無限後退をつづける事になる。そして、何らか特殊な措置がとられぬ限り、懐疑論に陥るだろう。
- 24) 素朴な概念化だろうが、ここで筆者がイメージしているのは、次の如き概念の包含関係である。

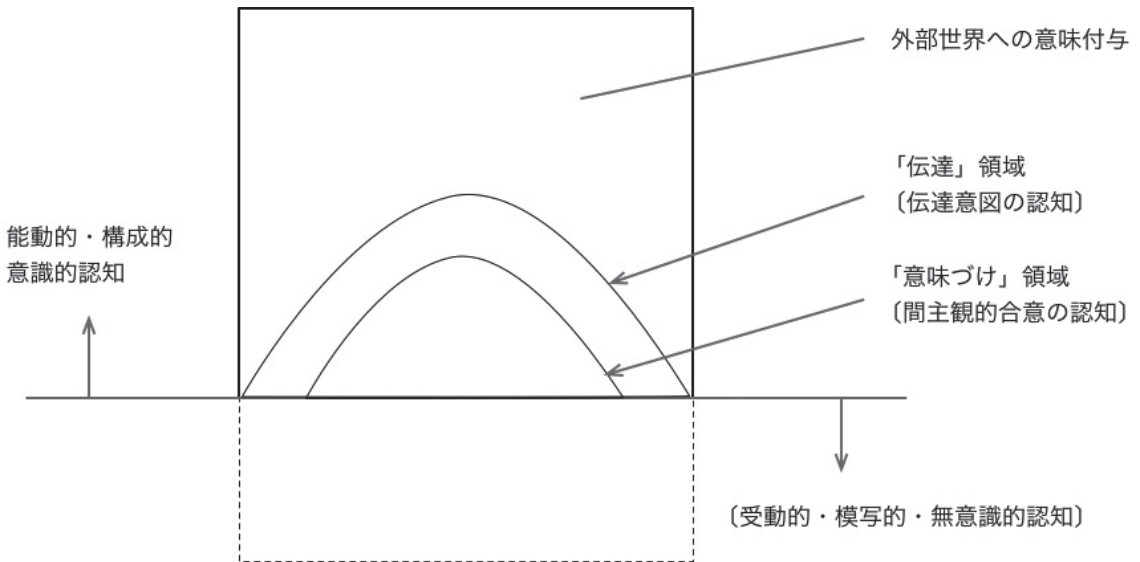


図6 個人的「認知」と「コミュニケーション」の包含関係

- 25) 確かにそれは、様々な拘束から自由ではない。社会化過程で内在化させた価値意識や規範、特定時点の「状況の定義」、そして所与とみなされた社会的現実、等々が、一定状況での個人の意味付与の範囲を限定するだろう。にもかかわらず、その限定された範囲の中で、様々な個人がその意味付与活動について持つ自由ないし不確定性は、相当に高いものであろう。
- 26) 「中断」の方法としては、理念型や概念図式を作る、「操作的定義」を導入する、確率論（特に大数法則）に訴える、「括弧入れて還元する」、等々、様々な手法が考えられてきた。
- 27) 無論、「人」が存在しなくてはならないとする理由はないだろう。筆者は、「文脈」や「構造」こそを重視する最近の理論化の方向については無知なので、それらを語れない、従って評価することもできない。

28) ここでは、下の如き素朴な図式をイメージしている。

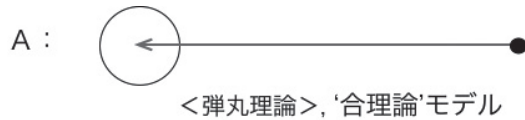


図7 「コミュニケーション」の「合理論」および「経験論」モデル

図式にしてしまえば単に矢印の方向が異なるという事に過ぎないが、最近の「コミュニケーション・モデル」の表示法では、Bの形式のものが多くみられる。例えば、D. C. Barnlund [1970 in Sereno & Mortenson, eds., 1970, p. 95ff], Pearce & Cronen [1980, p. 170], Rogers & Kincaid [1981, p. 55] 等である。

- 29) マスコミ受容過程研究史の大きな皮肉は、恐らく、それが〈弾丸理論〉を意識的に放棄する事で受け手の、〈認知上の〉主体性を回復させたとき、まさにその事によって、「コミュニケーション」を語りづらくなった、という点にあるのではなかろうか。
- 30) こうした問題関心自体が、そもそもの外れなものであるかも知れない事は承知しているつもりである。方法は対象に規定される。筆者が定義した意味での「交流」は、そもそも通常いわゆる実証的方法では論じられぬ対象である、とも言えるだろう。結果は本論の結論を待つより他にない。記述のこの段階で早急な結論を下されぬことを願う。
- 31) 筆者はこの著者の「紹介」に関しては全く同意するが、その結論部分(村松 [前出, p. 195-6])には同意いたしかねる。その主旨は、受け手の主体的意向を慎重に配慮しない内容分析は空虚である、という古来よりの主張である。筆者の反論は、以下の本文に明示した。
- 32) 従って、「受け手の多様性」を本文9～10頁段階での区分にしたがって理解するなら、Gerbnerらは、「社会的」要因を重視し、「心理的」要因のみを捨象している、という事になる。
- 33) 詳細には触れないが、以下の批判および反批判がある。M. Hughes [1980, p. 287-302], P. M. Hirsch [1980, p. 403-456; 1981, p. 3-37; 1981, p. 73-95], Gerbner et al. [1981, p. 39-72. ; 1981, p. 259-280].
- 34) 以下、特記しない限り、筆者の機能主義一般に関する理解は、次の文献に拠っている。Abrahamson [1978], J. H. Turner [1978, rev. ed.], J. H. Turner & A. Maryanski [1979], 新・中野 [1981].
- 35) 「決定的に」と書いたのは、そもそも機能主義は行為主体の意向を必ずしも問題としない理論化であるからである。「社会的機能とは……主観的意向……を指すものではない」[Merton, op. cit., 邦訳 20 頁].
- 36) 「[相互作用状況において] 各人はそれを、『共通』とよばれるほど十分に、他者の心のなかで進行する過程と類似したものだ、とみなすのである」[Bales et al., 1956. ; Parsons & Bales, 1956, Chapt. 5 邦訳 (下) 116 頁 圏点引用者].
- 37) この点は議論の余地があるだろうが、筆者は Turner & Maryanski [op. cit., p. 108ff] の理論に従った。
- 38) この点に関しては、Turner & Maryanski [op. cit., p. 28ff] を参照。
- 39) ただし、ここには確率論を導入するという突破口が存在しており、統計的に十分なサンプル数の確保によ

り、サンプル各個人の反応や測定に入り込む主観的な意向を反映した誤差の影響からのがれる事が可能となる。しかし、この手続きを介して得られるサンプルの代表値は、さらに操作的なものとならざるを得ない。

- 40) 特に、Cicourel [1964, 邦訳 1981年] 参照。
- 41) 例えば、「合意」「適合性」「正確性」のどの1つの値の変化も、他に影響すること [ibid., p. 64] や、ダイアド以上の相互作用について適用に問題があること [ibid., p. 65], 1次 first order の値（「彼が考えている事を私は知っている」）で満足しなくてはならないこと [ibid., p. 63-64] 等が挙げられている。
- 42) 従って、先行モデルよりも、より「意味づけ」に傾斜した理論化であるといえる。
- 43) むろん、より詳細な分析がなされているし、彼らの研究報告は他にも多い。しかし、ここでは省略して、理論化の方向についてのみ論じている。
- 44) ではその「根拠」の方は、たとえば、McLeod & Chaffee のモデルでは、基本的に Berger & Luckmann の〈現実の社会的構成〉論から出発している点、Pearce & Stamm のモデルでは、それをさらに徹底させて個人主義的な方法論に依拠している点、から各々明らかであろう。
- 45) 恐らく、ここにおいても統計（推計）学を導入する事で突破口は開かれるだろう。つまり、十分なサンプル数が得られているという条件下に、特定個人の期待が (PA \rightleftharpoons PD) の状態であっても、この反応誤差は結果に影響しない、と考えるわけである。但し、そうみなすためには、母集団の大部分が PA/PD である、と仮定することが必要になる。
- 46) 共志向のアプローチ（特に Pearce）は、その後さらに「意味づけ」へのラディカルな傾斜を続け、ついには、「確かに重要なものですが、おそらく本誌にとっては余りに重要すぎます (too heavy)」といった掲載拒否を受けるようになる理論 [Pearce & Cronen, 1980. その 13 頁に、こうした非難や拒否が採録されている!], つまり「社会的現実の共同管理論」へと発展する。(too heavy なので本論では扱えない。)
- 47) Merton [op. cit.] の用法をかりれば、「自分自身の態度や期待が共有されていないという根拠なき仮定と、それらが一様に共有されているという根拠なき仮定」[邦訳 342 頁] である。
- 48) この結果を説明するために、著者らが用いている推測は、「南部白人は、その長期にわたる人種的不平等の文化的伝統のもとでは、差別を誇張する傾向はより小さいだろう」というものである [ibid., p. 323]。
- 49) 著者らの研究は、この論文段階では、こうした方向性を実証的に検証するには至っていない。
- 50) 「多元的無知」は極めて広範かつ散発的に使用されてきた概念である。前出（注 12）Merton（準拠集団論）、Shibutani（流言研究）に加えて、世論形成過程研究 [Breed & Ktsanes, 1961, p. 382-392] や学生ラディカリズムの研究 [Korte, 1972, p. 576-587] などと関連して使用されてきた。
- 51) ここでは、Strauss の編になる *The Social Psychology of George Herbert Mead* [Strauss, ed., 1956] と、その拡張版 *George Herbert Mead on Social Psychology* [Strauss, ed., 1964b] とを 2 冊として数え、さらに、1982 年 11 月に公刊が予告されている Miller の編になる *The Individual and the Social Self: Unpublished Works of George Herbert Mead* [Miller, ed, 1982 (Forthcoming)] をも算入している。前二書の異同については Broyer [1973] を参照のこと。
- 52) この注を執筆している時点で筆者は未見である。(1982. 10. 3.)
- 53) PA の編者らは、PA を構成する草稿群について、「完結度は様々であり重要度には大きな幅がある」ことを指摘したうえで、読者にそれらの判断をまかせている [Morris, et al., 1938, p.v]. 第 xxvii 説のタイトル (“Back of Our Mind”) を除く全てのタイトル、配列は編者らによる [ibid., p. v].
- 54) 「1927 年の」講義という事で編者が意味しているのが、Academic Year での 1926 - 27 年の冬学期 (1926

年冬)の講義なのか、あるいは1927-28年における冬学期(1927年冬)のそれであるのか不明である。Meadは上の二つの学期にそれぞれ、“Advanced Social Psychology”を講義している[cf: Lewis & Smith, 1980, p. 282-283]。常識的には後者であろうが、Millerが所蔵する1927年の講義ノートはMSSと違っており、「同一対象と問題が論じられてはいるが、もっと新しい角度から……しばしばより鋭く」扱われているといい、Miller自身は「Meadは同じ講座を一年に二回行ったのではないか」と困惑している[Miller, 1973, p. 253]。ところが上述の通り、そのような事実はない。

- 55) ただし、この講座は学部学生を対象として行われたものである故、「学生がたやすく理解できるように、という見地から論じられ」たものである[Moore, 1936, p. v- vi]。それ故、MTの用語法その他に厳密性を求めるのは無理な注文であると思われる。本書の不正確な論述を逐一指摘したBook Reviewが、本書出版の翌年になされている[Tsanoff, 1937]。
- 56) MSS, MTとも、Alvin Carusによって速記者が雇われたものらしい。[Morris, 1934, p. vi; Moore, 1936, p. vii]。
- 57) 同種の批判は英文、邦文ともに無数存在するが、筆者の知る限り、このFarisの批判からの孫引きの繰り返しである。
- 58) 本論執筆者は、各冊の内容に関するより詳細なデータを求めて、各冊出版後に行われた以下のBook Reviewを参照したが、本論に記した以上のデータは得られなかった。McGilvary [1933], Otto [1934] (以上PP), Brotherston [1935], Crawford [1935], Murphy [1935], Wallis [1935], Kantor [1935], Faris [1936] (以上MSS), Pape [1936], Murphy [1936], Tsanoff [1937] (以上MT), Abel [1939], Larrabee [1939], Strong [1939] (以上PA)。
- 59) ちなみに、この分類に記載されているサブ・セオリーは、以下の通り。役割論、準拠集団論、社会的知覚と対人知覚の理論、自我論、精神医学の対人関係論(H. S. Sullivanによる)、言語と文化への志向をもつ理論(Sapir, Whorf, Cassirer)。その他、個別的に論じられてはいないサブ・セオリーも多数ある。
- 60) TSTないしWAY(“Who am I?”)テストは、Kuhnの完全なオリジナルではなく、1950年にBugental & Zelenによって提起されたものである。Bugental & Zelenのテストは、被験者に対して“Who am I?”への3つの回答を要求したにすぎなかったが、Kuhn & McPartlandのよく知られたTSTでは、これを20回答に拡大した。前者をWAY、後者をTST(Twenty Sentences Test)と呼ぶ[Wylie, rev. ed., 1974, Vol. 1, p. 240-241]。
- 61) 以上の引用の中には、筆者らがBlumer, Kuhnから引用した部分も含まれている。ただし、余りにも煩雑となるので、明示することを避けた。
- 62) 実は、これ以前にも相互作用論の内部分類の試みは2回ほどなされている。1968年にVaughan & Reynoldsによって、又、1973年にはReynolds & Meltzerによって。ただし、いずれもMeadと相互作用論者の関係についての直接の言及はないので、本文からは省略した。ただし、両者はともに、相互作用論者へのアンケート調査に基づくその内部動向の報告となっており、興味深い点もいくつかあるので、以下簡単に紹介しておく。

前者は、5人の社会心理学者によって選択された40人の相互作用論領域の指導的スークスマン(いずれも実名は伏せられている)に対して、「相互作用論は社会変動を扱うのか?」という主旨のアンケートへの回答を求め、総回答34通のうち使用に耐える31通について内容分析を行ったものである。結果、高い一貫性をもつ二つのグループが識別された。Aグループ(15人)は、社会現象を扱えると考え、相互作用論を社会の一般的理論図式とみなす。対するBグループ(16人)は、マクロ・レベルでの変動は扱え

ないがマイクロ・レベルのそれは扱えると考え、相互作用論を主に個人行動の文化による変化を扱う社会心理学理論とみなす。両グループについて、その構成員の Ph. D. 取得、学的ネットワーク等を調べた結果、Aグループは Chicago 大学から学位を受けた者ないしその系列であり、ネットワークは緊密であるが、Bグループはそのような高いグループ内同質性をもたぬことが判明した。筆者らは、Aグループをここ 30 年間のアメリカ社会学に対する反正統派、ラディカル派、'unconventional' とみなし、Bグループを 'conservatives' であるとする。Aグループが Chicago 学派に相当することは明らかであるが、そのような表現は用いられていない [Vaughan & Reynolds, 1968, p. 208-214]。アメリカ社会学内部における「時代色」の強い論文である。Chicago 学派を「理論的な現状維持への挑戦」として、好意的にみているという印象を受ける [特に ibid., p. 213-214]。

五年後の 1973 年に発表された後者 [Reynolds & Meltzer, 1973] は、筆者の重複もあってか同工異曲の調査に基づいている。しかし、この論文では、すでに本論で扱った Meltzer & Petras [1970] の、Chicago と Iowa という二大別法を認めたくえて、これら二大学派の存在を実証的に検証しようと意図されたものである。以下、調査方法をごく概略的に示す。まず、4つの判別規準（主に、相互作用論領域の論文を書いているかに関わる）から、124人の相互作用論者とおぼしき研究者に対し、「社会学の適切な方法論についての概念」に関するアンケートを郵送し、回答させる。質問文は、4つの、社会学方法論に関する短い文章（実証的操作主義的なものから参与観察を最もすぐれた手法とするものまでの4種類）からなり、これから択一選択させる。（但し、「その他」の自由記入欄を作ってある。）以上の質問に加え、学位取得の場所日時、博士課程で誰についたか、等々の学的背景およびネットワークを調べる質問をする。返送されたもの 84 通（67.7%回収率）、うち有効回答 81 通 [65.3%] を対象に分析を行っている。結果として、3つのサブ・グループが識別された。それらは、i) 「参与観察、又は [[正統派] 社会学に対する] 反正統派」グループ (Chicago 学派) の 13 人、ii) 「半・伝統的 semi-conventional」グループ (Iowa 学派) の 16 人、iii) 「[参与観察と操作的実証主義との] 折衷テクニック、又は伝統的 conventional」グループの 52 人、である。以上の結果から、当時 (1973) の相互作用論者の多数派は、方法論的にいって「中道派」である事が示唆され、参与観察のみ、操作的実証主義のみという立場は明らかにもはや少数派であると推定される。筆者らは、結論的に、Chicago, Iowa の両学派が現代アメリカ社会学に重大なインパクトを及ぼすことはなくなるだろう、という意味のことを述べる [Reynolds & Meltzer, 1973, p. 189-199]。

以上二つの調査から、(調査法、サンプル数、予想される母集団における変化、等々の比較を困難とする諸要因を考慮しつつも、なお敢えて推測するとすれば)、1968~1973年の5年間に、Blumer および Kuhn の影響は縮小してゆき、相互作用論の内実は更に多様化したのではないかと考えられる。およそ以上の経緯をふまえて、以下の本論で触れる 1975 年、1980 年の分類の試みが行われたものと推測される。

- 63) この事は、注 62) に記した 1968, 1973 年の調査結果を考慮すると、やや奇異に感じられる（しかも、1968, 1973 年の調査とこの 1975 年論文には執筆者の重複が著しいのに、である）。結局のところ、「多様化」があまりに著しく進行したが故に、もはや Chicago-Iowa という分類規準以外に、新しい分類を提出する事ができない状況になっていた、という事だろうか。
- 64) Lindzey & Aronson の *Handbook of Social Psychology* 第3版に、A. Statham との共同論文で “Symbolic Interactionism and Role Theory” の項の執筆が予告されている。この注の執筆時点 (1982. 10. 3.) で筆者未見である。
- 65) もちろん James は Chicago 学派のインサイダーではないが、プラグマティズムと Chicago 学派との関連から、通常、相互作用論の背景の一人として算入される。

- 66) Mead 自身は, “Social Behaviorism” なる用語を使用していない [Morris, 1934, p. xvi]. それは, Watson に対する Mead の立場を特徴づけるために, Morris によって造られた用語である [Pfuetze, 1954, p. 106, n. 46].
- 67) ここでいう「一派」とは, 極めて広い意味で用いている. その中には, Cottrell の門下らしき研究者 (C. Varela) も存在するが, 全体としては, Blumer 批判という形でまとまっている程度ようだ. しかし, 各研究者の論文の引照記事を比較する限り, 相互引照は頻繁に行われており, その見地からすれば, やはり, 「一派」と呼んでも差しつかえないだろう.
- 68) Mead の社会心理学講座は 1907 年の冬学期に始まり (それ以前は「比較心理学」), 1930 年の冬学期に終わるが, ‘Advanced’ の形容が冠されるのは 1917 年の冬学期からである. ただし, 1902 年の冬学期に一度, 「現代社会心理学 Contemporary Social Psychology」なる講義を行っている [Lewis & Smith, 1980, p. 262-271].

《追補》

本日 (1982. 12. 7.), Miller 編の, 主として講義ノートおよび草稿からなる, *The Individual and the Social Self* を入手した. そこで, 本章注 54) における MSS 講義との相異の問題が明らかとなった. 注 54) にいう Miller の「講義ノート」のもととなった講義は, Academic Year での 1926 - 27 年の春学期つまり 1927 年春に, Gates Hall において 40 回にわたり講義されたもののノートである [Miller, 1982, p. 1]. この講座は, Lewis & Smith による Mead の講座一覧表 [Lewis & Smith, op. cit., p. 282-283] には記載されていない. (正規の講座ではなかったということか.) 従って, Miller ノートは, MSS ノートとは全く別のものである [Miller, 1982, p. 13].

現在, 検討を行っていないが, 時間的余裕があれば本論にも利用できるかも知れない.

《以上, 追補》

第II章

- 1) すでに本論の始めに述べた如く、Meadに関する論文は欧文邦文を問わず無数に存在している。それ故、これらあまたのMead論を各々逐一比較検討していたのでは、それはMead論ならぬMead研究史論になってしまう。現実には各Mead論は執筆者の問題関心や意図、それにMead理解の仕方等によって極めて多様である。この事は、邦文のMead論相互の相違に限らず、例えば〈Meadは実際に自らを「社会的行動主義者」と認めていたのか〉といった基本的な事実に関してさえ、Meadの直弟子の間でも見解の相違がある、という程である。結局のところ、Meadが死んですでに半世紀が経過している。もはや、「唯一正当な」Mead理解など不可能であるかにも思われる。この事は、「Meadの——」と銘うった論文群を多少とも読むだけで誰しも肯かれるところであろう。Mead理論の「曖昧さ」はよく指摘されるところだが（しかも、少しも曖昧ではないと主張する研究者もいるのだが）、これが各個別Mead論（Mead理論に関するsecondaryな論述）となると、その多様性はMeadのoriginalにおけるその比ではない。そこで本論では、各Mead論における記述や理解の相違を逐一指摘検討する事はしない。加えて本論では、以下の代表的Mead論（邦文）は、一種の「常識」とみなし、その読了を前提して論を進める。「G. H. Meadはアメリカの哲学者で…」と書きおこしていく必要はないだろう。稲葉・滝沢 [1973]、岡部 [1968; 1969]、加藤 [1971; 1973; 1974a; 1974b]、佐藤 [1963; 1972]、新明 [1974]、滝沢 [1976]、鶴見 [1976]、富永 [1957]、船津 [1976; 1980]、南 [1976]（以上、50音順）。
- 2) 本論の全体を通して、筆者は「プラグマティズム」という包括的なラベルを使用することを、可能な限り避けたいと考えている。理由は二つある。第一に、筆者は「プラグマティスト」と称される思想家の著作の全てに通じているわけではない。従って、筆者は「プラグマティズム」を語ることができない。第二に、一般に「プラグマティスト」として総称されるJames, Peirce, Dewey、それにMeadの各々の思考の相互関連の問題。Mead自身は、その思考の受けた影響 [Thayer, 1968, p. 235ff] や両者の思考の同型性 [Lewis & Smith, 1980; Lewis, 1976] を指摘されることはあっても實際上Peirceに言及することはほとんどない。Jamesからの影響は明らかであろうが（特に精神の機能的、目的的性格について）、MeadのJames評価はどれも常に曖昧である。Jamesの思考の特に個人主義的な部分には当然Meadは反論してしかるべきであると思われるが、そのような論述部分は筆者は未見である。（その「意識の流れ」を間接的に批判した論述はある [Mead, 1913 in Reck ed., p. 144-145]）。そしてDeweyとの関係については、その緊密な実生活上の関係ゆえに [cf. Miller, 1973]、又Meadは常にDeweyを肯定的に批評しているが故に、両者の全著作の厳密なテキスト比較を行わぬ限り、有効に論じることは難しい。総じてMeadは他の「プラグマティスト」の評価において極めて曖昧なのである。以上の理由から、「プラグマティズム」という包括的な見出しの使用は、本論においては極力これを避けることにしたい。
- 3) 蛇足的に補言する。言うまでもなく、〈純粋に生物学的な立場〉などというものは実在しない。生物学も又、学という名の人間の営為であり、従って社会的営為であるからには、歴史、社会状況、イデオロギーといった諸拘束から自由たり得ない事、他の諸学と何ら変わるものではない。ブッシュマンは、中国人の類縁となることもあれば、ヨーロッパ人の類縁として分類される事もある。ここで〈純粋に生物学的な立場〉とは、一般に生物学領域で研究していると認められた人々が一般に生物学的見地からして現在妥当的である、とみなす立場、というほどの事以上の意味を持つわけではない。特に、生物学的な〈分類〉と称されるものは、30年前にPiagetが行った批判を現在なお克服するに至ったとは言いがたい [Piaget, 1950, Tome III, 邦訳 1980年]。
- 4) 「進化論」と呼ばれる生物学の一領域は、しかし、その構成要素において生物学の全領域をカバーしてい

る。「総合派進化論」は、分類学、古生物学、比較解剖学、生理学、生態学、分子生物学、集団遺伝学、比較動物行動学、等々の領域を背景に持つ。どの領域にどのようなウェイトを置くかで、「進化論」の内容は変化する。本論で筆者が依拠しているのは、(筆者の中高等課程での「生物学」の教科書によって得た知識に加えて)、Patterson [1978, 邦訳1980年]、Craw [7th. ed., 1976, 邦訳1978年]、Monod [1970, 邦訳1972年]、Lorenz [1965, 邦訳1976年]、駒井 [1972] 等々である。

- 5) 環境は内部、外部に二分して考えることができる。突然変異した遺伝子型が発生途上の胚の内部環境に適合的でなければ、一種の致死遺伝子となり、外部環境の淘汰圧にさらされる以前に死亡することが多い。突然変異体の大部分はこの段階で淘汰されてしまう。
- 6) 「人種は動物でいえばほぼ亜種 subspecies または地方品種 local race の階級に相当する」[駒井, 1972, p. 216]。従って、全ての人種は同一種(ヒト属ヒト)である。
- 7) 一般に、「自然状態においてn世代の子孫を残しうる」ことをもって同一種と分類する根拠とする。もっとも、この根拠はすでに不十分な言明を含んでいる。人間における「自然状態」を何によって判定するか、という点である。
- 8) 過去における人類社会全般に関しては、様々な仮説が立てられている。ただしいずれも仮説の域にある、と考えるのが妥当である。
- 9) Lorenz [1965, 邦訳1976年]における行動の進化に関する議論を参照のこと。
- 10) いわゆる「定向進化」、より正確には進化における定向性および指向性の問題に関しては、(古い文献だが)Simpson [1950, 4th. ed.] の邦訳 [1962年] 第11章が参考になる。進化の指向性の事例は、Marshが行った馬の化石比較の研究が最もよく例示するところだが、MeadもMTの中でこのMarshの研究に言及している [MT, p. 128]。
- 11) というか、現在の人間社会には、進化論的な意味での淘汰圧はもはや存在していない、と考えるのが妥当である。人間の環境操作能力の増大とともに、ここで言う意味での淘汰圧は消滅したと考えられる。
- 12) 筆者はここで、そうした壮大な思弁の試みを否定するつもりもなければ過小評価しようという意図を持つものでもない。ただ、それらを生物進化論に比較するとき、実証的な根拠を持たぬ点を主張しているにすぎない。
- 13) 誤解を避けるために付言するならば、筆者は社会「進化」を生物進化と同一の原理で説明し尽くせる、という発想に対して疑問を提出しているのであって、生物進化からの社会「進化」の類推それ自体を否定しているのでは全くない。さらに筆者は、「社会進化」論に関して述べているのであって、「体制変動」論については一切触れていない。
- 14) 無論、「仮設的」というなら、筆者の依拠する生物学的進化論にしたところで、(社会進化論と同程度までに、とは言わないまでも)その全体が一個の「仮説」の域を出るに至ってははいない。「自然界で新種の誕生が観察された例はこれまでひとつもない」[Patterson, 1978, 邦訳128頁]からである。要するに、進化論的発想の社会や文化への適用に関する限り、筆者はK. Popperと同じく、極めて慎重であるべきと考えている [cf. Popper, 1957, 邦訳61年]。
- 15) 以上の進化論に関する論述において、筆者は「社会進化論」についてのレビューに類する作業を一切行っていない。筆者にしても、Parsons [1966, 邦訳1971年; 1971, 邦訳1977年]、吉田 [1967]、村上・公文・佐藤 [1979]、等々の業績を全く知らないという訳ではない。しかし、これらを逐一検討していたのでは、本論の主題から余りに外れてしまう。そこで、不十分な形ながら、以上の「文献の根拠を欠いた」論述をもって、当面の暫定的立場としたい。なお、「社会進化論」に関する最近のレビューとして、友枝 [1981

in 安田他編, 1981, p. 125-153; 1982] があるが, この著者は Darwin 以降の生物学的進化論, 特に「総合派」進化論に関して一切触れていないので, 依拠することができなかった。

- 16) この引用部分はかなり奇妙である。筆者は Hegel 思想について無知であるが, それでも Hegel がただ矛盾を普遍問のものとしてばかりではなく, 普遍と個別との間のものとしても論じた事程度は知っている。総じて MT における Mead の Hegel 講義 (特にその, [Being = Not-Being] → Becoming という図式 [MT, p. 131, 134]) は, Hegel 『小論理学』における「有論」の, [[有 Sein = 無 Nichts] → 成 Werden] → 定有 Dasein という過程を想起させる。しかし又, 『精神現象学』への言及もなされてはいる [MT, p. 130]. (他には, SW, p. 18 に, 『現象学』への言及がある。) 結局, 学部学生用の (三隅 [1975, p. 162] の表現によれば「一年生も聴ける講義」) である, という MT の限界によるものとも考えるべきかも知れない。
- 17) 以上の引用は MT, p. 134-5 より。なお最後の引用部分は Mead における公理主義的な科学的相対主義 (Poincaré からの影響) を示すものと考えてよいだろう。本論 39 頁およびその注 34 を参照のこと。
- 18) Hegel 論理学と, Peirce, Dewey の「問題解決の論理」との関係論じた著作として, 上山 [1963] がある。筆者は基本的にその理解に従っている。
- 19) こうした「プラグマティズム」一般の, 「適応主義」への批判は数多い [e. g. 山本, 1957, p. 133ff]. Mead に関しては, それが, 「時代状況を反映した保守改良主義者のオブティミズム」といった表現 (上はその最大公約数的形容である) をとって, 再三指摘されてきた [cf. 佐藤, 1963 in 山田編, 1963, p. 48-49; 岡部, 1968, p. 264-265; 佐藤, 1972 in 北川他編, 1972, p. 173; 稲葉, 1973, p. 378-382; 加藤, 1973 in 内川他編, 1973, p. 85; 船津, 1976, p. 116; 滝沢, 1976, p. 45-49. 以上年代順。但し, 目についた範囲での邦語文献のみ]。それ故, これ以上同種の批判を行うべき必要を感じない。むしろ反対に, 「適応 (Mead 的意味の)」なくして一体どんな社会が可能であるのか, と問いたくなる。なお以上に関連して言えば, 以下の本論を通して筆者は Mead の思考を理解することを第一義とするので, その実際上の有効性や現実への妥当性を逐一批判検討するつもりはない。
- 20) 壮大な Spencer 体系を, このように要約する事は恐らく危険である。しかし, アメリカにおいて Spencer 主義が有した意味は, 結局, このように要約して差しつかえないのではないかと考えられる [cf. Hofstadter, op. cit.]。
- 21) Spencer 主義は, Mead の理論よりは遥かに現代進化論の語りうる限界を超出している。少なくとも, 自然の淘汰圧が現在 (当時) なお直接的に作用している——人間の社会と個人の関係に対して——と考えた点において。
- 22) 実際には, 進化は, 量子論的に——いわば非決定論的「機械論」によって——説明される。「突然変異はそれ自体としては微視的, 量子的出来事であり, したがってこの出来事には不確定性原理が適用される。……それは本性そのものからして <本質的に> 予見不可能な出来事なのである」 [Monod, op. cit., 邦訳 134 頁, 圏点引用者, <> 内は原文の強調]。
- 23) ここの補足は, この引用文の直前の文章から, 文脈に適合する形で補ったものである。補足に恣意性はない筈である。
- 24) その好例は, 動物行動学者 D. Morris の〈裸のサル〉に関する三部作の一般教養書であろう。
- 25) その意味では, Mead は明らかに「社会有機体」論者である。「進化論的パースペクティブ」を受けつぐ者として Mead を Comte や Spencer と同列に位置づけた試みとして, Fletcher [1971, Vol. 2, p. 514-517] がある。
- 26) あまりに多くの論者が指摘してきたところであるから, 逐一その典拠を示す必要はないと考える, よって

省略する。

- 27) 無論, これは MT よりの引用であるから, 相当に割り引いて考慮する必要がある。
- 28) むろん, 「経験論」対「合理論」といった相互に排他的な二分律など成立しない。筆者は, Mead の「経験論」は相当程度「合理論」に傾斜していると考える。理由は以下本論に示す。
- 29) この一般的な「問題解決の論理」の枠内では, 「歴史家, 言語学者, 社会統計家のリサーチ法と, 生物学, 幾何学, あるいは物理化学者らのそれとの間に, ^{メソッド}手法の見地からして根本的相違はない」[Mead, 1906 in SW, p. 61] と主張される。Mead の科学論はかなり早期から基本的に変化していないらしく, すでに同種の主張を含む「社会改革における作業仮説」[Mead, 1899 in SW, p.3-5] は 1899 年に著わされている。さらに, Mead [1900, in SW, p. 7ff] 参照。
- 30) それが発見されるのは, その存在によって研究者の(習慣的な)行為がさまたげられることによっている。かくて, Mead の科学論は「問題解決」を共通項として, その行為論と関係している。
- 31) 「観察には, 実験にあるのと同じほどの正確なテクニックが存在する」[MT, p. 284]。Mead の「検証」概念は極めて幅広いものである。「思考実験」——これは彼の行為論における「内的リハーサル」に対応するといえようが——は重要視されている。Mead は実際には調査, 実験には携わらなかったといわれる(それ故, しばしば内実なき理論と批判される [cf. Meltzer, 1964, in Manis & Meltzer, eds., 1967, p. 22]) が, 報告書こそ書かなかったものの, Chicago 大学および Chicago 市の様々な調査に参加・協力していたといわれる。但し, それが今日いわゆる「実証的」なものであったかどうかはわからない。
- 32) Mead 流に表現すれば, 例外それ自体は個人的な反作用に由来するが, それがそれ以前の「法則」という共有された「話想宇宙 [universe of discourse, 論理平面とも訳す]」における「意味シンボル」によって表現されるとき, 初めて社会的なものとなる, という事である。
- 33) これは, すでに本論第 I 章 1 節 1) 項の a) (13 頁) に示した Bridgman の「操作的定義」の論理と同種の発想である。しかし Mead は, Bridgman の意味での「操作的定義」を唱えてはいない。では, いかにして概念の客観性は保証されるのか? その検討は次章に残さねばならない。その点にこそ Mead の「コミュニケーション」論の要点があるからである。
- 34) Mead は殺人を例にとって, 検察官, 社会心理学者, 外科医といった見地からの因果推論を示し, それらの相違が各立場の関心に基づく相違である事を示す [MT, p. 276-277]。又, 目的論と機械論の対立については, 生物学に例を求め, 機械論によって全てが説明し尽せるなら目的を導入する必要のない事, 従って, 「機械論的証明と目的論的なそれとの間には真の葛藤は存在しない」[MT, p. 271] 事を主張する。そして, 研究者はいかなるドグマに束縛される事もなく仮説を追求しようとする [MT, p. 267-273]。かくて Poincaré の『科学と仮説』を引用しながら, Mead は言う, 「あらゆる判断は必然的に仮説的判断である」[MT, p. 339]。このような Mead の科学的相対論の立場は, 彼の「パースペクティヴ」の議論につながってゆくものと見てよいだろう。
- 35) Cottrell 派の Blumer 批判 [e. g., Rexroat & McPhail, 1979] は, しばしば Mead における「操作手続」を強調する。しかし, Mead は「操作主義」にコミットしてはいない。(その点で, Kuhn の相互作用論とも異なっているといえる。) Cottrell は, Mead 理論と Sullivan の対人関係論を統合しようと考えていた [cf. Cottrell, 1978] ため, Bridgman の影響を強く受けた Sullivan の理論を通じて, Mead 理論をも「操作主義」的と考えるようになったのではないかと筆者は推測する [cf. Sullivan, 1947, 邦訳 1976 年; 1964]。
- 36) ここでの邦語訳は, 船津 [1976, p. 74-5] に従っている。
- 37) ここでの邦語訳は, 船津 [1976, p. 71ff] に従っている。

- 38) Blumer は、実際には、「定義的概念 definitive concepts」を否定して「感受概念」の使用を主張しているのではない。「感受概念」を使用して研究を蓄積するうちに、その努力を通じて「理論的使用に耐える真正の定義的概念が形成される」[Blumer, 1969, p. 143]と望んでいるのである。
- 39) この文章の末尾を「だろう」としたのは、Blumer の「^{エクスプロレーション} 探査 - ^{インスペクション} 精査」という方法論記述の部分には、一度も「感受概念」なる用語は出てこない（‘sensitize’ は一回用いられている [ibid., p. 41]）からである [ibid., p. 40-47]。Blumer の概念の用語法は、それ自体「フレキシブル」で、一定していない。しかし、彼の別の論文 [ibid., p. 127-139, 140-152] を読むかぎり、彼がその「探査-精査」過程でも「感受概念」を使用するであろうことは間違いないと思われる。
- 40) ここで「第一義的に」と書いたのは、実際のところ Blumer は概念の社会性を全く放棄しているのではないからである。彼の主張は、「厳密」とされている概念定義が少しも厳密ではなく又現実をよく反映してもいない、という不満に始まって、ひとたび「現実それ自体」に「感受概念」をもって迫ることから、より妥当な概念化を目指そうとするものと考えられる [ibid., p. 140-152]。この意味では、Blumer と Mead の方法論的相異は決定的なものではない。従って、「Blumer は Mead が要求する全てを拒絶する」という McPhail & Rexroat の批判はゆきすぎである [McPhail & Rexroat, 1979, p. 454]。Lemert のいう如く、「Blumer は社会学を芸術に還元しようとしている、という意味での人文主義者ではない」[Lemert, 1979, p. 115] のだ。よって、彼を人文主義的と分類する視点も、必ずしも妥当とはいえない（本論 26 頁参照のこと）。
- 41) 「ほぼ同様」という限定の意味は、上の注) 35), 40) に明らかであろう。
- 42) McPhail & Rexroat の Blumer に対する方法論批判は、相当に詳細な Mead との文献比較になっている。その論点に対して、Blumer は逐一反論するという手続をとっていない [cf: Blumer, 1980]。結局、論争が成立しているとは言い難い。
- 43) 「生理学的」といっても、Mead のそれは、かつて Merleau-Ponty が批判した用法、つまり「行動の分析によって……行為の背後に仮定されざるをえない現象」[Merleau-Ponty, 1942, 邦訳 99 頁] の意味で用いられているにすぎない。従って Mead の「生理学的概念」は、何ら客観性の保証を有するものではない、ともいえる。しかし、ここではその点を批判するよりは、むしろ Mead が当時であって最も「客観的」であると考えられた「生理学的概念」に注目しているという点をこそ強調したいと考える。
- 44) 例えば、Blumer が「Mead の社会学に対する意味」を論じたよく知られた論文 [Blumer, op. cit., p. 61-77] では、すでにこの点は全く無視されている。同様の事実が、Kuhn [op. cit.], Kuhn & McPartland [1954 in Manis & Meltzer eds., 1967, p. 120-133] における「態度 attitude」概念、R. H. Turner [1956, p. 316-328; 1962 in Rose ed., 1962, p. 20-40] における「役割取得 role-taking [Mead の用語では taking the role/attitude of the other]」の概念についても妥当する。逆に、これらの概念の「生理学」的性格を強調するのが Cottrell の一派である。例えば、Cottrell 派の Lewis などは、Mead 理論を、「社会生理学 sociophysiology」とでも呼びうるような新しい学際領域をひらくものである、といった主張をしている [Lewis, 1979, p. 263, 圈点引用者]。
- 45) 従って、論述のこの部分では Mead の社会的・心理的な分析に関しては触れない。それらは、次項を参照されたい。
- 46) 誤解を避けるためただちに補足するならば、Mead は「態度」の生理学的根拠をただ神経系にのみ求めているのではない。「なぜならば、神経系は、生物体全体のある特別な部分にしかすぎないからである」[MSS, 邦訳 121 頁]。概して Mead の生理学的概念化が（今日の眼からすれば）曖昧なものである事は否

めない。Mead 自身の有機体論的志向（それは彼の思考の統合原理たる進化論的発想と表裏一体のもの）が、その曖昧さを増大させる方向に作用している事も疑いえないだろう。彼は、人間行動の基底の原理をその生理学的概念化に求めるのだが、その生理学的概念化自体が、彼の有機体論的な進化論的発想の枠内に置かれているので、ちっとも行動を生理学に還元することにならないのである。‘有機体論的還元主義（そんな表現が可能ならばだが）’とでも言えば良いかも知れない。ともあれ Mead においては、その「態度」≡有機体の全体的体制、といった発想に端的に示される如き有機体論的思考が、生理＝心理二元論を克服する駆動力となっている。Natanson のいう「Mead は心身問題の豊かな可能性を追求しなかった」[Natanson, 1956, p. 57] は、およそ文脈外れの批判というべきであろう。

- 47) それを最も端的に例示するものは、Mead がよく用いた、争っている犬の身「構え」という全身的な有機体的体制であろう。
- 48) ここに示されている Mead の進化論的発想は明らかであろう。例えばこのようにして、彼はその生理学的概念を進化論に包摂してゆく。
- 49) むろん、闘犬の身構えの如き内部的態度から人間の「言語」という行為^{アクト}＝態度に至る過程には、(生理学的進化論の説明に加えて)社会的、心理的な理由づけがなされている。それは、しかし、別項で論じる問題である。
- 50) Mead はこの定義を、MSS の中では極めてひかえ目に提出している。彼の生理学的根拠の曖昧さについては注 46) で述べた。なお、「態度」概念に連関して、二点ほど補足しておく。第一に、Mead は晩年に至るまで一貫して或る程度の「社会的本能」を認める、本能論的な思考を捨てなかったということ。この本能論に従って、幼児(新生児)における「他者の態度を取る事」の能力が保証されている。Mead は、1909 年の論文において「マクドゥーガル、ロイス、ボールドウィンの……立場が仮に一貫して主張されたなら、それが心理学に対して持つ意味を」強調したい、と述べ [Mead, 1909 in SW, p. 97, 圏点引用者]、本能説を模倣説に対抗させている。「反省的意識に先行して、……どんな子供の生活においても、社会的本能から生じる行動によるこのような相互関係の条件が存在していなくてはならぬ」[ibid., p. 102, 圏点引用者]。つまり、新生児において「他者の態度を取る事」が可能であるためには、その事を可能とする生得的／本能的能力(「社会的本能」)が当然要求されるわけだ。しかし、「本能論」の衰退とともに Mead は「本能」を大々的には語れない状況に直面する。1910 年には、「他個体から本能的な反応を要求する動作」, 「社会的行為の示標に本能的に反応すること」といった表現が散見される [Mead, 1910c. in SW, p. 124, 131, 圏点引用者] が、もはや本能論が正面切って主張されることはない。1922 年の論文では、「全ての高度に組織化された生体にあつては、部分的にあらかじめ決定された反作用……や、おそらくその他の、例えばいわゆる群れ本能といった反作用を呼びおこす」というような具合に、幾分もどかしげに生得説が説かれている [Mead, 1922, in SW, p. 243, 圏点引用者]。過激な経験論＝学習説(例えば Watsonism)の渦中にあつて、Mead は多少とも生得説を捨て去らずにいた。或いは、そうすることができなかった。なぜなら、一定の生得説を採らぬ限り、新生児における能動的(≡反模倣説的)、生理的(≡反「心理主義」的)な「他者の態度を取る事」が説明できないからである。こうした Mead の「本能論」的傾向は、概して無視されるように見える。例えば、T. W. Goff は、Mead が、人間の新生児では『「本能によるパターンづけ」が欠けて』いると考えた、とし、「人間の幼児は、他の動物がもつ高度に特殊化された本能に対して、相対的に不確定的な『衝動』をもって誕生する」と主張した、という [Goff, 1980, p. 58]。Mead は、しかし、「高度に特殊化された本能」は否定したが、先述のごとく、「本能によるパターンづけ」の全てを否定したのではない。さらに、Goff による Mead 理解では、Mead はその自我発達論の初期(遊戯段階^{プレイ}以前)では

幼児は「受動的 passive」であるが、ある時点から能動的になり、「自分の泣き声の意味を想像上で自覚するようになる」のだ、と主張した、とされるのだが [Goff, op.cit., p. 59, 圏点引用者]、これも不適切な理解である。Mead の「他者の態度を取ること」は、はじめから能動的な生得的能力であるし、「泣き声」の「意味」が自覚されるのは、「想像」によってではなく、「泣き声」に応答する「他者の態度」を子供が「取る」ことによって、「他者の反応」を内在化させ、その視点から、自分の「泣き声」の「意味」を「態度」に（生理的に）移入させることによって、である。それは「想像」などといった心理的要因を媒介してのことでは全くない。「想像」(Mead 流に言えば「予期される未来の心像 mental images」)が「自我」の一部として働き出すのは、「自我」が生じてのちの事であって、このような発達段階最初期の事ではない。Goff の理解では、Mead において能動的かつ生理的なものと考えられていた発達段階最初期の社会化のメカニズムが、むしろ受動的かつ心理的なものとして想定されている。以上、「態度」に関連する第一の点。もう一点、これは指摘するにとどめるが、Blumer には「態度」概念の曖昧さを激しく告発し、それは「確かな理論化をさまたげる」[Blumer. op. cit., p. 92] ものだ、と主張する論文 [Blumer, op. cit., p. 90-100] があって、(皮肉にも)これは事実上、Blumer の Mead 批判とも受け取められる内容を持っている。

- 51) Mead 自身は、「役割取得 role-taking」という用語はまず使用していない。何時、'taking the role of the other' が 'role-taking' に変わったかは定かでないが、Cottrell 派の研究者は、両者を区別して、前者を略称 TAO, TRO などと呼称している [O' Toole & Dubin, 1968]。いずれにせよ、「態度」とならんで「役割」という用語を使用したのは Mead の理論化においては望ましくならぬ混乱を導入する結果となった。生理的「態度」は想定できても、生理的「役割」を想定させるには、この用語は余りに社会的コンテクションを負いすぎているからである。より精確に表現すれば、〈特定「役割」の実行に伴う「身振り」が表出しているところの「態度」〉という事にでもなろうか。ともあれ、かつて L. A. Coser が適切に指摘した通り、「[Mead の] 役割取得の概念、つまり自分に対する他者の態度をとることは、現代社会学者が役割達成……と呼ぶものと混同されてはならない」[Coser, 1971, p. 340] のである。
- 52) 「他者との相互作用の間を通じて、我々は彼らの次の行為を分析するが、それは彼らの構えの変化やその他の進展する社会的行為の示標に我々が本能的に [無意識に——補足引用者] 反応することによってなのだ」[Mead, 1910c in SW, p. 131, 圏点引用者]。おそらく、この部分は Mead 理論の眼目のひとつだろう。通常の社会的相互作用状況において、二人の人間は相互に相手の態度を取り合い、互いの態度を調整 adjustment させ合って相互交渉を行うが、この過程は通例、無意識的に進行する。従って、そこには自我も精神も機能していない。Mead においては、普段我々が親しんでいる「相互作用場面での意味解釈過程」が、生理的「態度」の相互の取りあいにビルト・インされているわけだが、この習慣的過程は、多義的な意味解釈の余地を残していない。(もし、それが生じたら、それは「問題状況」となる。)「他者の態度を取ること」の精確性は、Mead の理論化の中では極めて高いものと想定されている。なぜなら、そうでない限り、ヒトの幼児はそもそも人間として発達しえない(自我を持つに至らない)からだ、というのが Mead の発生論的な理由づけである。「ある人が、自分の話すのと同じ言葉を相手から話しかけられたときに、その時に彼がとるであろう態度をある程度はとらない限り、その人は自分の話すのを聞くことができない」[Mead, 1913 in SW, p. 145-6] のだ。
- 53) このような理論化の当否は後に検討するとして、こうした発想は相互作用論には全く (Cottrell 派を除いては) 継承されていない。例示すれば、Blumer のいう「社会的相互作用の本質」は、「象徴的相互作用は行為の解釈を含む」[Blumer. op. cit., p. 8, 圏点引用者] という主張である。(もっとも、Blumer は「反射的反応 reflex responses」に基づく「非象徴的相互作用 non-symbolic interaction」をも認めてはいる

[ibid.]. しかし、Mead における「無意識の相互的調整」は、実は後述の如く、まさに有意義シンボルによってこそ促進されるものなのである。さらに Blumer の関心の焦点は、明らかに「行為の解釈」を含む相互作用にある。) Kuhn の操作主義的な相互作用論の図式 [Kuhn, op. cit., p. 50] には、Mead の「意識されない行為の相互的調整」を許容するものは全くない。Kuhn & McPartland の TST に関する論文では、「自我への態度 [Self-attitude, 通常は「自己態度」と訳される]」を測定しようとするわけだが、これは完全に心理的なものを測定しているといつてよいだろう。つまり Mead と Kuhn とでは「態度」概念の内容が全く異なっているといえる [cf. Kuhn & McPartland, op. cit., p. 120-122]. Turner においては、「[役割取得は] 常に、勝手に理解されたシンボルや身振りと関連で他者の行動にただ反作用するだけ、というより以上のものである」[Turner, 1956, p. 316, 圏点引用者] という理解が示されている。かくて、Mead 理論の「相互作用論化」は、どうやら生理-心理-社会という三つの水準のうち、第一の基底的な水準を切り落すことによって進行したものの如くにみえる。であるならばそれは、心的相互作用論 *psychic interactionism* と呼ばれるのが相応しいだろう。

- 54) その詳細は、次節 3) 項にゆずる。
- 55) むろん、「他者の態度を取る」という発想それ自体は、よく指摘されるように、直接的には Cooley の「鏡像自我」なり A. Smith の先駆的な発想に起因しているものだろう。しかし、Mead が例えば Cooley と決定的に違うのは、その「他者の態度を取る」という発想が、基本的には全く心理的要因を必要としないで生じる、生得的・生理的な能力として想定されていることであり、おそらくこの一事をもって、Mead の理論は極めてオリジナルなものと呼びうるものとなっている、という事であろう。
- 56) ここでは、その生理学的根拠との関連でのみ扱う。より詳しくは次項参照。
- 57) Faris の次の指摘は Mead 的な発想をよくとらえている。すなわち「一方では生得的メカニズム [本能的無意識行動] を、他方では獲得的メカニズム [習慣的無意識的行動] を、除外してしまえば、残るのは意識的経験の全領域であり、それは『抑止された行為』『反省的行為』などと命名されるような、妨害に直面する行為を含む……」[Faris, 1937, p. 39, 圏点引用者]。そして、Mead は、「無意識に達成される行動の領域」を、相当に広範なものにとらえていたようだ。
- 58) 「I」と「Me」については後に詳しく検討する。
- 59) この認識によって、Mead は精神と身体のパラレリズムを、回避しようとした。
- 60) こうした認識をも、彼の生きた「時代背景」に関連させて批判するのは容易であろう。しかし、筆者は Mead 理論のこの部分に最も強い魅力を感じるものである。総じて現代の社会=心理学的理論化は、「自己意識的人間像」とらわれた「意識遍在主義」の如きものに傾斜しているようにみえる。「過意識的人間像」とでも D. H. Wrong [1961, p. 183-193] をもじってみたくなる。現実には、普通人は常にあらゆる事を意識し考えて行為する程の物理的-心理的-社会的自由/能力を有してなどいない、と筆者は考える。(多分、生きる事とは考えない事である。)[「常にあらゆる可能性」を考えようとしていられるのは恐らく一部の学者くらいのものであるに違いない。
- 61) 最近 (82. 10. 16.) 借覧できた概説書 (J. A. Schellenberg, *Masters of Social Psychology*, 1978, Oxford) では、「社会的行動主義」という用語は、「Mead がむしろ偶然使った語句」であり、これを Morris が彼の社会心理学の格好の Tag として用いたという意味のことが記され、Mead がこの用語を実使用した事が認められている [Schellenberg, 1978, p. 45]. 又 Miller も、Mead がこの用語を強調した、としている [Miller, 1973, p. xxix]. これらは第 I 章注 66 の見解と矛盾する。(但し、Schellenberg の方の記述は典拠を欠いている。)
- 62) 周知の如く、Mead は Watson の動物心理学実験に興味を示したし、又、Watson は Mead の講座を受講し

ている。しかし Watson は Mead の思考を理解しなかったし、Mead は Watson の行動主義に反対した [cf. Miller, op. cit., p. xxvii. 但し、この部分は一部、*A History of Psychology in Autobiography, Vol. II* の Watson の項よりの引用からなっている]。

- 63) Miller からの引用部分の主語は、原文の文脈上では、当時進行しつつあった「内観主義への反抗」となっていて、必ずしも Mead の主張と直接一致するものではないが、この引用部分が Mead の意図を端的に示しているという理由から、文脈を敢えて侵犯して引用した。(ちなみに Mead は内観を否定してはいない。)
- 64) ここに引用した論文は 1900 年に発表されている。この年 Watson は Chicago 大学の心理学科大学院に入学している [安田, 1968, p. 375]。従って、Mead の基本的な発想が Watson によって触発されたものとみることはいえない。Watson の「行動主義の中心的主張」が形成されたのは、1908 年に彼が、Johns Hopkins 大学に移って以後のことである [cf. 今田, 1962, p. 359]。いずれにせよ、「[Watson が] 意識のあらゆる状態を否定したことは事実だが……彼はただそれを広めたにすぎない。だから彼を [行動主義の] 普及者とするにはできようが、決して創始者とするわけにはいかない」[Roback, 195, 邦訳 334 頁および同訳書 19 章] のであり、Watson-Mead 関係のみを強調することは、当時の一般的な学的傾向を見逃すことになるだろう。
- 65) ここに示した引用内容とほとんど変わらない主張が 1922 年の論文にもあらわれている。「他者を含むような意識経験から対象が排除されているからそれが主観的になるというのではない、それが主観的となるのは……それが一人の個人によって彼の自我に [のみ] 参照せられるが故である」[Mead, 1922 in SW, p. 241]。この部分での Mead の意図が基本的に変化していない事の一証左であろう。
- 66) Mead は対象の性質に関する J. Locke 以来の区分 (第一次 primary と第二次 secondary) を継承し、第二性格の遠距離経験 (例えば視覚) が、第一性格との接触経験 (例えば手による操作) と照合される事で、対象の客観性が保証される、或いはより弱い表現をすれば、対象のリアリティが検証される、と考えていた [cf. Mead, 1907]。詳細は別項にゆずる。
- 67) 引用文中、[] 内の表現は原文では別様のもとなっていて、長い表現なので [] 内のごとく言いかえた。その恣意性を懸念する向きは原文に当たられたい [SW, p. 102, l. 10~18]。
- 68) この引用部分の主語は「精神」であるので、直前の 1922 年論文の引用と精確に対応しているわけではない。しかし、この文脈ではさして問題にならないと考えた。
- 69) この MSS の注 (25) は、講義録からの採録であるが、採録年代不詳である。もしこの部分が 1930 年講義の速記録からのものであれば、以下の本論の筆者の主張は一応の意味をなす。そうでない場合、筆者は本論の「30 年」という部分を「20 年」に改める必要がある。
- 70) この論述部分にはおそらく異論が出るだろう。実際に、Mead は意味についての論を展開し、その定義をも示している。しかし、Mead の思考の全体的な意図からすれば、彼の意味に関する議論は、その社会心理学的体系の、いわば説明原理のひとつであり、それ以上に重要視されている又は精密化されているという訳ではないように思われる。つまり、Mead の意味論は手段であって目的ではない。少なくとも Mead 自身にとって、この問題は一定程度解決済み [MSS, Chapt. 11] だったのであり、それが中心課題だったのでない。Mead に従うなら、「意味の意味という問題について、巧みな議論が多くなされてきたが、無為におわっている。この問題を解くのに、心的な状態 [心理的変数、補足引用者] を拠りどころにする必要はない」[MSS, 邦訳 89 頁] という事だ。
- 71) じっさい、Morris が指摘するごとく、このような方向性は、「Watson が登場するずっと以前から確立されていた方向性、プラグマティズムの進化論的アプローチに内在していた方向性」[Morris, op. cit., p. xvii]

だったと考えてよいだろう。

- 72) 「遠距離経験」に対比され、対象の「操作 manipulation」を含む「接触経験 contact experience」の概念は、後に至るまで Mead の理論化（特にその行為の段階論）に影響を及ぼす重要な概念であるが、Mead はこれを、G. F. Stout の *Manual of Psychology* 初版（1899）から得たらしい [cf. Mead, 1907 in SW, p. 77-78].
- 73) Mead がその身振り＝言語起源論を展開するにあたって、C. Darwin の表情論、および W. Wundt の「身振り」論を批判的に摂取した事は、よく知られている。Darwin の表情論は、その全体が、彼のいう「三つの原則」を例証する事に充当されている。「原則」のうち主要なもの、その「第一の原則」を要約すれば、「欲望を満たし、又、感覚を和らげるのに役立つ運動（表情）は、習慣となり、当該の欲望や感覚が感じられると、有効性の有無と無関係に遂行される」ということになる [cf. Darwin, 1921, 邦訳（下）423 頁]。つまり、Darwin は「情動の表現が身振りの唯一の機能であるかのように見なした」[MSS, 邦訳 49 頁] のであり、そのコミュニケーションな機能について考察を進めなかった。それが Mead にとっては満足のゆかぬ点だった。そこで Mead は、Wundt の『民族心理学』第 1 巻『言語』に依拠する事になる。（Wundt の *Völkerpsychologie* (1900-1920) は、全十巻から成る大作であり、その第一、二巻が『言語』にあてられている。筆者は未見である。同一主題を異なった方法で論じたのが、*Elemente der Völkerpsychologie* (1912) であり、こちらは 大正十三年（桑田芳蔵による大意紹介）、昭和三十四年（比屋根安定による英訳よりの重訳 [らしい]）の二度にわたり、「邦訳」されている。筆者は比屋根訳を参照した。）『民族心理学（要論）』において、Wundt は「身振り言語が言語の根本形式であることを認めて」[Wundt, 1912, 邦訳 40 頁] いる。それは又、「人類の表現活動の自然発達」[同訳書 42 頁]、つまり進化過程にあるものである事も認められている。しかし Wundt は、身振りを交わす二人の自我を先験的に仮定している。従って、「内に起こった感激の影響を蒙って、問われた人々は、これと同じ、あるいは少しく違う表現動作を以て、返答せねばならぬ」[同訳書 42 頁] という事になる。このような先験的な自我を仮定する事には、Mead は反対した。「実際は、自我が社会過程との関連で、……説明されなければならない」[MSS, 邦訳 55 頁]。そこで、精神および自我をも社会過程から説明する彼独自の「身振り」論が展開されることになる。
- 74) Mead の〈科学的装置〉とは、Dewey の「道具主義」に対応する、科学の実用的価値を重視する発想から出た表現であるといわれる。「Mead は精神および自我の、その社会的進化に関する実証的研究と、社会内の人間の現実の問題に」関心を抱いていた [Pfuetze, op. cit., p. 230] のであり、その理論化の全体は、それによって社会改革を進行させるための一種の〈装置〉だった。Huber はこれを、Pragmatic bias であると批判している [Huber, 1973, op. cit.]。
- 75) すでに 1967 年の Blumer-Bales 論争において、この点は批判されていた。「社会的行動主義は、Mead にとって、まさに意味の監獄を破って出る哲学的な鍵^{キイ}だったのに、Blumer は……自らその監獄に閉じこもっている」[Bales, 1967, p. 546]。またこの論争では Stone & Farberman によって、Blumer が、「Cooley の共感的内省を想起させるような主観的唯名論を含意している」という指摘もなされている [Stone & Farberman, 1968, p. 410]。
- 76) Baldwin の立場を要約して Mead はいう、「自我と他者^{ソシウス}とは分離不能であり、択一的な分化および同化を媒介するのは模倣である」と [Mead, 1909. SW, p. 95]。しかし、Mead にとって「模倣が理解しうるものとなるのは他者の自我についての意識が出現してからの事であって、それ以前の事ではな」かった [ibid., p. 100] から、模倣説による Baldwin の自我発生論には同意し難かった。（Baldwin の自我の発達段階は projective-subjective-ejective の三局面からなるが、subjective の段階において「模倣」が自我意識の出現

の説明原理となっている [Baldwin, 1897 in Gordon & Gergen, eds., 1968, p. 161]. Baldwin 自身は心理学者だったが、その理論化は社会的傾向を明示するものであり、Ross (1908), McDougall (1908) に先行して、「おそらく英語の著作で初めて」[Mueller, 1976, p. 245], “A Study in Social Psychology” の副題をもつ *Social and Ethical Interpretations in Mental Development* (1897) を著した、「社会学理論の心理学上の先行者」の一人だった [cf. Petras, 1968, p. 132-142; Mueller, 1976, p. 240-253; Stryker, op. cit., p. 23-24].

- 77) [] 内に示されているのは Cooley の『人間性と社会秩序』および『社会組織編』の二著である。
- 78) Mead-Cooley 関係については、Mead [1930 in Strauss ed., 1964, p. 293-307] に、Mead による Cooley 社会心理学の詳細な検討がある。それによると、Cooley は「精神それ自体がコミュニケーションを通して個人の内部に生じる」ことを認識していた点で、「模倣説」にたよる Tarde や Baldwin, 社会的相互作用を通しての自我の構成を余り論じなかった James に比較して、すぐれていた [ibid., p. 300]. つまり、Mead のいう「自我の社会的起源」をよく認識していた、という事である。しかしながら Cooley の問題は、一方で心理過程と生理過程のパラレリズムを認めておきながら、自我と他者とを共に意識内部に位置づけた事である [ibid., p. 302-303]. 彼は自己の属す洗練された文化にのみ興味があり、これらは確かに精神内部に位置をもつだろうが、しかし彼の理論化は、原初的衝動から高度な文化的表現までの人間行動の全域を科学的に説明するものではない [ibid., p. 303]. さらに Cooley は厳密な科学的手続きを重視しない [ibid., p. 303]. 「彼の方法とは、精神に、相互作用し合う諸自我の座を求める一種の内観だが、この精神をいかに客観化するかという方法論的問題を、彼は形而上学的だといって押しつける。だからその方法は心理学的なものだ。彼にとっての社会とは、心的な全体にすぎないのだ」[ibid., p. 304]. そして Mead は問う、「自我が精神内部に存在するという Cooley の説明は、客観的社会生活内における社会的個人を適切に説明するだろうか？」と [ibid.]. さらに Mead は、Cooley における「空想」や「観念」をもって社会と個人を説明する方向性を批判する。そして「自我」は「心的」であるよりは、「経験の客観的局面」に属するものだ、と主張される [ibid.].

この論文には、Mead の主要関心の多くが示されている。つまり、i) Cooley と同じく、自我の社会的起源を主張する。ii) それを、心理=生理パラレリズムを克服する形で行う。iii) しかも、自我や社会の説明をただ心的なるもののみ求めず、客観的・物理的な経験の局面との関連で行う。iv) そして、最も原初的なレベルから「いわゆる高度な」[ibid., p. 302] 社会過程までもを説明しうる体系を構築する。すでにこの論文は、Cooley 批判の形での Mead の自説の主張というに近い。

たしかに、Cooley の社会心理学は、すぐれてメンタリスティックなものであったといえよう。例えば Cooley においては、「社会秩序の有機的全体は人格とほとんど同様の性質をもつ心的事実」[Cooley, 1920, p. 135, 圈点引用者] なのであり、そのような社会の理解に必要とされるのは、人格理解の場合とほとんど同様の「同情的想像」なのである [ibid.]. そしてそうでない限り、「全く社会学的とはいえない」という主張がなされる [ibid.]. そして社会学的概念や観察は、「本質的に直接的かつ生々 fresh のものでなくてはならない」[ibid., p. 144] とされるのである。

Cooley のこうした側面に、Mead は強く反発したであろうと思われる。Mead の客観主義的方法論（本節2）項と、上掲の Cooley の主観的方法論とは鋭く対立するものであるといっていよう。

およそ以上が、Mead-Cooley 関係における基本的な両者の相違点であると考えられる。

- 79) その生理学的根拠についてはすでに述べた（前項b）参照）ので、ここでは主としてその社会的根拠に関して述べる。Mead に即していえば「[精神や知性を発達させる] 人間の生理学的能力は……生物学的な進化の所産である」[MSS, 邦訳 239 頁（注）27] という点にはすでに触れたので、「……しかし……それ自

身の現実的な発展は……社会状況を媒介にして進む [ibid.]、という部分について述べる、という事である [以上、 圏点引用者]。

- 80) Meadにおけるこうした有機体論的社会観は、Cottrellの次に示すMead理解において極めて明確な形であらわれている。Cottrellによれば、「相互浸透的相互作用 interpenetrative interaction という用語は…… [Mead理論の] 本質的部分を示すものだ。それは、行動主義的にいうと、どんな所与の社会的相互作用においても、参与者は他者の部分となる、という重要な仮説を示している。このことは比喩的説明ではないという事は強調されねばならない」 [Cottrell, 1980, p. 52 圏点引用者]。このCottrellのMead理解（彼は1929年冬学期の「高等社会心理学」を受講している [Lewis & Smith. op. cit. p. 284-285]）が正しければ、Meadにおけるすぐれて関係論的な相互作用の理解が認められよう。つまり、Meadにとって「個人」の境界線は、相互作用論者や多くの諸領域の理論家が今日想定しているほどには確固としたものではなかった、という事だ。こうした方向性は、1920年代に「Sapirを介してMeadの仕事を知った」 [Strauss, 1977, p. x] 精神医学者H. S. Sullivanの理論化において一層徹底される。Sullivanの「人格」の定義は、「反復生起し、ある人の人生を特徴づける対人的 [interpersonal] な場の比較的恒常的なパターン」 [Sullivan, op. cit., 邦訳4頁, 強調原文] という、完全に関係論的なものとなっている。しかし、こうしたMead = Sullivan型の関係論的思考は、必ずしも主流的なものとはならなかった。T. J. Scheffによれば、「サリヴァンは、精神医学的徴候を対人関係の障害と定義……したのだが、彼の弟子たちは……症状を患者の中に置きもどしてしまった」 [Scheff, 1966, 邦訳19頁] のである。もっとも、この流れが'60年代にR. D. Laing, T. Szasz, D. Cooperらの、いわゆる「反精神医学」運動として一時注目を浴びた事は周知の通りである。
- 81) 「有意味シンボル」は、言語のみに限定されない。それと同様の機能は、「より低い程度でなら個体が見たり触れたりするその個体自身の身振りについても」存在する [Mead, 1922 in SW, p. 243]。Meadの理論化は、身振り→言語という進化過程を想定しているのだから、〈Verbal/Non-verbal〉という区別は、むしろ〈Gestural/Non-gestural〉という区別に倒置されているように思われる。
- 82) 以上の限定は、非言語的な「有意味シンボル」についても妥当するとみてよいだろう。
- 83) 無論、他にも自我発達段階の区別法は存在する。例えば、Martindaleの区別では、発達段階は二段階に分けられ、(1) 自分の自我に対する他の個人の特種な態度を組織化する。(2) 自分の自我に対する一般化された他者の社会的態度を組織化する。となっている [Martindale, 1960, 邦訳391頁]。これは、MSSのp. 158, l10以降 [邦訳169頁上段] の記述、「自我の十全な発達にはふたつの一般的段階がある……」に基づいたものと思われる。じっさい、Meadの自我発達論で決定的に重要なのは、いかにして具体的他者から抽象的他者へと、態度を取る対象を拡張してゆけるか、という点である。Meadは、この後者の態度 = 一般化された他者 (= 集団規範) の内在化が、「人格の十全な発達」にとって必要だと言うわけだが、現実にはしばしばそれを裏ぎっている。彼における「一般化された他者」の内在化は、「パースペクティブの内在化」としては事実命題たりうるかも知れぬが、「規範内在化」としてはもはや当為命題に等しい。関連して述べれば、Meadの理論化の中には、精神医学領域でいうところの「解離 dissociation」、つまり自我に統合されぬまま、しかも自己の中において行為に（潜在的に）影響する自我部分を生み出すような機制は存在していない。従って、Meadの「自我」は、たとえ「I」-「Me」関係の緊張を常にはらむとはいへ、すぐれて整合的かつ統合度の高いものであると思われる。
- 84) Meadの理論化においては「はじめから、有機体には行為が存在している。説明されねばならぬのは行為ではなく行為のとり方である」 [Troyer, 1946 in Manis & Meltzer, op. cit., p. 304]。だから、「有機体はそもそも行為するものと仮定され、この行為の原因は追求されない」 [Faris, 1936, p. 810]。但し、若干の

生得的≒本能的 drive が仮定されていることはすでに注50)に示しておいた。

- 85) この発想は、典型的に機能主義心理学的なものといっただろう。Meadにおける機能主義心理学的発想については注102)を参照。
- 86) 補足の恣意性を懸念する向きは、SWのp.242~243にまたがるパラグラフを引照されたい。Meadは、晩年まで、幾つかの生得的≒本能的な行動を認めていたようである。この点は、「説明概念としての本能は、人間の研究において事実上放棄されている」とする現代の相互作用論者[Lindesmith, et al, 1978, 邦訳220頁]とMeadとの相違点である。もっとも、本能説/学習説が排他的二分律たりえないという点については、さすがに両者とも一致しているといえようが。
- 87) 「態度を取る」ことは、模倣とは異なり、それ自体能動的な過程である。それによって、自我が生じる以前に、いわば「他者の眼から」自己を眺める事が可能となる。そこで、模倣説に同意しなかったMeadは(注76)参照)、この発想をもって自己対象化=自我析出の基本的説明原理となした。なお、「態度を取る」ことそれ自体の根拠は、進化過程において生得的なものとなったとして、進化論の枠組内で与えられている(本文41頁参照)。
- 88) その「普遍性」の根拠は、特に「有声身振り」および「言語(行為)」における、「人は自分が話すことばを、相手がそれを聞くのと同じように聞く」、という、その再帰性に求められている。従って、Saussure風というなら、Meadにおいては「概念」と「聴覚映像」とは分離されていない、或いは極めて高い一致度をもつ。「意味表示は、……二つの指示対象をもつ。一方では指示されたその事物に対して、他方では、反応、事例、意味または観念に対して、それはデノートし、かつコノートする。シンボルが自分に対して用いられたとき、それは名称 name であり、相手に対して用いられたとき、それは概念である。しかし、……デノテーションとコノテーションが自他相方に対して向けられ、……それが1つの話想宇宙内にない限り、デノートもコノートもなされない」[Mead, 1922 in SW, p. 246, 圏点引用者]。
- 89) Meadは有意味シンボルによる自己対象化=反省作用をもって、動物と人間とを区別する(ほとんど唯一の)相違と考えている。
- 90) このことは、MSSにおいては、特にその第4部 'Society' において顕著である。しかもそこでもMeadは、新しく何らかの説明原理を導入することをしていないから、いわば文脈が社会的・心理的な説明を要求しているにもかかわらず、それが与えられない、という結果(或いは筆者の「印象」か?)になっている。進化論的自然主義型の説明の限界といわざるを得ない。なお、「Me」の定義にあたって彼は典型的に社会=心理的な概念(「他者の期待」)を導入したが、それが内在化されるプロセスを、「話想宇宙」の「全員に同一の[生理的]反応を与える」特性に求めているので、社会=心理的概念がそれ自体の権利において論じられているとは言い難いように思う。しかもなお、「話想宇宙」がそのような特色を有さぬ限り、Meadの自我発達論の全体が崩れ去ってしまう。
- 91) 或いは「全員に対する一般化された他者の態度をめいめいが採用してはじめて、話想宇宙は存在できる」[MSS, 邦訳167頁]のである。だから、少なくともMeadの理論化内部では「一般化された他者」は論理的に要請されているのであって、それ自体にMead自身の「理想主義」や「ロマン主義」[cf: 宇賀, 1971年]的な傾向を認めるべき必要はない。しかし、であるとしても、Meadの理論化と現実との乖離は否定しようもない。T. V. Smithの言をかりれば、「残念に思われる事は、社会改革のすぐれた道具としての彼[Mead]の社会心理学に感じられる楽観主義が……何も適切な根拠づけを持たぬということだ」[Smith, 1931, p. 382]ということになろう。
- 92) こうした論調が直ちに想起させるのは、やはり、人類学および社会学における機能主義の発想であろう(本

文第 I 章 1 節 2) 項 a) 17 頁以降参照)。機能主義が「社会の存立」を大前提として掲げると同様に、Mead の理論化は「話想宇宙の先在」を要請する。Mead は共同的 co-operative な行為を人間社会の本質として理解した点では反 Hobbes 的であったが、「社会 = 人格の統合」を要請する理論化を行った点では Hobbes 的、また機能主義的であったといえよう。やや論点は異なるが、Mead と Parsons の類似性を指摘した論文として McKinney [1954, p. 565-574] が参考になった。

- 93) Natanson の Mead 理解では「一般化された他者が『距離をにおいて』知られるということは明らか」[Natanson, 1956, p. 67] だ、という。従って、それを「操作」し、「遠距離感覚」と「接触感覚」との照合からそのリアリティを検証することもできない、という事になる。
- 94) 従って、注 93) の Natanson の Mead 理解は全くの誤りとしか言いようがない。「遠距離に」あるのはむしろ「話想宇宙 (有意味シンボル体系)」であって、その生理的な直接的影響のもとにそれが個人内部に反映されたものが、「一般化された他者」であろう。であるなら、i) 「一般化された他者」は「遠距離」の対象ではない。ii) 「話想宇宙」の影響が「他者の態度を取ること」と同程度に生理的・直接的である限り、そこに意識的な解釈過程は介入しない。iii) 「一般化された他者」は集団成員全てについて一意的な意味性をもって内在化される。という事になり、Natanson の批判は Mead を読み変えたうえでのみ意味をなす。
- 95) ただし、事の当否はともあれ、Mead の理論化の中では「一般化された他者の役割を取ること」が要請されている事実は無視されてはならない。
- 96) さらにここから導かれる結論は、i) Mead の理論化と相互作用論の理論化とは対立する。或いは、(こうした表現が許されるなら) 両者の関係は、Parsons に対する Schutz のそれに類似する [cf. Sprondel, ed., op. cit.]. ii) Blumer が Mead 理論全体の〈正統な後継者〉たりうるはずがない。iii) Mead の理論を不完全なものとして断じ、そこから出発している、という点では、自己を Mead 理論の延長上に位置づけている Blumer の立場に比して、Kuhn の立場の方がより整合的である。iv) Mead の理論が実際に妥当だとみなされる範囲内においてのみ、Mead の理論化に忠実であろうとする Cottrell の理論化も現実に対して有効でありうる。というところだろうか。
- 97) これらのうち、Morris [1934, p. xxv], Rose [1962, p. 12], Lindesmith, Strauss & Demzin [邦訳 287 頁], Strauss [1977, p. xxvii~xxviii. この revised introduction (Lewis は 1964 年の original version に依拠しているが) でも、Strauss の見解は変わっていない] の四者について、Lewis の理解は妥当するが、Meltzer についてはやや強引な理解、Thayer については全くの誤解、をしているようだ。Meltzer [1978, p. 25] の「I」理解は、Kolb のそれ(「残余」)に同意しつつも、「補償」として有効であろう、という残余/補償の折衷論であって、全き「補償」論とはいいかねる。又、Thayer [1968, p. 258ff] は、「I」を「反応」として理解し、「補償」論とは理解しかねる論調である。Thayer は、「I」を過小評価する如き事は書いていない。ちなみに、もし Thayer を批判するのであれば、その「I」-「Me」という分類は、Mead にとって、「理論的探究のための暫定的原理 a tentative principle だった」[ibid., p. 258, 圏点引用者]、という部分をこそ問題とすべきだろう。
- 98) Kolb による Mead 批判の「古典」[1944, in Manis & Meltzer, 1978, p. 191-196] は、確かに「I」を「残余カテゴリー」とみなしている。Gillin [1975] の方は、掲載誌が我国にどうも入っていないこともあって、筆者は未見である。

《追補》本日 (11 月 16 日)、Gillin [1975, p. 29-47] を発見し、読了した。(上述「掲載誌云々…」は、古い『全国大学洋雑誌購入目録』に拠ったためのミスである。)

Gillin の Mead 理解は、Kolb に依拠しつつそれをさらに過激にしたものとみることができる。要約的に示せば、Mead の理論化では、「一般化された他者」が人間を完全に社会化、標準化、自動化してしまう。しかも「I」は単なる仮説的前提 presupposition、^{フィクシヤス}架空なものとして Mead 自身に於いても想定されている。だから Mead は完全な決定論者、「社会学的帝国主義者」[ibid., p. 31]、「哲学的帝国主義」者 [ibid., p. 32] だ。「Mead は一般化された他者の決定論的重圧の下に、個人を押しつぶす」[ibid., p. 35] のだ。「Mead の人間観は、社会状況によって決定されるモノ^{オブジェクト}というものだ」[ibid., p. 39]。以上に対する筆者の反論は、「一般化された他者」に関しては本文を、「I」=単なる仮説的前提という理解に関しては、注 100) を参照されたい。

《以上、追補》

- 99) この Lewis の主張には、検討さるべき余地がある。公刊論文においても、Mead の「I」への言及はかなり多様だからである。
- 100) Mead において「I」は仮説的前提 presupposition だった、という理解は一般的なもののようで、Lewis [ibid., p. 269], Reck [1964b, p. xxxi], Gillin [1975, p. 37] 等にそのような理解が示されている。両者とも、Mead [1913] 冒頭部分からそう判断しているのだろうが、筆者にはどうも納得いたしかねる。当該部分を抜き出せば、以下の如く。

…What is involved in the self being an object? The first answer may be that an object involves a subject. Stated in other words, that a “me” is inconceivable without an “I.” And to this reply must be made that such an “I” is a presupposition, but never a presentation of conscious experience, for the moment it is presented it has passed into the objective case, presuming, if you like, an “I” that observes — but an “I” that can disclose himself only by ceasing to be the subject for whom the object “me” exists. … [Mead, 1913 in SW, p. 142. underline added.]

ちなみに筆者のこの部分の理解は以下の如く。

「……客体としての自我に含まれるものは何か？ はじめの回答は、客体は主体を含む、というものとなる。換言すれば、「Me」は「I」なしでは考えられないということだ。そしてこう答えると、次のような反論 reply がなされるにきまっている。つまり、そのような「I」は仮説的前提ではあっても、意識経験のあらわれでは決してない、なぜというに、表象されたその瞬間に、それは、もし [Mead が] そうしたいなら観察する「I」とでもいったものを仮定して、その観察する対象事例へと移行してしまっているからだ、と。——だがしかし [ここから Mead 本来の、第二の主張]、その「I」とは、客体の「Me」がそれに対して存在する主体としての存在をやめることによるのみ、自らを表現できるものなのだ、と言いたい。……」

なお、この部分の邦訳は、すでに MSS 邦訳 385 頁に、(上とは異なる理解で)掲載されているので、比較検討されたい。実際のところ、この論文はもともと講演原稿であるから、見られる如く省略が多い。問題となるのは、reply (反論) する想定された主体の意見 “I” is a presupposition, but never a presentation” に、Mead がどの程度同意しているか、という点である。ところで Mead にあって Presupposition は、むしろ否定的な意味あい、〈先験的前提〉といった意味をもって使用されるようである。Newton の “Non Fingo Hypotheses” は、「hypothesis を作らない」事では当然なく、「Theoretical presupposition を作らない」事であると理解されている [cf. Mead, 1929, p. 427]。Mead の科学論 (本文 2 項 a)) からすれば、Mead は hypothesis は作っても theoretical presupposition はその使用を極力回避するだろうから、筆者にはどうも、Mead がこの論文で reply の主体に同意していない、つまり想定され

た reply の主体をまさに自身の所論への〈反論者 replier〉として論を進めているように思われる。「I」はつねに「Me」の意識の外部に含意されているものではあるが、〈先験的前提〉というよりは、明らかにひとつの確たる仮説 hypothesis として考えられていると筆者は推測する。

- 101) 原文では反応 response ではなく、本能的反作用 instinctive reaction となっているが、刺激に対応する概念として、反応と同義に使用されているとみてよいだろう。
- 102) Mead において、機能主義心理学的な発想が後期に至るまで根強く残っていた事は認めてよいだろう。Mead は「方法」としては行動主義的なアプローチを採用した(本文2項c))が、その心理学的な説明原理としては、機能主義に多くを負っている。(ちなみに、Mead の1910年の論文 [Mead, 1910c, SW, p. 123-133] は、James の『原理』における「ロウソクに手をのばす子供」の行動の反射弧概念による説明 [James, 1952, p. 16] に対して同例を用いて機能主義の説明を行った Dewey [1896, p. 357-370] の著名な論文を、それをさらに同例を用いて Mead 流に展開したものである。) 補足の要はないかも知れぬが、Dewey の論文が主張した事は、「刺激」と「反応」とは各々別個に独立した実在ではなく機能^{エンティティ}であって、一つの全体としての行為^{アクト}の中で、適応という目的に向けて機能する協同 coordination 的な過程である、という事であったと言えよう。そこに見られる表現、例えば「運動的^{アクト}反応ないしそれを構成する注目こそが、次の行為^{アクト}に対する刺激となる」、「感覚刺激が動作を決定するのが事実であるのとまさに同じように、運動的^{アクト}反応はその刺激を決定する」[Dewey, op. cit., p. 363, 圏点引用者]といった表現は、本文中に示した Mead の発想と同一であるといつてよいだろう。
- 103) この点に異論のある方は、本論の注50)における筆者の理解を参照されたい。
- 104) すでに Kolb の批判は様々に引用されているし、その前半部分は MSS 邦訳版の「解説」369~374頁に要約紹介、批判されてもいる。だから本文中では繰り返さない。反論のみを示す。
- 105) 従って、この場合は実際には「問題状況」に該当しない。共有されていた「Me」が、相互行為として確認されたにすぎない。
- 106) 無論、言うまでもなく、ここまでの Kolb に対する反論は、不完全極まりないものでしかない。しかし、そもそも Kolb の Mead 理解がそれほど適切なものではないと考えられる以上、この先 Kolb を引いて反論してみても仕方がない。ここでの反論の不完全な点は、さらに論を進めた地点で検討されるだろう。
- 107) 論述の次の段階へ移る前に、ここまでの議論が相互作用論とどのように関係しているかを指摘しておく。Blumer の Mead 理解、特にその「I」-「Me」関係についての理解 (Blumer の自我論 [Blumer, op. cit., p. 12-15, p. 62-64]) は、i) 「態度」としての「I」-「Me」、という理解を全く欠いている。すでに注50)に指摘した通り、Blumer は「態度」概念全般に対して否定的である。従って、彼の理論化は、概して「Me」の側面(規範被拘束的側面)を無視する傾向が強い。ii) Blumer は Mead が「人間とは自我を持つ^{ハヴン} having 生き物だと考えた」という理解をする [ibid., p. 62, 圏点引用者]。全くの誤解である。Mead において自我は態度の局在的機能であるから、この理解では、(たとえ——よく知られる如く——彼が自我を過程であると強調したにしろ)自我は遍在することになり、Mead の理論と矛盾する。iii) 「態度」としての「Me」を認めないが故に、Blumer のいう自我は極めて流動的である。そこでは自我の再帰的性格 (Blumer の用語では「自我との相互作用 Self-interaction」)ばかりが強調される [ibid., p. 13-14, p. 62] が、一体何が何と Self-interact するのか全く不明確である。(Blumer の理解では、「彼」が「彼自身」と Self-interact するらしいが、そんなことは自明である。何の説明にもなっていない。) iv) Blumer は、Mead の自我発達段階説を次の如く理解する。「具体的 discrete 個人 [の役割] (遊戯段階) から、具体的な組織化された集団 [の役割] (ゲーム段階) を通して抽象的 abstract な共同体 [の役割] (一般化された

他者)へ」,と [ibid., p. 13]. ちなみに「集団」は複数形,「共同体」は単数形名詞で示されている. 問題は,「共同体」の規模を Blumer がどう理解したか,である. Mead の(当為としての)理論では,「共同体」は極めて大きな(一般的な)ものである. しかし Blumer の「共同体」は,彼の方法論が有効であるためには,(前述の如く)Mead のそれに比してずっと小規模なものと想定されていなくてはならない.すると,もはやそれは Mead 的意味での「共同体(一般化された他者)」ではありえない.およそ以上が,ここで Blumer の Mead 理解の問題点である.こうしてみると,Blumer は Mead 的というよりは Cooley 的であるといわざるを得ない.

Kuhn については,その自我論を自ら決定論的とみなしている点 [Kuhn, op. cit., p. 56] を指摘するとどめる. Cottrell 派については,本文中の筆者の Lewis 批判に明らかであろう.

- 108) 以上日本語の形で引用した部分について筆者の理解が妥当である保証はない.しかし二,三案出した中では最も整合的と考えられたので,敢えてその理解を示した.なお筆者の知る限りの Mead 論で(欧・邦不問),この部分を論じたものはない(ようだ).[但し,SW, p. 145. の第1センテンスについては,Lewis[1979, p. 269] に不十分ながら言及がみられる].そこで,依拠すべき先行理解を欠く「独断」の可能性大である.識者の御批判を待つ.
- 109) その理由は,それが知られるのはただ「後続する内省においてのみ」[James, op. cit., p. 196] であるからである.なお,James の *Principles* を引用するなら Holt の original edition か Dover の authorized edition からとすべきだろうが,本論では都合により別版に拠っているので,ページ付けが違っている.
- 110) 従って,Kolb ら「残余論」者の主張は正当とはいえないものと考えなくてはならない.「残余論」は,「意識の中にあるのは常に『Me』のみだから,『I』と『Me』の区別はナンセンスだ」と説くのであるが,この部分から明らかなように,Mead は,(表象されたことにおいて)もはや「I(主観)」たりえないが,さりとて「Me」に統合されてはいない興奮・反応状態を想定しており,これは意識されているものである.だから,自我意識=「Me」という「残余論」の等式も,それを根拠とする批判も成立しない.ちなみに,Mead がこの論点を展開しなかったのは,それが直ちに「Me」に統合される,ごく単期間の過程であるから,「方法」としての行動主義からみたときにはほとんど意味を有さない,と考えたためではなかろうかと臆測される.
- 111) 「^{オブザーヴァー}観察者」は「^{シンカー}思考者」の「自己を直接に覚識する」という特性規定を重視した言い換えであると考ええる.
- 112) つまり,James が自我意識を「純粹自我」の見地から,いわば〈上〉から眺めようとしたのに対して,Mead はそれを「生体の反応」の見地から,いわば〈下〉から捉えようとした,といつてよいだろう.
- 113) ここに示した如く,Mead は James の「純粹自我」や「意識の流れ」のような,empirical というよりはもはや transcendental と呼びたくなる概念化をもって,説明原理として使用する事には批判的である. James に対する Mead の批判はここに示した通りであるが,他にも,例えば Bergson については,しばしばその思想に依拠しつつも,「Bergson が理解していないのは,科学的方法を直接的諸条件に適用する事ほどに理性的かつ自己意識的に反省的である事は他に何も無い,という事だ」[MT, p. 294],「Bergson はイメージを生理学的刺激として考える事をしなかった」[PA, p. 377] 等々と批判して,結局彼を「反・主知主義者」と断じている [MT, chapt. xiv]. さらに,法則の絶対性を認めない(本文2項 a)) Mead は,次のように哲学者を批判する.「今もなお哲学者は,究極因^{ファイナルティ}の腕^{アーム}の中に身を休めたいと,中世主義者の如く熱望している.観念論者も実在論者も新 Kant 派の現象論者も,その不安な精神を何らかの絶対性という永遠なる力^{アームス}の中に休息させようとしている」[Mead, 1929a in SW, p. 324 圏点引用者]. 強調部分が具体的に誰を指すかは不明であるが,Mead 自身には,Miller [op. cit., p. 8-9, 88, etc.] や Reck [1964b, p. 1xi-1xii]

の主張する如く、超越論的傾向も現象学的志向も存在していなかった、と考えるのが妥当だろう。本論は、本章冒頭に示したように、こうした常識的／通俗の見地（Meadにおける自然主義・科学的客観主義）に拠っている。これに対して Mead の現象学的志向を強調し、「Mead は少しもプラグマティックでも自然主義的でもない」[Natanson, 1956b, p. 241] と主張するのが、M. Natanson の立場である。その著作 [Natanson, 1956a] を系統的に検討することは本論では行わない。しかし、いくつかの点は指摘しておく。

第一、Natanson の著作 [1956] と、その前年に出た V. M. Ames の、Mead と Husserl に関する論文 [Ames, 1955, p. 320-331] に対する批判論文 [Natanson, 1956b, p. 241-245] とでは、Mead に対する言及の仕方が全く違う。前者では、「Mead はその解釈者たちの虜である」[1956a, p. 2]、「Mead に対して行われた最大の不正は……彼を『社会的行動主義者』とラベル付けし、その哲学を単にプラグマティズムないし自然主義の別のあらわれと扱うことで、[Husserl の伝統に属す Mead の現象学的] 主題をばかした事だ」[1956a, p. 4] と主張して、いわば「正当な Mead 理解は現象学的なそれである」という論陣を張っているのに対し、後者では、「Mead は……多くの解釈を許しうる……[例えば] その思考は少しもプラグマティックでも自然主義的でもなく……」[1956b, p. 241, 圏点引用者] といった具合に、現象学的理解がひとつの可能な解釈であるという弱い主張に変わっている。（無論、「論争」における社交辞令かも知れぬが。）この前者の主張には反論が可能だが、後者のそれには反論できない。主張が一貫していない。

第二、仮に著書 [1956a] の主張を選んだとする。この著書は二部に分かれ、第一部では、Mead の思考が、MSS → PA → PP と、「時系列的な進歩」[ibid., p. 6] をし、「問題の多い実証主義から社会的現実についての観念的・主観的な説明へと」[ibid., p. 3-4] 発展した事をあとづけようとしている。そこで直ちに、二点が問題となる。i) まず、本文 I 章 2 節 1) 項に示した如く、MSS → PA → PP という「時系列」を措定するのは不可能である。これらは全て、ほぼ同時期（1927～1930年）のものである。従って、同時期に Mead の思考が多面的に「発展」したと考えなくてはならなくなる。ii) 次に、Mead 理論の「発展」がどのように再構成されているか、が問題となる。Natanson の再構成は概して妥当的であるが、必ずしも正確ではない。この第一部の特性は、Mead からの断片的な引用が積み重ねられている事である。試みに、第一部のレファレンス [1956a, p. 52-55] から、「Natanson による Mead からの引用パターン」を作ってみると、次表の如くなる。一見して明らかなように、MSS からは、「Self」26 章以降の引用が 3 か所のみであり、PA からは、I 説（行為の段階論）、VII、XI 説（対象知覚にかかわるパースペクティブ論）と、いずれも「知覚」にかかわる部分からの引用が極めて多く、そして PP からの引用では、MSS、PA 以後のものではありえない 1926 年論文からの引用が目立つ。逐一検討はしないが、要するに相当偏向した引用・理解がなされている。（機会があれば検討して示したいと考えている。）なお、この著作の第二部は Mead の思考の主要テーマの批判となっており、こちらは有効な指摘が多々みとめられる。

第三、例えば Ames への反論の中で、Natanson は書いている。現象学的方法によって「変化するのはただ観察者が世界を経験する様態のみである」と [1956b, p. 243]。しかし、Mead の全体的な議論からすれば、主体の変化は常に客体の変化をともなう。‘World that is there’ は確かに存在を続けるだろうが、しかし、環境と独立に生体のみが変化する事はありえない筈である。だから、「観察者の経験の様態のみが」変わるなどという事は、Mead の理論化の中では生じえないのではないか。そうした発想を Mead の理論化の中で可能とするためには、その部分的摂取および別概念の導入（例えば Natanson は Mead を論じるのに、どこからか、「意識の流れ」概念を持ち込んでいる [1956a]、等々）を要する。ちなみに Schutz はその論文のひとつにおいて、Mead 理論が彼の目的に合わぬとしてこれを一蹴している [Schutz, 1945, p. 61-70. 特に p. 68]。なお筆者が本論で現象学的理解に拠らなかった理由は単純で、それに要される手続

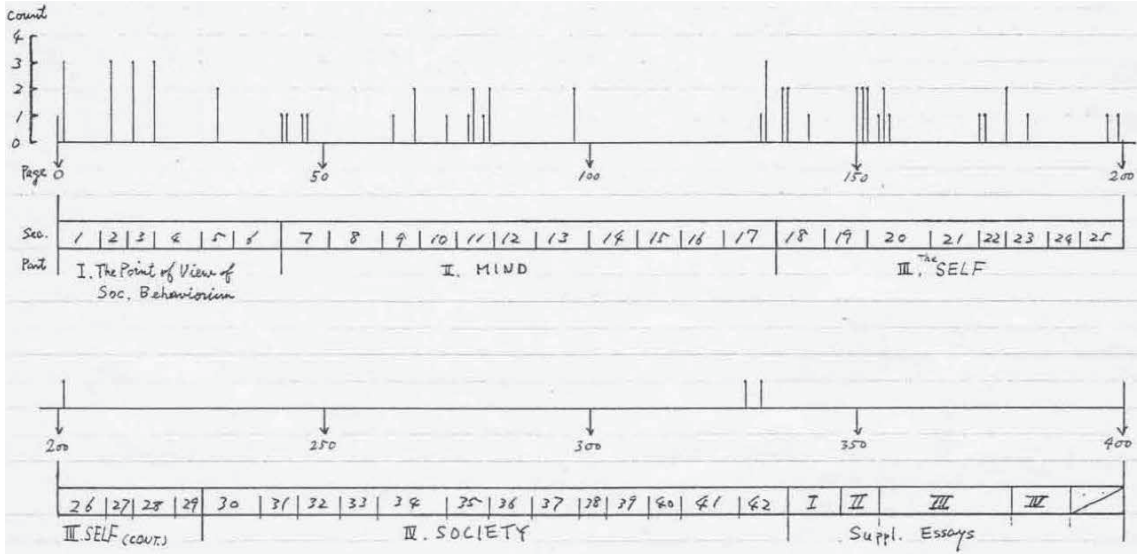


図8 Citation Pattern From MSS in Natanson (1956, Chapter II)

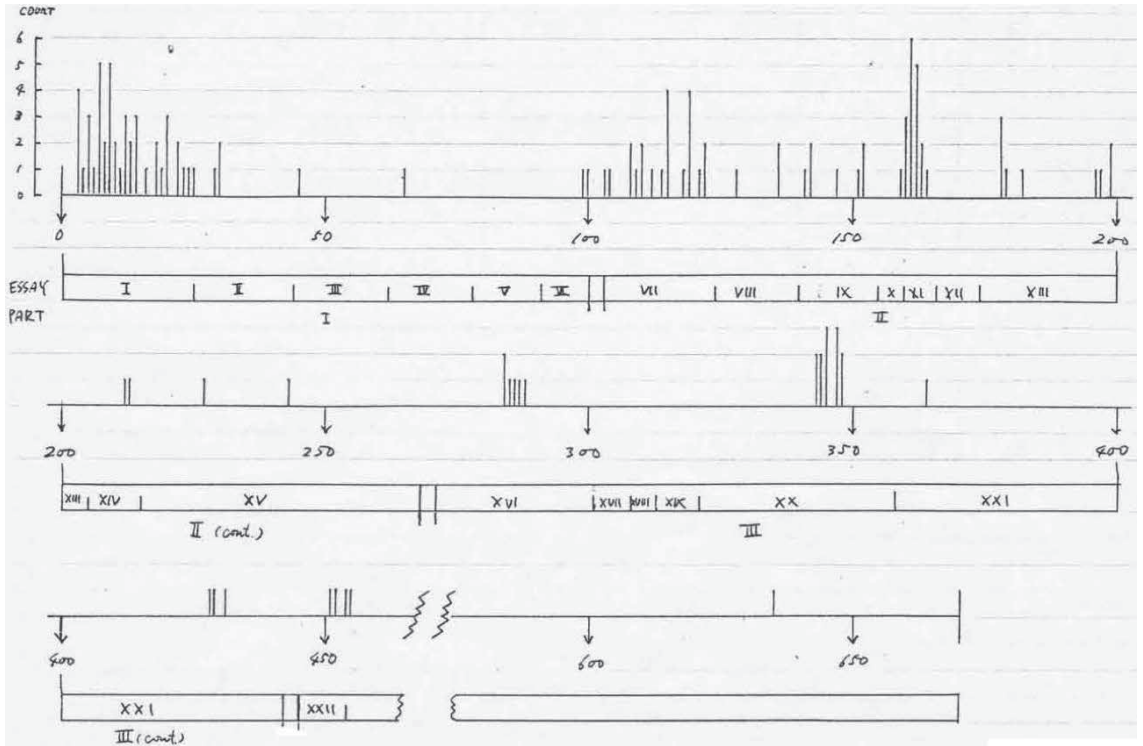


図9 Citation Pattern From PA in Natanson (1956, Chapter II)

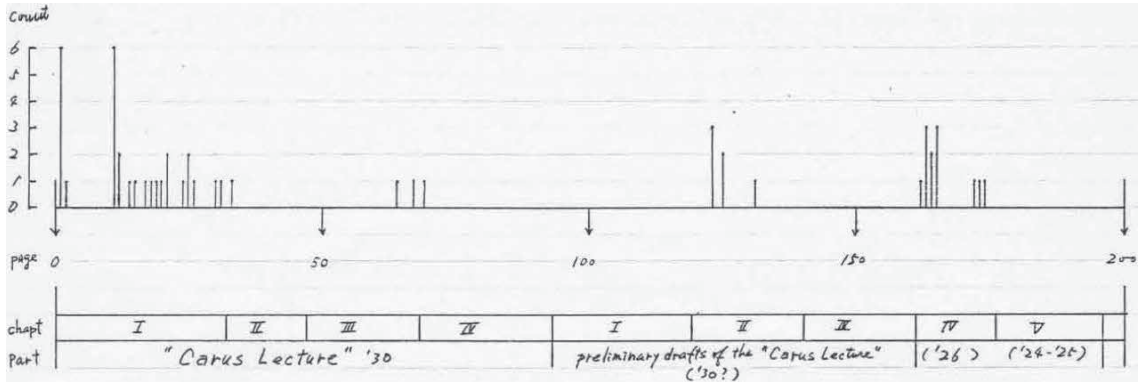


図 10 Citation Pattern From PP (in Natanson, 1956, Chapter II)

き (i) 現時点で妥当な Husserl の文献に基づく定位, ii) 同じく Schutz の定位, iii) 両者の関係の定位, iv) Natanson の両者の理解, v) Natanson における Mead と現象学) が, 余りに莫大なものと考えられた——つまり能力不足——ゆえである。

- 114) Mead の論文を日本語の形で引用するについて, 筆者は極力, object = 「客体」, subject = 「主体」という日本語を当てるよう努めている。これに対する予想された批判にあらかじめ答えておけば, object = 「客体」については, Mead 自身の一貫した主張, 「自我は, 心理学が個人意識の条件としての物理的身体組織の实在性を所与として認めるのと同様の意味で, そこにあるものとして as there, 所与として認められねばならぬ」 [Mead, 1910a in SW, p. 111-112] という事, つまり個人の外部にいわば客体として (「Me」として) 自我を認める, という主張に対して適切な日本語を選択しようとした結果である。subject = 「主体」については, (object と同じ議論も成立するが), ここでは特に, 本文中で述べている主題 (Mead における主体性・独自性の所在) に対して適切な日本語を選択しようとした結果である。日本語における「主観」というコトバは, 「主体」というコトバに比して, より含意された「主体性」が低いように感じられる。以上が理由であるが, この理解が適切でないと考えられるならば, MSS 邦語版 385 頁に, すでにこの部分が訳出されているので, そちらを参照されたい。
- 115) James が, Soul Theory の心霊的 spiritual な側面に強く魅かれていたであろうことは明らかであろうが, 『原理』では, 自身を「心理学者としては」と自己規定したうえで [ibid., p. 223], この結論を導いている。
- 116) そうした推測を可能とする理由としては, 「場面の背後 (Mead)」≡「思考の背後 (James)」, 「付加利益 (Mead)」≡「全き余計物 (James)」という表現上の類似点が指摘されよう。
- 117) むろん, それは, より大局的にみるならば, Rucker のいう「Chicago 派の思想」の共通項であろう。「Chicago 哲学における中心概念は活動アクティヴィティという概念である」 [Rucker, 1969, p.5]。そして, この「活動」の根拠を求めることは, 「活動の根拠」を求めねばならなくなる程の問題状況が現出しない限り, 追求される必要のないものだったと思われる。「……このような具体的活動という視点からすれば, 生物学的機能は, 単なる機械的過程でも, 超自然的心霊的存在の代行者でも, 何らかの絶対的な目的でもなかった」 [ibid., p.6] のである。
- 118) 無論, それが「自我」における「I」部分として機能するためには, 他者による媒介過程 (を通しての「Me」の成立) を経なくてはならない事はいうまでもない。
- 119) 再度 Kolb に対して反論すれば, 「『I』と『Me』とが [MSS において] 導入されるのは, p. 173 [22 章. 「I」と「Me」以降である」 [Kolb, op. cit., p. 192, n. 4] という指摘も, 相当に割引いて理解する必要がある。

字面だけを見ればそうなるのだろうが、それ以前にも、例えば「共通の世界」と「個人に特有な世界」[MSS, chapt. 6] といった形をとって十分に展開されている。

- 120) 有機体が環境の部分全体から「切り取って cut out from」選択する、という「生世界論」的発想は、James [例えば 1904, p. 481] や Bergson から受けつがれたものであろう。ただし、Mead におけるそれが、例えば von Uexküll のそれと異なる点は、前者が常に過程的・変動的であるのに比して、後者が予定調和的である点にある。
- 121) さらに図式的に示せば、以下の如く。

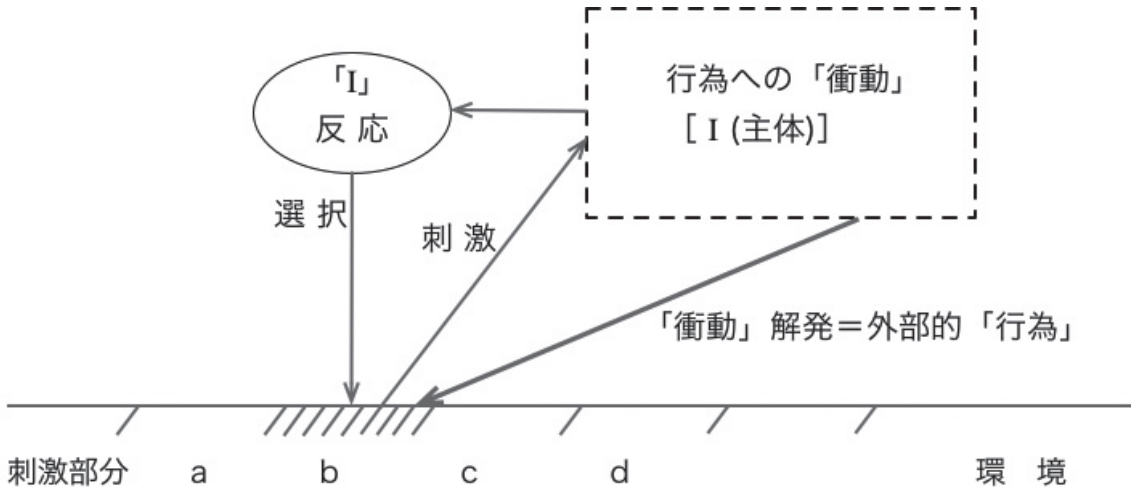


図 11 「社会的行動主義」と「I」の関係概念図

- 122) ここまでの理解と、相互作用論との関係について触れておく。

まず Blumer と Mead について。Blumer が、Mead における自我の反省的性格や「意味」の重視を強調し、これを継承して、極めてフレキシブルに「現象へ」迫る方法論を展開し、思索型社会学や実験中心の社会心理学に欠如していた部分を補充したことは、評価されるべき貢献である事に疑問の余地はない。およそ健全な社会科学とは、常に必ず、「現場」から始まるべきものである筈である。しかし、この「現場」意識に、Blumer のおちいった陥穽があったとも言えるのではないか。「現場」が「意識」されるとき、それは多くの場合、「問題状況」をはらんでいるが故に「意識」されるのである。(全くの「無問題」にみえる「現場」が問題とされるようになったのは、比較的最近のことであろう。)従って、Blumer の方法論は、Mead の理論化の「問題状況」の部分のみを抽出したかの如き印象を与える。「注目」と「反省」とが間断なく継続され、個人は「意味」の「解釈」に忙殺されている。個人は常に、「能動的行為者」である。相互作用「状況」においても、個人は他者の行為の「意味」を「解釈」し、「定義」を与え続ける。「対象」の「意味」は「行為者」によって付与されつづける。「解釈」と「定義」をへて、はじめて「結びつけられた行為 joint action」が可能となる。(「無意識の相互調整」はどこにもない。)以上、Blumer [1969, op. cit., p. 61-77] の Mead 理解は、まさに、Mead の全体としての理論化の「問題状況」の部分のみを切り抜いて提示したものといえる。そこにはすでに、Mead 的「有意味シンボル」や「態度」が与える安定的な「無問題状況」の感覚はない。Blumer の理論化は、「現場」の「問題状況」に中心を合わせ、主体の「心理」レベルに焦点を結んでいる。Blumer の Mead 理解は「問題状況」に偏向している。

しかし又、次のようにして Blumer を肯定的に評価することもできる。すなわち、Blumer は「高速回転させた Mead 理論」を継承しているのである、と、Mead 的「問題状況／無問題状況」とは、それが頻繁に移行するならば、要するに「問題状況」になってしまう。そこではもはや、「安定的」な「態度」も「話想宇宙」も有り得ない。そもそも「安定的」なる形容が存在しえないのだから。このように考えるならば、Blumer と Mead の「机上の理論」的相違は、解消してしまう。ただ、社会の全てが Blumer の想定する如き「汎・問題状況」的であるか否か、それは議論の余地を残しているだろう。加えて、Blumer が通常の意味で「厳密」な方法論や定義を採用しない点は、やはり問題として残る。この点に関する Huber の批判への Blumer の回答 [1973, p. 797-798] は、研究者が「十分に知的かつ熟練していれば、彼には何が起きているかがわかる」[ibid., p. 798] という、およそ楽観的なものにすぎない。同様の傾向は、先述した McPhail & Rexroat による批判への反論 [Blumer, 1980, p. 409-419] にも認められる。いずれにせよ、Blumer は、「個人－社会関係の個人的要素に注目を向けてきた」[Hayes & Petras, 1974, p. 395] といえる。それ故に、その主張は、時に「社会唯名論」と批判される訳である [Lewis, 1976, op. cit.]. このような批判への Blumer の反論 [Blumer, 1977, p. 285-289] は、Blumer の Mead 理解が、表現の上ではかなり正確でありつつも、重点はやはり「個人的要素」に傾いていることを示している。一例として、Blumer は、Mead における「問題解決」の「私的」な側面のみを強調し、それが社会的にいか^にに検証・共有されてゆくかについては触れていない [ibid., p. 289] し、「パースペクティヴ」や「話想宇宙」が多様かつ複数存在することばかりが主張される [ibid., p. 287-288]. 同一の理論が、全く重点を変えて主張されている事実はいなめないのである。

次に、Kuhn と Mead の関係については、Kuhn の Mead 理解が不十分であるように思われる。確かに操作的な実証研究を旨とする Kuhn の立場からすれば、Mead の理論化は「曖昧」であるかも知れない。しかし、そのことが直ちに、Mead の理論化の全き意味での「曖昧さ」につながるものではない筈である。さらに、Kuhn は、Mead が生理＝心理パラレリズムを回避すべくその理論化を展開した点を無視して、完全に「心理」＝「社会」的な変数関係のみを扱った。加えて、「心理」は「社会」的に決定されるとして、Mead の「創発」概念を取り込むことをしていない。おそらく彼の方法は、「正統」派の社会心理学に最も適合的なものであろうが、その方法には、「生理」＝「心理」＝「社会」を貫通して展開された Mead 的発想は残されていない。なお、Mead の理論によって Kuhn の方法＝TST 法を批判すれば、次の如くなるだろう。TST テストは「問題状況」を生み出す。従って、精神、自我の思考機能が働き、これを「解決」すべき「創発」を生み出す。「創発」がどのようなものであれ、それによって被験者の「Me」は変化する。従って、TST 以前の「Me」と以後の「Me」とは同一ではあり得ない。よって、TST によって知られ得るのは、「創発」後も変化していない「Me」部分のみであり、結局、全体としての「自己態度」が安定的なものとして検出されることは有り得ない。以上は勿論、TST を無効とするものではない。しかし、その妥当性への疑義を提起するものではあろう。

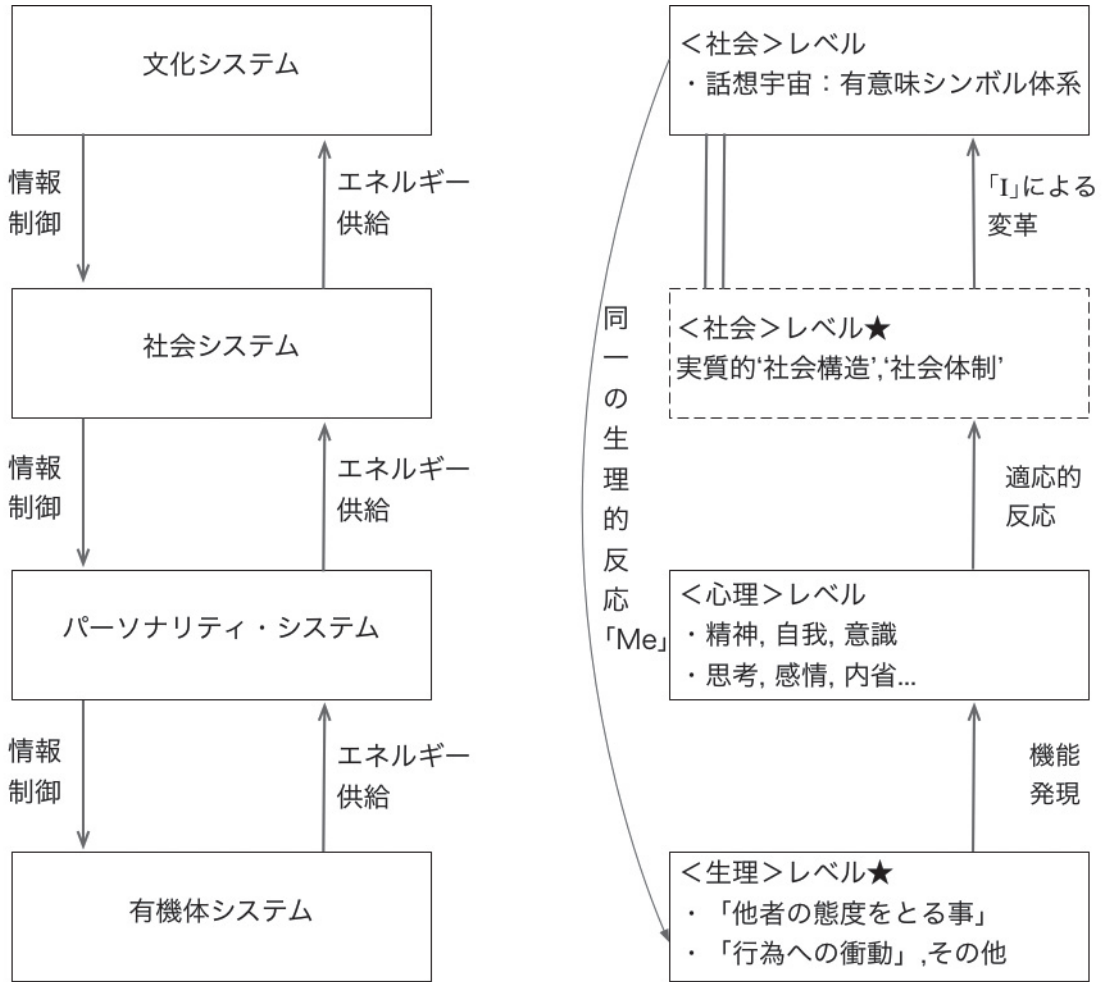
最後に Cottrell 派と Mead については、この派の陣容が不確定であり、主張も必ずしも一貫していないので論じることは難しい。但し、例えば「態度取得」の事実を検証しようとするとき、被験者を「無問題状況」にいか^ににして保持するか、或いは、それをいか^ににして知るか、等々の問題が生じる筈である。生理学的検出機械の発達をまたぬ限り、この派の唱導する「Mead 理論それ自体の検証」はすぐれて困難ではなからうか。すでにいくつかの、これに類する研究がなされているが、条件が十分満足されているかには異論が出るだろうと思われる。以上に加えて、Mead の理論化じたい、その現実に対する有効性は疑わしい、この点が Cottrell 派の決定的な困難であろう。しかしながら、この派の出現によって、Mead の理論化と

相互作用論の関係について、再度の問題意識が喚起され、Lewisの表現を借りれば、Mead研究の‘New Wave’が起きた事は、何といっても評価されるべきであろう。

以上、Meadと相互作用論諸派に関する筆者の暫定的な結論である。

- 123) なお、ここまでの記述に触れられていないMead的概念として、「行為の諸段階」、「パースペクティヴ」論、「社会性」概念、「知覚の社会的要因」、等々があるが、いずれも、ここまでに示した記述に関連し、そこから発展してきたものである。従って、これらの議論にも、以下の本文および注において必要な限り言及するが、Meadの基本的な思考の方向性に関しては、一応、以上で提出したものと考える。
- 124) 幸か不幸か、このような陳腐な比喻は、最近の多くの「生物系統発生図」には当てはまらない。タンパク質や遺伝子の分子生物学／分子遺伝学的研究の進展とともに、種の系統の分類は極めて精密化し、同時に、「系統樹」は水平の時間流を持つようになりつつある。（例えばPatterson [op. cit.]を見よ。）もっとこの事は、垂直の時間流を持つ「系統樹」に明白に示される一種の人間中心主義への修正とも考えられる。「本家」の生物進化論が「上-下」のイデオロギーを放棄しつつある時代に、社会「進化論」の方はかたくなにそれに固執しているようにみえる（例えば、「およそ発展なるものは、究極的には、一本の普遍的な発展軸に沿う方向性をもった変化として、とらえられざるをえない」[村上、公文、佐藤、前出11頁、なお、同書53、55頁の‘系統樹’をも参照])のは、筆者には皮肉な事態と感ぜられる。
- 125) むろん、例えば現代人の犬歯は小さくなる傾向にあるが、これが果たして生理学的体制の変化に起因する「退化」か否かは疑わしい。視力の低下と同様、環境要因に由来する表現型における変異と考えるのが妥当ではなからうか。
- 126) このような単純な概念化を克服する試みとしては、リニアルな発展モデルを否定して「多系的発展論」を提出する、前出、村上・公文・佐藤 [1979] を挙げておく。
- 127) 次に示すのは、周知のParsonsによるシステム階層モデルであるが、このモデルは、Meadにおける生理→心理→社会という（必ずしも明示的ではないが）区分と、極めてよく一致する部分をもつように思われる。（むろん、相違点は挙げていけばきりがなが、）並記したのは、Parsonsモデルに比較するべく概念化したMeadの「モデル」である。

Parsonsの図式は完全に現実の「モデル」として想定されているが、Meadのそれは、むしろ現実そのものを説明しようとするものであり、実体的なものと機能的なものを含む。Parsonsの社会システムに相当する部分の分析はMeadにおいては必ずしも明確とはいえない。Meadにおいては、Parsonsの文化システムに類するもの（同一ではない）、つまり「話想宇宙」が、有機体システムに類するもの、つまり「生理的態度」に直接に影響し、「心理的機能」を働かせる、等々の相違を含みつつも、なお両者の図式化には類似性が認められるといえよう。



Parsonsの「制御のサイバネティック・ハイアラーキー」

Mead理論の部分的図式化
★は実体、他は機能

Source: Turner & Maryanski (op. cit., p.81)

図 12 Parsons モデルと Mead モデル

- 128) それを「点」と呼んで時間的ひろがりをも有さぬものと想定することにはおそらく問題があるだろうが、しかし、時間幅を想定するにしても、その妥当な大きさは、決定するのが困難である。それ故ここでは、表記を簡略化するため、敢えて必ずしも正確ではない記述を採用する。
- 129) 無論、これ以外にも、ヒトの生理学的体制を他から区別する特性は数多いだろうが、ここではこの四つに限定した。実際のところ、こうした個別的な特性より以上にヒトを他から区別するのは、その、こうした個々の特性を極めて精妙に関係づける全体的な身体的体制であると考えられるが故に、多数の個別的な特性を列挙することにはさほどの意味はない、とも思われる。(Mead はそう考えた。)

- 130) この、1922年論文からの引用部分で、「自分自身でありつつも同時に他者になれる能力」という表現が、「他者の態度をとる事」に変わって使用されている事実は、重要な意味を持つ。すなわちこの方向への概念の一般化をさらに進めたものが、「同時にいくつもの^{シングス}事柄になれる能力」として定義される Mead 最晩年の概念、すなわち「社会性 sociality」の概念に他ならないからである [PP, p. 49]. 「社会性」の概念が説明概念として十分な展開をみせるのは PP においてであるとされているが、すでにこの 1922 年論文において、明確にその方向への展開が予示されている。
- 131) 今日、いわゆる高等な霊長類における一定のシンボル操作能力はその存在が認められていると言ってよいだろう。しかしその使用による自己対象化機能の発達（自我の析出）や、その「^{シグニフィカンス}有意味」性の程度ないし質（「話想宇宙」体系の存在ないしはその規模と「普遍性」）に関しては、議論の分かれるところであろう。
- 132) いわゆる「パッシヴ・ラーニング passive learning」による実験動物の行動異状や、孤立して成育させられたために生殖期に正常な交尾能力を発現できぬ群居動物の行動などは、こうした先在する「社会関係」の重要性の例証となるものであろう。従って、群居動物であるヒトの絶滅した類縁種においても、その先在する「社会関係」が、正常な社会的機能（そこに、現存するヒトに類似の「自我」や「話想宇宙」が存在したかは問わぬにしろ）にとつての必要条件であったであろう事は容易に推測されよう。
- 133) Mead のドイツ留学は 1888 年秋から 1891 年秋の期間にわたるものである [Miller, op. cit., p. xv-xvii]. この期間は、ドイツにおける Darwinism すなわち Haeckel 主義が興隆しつつあった時代にあたる。Mead がその留学期間中に Haeckel 思想に触れたかどうか不明であるが、進化論思想の Mead への影響を考えるには興味深い主題となろう。
- 134) 「身振り」、「有声身振り」、「言語」の各々の再帰的性格が、Mead においてどのようにとらえられていたか、は実は重大な問題を含む。もしその理論化が、「有意味シンボル」つまり主に「言語」にのみ再帰的性格 = 自我の析出原理を求めるなら、聾啞者 [差別語として使用しているのではない] における自我の存在が理論内在的に否定されてしまう。Mead の理論化は、この場合、「健体者による健体者のための健体者に関する」差別的理論となってしまうわけである。以下の引用部分に注目されたい。
- 「さらに言えば、聾啞者が身振りを作り上げるという事が十分に証拠だてているように、有声身振りは「Me」を構成するのに働く唯一の形成というわけではない。他者が影響されるのと同様に自分自身もそれに影響されるような……あらゆる身振りは、自我の構成メカニズムとして働くであろう」 [Mead, 1912 in SW, p. 140, 圏点引用者]. 「有声身振りがとりわけ重要なのは、それが、それを生じさせた個体に対して他個体に対するのと同じ様式での反作用を有するが故であるが、しかしこのことは、より低い程度においては個体が見たり触れたりするその個体自身の身振りについてもいえることである」 [Mead, 1922 in SW, p. 243, 圏点引用者].

実のところ Mead は、1900 年から数年間、障害をもつ児童の教育のため 1899 年に Mary R. Campbell 女史によって設立された Chicago Physiological School [名称はその後変わるらしい] という特殊学校 [差別的に使用しているのではない] の運営に参加し、^{マネジメント}財政に尽力するかたわら、障害児の調査、教育に協力していた（この委員会メンバーには、Chicago 大総長 Harper をはじめ、Dewey, J. R. Angell らが名を列ねている [Deegan & Burger, 1978, p. 363-365]). ここの実経験が、上の引用にみられる如き「身振りの再帰性」の主張を生んだものらしい。さらに引用を示しておけば、「……聾啞の児童のばあい、言語の発達にたいして全然配慮がなされなかったならば、その児童には通常の人間の知能の発達はなく、下等動物の水準にとどまることはわかっている」 [MSS, 邦訳 248 頁]. この引用の「わかっている We find」には、上の如き根拠が存在している。従って、Mead の理論化における「身振り」、「有声身振り」、「言語」は、

その効率にこそ差はあるものの、等しく自我析出の原理たりうるものと考えられている、とみるべきである。(しかし、これで全てではない。)

では、いわゆる「三重苦」の障害者の場合にはどうなるのか？ Mead はいう、「ある刺激がだれかともうひとり別のだれかに同じ影響を及ぼすなら、そのとき言語活動が可能になる。ヘレン・ケラーのような盲人を例にとると、自分自身と同様に他者にもあたえられる接触経験が、そういう刺激になる。〈彼女の〉精神が形成されたのも、こういう〔接触経験という〕言語によってである」[MSS, 邦訳 160-161 頁, <> 内と圏点は引用者]。ここでは「接触経験」(それは「対象についての意識」を生じさせるものでもある。本文 70 頁参照)までもが、自我析出の原理として認められている。「接触経験」は「対象操作」という「行為」にかかわるものだから、結局、「行為」、「身振り」、「有声身振り」、「言語(行為)」という広義の行為^{アクト}の全カテゴリーが、自我析出のための再帰性を持つものと想定されている事になる。(それだけ、人間の生理的体制が生得的に発達している、という事にもなる。再帰性をもつどんな「行為」カテゴリーでも、自我発達の外部条件たりうるほどに。)ところで、Mead は「言語」に加えて「手の対象操作能力」を重視した [cf. Mead, 1907, op. cit.]. では、聾・啞・盲に加えて四肢欠損の障害をもつ人の場合はどうか？ 筆者は Mead がこうしたケースを論じた部分を知らないが、おそらく、体性感覚による「接触経験」において再帰性が求められる事になるだろう。かくて、Mead の理論化は、確かに人間の「言語」能力、シンボル操作能力に強調を置くものではあるが、その「言語」じたい「行為」と連続的なものと想念されているが故に、シンボルの再帰性に基づく自我析出の原理も、極めて広範な、「行為の再帰性」によるものとなっている。

なお付言しておけば、この注に部分的に引用した Deegan & Burger の論文は、他にも、ストライキその他の社会問題への Mead の Active なコミットメントをあとづけたものであり、その理論と行動との関連性を知るに有効である。

- 135) それは例えば、「西欧近代的自我」といった特定の「自我」の様態とは限らないであろう。何よりもそれは、「全く自然的な過程」から創発したとされている点は強調されるべきだろう。というのも、この点にこそ、精神／自然の二分律を克服せんとした Mead の意図が集約されると考えられるからである。
- 136) もちろんその内容の「質」は、「歴史」時代の「話想宇宙」のそれとは全く異質なものであろうけれども。
- 137) ここに「特別な不連続」とは、ヒト以前の霊長類の「話想宇宙」と全く独立にゼロから始めてヒトの「話想宇宙」が成立した、との意味である。
- 138) であるならば、Mead において「個体発生は系統発生を」必ずしも繰り返さないことになる。「個体発生」においては「話想宇宙」は先在し、「系統発生」においては「話想宇宙」は「精神」、「自我」とともに発達する。勿論、「系統発生」とは分析的にみれば「個体発生」の集合であるが、この場合、「個体発生」と同時に「話想宇宙」も発達してゆくわけである。(「C = 個人自我の析出」において Mead は、多少とも安定的な先在「話想宇宙」を想定しているようだが。)
- 139) 従ってこの理解では、「精神」、「自我」も又、ヒト以前の類縁霊長類の「精神」、「自我」との間に、注 137) の意味で「特別な不連続」は存在しない、という事になろう。ところが他方 Mead はいう、「……全てのいわゆる心的経験にとって欠くことのできぬ自我とは、人間という脊椎動物 human vertebrates の社会的振るまいにおいてのみ出現した」と [Mead, 1924-25 in SW, p. 283, 圏点引用者]。さらに又、「自我が出現したのは脊椎動物の進化の遅い段階においてである」[ibid.] と。(もっとも、前の方の引用には「いわゆる so-called」という限定詞が付されているので、必ずしも意味が明確ではないが。) とすると、「自我」も「精神」も、人間に特個的なものという理解も不可能ではない。要するに問題となるのは、ある「進化」

段階のある自我がその時代の人間に特個的な質をもつのは明らかであろうから、この「質」の広がりのごままでをヒトの自我として分類するか (Mead はしたのか)、という事だ。そしてこの意味では、どうも Mead は、上に引用した如く、ヒトの自我を狭くとらえ、a-b 間の「ヒトの先史」に成立したものと分類したようだ。すると、対応するヒトの「話想宇宙」も又、a-b 間に、異「質」なそれから変化した、という事 (つまりヒトの「話想宇宙」として分類しうるものとなった、という事) になるだろう。

140) 上の注 139) の議論とその本文部分をあわせて、「Mead における諸概念の進化」を、生物進化論になぞらえて図式化 (あくまで単なる理解のための視覚化) をしてみると、次のようになる。

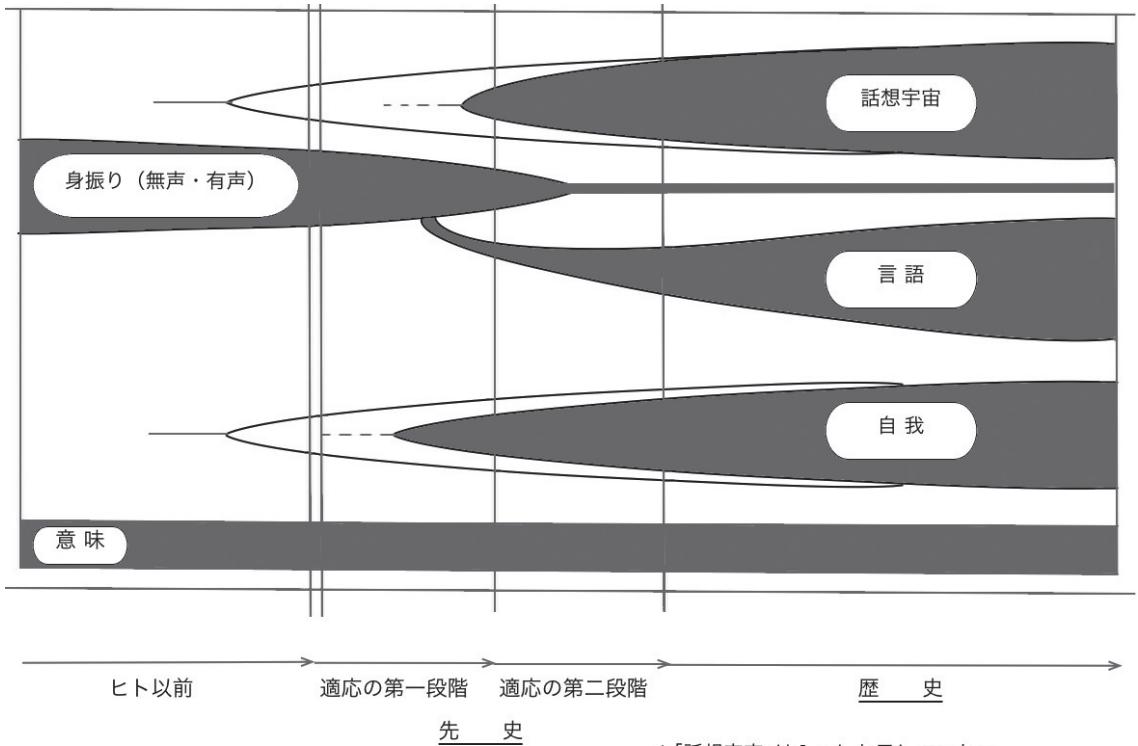


図 13 Mead 的概念の発生史

上の図式化で、黒塗り部分は「自我」を狭く分類した場合、白く囲んだ部分は、それを広く分類した場合、の表現である。これら諸概念は全て「先史」以前において与えられ、以後は拡大、一般化を続けるものと想定されている。「意味」(「意味についての意識」ではない) は、他の概念と無関係に、ヒト以前から存在している。

141) 確かに Mead は MSS において、精神異常に類する行動に関して言及してはいる [MSS, 邦訳 79, 153, 182 頁等] し、Freud に言及してもいる [同, 223, 274 注 (8) 頁]。又、精神病理学的な記述 [同, 152, 174, 213 注 (21) 頁] や犯罪・逸脱に関する記述 [同, 279 頁等] も存在する。しかし、そうした事実を説明する概念を導入しているわけではないし、そうした事実を生じさせる組織的な機制を論じているわけではない。

- 142) この点、「文明」がそもそも「人格」に対して抑圧的だとする精神分析的発想とは全く異なる。なお、「分裂病になる可能性は全人類が持っている」と仮定する中井 [1982, 8 頁] は、「分裂病親和者」の特性を「微分回路」にたとえ、「変化の傾向を予測的に把握し、将来発生する動作に対して予防的対策を講じる」、「過渡的現象に敏感でこれを洗いだす鋭敏さ」をもってその特徴としている [同書, 9 頁, 圏点引用者]。これはまさに「行為の最初の徴候に反応する」Mead 的人間像ではなかろうか。すると、Mead 的人間像はまさに「分裂病親和的」なものとなり、Carveth のいう、「Mead は神経(症)的に過社会化された人間像に傾いている」[Carveth, op. cit.] という指摘にも合致する。Mead の人間像は異常とも思われるほどに他者の「態度」に関して鋭敏であるように思われるが、それが「分裂病」と結びつかないのは、ひとえに、Mead の理論化にそうした病理現象を生み出す概念が含まれていないが故である。現実には、Mead が想定したほど他者の「態度」に鋭敏な人間なら、少なくとも現代日本にあっては、間違いなく「発病」するだろう。なお、中井は「忘れられた Meadian」H. S. Sullivan の現代日本における熱心な紹介者であるから、概念規定の類似(用法は全く違うが)も、あながち偶然とはいえないかも知れない。
- 143) 直ちに補言しておけば、Mead は、「[自然の] 適応過程はかならずしもより望ましいと考えられる個体をとりだす過程ではない」[MSS, 邦訳 265 頁] ことを認めている。ここで Mead が例示しているのは、寄生虫における器官の退化(による適応)である。このように、自然進化に関しては相当に適確な認識を持った Mead が、何ゆえに社会「進化」を絶対視したのかは、おそらく上の引用の「より望ましい」という価値表現に明らかだろう。Mead にとって社会とは常に必ず「より望ましい」方向にむけて(集団的かつ内省的に)「それ自身の進化をコントロールする」[MSS, 265 頁] べきものだったのである。
- 144) そしてその結果、(筆者の考えでは)、Mead の体系はそれ自体としてはほとんど完全に崩壊してしまう。この点にこそ、「社会性」と「主体性」とをふたつながら保証しようとする Mead 理論の枢要点があると考えられるからである。
- 145) 従って、Meltzer [op. cit., p. 10] における、「幼児による意味をもたぬ模倣」[圏点引用者] は、全くの誤解である。Mead にとって、「模倣が理解しうるものとなるのは、他者の自我についての意識が出現してからのこと」[Mead, 1909 in SW, p. 100] であり、この認識をもって、Baldwin の模倣説に満足しなかった事(「自我が人間意識の産物でありながら、しかもその前提でもあるなどと仮定する事……はできない」[ibid., p. 97]) を忘れてはならない筈である。
- 146) 補言しておけば、Mead の「自我」は、O. Rank が提唱し、最近の R. D. Laing 等にもみられる、「出産外傷 birth trauma」などからは無縁であるし、「母胎内学習」を行うものでもない。Mead は、一方では個体間、種間の強い関係性を想定しながら、世代間の連続性についてはそれほど強い関係を規定していない。
- 147) なお、ここまでの本論で指摘していない Mead の理論化に影響を与えた理論として、ゲシュタルト心理学の存在がある [cf: MSS, 邦訳 42 頁]。
- 148) 「……広義の機能主義は、二つの方向に伸びてゆく……一方には、個体と環境との関係を問題とする行動主義となり、他方には個体の中にある動因を問題とする動的心理学となる」[今田, 前出, 358 頁]。この意味では Mead の理論化は「機能主義」と「行動主義」の中間形態とも考えられる。(但し、より拡張されている事は変わらない。) 少なくとも Mead は、〈心理〉レベルでの「情動と動機についての適切な観念をもちあわせていなかったし、また人間の感情生活についての動態理論ももっていなかった」[Gerth & Mills, 1953, 邦訳 12 頁] とは言えるだろう。
- 149) ここで〈上〉、〈下〉という表現は注 127) の図式化にならった便宜的なものであって、特別の意味はない。実際、こうした分離じたい多分に便宜的なものである。物理学的実体として存在するのはただ個々人の生

理的体制のみであるから。（「話想宇宙」は、物理学的実体ではない。）

- 150) MSS 邦訳では「達成」と訳されているようであるから必ずしも定着した用法があるわけでもないようなので、別様の訳を当てた。特に執着するつもりは全くない。
- 151) いわゆる Mead の「行為の段階論」は、この文脈で理解されるべきものと考え、^{アクト}「行為とは過ぎ去ってゆく事象の単なる連鎖ではなく目的に向かう組織化された全体である。この過程の研究を容易にするために、[Mead は、行為の四段階という] 概念を提起した。[PA の] 編者らが、Mead のこれら四概念についての導入的論議を「行為の諸段階」とラベルつけたがために、自然発達のステップとしばしば誤解された。……それは [Mead の] 意図に反する」[Shibutani, 1968 in Buckley ed., 1968, p. 332 圏点引用者]。以上の Shibutani の理解に筆者は同意する。例えば Natanson は、「行為の諸段階を関係づけるものは何か」と問う [Natanson, op. cit., p. 71] のだが、そもそも「ひとつの全体」として提起された概念の、その分析上の要素に、「関係づけるもの」など存在するはずがない。「行為」は「態度」の^{オヴエートフェイス}外部的局面であるから、それは「中枢神経系を中心とする有機体の全体的体制」であり、Natanson の言うような、「刺激反応パターンから成立する」[ibid., p. 69] ものではない。Mead は、「態度」≡「行為」をそれ以上還元することはできぬ、としている [MSS, 邦訳 133 頁, 注 (28)]。
- 152) すなわち、外部的世界は、それに対する生物種の生理的体制（≡「態度」≡「行為」）との関係性においてのみ、その実在性をあらわす。言い換えれば、世界は行為との関係においてのみ実在する。
- 153) 「意識」とくに「主観的意識」と「自我」とは別のものである。「自我とは社会的行為の中で生じる或る種の構造を持つものであり、その構造 [自我の組織化された「Me」部分・補足引用者] は、その個人だけが^{アクセス}接近できる^{エクスペリアンス}特徴的な対象群についてのいわゆる主観的意識経験からは完全に区別しうるものである。——この両者における、^{アクセス}接近することがその個人にしかできないという共通の性質は、だからといって、両者を融合させるものではない」[MSS, p. 166-167, 圏点引用者]。従って「意識」と「自我」は区別され、しかし両者とも、^{アクセス}当人にしか「接近」はできないという性質をもつ。しかし後の本文に示すように、^{インアクセスシビリティ}「接近」不可能性はそのまま主観性と同義ではない。
- 154) 同様の主張が、1924-25 年論文にも示される。「[自我についての意識は、その内容が他のどんな個人の経験にも表われないという] 意味で私的だが、しかしこのプライベートは、別の個人の側の^{アクセス}接近やパースペクティブの違い、という以上のことでは必ずしもない」[Mead, 1924-25 in SW, p. 269-270]。この引用部分では、「パースペクティブ」論からする説明となっている。
- 155) かくて、Mead の方法論が有効であるためには Mead の理論化が妥当であらねばならず、Mead の理論化の妥当性を検証するには、Mead の方法論が有効であることを必要とする。
- 156) Mead がその科学方法論を展開するについて使用した例は、多く自然科学とくに物理学から取られており、そうした方法論を人間社会の問題に適用するのは無理がある、という批判は、例えば Huber [1973. op. cit., p. 278] など、多数ある。以下の引用を参照されたい。
「物理学における姿勢を心理学にまで持ち込んだため、意識ははじめから本質的に社会的であることが見過されてきた。幼児は、物理的対象を形成するより先に社会的対象 [他者] を形成するのだ」[MSS, p. 184, n. 15, 圏点引用者]。

Mead の理論化は、その「態度」の概念規定や、「神経系への還元」に対する強い反論 [例えば、MSS, 邦訳 132 頁注 (28), 238 頁注 (25) など]、そして Newton 力学の機械論的物理学的還元主義批判 (本文前節 1) 項 c)) などに明かなように、古典物理学的な還元主義にくみするものではなく、決定論・機械論を回避しながらもお自然主義的客観主義の方法論で人間の社会と個人とを捉えようとしたところ

に Mead 理論の中心課題があったといえる。従って、(Mead の理論化の当否それ自体はともあれ)、上に示した如き批判は少なくとも Mead の意向を汲んだものとはいえない。

- 157) Swanson のこの論文は、Mead の理論化を、大胆に拡張された機能主義心理学と適切に評価し、Freud との基本的志向の相異にも適切な理解を示していると筆者は考えるのだが、なぜか、Manis & Meltzer 編の相互作用論リーディングス第三版からは削除されている。(筆者は第二版は未見。) Cottrell は、このリーディングスを混乱して誤解を招く、と酷評しているが、確かに Mead 理論の位置づけという点からは納得がゆかない点がある。なお Mead の機能主義心理学的傾向については、Cook [1977, p. 307-316] が参考になる。
- 158) この後二者は絶対必要条件ではない (注 134))。
- 159) 自我の析出過程と、「他者」、「対象」、「自我」、「意味」の各々に「ついての意識」の発生の順序はどうなっているか? Mead においては「自我」は「意識」に先在するから、まず、どれほど漠然としたものであっても「自我」が生じなくてはならぬ。そして、「幼児の初期の社会的な知覚対象 percepts は他者について」[Mead, 1912 in SW, p. 139] のものであり「それを追って、全体としての自分自身の知覚に先行して……様々な「Me」が生じる」[ibid.] ののであるから、次には、「他者についての意識」→まだ統合されていない「自我についての意識」→統合された「自我についての意識」という順に「意識」が生じる。さらに、「ひとつの統合物としての身体 [[態度]: 補足引用者] が出現するのはかなり遅く、環境内の対象の組織化がなされたあと」[ibid., p. 138] のことであるから、統合された「自我についての意識」に先行して「物的対象についての意識」が生じていることになる。さらに、「意味についての意識は……自分の反応態度についての意識」[Mead, 1910c in SW, p. 133] であるから、「意味についての意識」が「自我についての意識」に先在することはない。さらに、「社会的意識 [[他者についての意識]: 補足引用者] は、物理的意識 [[物的対象についての意識]: 補足引用者] に先行する」[Mead, 1910a in SW, p. 113] から、「他者についての意識」→「物的対象についての意識」である。以上まとめると、順序は、「漠然たる自我の析出」→「他者についての意識」→「統合されていない自我についての意識」→「物的対象についての意識」→「統合された自我についての意識」→「意味についての意識」ということになる。もっとも、ここでの「統合された自我についての意識」といっても、それはまだ、「一般化された他者」の段階のものとは思われない。「プレイ段階」から「ゲーム段階」への移行期のものであろうと考えられる。以上が、推定される「自我と意識の発生順序」である。
- 160) Mead の理論化における「Me」ないし複数の「Me」と「一般化された他者」との関係は、必ずしも明瞭ではない。Mead は「あらゆる種類のさまざまな社会的対応^{リアクション}に対応するあらゆる種類のさまざまな自我がある。……多面的人格というのは、ある意味で正常^{ノーマル}である」[MSS, 邦訳 152 頁] といい、「Me」を複数認めているようだ。(これは James の「社会的自我」の理解、つまり「……一人の人は、彼を認め彼の印象を心に蔵する個人の数と同数の社会的自我を有って居る」[James, 1892 邦訳 (上) 221 頁] を継承したものとも考えられよう。) しかし、こうして一個人内の複数の「Me」の存在を認める Mead も、直ちに、「ふつつには、われわれが属している共同体全体の種類に対応して、統一された自我がある」[MSS, 邦訳 152 頁, 圏点引用者] と言い、「一般化された他者」を導入してくる。さきに本文で示したように、Mead は James の「純粹自我」のような概念に訴えるわけにはゆかなかったから、複数の「Me」の統合原理として「一般化された他者」が要請される、とも考えられよう。しかし、「一般化された他者」と複数の「Me」との関係はどうか? (同様のことは、その直接的対応物たる「話想宇宙」にもいえる。) この点 Mead は必ずしも明確であるとはいえない。

- 161) このあたりの記述は、「I」が平衡の乱れを感知するセンサーとして機能するサイバネティクス・モデルのようにも考えられよう。Shibutani は、「動機」についての四種類のアプローチ (S-Rの反射弧モデル, ゲシュタルト心理学の緊張緩和モデル, 精神分析学の主観的な欲望や意図によるモデル, サイバネティック・モデル) を挙げ、Meadの理論をサイバネティック・モデルとして考察している [Shibutani, 1968, op. cit.]。
- 162) 以上の問題解決過程を、次頁に図式化・視覚表示してみた。あくまで単なる図式化にすぎないが、筆者の理解を伝える一助にはなるだろう。

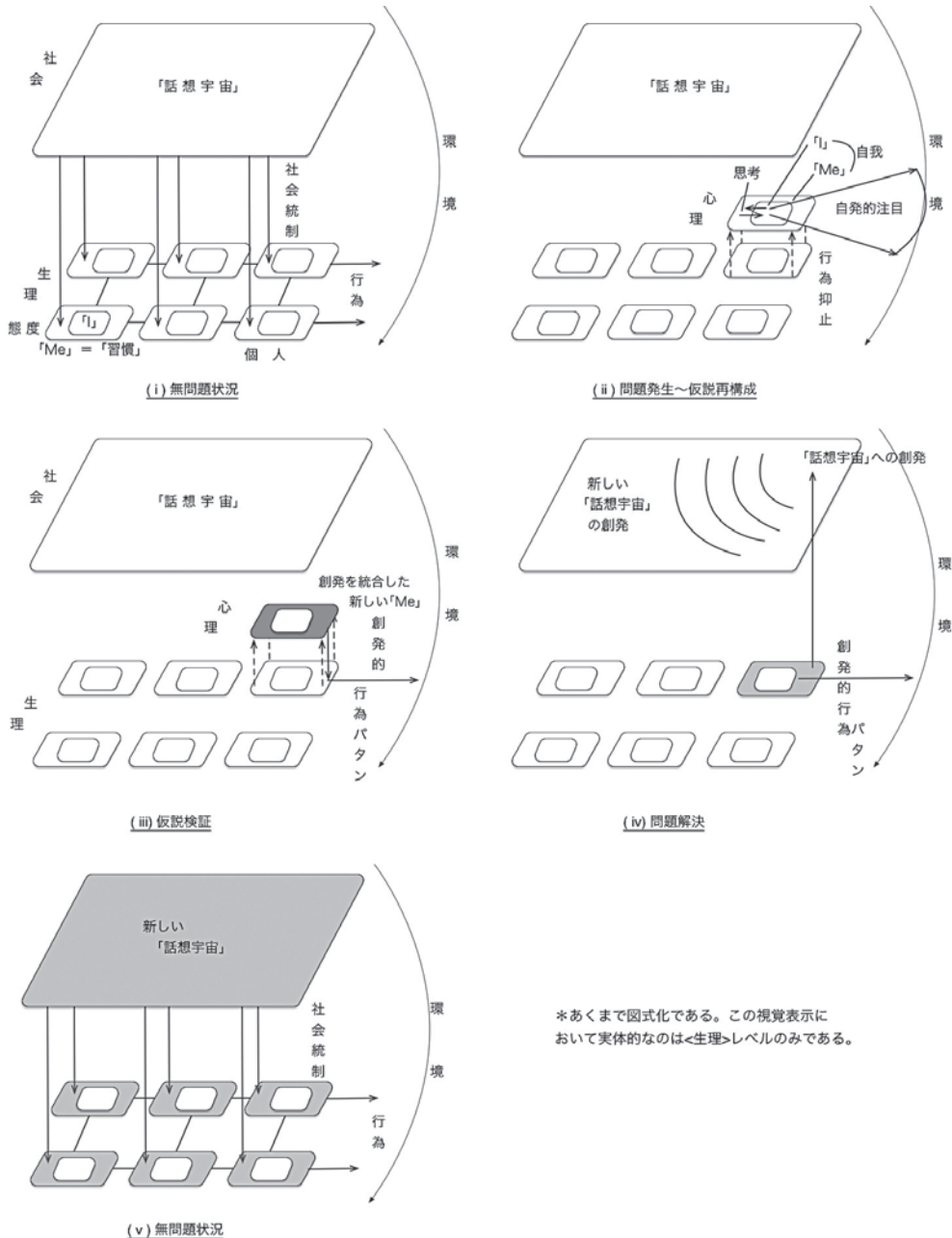


図 14 「社会的行動主義」による個人と社会の「問題解決」過程の図式化

- 163) これらは全て、様々な文脈で Mead に与えられてきたラベルである。
- 164) 「無効果的」という日本語を当てた単語は、'ineffectually' と Reck 編の論文集ではなっているが [SW, p. 106, l. 15], 'ineffectually' の誤植だと理解した。初出誌には、まだ当たっていない (1982. 11. 29.)。《追補》初出誌に当り、以上の理解を確認した (1982. 12. 3.)。
- 165) 「転回」を主張するのが Natanson [1956, op. cit.] の立場であるが、少なくともその主張する意味での時系列的な「転回」は、現在知られている Mead の「文献学」的事実からしてありえない事は、すでに注 113) 後半で証明してある。
- 166) 『人間性と社会秩序』における Cooley の、「自我観念 self-idea」の主要な三つの構成要素、つまり「他者にとって自分がどう見えるかについての想像」、「その見え appearance についての他者の判断についての想像」、「誇りや屈辱といった、何らかの種類の自我感情 self-feeling」[Cooley, 1922, rev. ed., p. 184] は、明らかに〈心理〉および〈社会〉レベルにかかわるものであるし、『社会組織論』における「意識」の「三つの側面」つまり「自己意識、いかえれば私というものが自分について考えている意識」、「社会意識……、すなわち私が他人にたいして考えているもの」、「公共意識、もしくはコミュニケーションをかわす集団においてこれまでに組織化された全体的な見解」も、やはり同様であろう [Cooley, 1909, 邦訳 14 頁]。事実、Cooley は、Spencer の社会学に関して、「その全体系にかかわる難点は、^{ライフ}生活の生理学的な側面ばかりが事細かく説かれ……しかもただそれだけが科学の考察しうる側面だと考えられている」ことだと主張する [Cooley, 1922, op. cit., p. 126-127, note]。さらに Cooley は、その、Spencer 社会学を論じた文章において、Spencer が自身に与えた進化論的発想の影響を認めつつも [Cooley, 1920, p. 141-142]、その生物学主義を酷評し、「社会秩序の有機的全体は、人格とほとんど同じ性質をもつ心的事実 mental facts であり、その理解に必要とされるのは、[人格理解の場合と]ほとんど同じ種類の同情的想像 sympathetic imagination である」[ibid., p. 135, 圏点引用者]と述べ、社会学の素材や観察や概念は「本質的に直接かつ生のまま fresh のものでなくてはならぬ」[ibid., p. 144]と主張する。Lewis [1976]、Lewis & Smith [1980]、Stone & Farberman [1967] 等は、Cooley と Blumer の方法論や人間観の類似を主張するが、上の引用にみる限り、たしかに基本的な方法論においては少なくとも、Blumer は、Mead よりは Cooley に近いといえよう。

さて次に Thomas に関しては、(少なくとも、その『欧米におけるポーランド農民』の「方法論ノート」——主に Znaniecki の筆になるという——を読む限り)、その高名なる実証主義的方法論は、個人の属する社会的現実とその生活史を重視する、〈心理〉および〈社会〉レベル中心のものとなっている。Thomas & Znaniecki は、この「方法論ノート」で、「常識社会学 “Common sense” sociology」ないし「実用社会学 “Practical” sociology」の五つの誤謬を指摘する。すなわち、(i) 「我々はその中に暮らしているのだから、その社会的現実を知っており、事物や関係を、経験的にそれらに親しんでいる事を根拠に、確実なもののみなしうる、という顕在的、潜在的な仮定」[Thomas & Znaniecki, 1918, p. 4]。(ii) 「個人的経験に信頼を置くかわりに、社会的現実の研究によって通俗的一般化の水準を越えようとし……実用的目的との直接の関係にもとづいて調査を行い、望ましいものと望ましくないものとの規準をもって、理論的問題に接近する根拠とする事 [要するに価値観の混入]」[ibid., p. 7]。(iii) 「所与の社会の生活の残り部分から恣意的に分離させても、一群の社会的事実^{ライフ}は理論的また実用的に検討しうるという潜在的な仮定 [つまり文脈の無視]」[ibid., p. 10]。(iv) 「人間は、その個人的、社会的な過去と無関係に、同じ影響に対し同じように反応するから、同一手段により多様な個人に同一の行動を生じさせる [という仮定] [つまり生活史の無視]」[ibid., p. 12]。(v) 「人間は外部からの影響を受けずとも、自発的に、所与の条件から十分に統合されたや

り方で、自分を有利にする傾向性を発達させるから、一定の傾向性を発生・抑圧するには、望ましい条件を与え、望ましくない条件を除去すればそれで十分だ [という仮定] [つまり主観的意向の無視] [ibid., p. 12]. 以上の「誤謬の指摘」に明らかなように、Thomas & Znanieckiの方法論は、すぐれて社会心理的要因を重視するものである。これら「誤謬」を裏返せば、そのまま相互作用論の方法論と考えてもおかしくないものであろう。もしこれがアメリカ社会学の「独立宣言」であるのなら、(Jamesの『原理』=アメリカ心理学の「独立宣言」とあわせて)、アメリカの社会学および心理学の「独立宣言」は、ともにすぐれて経験主義的・現象論的なものであったといえるだろう。さらに、Thomas & Znanieckiの著名な「態度」概念は、「社会的世界における個人の実際の、又有り得べき活動を決定する個人的意識の過程」[ibid., p. 22]と定義され、これは、「意識過程[それ自体、つまり、生理学的意識過程]とは峻別されている。「意識過程とは……ある人のある状態 a state of somebodyであり、態度とは……何ものかに対しての態度 attitude toward somethingである」[ibid., p. 23, 強調原文]とされている。つまり純粋な〈心理〉変数として定義されているわけだ。かくて、CooleyにおいてもThomas & Znanieckiにおいても、等しく〈生理〉レベルは少なくともごく軽視されているといえよう。

- 167) 勿論、CooleyやThomas & Znanieckiと、Watsonとでは同じ経験主義=学習説といってもその方向が正反対である。前者は主観的意識とその周囲の文脈に接近しようとし、後者はそれを切り捨てる。Meadは、この二方向を統合しようとしたと考えることもできる。
- 168) 〈生理〉学的「本能論」から〈社会〉〈心理〉学的「社会集団論」へのアメリカ社会心理学(社会学的社会心理学)の移行過程をあとづけた試みとして、Hayes & Petras [1974, p. 391-396]が参考になった。
- 169) 巷間に広く流布した一般的理解、「Meadの理論は当時のアメリカ社会心理学者に大きな影響を与えた」に対して、Lewis & Smithの研究は、むしろそれが限定的なものであり、その存命中の影響はむしろ小さかったと主張する [Lewis & Smith, 1980, op. cit.]. (同様の見解はすでに、Cosser [1971, op. cit., p. 345]にも示されている。) Lewis & Smithの研究の全体としての目的は、その四年前のLewis論文 [Lewis, 1976, op. cit.]の目的を継承し、プラグマティズムとChicago社会学との関係を再定位することで、MeadとBlumerの立脚点の相異を明示化しようとするにある。Lewisは、初期プラグマティストに、Peirce-Meadという「社会実在論」の立場と、James-Deweyという「主観的唯名論」の立場とを区別し [Lewis, ibid., p. 348], Blumerを後者の流れに位置づけることで、Mead = 「社会実在論」者、Blumer = 「主観的唯名論」者という分離を行おうとした。Lewis & Smithの研究は基本的にこの線に沿って、実在論の流れ (Peirce-Royce-Whitehead-Mead) と、唯名論の流れ (James-Dewey-Cooley-Thomas-Small-Blumer) という区別を行おうとするものである。彼らの研究は興味深いものだが、James, Peirce, Dewey, Meadの四者に関するテキスト比較が部分的なものにとどまっている点など、(彼ら自身認めている通り)、まだ完成された研究とはいえない。(また、筆者自身、注2)に示した通り、この四者の著作に十分親しんでいるとは到底いえないので、彼らの研究の妥当性を評価することもできない。)ただ、この研究の中で注目したいのは、Chicago大学社会学部の公式記録からMeadの「人気」の実態をたどり、又、その他の指標をも用いてMeadの影響の実質に迫ろうとした部分 [Lewis & Smith, 1980, op. cit., Part. 2]である。ここで彼らは、(i)社会学博士課程の学生におけるMeadの認識度 (MeadからのPh.D.論文への引用やその講座受講者数など)は非常に限定されたものである事 [ibid., p. 208-209]. (ii)社会学雑誌、書籍等におけるMeadの認識度は、1920年半ばより高まるが、それでもそのアメリカ社会学への影響は(1935年までの分析では)ごく小さなものである事 [ibid., p. 225]. (iii)かつての大学院生へのインタビューから、Meadに特に影響を受けた者はごく少数である事 [ibid., p. 246]などを結論として提示している。こうした研究に加えて、当

時のアメリカ社会学が Spencer 社会学の「本能論」から次第に脱却し、Sumner（「内集団」と「外集団」）、Cooley（「第一次集団」概念等）、Thomas（「状況」と「解釈」の重視）等を経て、「社会集団」論へと移行しつつあったという背景 [Hayes & Petras, op. cit.] を考えるとき、Mead の〈生理〉レベルを重視する「社会心理学」が、むしろ例外的でさえあったであろう事が推測されよう。

- 170) 人間が複雑なサイバネティック機械であるという証明は、いまだ得られていない。得られているのは、一定の近似が可能である、という例証にすぎない。さらに、人間が複雑なサイバネティック機械ではない、という証明も得られているとは言えないだろう。勿論そうした主張は数多いが、しかし、過去数十年間の物理＝化学＝生物学領域における研究成果を踏まえて（ちょうど Bergson の『創造的進化』が当時の成果を踏まえて書かれたように）、そうした主張を行うことは難しいのではなからうか。
- 171) Mead はそのドイツ留学期間に、Wundt に直接学んだというわけではないらしい [Morris, 1934, op. cit., p. xiii] が、その生理学的心理学への関心は高く、そしてそれは主としてキリスト教神学の世界観から逃れるためであったようだ。その親友 Henry N. Castle は、1889 年 2 月、その手紙の中で次のように記している。「彼 [Mead] は、教会からの独立を匂わせるようなどんな決定的な哲学的見解も表明する機会を得るのは難しいと考えているようだ。他方彼は、生理学的心理学の中に無害な領域を、万能の福音主義からの異端視も破門も召かず静かに研究できる領域を見出しているようだ」[“Castle Letters”, 但し Wallace 1972, p. 406 より重引]。そして生理学への関心はその後も長く続いた、と考えてよいだろう。
- 172) 同時にまた、環境への適応性を保証する、「刺激」を決定していない「態度」部分も失われ、「態度」は「完全に社会化」されてしまう。すると、もはや環境変化への適応的対処は不可能となってしまふ。
- 173) と、このように考えると、さきに本文で検討した Lewis の、「社会化された Me」と「社会化された I」との対話、という理解にも妥当性があるように思われてくる。しかし、上の注 172) に示したように、「社会化」＝「態度の組織化」＝「刺激の決定」であるのなら、この理解は成人における「適応性」を保証しない。或いはそれとも、「変化した環境」との関係においては、過去の「社会化」はもはや「社会化されたもの」たりえないから、（従って「刺激を決定」していないから）、「適応性」は失われぬ、と考えて、「態度」は完全に社会化される、とみなすのが適切だろうか。
- 174) 言うまでもなく、ここから「準拠集団論」が発達する。但し、Mead 的「話想宇宙」は、成員の〈生理〉的「態度」と直接関係するものだが、「準拠集団」にはそれほどの直接的関係性が想定されていない。それは、多く、実体的にとらえられた〈心理〉レベルとの間に関係性を持つものである。
- 175) この点は、例えば Goff [1980, op. cit., p. 80-81] によって指摘されている。
- 176) この点から「相対的剥奪と満足 relative deprivation and satisfaction」の理論が生じる。
- 177) Mead は「態度」をはじめから Black Box とみなしているのではない。当時の生理学の水準からして、それをさらに分析・還元することは有効な結果をもたらさないと考えたものと思われる。
- 178) Mead の場合、「話想宇宙」と「態度」の「Me」部分とは必ず一貫しているから、「二重の態度取得」は、単に同一の内容が二重に「取られる」だけであり、ズレや不整合は生じない。
- 179) Mead においては、「反応は普遍的であり、刺激は特殊である」[MSS, 邦訳 93 頁]。
- 180) 例えば Chomsky において典型的に生物学的・遺伝的に〈生理〉レベルに与えられている言語能力、「文法構造」と、Mead における「態度」概念に類似性を認めることはできないだろうか。Chomsky において、「生得的言語能力は、適切な刺激が与えられれば文法を構築する」[Chomsky, 1975, 邦訳 19 頁]。一方 Mead において、「精神や知性を発達させる生理学的能力は生物学的進化の所産であり…… [その] 現実の発達 は社会的状況との関連で進行する」[MSS, p. 226. n. 27]。この両者の表現には、よく似た傾向性が認めら

れはしないだろうか。

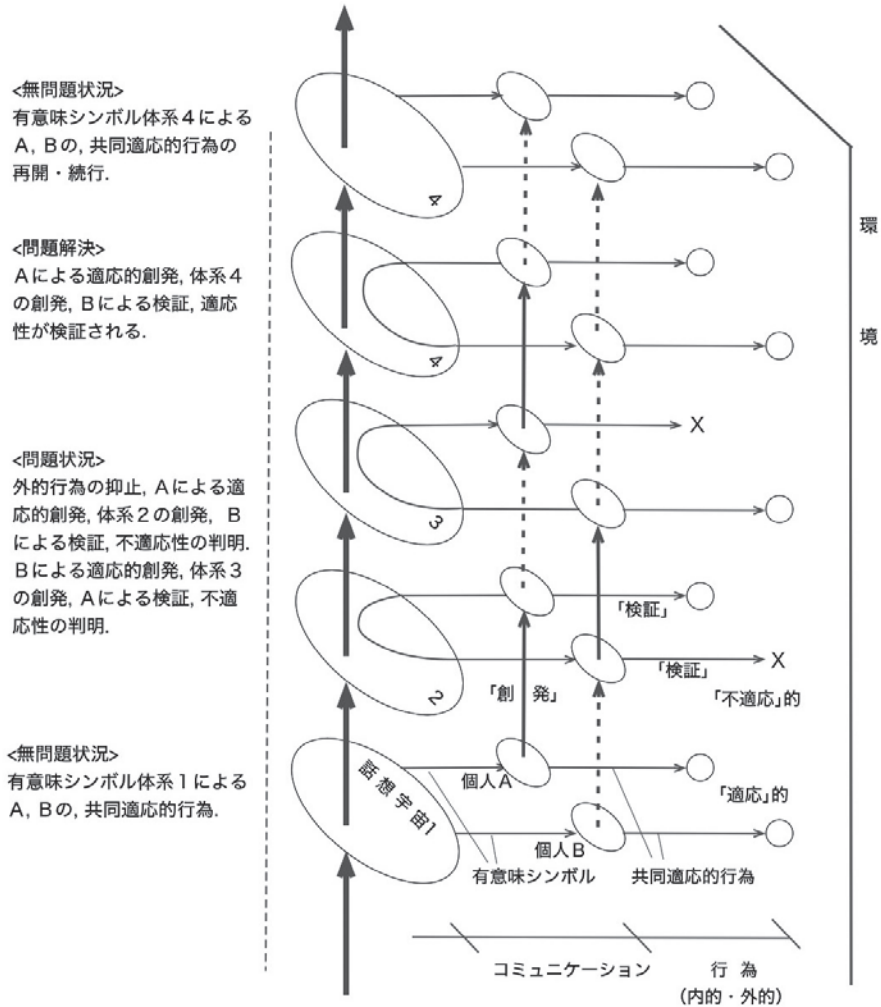
- 181) では、「合理性」はどうか、といえ、期待効用を所与の条件下で最大化させる個人、という意味での「合理性」は、必ずしも保障されていないのではないかと思われる。Meadにとって「幸運にもエコノミック・マンはまがい物」であり、「そんなものは存在しない」のであった [Mead, 1910a in SW, p. 108, 圏点引用者]。Meadが保障するとすれば、それは「社会にとっての」合理的個人であろう。

第三章

- 1) 無論, 知られる如く Mead の「社会心理学」は, 「コミュニケーションの」社会心理学であり, Mead の「哲学」は「コミュニケーションの」哲学である。従って言うまでもなく, Mead の思考に「コミュニケーション」概念は不可欠の存在である。それを知りつつ取えて前章の記述からこの概念を消去したのは, 「他者の態度を取る事」というすぐれて「コミュニケーション」類似の概念と, この概念との区別をつけておきたかったが故である。後に示すように, Mead の公刊論文のいくつかは, 全く「態度取得」概念のみで展開されている。もしそのようにして Mead の理論化が記述されうるのなら, その内部の, すでに述べられたどこかに「コミュニケーション」概念は充たされうるはずである。このように作業を進めれば, その「コミュニケーション」概念はより明確に定位されうると考えたわけである。
- 2) ここで「類似の用語」とは, その一般的定義 [例えば Schramm, 1953, op. cit.] におよそ該当すると考えられる用語の全て, という程度の意味である。
- 3) 以下数頁にわたり, 筆者は再度「過剰引用」の危険をおかすことになる。しばしば言われるように, Mead の理論が論じ尽くされているのであれば, Mead を論じた多くの論文のどこかで, これと同様の作業が行われ, 「Mead の公刊論文における 'communication' 概念の用法」に関する考察がなされている筈である。不勉強ゆえにそのような論文 (邦・欧不問) を知らないのだから, 以下の「洗い出し」作業を行う仕儀と相成った。以上, 了解されたい。
- 4) 勿論, 当然, 見落しがあると思われる。識者の御指摘を待つ。
- 5) 「共感」, 「交流」, 「感情移入」等々といった概念は, マスコミ, コミュニケーション論の中心および周辺で様々に使用されてきた。'Empathy' を主題としてコミュニケーションを論じたレビューとして, Gompertz [1960, p. 533-546] があり, その文献目録が参考になった。
- 6) ここに Lipps のいう「『本能』の事柄」とは, 生理学的な意味合いでの「本能」ではなく, 純粹に心理的な意味での「しかるべく生じる事」の意に理解した。「それ以上還元し得」ないのであるから, このように考えるのが妥当であると思う。
- 7) 勿論, 「共感」的なもの, の概念および定義は, 多様である [cf: 春木, 1975 in 春木・岩下編著, 1975, p. 1 ff] ので, 以上につきるものでは決してないだろう。ただ, Lipps において「自分→対象」の方向性を与えられた「感情移入」が, Mead の「態度取得」の場合, 「対象→自分」の方向を与えられている, という点は明らかであろう。ちなみに Lipps において「対象→自分」という方向性をもつ移入は 'Sympathie' であるという [岩下, 1975 in 春木・岩下編著, 1975, p. 143-144] から, Mead 的「態度取得」は Lipps 的 'Sympathie' により近い (少なくともその方向性において) ということになろう。要するに, E. B. Titchener による 'Einfühlung' の英訳が 'empathy' であった [cf: 岡部, 1969, p. 87] というところから, 英語における 'empathy', 'sympathy' と独語における 'Einfühlung', 'Sympathie' という具合に, 概念関係が複雑化しているものようだ。従って, Mead が, 「Lipps の Einfühlung」[PA, p. 427], 「Lipps の empathy」[PP, p. 123] というときは, 本文に示した如き, 「自分→対象」という方向性をもつ Lipps の「感情移入」に対して, 「対象→自分」という方向性をもつ自身の「態度取得」を対抗させている, と考えられよう。(「態度取得」は能動的な過程ではあるが, 対象の「態度」が自分によって取られるのであるから, これは「対象→自分」の方向性をもつと考えられよう。現に, Mead は, 本文中に示したように, 「態度取得」は「投射 (自分→対象)」ではない, としている。) 以上述べた点までは, 「共感」的なものと「態度取得」との関係が示されうると考えるが, より莫然とした用法での 'empathy', 'sympathy' 等について, それらの明確な概念関係を示すことは (現時点で筆者には少なくとも) できない。今後より深く検討され

るべき問題であろう。なお蛇足的に補言しておけば、本論のこの部分に関連して筆者が参照した春木・岩下編著 [1975, 前出] は、「共感」関連概念を理解するに有効であったが、Mead の「役割取得」に言及し [同書 55 頁]、また Dymond の「共感能力」を検討し [同書 141-142 頁] ながらも、後者が Cottrell の指導下に、Mead の影響を受けた研究である点が明示されていないので、Mead-Cottrell-Dymond という「社会的行動主義」の一方の流れが必ずしも追跡されているとはいえないようだ。

- 8) だから、コミュニケーションの起源は「身振りの意識されない会話」[MSS, p. 69, n. 7] に求められる。そして「意識されたコミュニケーションは……身振りが記号になるときに、つまり、身振りが、それをしていいる者、それに反応している者の双方に、それをしていいる者の後続する行為に関する明確な意味つまりシグニフィケーション^{ミーンイング}の伝達性を伝えるようになるときに、生起する」[ibid.]。従って、Mead 的コミュニケーションは、そもそもその「起源」の定義からして、集団成員に共通の反応を生じさせるものとして想定されているようだ。
- 9) 従って、Mead の論述の焦点が「個人」の側によっているときには、「態度取得」概念が多用され、「社会的視野が強調されるときには、「コミュニケーション」概念が使用される、という表記上の相違が考えられるだろう。
- 10) Mead の「意味」の定義「Aによる行為の完成を導くBの反応」には、一見、「対象」が含まれていないかにみえるが、Mead の理論化からすれば、そもそも「(物的) 対象についての意識」自体、社会過程内での自我析出にともなって、社会的に生じ、かつ決定されるものである。「社会的行動を通じてのみ、個人は観念を持つ」[Mead, 1982, p. 133] のであり、「知覚対象 percepts の内容は、ただ有機体の態度が組織化されることによるのみ得られるものなのである」[ibid.]。従って、Mead の「コミュニケーション」論が、「対象についての有意味なシンボル」を含むものであることは明らかである。
- 11) A の「Me」を知っているBにとって、A の「沈黙」は、自身にとっての「問題状況」とはならないかも知れない。B の知るA の「Me」が、会話を「長く中断させる」ものでなかったなら、このときはじめてB は「問題状況」に直面し、思考を機能させる。(例えば、A の思考過程を推測し、その会話中断の原因を探ろうとする、等々。)
- 12) 以上の筆者の Mead 理解を、次頁に視覚化して示した。これは、A, B 両人が、同一の「問題状況」に直面した際、コミュニケーションを交わしながら「問題解決」に向かうプロセスの概略図である。なお、現実のコミュニケーション過程が、(たとえこのような Mead 理解を大局的には受容するにしても)、ここに視覚化したほどにリニアルである事はまず有り得ない。これはあくまで単なる視覚化の試みにすぎない。



*あくまで単なる図式化にすぎない。
 *ここではA→B→Aと時系列的に「創発」が起こると仮定した場合を示してある。
 *「検証」行為は外部的(現実の「実験」など)であっても、内部的(「思考実験」)であっても構わない。
 *この図式化にみられる上行性は、Mead的イメージに沿ったというにすぎず、筆者自身の意向とは関係ない。

図 15 「社会的行動主義」による「問題解決」過程とコミュニケーションの概念図

- 13) この点に関しては、Mead [1982] 所載の1927年講義ノート [Mead, 1982, p. 132-135] の「知覚における社会的要因」の部分参照。なお、部分的にはすでに本論中に引用した。
- 14) いうまでもなく、この印象の正当性を筆者自身は評価しえない。筆者が行っているのは、Mead 批判であるよりは、筆者の Mead 理解への自己批判である可能性大である。
- 15) であるからといって、前章末に示した暫定的な Mead 理解ないし批判をひるがえすつもりはない。
- 16) ここに「相互主観的意識」とは、次の意味で理解されている。i) 他者の意識内容は決してそれを他者が経験するようには経験できない。ii) 従って意識は常に一個人内のものにとどまる。つまり主観的である。iii) 二人の個人が各々の意識内容に対して何らかの意識を持つとき、これが両者の相互主観的意識である。iv) 或る事象に対する各々の意識内容と、それに対する相手の意識内容とが、各々によって一定程度近似

的であるとみなされる場合、「共通であるという相互主観的意識」が成り立つ。v)「相互主観的意識」は、それが i) および ii) の意味で「主観的」なものにとどまる限り、決して「相互主観的事実」とはならない。それは常に個人的意識の領域にとどまる。なお、この場合、「社会的現実」とは全き意味での現実 reality ではない。それは常に、「社会的現実についての相互主観的意識」として、各個人の個人的意識の領域にとどまる。要するに、以上の場合、個体の意識は常に個体内部にとどまり、外に出てゆくことがない。

- 17) 「交流」成立の有無と、「意味づけ」成立の有無とから、「コミュニケーションの事実と意識」について、以下の関係が与えられる。

		「意味づけ」： 共通であるという相互主観的意識	
		Yes	No
「交流」：共通 であるという 客観的事実	Yes	「コミュニケーション」： 「意識されたコミュニケーション」の事実	「コミュニケーション成立 についての無知」： 「意識されないコミュニケーション」の事実
	No	「多元的無知」： 「意識されたコミュニケーション」の非真実	/

図 16 コミュニケーションの事実と意識

- 18) 以上で筆者が想定しているのは、以下の単純な概念関係である。

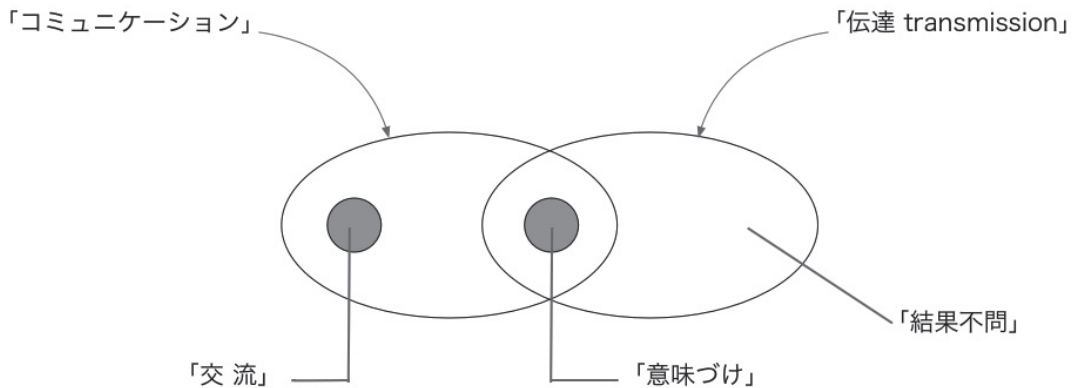


図 17 コミュニケーションと伝達

- 19) だから Mead にとって、〈心理〉を〈生理〉と併置させ、〈心理〉を「孤立した島」とみなすパラレリズムは、「家屋内の暖かさと、そこに備えつけられた暖房装置とのあいだのパラレリズムと何らことなるものではない」[MSS, 邦訳 125 頁]、つまり上述の心身二元論的平行系列は、實際上、因果関係をもつ‘平行’論に他ならず、従ってすでに‘パラレリズム’ではなかった。
- 20) であるからといって、個人の独自性や主体性が失われるものではないことはすでに示した。すなわち、i) 「態度」>「一般化された他者」である。ii) 「I (主体)」は常に「問題状況下」で「創発」的行為パターンを発達させる。これが共有化されたとき、「話想宇宙」のその部分は、その個人の主体的・独自の貢献として認められる。iii) 「Me」は一個人内に複数存在しうる。といった点によって個人の独自性・主体性が保証される。
- 21) 以上から、本論第 I 章注 24) における経験論的な「認知=コミュニケーション」関係図に対応させて、Mead 的な発想を図式化して示せば、以下の通り。解説すれば、「態度」はその三層の機能的同一性によって、コミュニケーションの「交流」を保証し、個人の社会性の根拠となる。他方、「自我」は「問題状況」下において個人の主体性・独自性を保証し、それが「話想宇宙」に反映されるに至るまでの短期間、コミュニケーションの「意味づけ」を与える。Mead の理論化は、多く「経験論」的であるが、〈心理〉レベルの「経験論」的傾向性が、〈生理〉および〈社会〉レベルの「合理論」的傾向性にはさみ込まれている事によって、全体としてのコミュニケーションの「交流」を保証している。

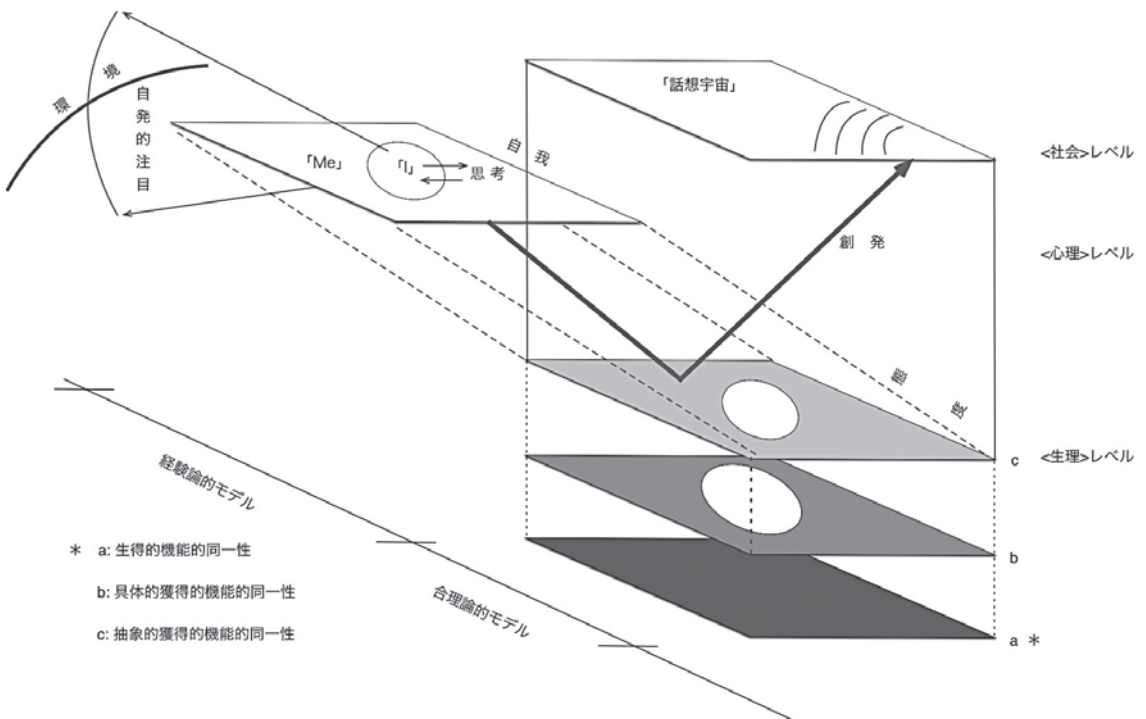


図 18 「社会的行動主義」における「交流」と「意味づけ」の概念図

- 22) 勿論、このように断言するだけの知識は筆者にはない。けれどもアメリカの社会学および心理学が、概して、社会科学の対象を扱う際には、こうした傾向が支配的だったようにみえる。現在それは、変わりつつあるようにも思われる。
- 23) ここで筆者は、人間についての事実認識に関して論じているのであって、それが別様の「モデル」によって近似的に予測可能であるか否か、という点に関して方法論の妥当性を云々しようとしているのではない。無差別曲線が個人の消費選好を一定程度近似的に代表していようがまいが、少なくともそれは実在する個人の消費選好それ自体ではない。
- 24) 言うまでもなく、「シヤム双生児」の大部分は一卵性であるから、常にその遺伝子型において少なくともホモである。従って、Plato 的発想に直接に対応するものではない。遺伝子型においてヘテロであるような「シヤム双生児」の存在ないしその記録を筆者は知らない。(全く生じえない可能性ではない筈であるが。)
- 25) ここに「近代人」と記し「西欧近代人」と記さなかった理由は以下示す通り。本文中に引用した Chang-Eng 「兄弟」は、1811年タイの貧しい中国人家庭に生まれ、1829年にアメリカに渡るまでの精神形成過程を、タイの文化内部ですごしている。つまり18才まで純粋に西欧近代的な文化に接した事はないと考えられる [cf. Fiedler, op. cit., p. 215]。従って、彼らの18才以降の第二次的社会化の影響を相当著しいものと考えない限り、「私的な領域の必要性」(本文にいう意味での)が、「西欧近代人」に特個的なものとは必ずしも断言できないケースを提供しているとも考えられる。
- 26) このことの実例は、本文中に引用した、Violet-Daisy 「姉妹」が出演した映画(つい最近、その公開禁止が解かれた Todd Browning 作 *Freaks* (1932))の中で(どこまでが「演技」であるかは不明であるが)示されている。すなわち、「姉妹」の一方がその恋人を待っている。他方は読書に熱中している。恋人(役の役者)が現われ、一方と接吻する。同時に「姉妹」の他方は、熱中していた本を取り落して、陶然とした表情身振りをする。この「映画の一場面」が「演技」ではないならば、Mead の主張は一定の実例を与えられる。
- 27) 確かに、定義を二者間の差異において求める方向も可能である。しかしこの場合にも、二者間の差異が比較しうるといふ事的前提として、比較される二者が何らかの同一カテゴリーに分類されうるといふ条件が要請されている筈である。換言すれば、差異の測定は測定対象についての妥当な定義から始まる。
- 28) Sullivan の用語の意味するところをよく伝えていると思われる、という見地から、ここでの訳語は、中井・山口訳 [1976] に拠っている。
- 29) いわゆるメディアの累積的・習慣的・長期的な効果である。
- 30) 本論は、そこまでの事を目的としてはいない。それは、今後の筆者に残された課題のひとつである。
- 31) いかなる条件下にコミュニケーションの「合理論」≡〈弾丸理論〉的事態が生じ、又、いかなる条件下で「経験論」≡「主体的・選択的接触」が生じるのか? おそらくこの点こそが、「今後の課題」としては最大のものであろう。
- 32) マス・メディア内容と、「話想宇宙」との類似傾向は最近特に著しい。つまり、個人のどんな「私的な領域」も、メディアという「ネットワーク」に「客観化」される「接近可能性」を与えられている。但し勿論、Mead の「接近可能性」は成員全てに開かれているが、「アクセス権」はその不在に端を発している。現実には、「客観化」される情報内容は極めて限定されている。
- 33) ただし、Mead 的な人間が、極めて広範な刺激に対して再帰的性格を見出す事は忘れられてはならない。新生児がTV画面の「母親像」の「態度を取る」ことは全く有り得ない可能性であろうか?

- 34) かつて、Cなる三人組のアイドル歌手が‘解散記念’の全国ツアーを行った。そのツアーの全てを追いかけて、ビデオに収録した熱狂的ファンがおり、東京での‘最終コンサート’終了直後にインタビューを受けた。その青年は、疲れ果てた表情で、「終ってくれて嬉しい。これで家に帰って休める」と答えていた。この青年が収録したビデオ・テープをその後も大切に保管しているか、筆者には疑問である。
- 35) 要するに、この例示において筆者はMeadの理論化の「曖昧さ」を最大限利用しているということだ。さらに言えば、Mead的概念化がそもそも現代日本のマス・メディア状況の研究に対して適切なものであるか否か、という点（それは何もMeadの理論に限ったことではないが）については、本論ではこれを一切考慮していない。
- 36) Meadにおいては、「共同適応的」である事が第一に要請されているので、「合理性」にも限定が付される。前章注181) 参照。
- 37) すなわち、危機的状況下では、常態での社会的ネットワークが破壊され、新しく、自生的・一時的なニューズのネットワークが形成されるプロセスが、詳細に論じられている。

参考文献

以下に示すのは、i) 本論中に引用した文献、ii) 実際に引用はしなかったが、本論執筆の参考となった文献の一部、である。(なお、ここに「実際に引用」とは「」内に原文を忠実に使用することをいう。)

* 発表・発行年は、可能な限り、初出、初版の年にそろえた。

* () 内は、欧米語文献で邦訳のない場合、実際に引照した版ないし刷の年代、邦訳のある場合でこれを引照した場合は、最初の邦訳年又は改版後最初の出版年を示す。又、改訂版発行年を示す場合もある。

* Mead に関する Book Review は、多く本論に引用したものを除き、Bの項に一括して示した。

* Gerbner の研究に関する論争の記事は、'Gerbner' の部分に一括して示した。

* 頻出する雑誌名は、以下の Key によって示した。

Keys:

POQ: Public Opinion Quarterly

JQ: Journalism Quarterly

JC: Journal of Communication

CR: Communication Research

AJS: American Journal of Sociology

ASR: American Sociological Review

SQ: Sociological Quarterly

1978 Abrahamson, M., *Functionalism*, Prentice-Hall.

1955 Ames, V. M., "Mead and Husserl on the Self," *Philosophy and Phenomenological Research*, 15: 320-331.

1981 新睦人・中野秀一郎『社会システムの考え方』有斐閣。

1897 (1968) Baldwin, J. M., "The Self-conscious Person," in Gordon & Gergen, eds., 1968: 161-169.

1966 Bales, R. F., "Comment on Herbert Blumer's Paper," AJS, 71: 545-547.

1970 Barnlund, D. C., "A Transactional Model of Communication," in Sereno & Mortensen, eds., 1970: 83-102.

1966 Berger, P. & Luckmann, T., *The Social Construction of Reality*, (1967) Penguin Books, (1977) 山口節郎訳『日常世界の構成』新曜社。

1966 Blumer H., "Reply (to Bales)," AJS, 71: 547-548.

1967 Blumer, H., "Reply to Woelfel, Stone, and Farberman," AJS, 72: 411-412.

1969 Blumer, H., *Symbolic Interactionism: Perspective and Method*, Prentice-Hall.

1973 Blumer, H., "A Note on Symbolic Interactionism (Reply to Huber)," ASR, 38: 797-798.

1977 Blumer, H., "Comment on Lewis' 'The Classic American Pragmatists as Forerunners to Symbolic Interactionism'," SQ, 18: 285-289.

1980 Blumer, H., "Mead and Blumer: The Convergent Methodological Perspectives of Social Behaviorism and Symbolic Interactionism," ASR, 45: 409-419.

Book Reviews

Of PP:

1933 McGilvary, E. B., *International Journal of Ethics*, 43: 345-349.

1934 Otto, M. C., *The Philosophical Review*, 43: 314-315.

Of MSS:

1935 Brotherston, B. W., *The Journal of Religion*, 15: 232-234.

1935 Crawford, W. R., *The Annals of the American Academy of Political and Social Science*, 179: 272-273.

1935 Murphy, A. E., *The Journal of Philosophy*, 32: 162-163.

1935 Wallis, W. D., *International Journal of Ethics*, 45: 456-459.

1935 Kantor, J. R., *International Journal of Ethics*, 45: 459-461.

Of MT:

1936 Murphy, A. E., *The Journal of Philosophy*, 33: 384-386.

1936 Pape, L. M., *The Annals of the American Academy of Political and Social Science*, 187: 251-252.

1937 Tsanoff, R. A., *The Philosophical Review*, 46: 433-436.

Of PA:

1939 Abel, T., *American Journal of Psychology*, 52: 155-156.

1939 Larrabee, H. A., *The Philosophical Review*, 48: 433-436.

1939 Strong, S. M., *AJS*, 45: 71-76.

1961 Breed, W. & Ktsanes, T., "Pluralistic Ignorance in the Process of Public Opinion Formation," *POQ*, 25: 382-392.

1928 Bridgman, P. W., *The Logic of Modern Physics*, McMillan, (1941) 今田恵・石橋栄訳『現代物理学の論理』創元社.

1945 Bridgman, P. W., "Some General Principles of Operational Analysis," *Psychological Review*, 52: 246-249.

1973 Broyer, J. A., "Bibliography of Writings of George Herbert Mead," in Corti ed., 1973: 243-260.

1968 Buckley, W., ed., *Modern Systems Research for the Behavioral Scientist: A Source Book*, Aldine.

1977a Carveth, D. L., "The Disembodied Dialectic: A Psychoanalytic Critique of Sociological Relativism," *Theory and Society*, 4: 73-102.

1977b Carveth, D. L., "The Hobbesian Microcosm: On the Dialectics of the Self in Social Theory," *Sociological Inquiry*, 47: 3-12.

1964 Cicourel, A. V., *Method and Measurement in Sociology*, Free Press, (1981) 下田直春監訳『社会学の方法と測定』新泉社.

1975 Chomsky, N., *Reflections on Language*, Pantheon Books, (1979) 井上和子・神尾昭雄・西山祐司訳『言語論：人間学的省察』大修館.

1973 Clark, P., ed., *New Models for Mass Communication Research*, Sage.

1977 Cook, G. A., "G. H. Mead's Social Behaviorism," *Journal of the History of the Behavioral Sciences*, 13: 307-316.

1902 Cooley, C. H., *Human Nature and Social Order*, (1922) revised edition, (1964) Schocken Books.

1909 Cooley, C. H., *Social Organization: A Study of the Larger Mind*, Charles Scribner's Sons, 1929, (1970) 大橋幸・菊地美代志訳『社会組織論：拡大する意識の研究』青木書店.

- 1920 Cooley, C. H., "Reflections Upon the Sociology of Herbert Spencer," *AJS*, 26: 129-145.
- 1973 Corti, W. R., ed., *The Philosophy of George Herbert Mead*, Amriswiler Bücherei.
- 1971 Coser, L. A., *Masters of Sociological Thought*, Harcourt Brace Javanovich.
- 1971 Cottrell, L. S., Jr., "Covert Behavior in Interpersonal Interaction," *Proceedings of the American Philosophical Society*, 115: 462-469.
- 1978 Cottrell, L. S., Jr., "George Herbert Mead and Harry Stack Sullivan: An Unfinished Synthesis," *Psychiatry*, 41: 151-162.
- 1980 Cottrell, L. S., Jr., "George Herbert Mead: The Legacy of Social Behaviorism," in Reiley & Merton eds., 1980: 45-65.
- 1976 Crow, J. F., *Genetics Notes*, 7th. ed., Burgess Publishing, (1978) 木村資生・北川修・太田朋子訳『遺伝学概説・原書第7版』培風館.
- 1921 Darwin, C., *On the Expression of Emotions in Man and Animals*, 2nd ed., (1950) 村上啓夫訳『人間および動物の表情』(上・下) 改造社.
- 1978 Deegan, M. J. & Burger, J. S., "George Herbert Mead and Social Reform: His Work and Writings," *Journal of the History of the Behavioral Sciences*, 14: 362-373.
- 1956 (1970) Desmonde, W. H., "The Position of George Herbert Mead," in Stone & Farberman eds., 1970: 55-62.
- 1896 Dewey, J., "The Reflex Arc Concept in Psychology," *Psychological Review*, 3: 358-370.
- 1962 (1970) Duncan, H. D., *Communication and Social Order*, Oxford University Press.
- 1973 江藤文夫・鶴見俊輔・山本明編「講座コミュニケーション」第1巻『コミュニケーション思想史』研究社.
- 1936 Faris, E., "Book Review (of MSS)," *AJS*, 41: 809-813.
- 1937 Faris, E., "The Social Psychology of George Mead," *AJS*, 43: 391-403.
- 1967 (1979) Faris, R. E. L., *Chicago Sociology, 1920-1932*, University of Chicago Press.
- 1978 Fiedler, L., *Freaks: Myths and Images of the Secret Self*, Simon and Schuster.
- 1971 Fletcher, R., *The Making of Sociology, Vol.2: Development*, Charles Scribner's Sons.
- 1976 船津衛『シンボリック相互作用論』恒星社厚生閣.
- 1980 船津衛「自我論の展開」東北大学文学部研究年報第30号, 61-114頁.
- 1976 Gerbner, G & Gross, L., "Living with Television: The Violence Profile," *JC*, 26: 173-199.
with: Hirsch, P. M., "The 'Scary World' of the Nonviewer and Other Anomalies: A Reanalysis of Gerbner et al.'s Findings on Cultivation Analysis, Part 1," *CR*, 7: 403-456; "On Not Learning From One's Own Mistakes: A Reanalysis of Gerbner et al.'s Findings on Cultivation Analysis, Part 2," *CR*, 8: 3-37; "Distinguishing Good Speculation from Bad Theory: Rejoinder to Gerbner et al.," *CR*, 8: 73-95, ('80-'81);
Hughes, M., "The Fruits of Cultivation Analysis," *POQ*, 80: 287-302 ('80); Gerbner et al., "A Curious Journey into the Scary World of Paul Hirsch," *CR*, 8: 39-72; "Final Reply to Hirsch," *CR*, 8: 259-280 ('81).
- 1953 Gerth, H. H. & Mills, C. W., *Character and Social Structure: The Psychology of Social Institutions*, Harcourt Brace & World, (1970) 古城利明・杉森創吉訳『性格と社会構造：社会制度の心理学』青木書店.
- 1975 Gillin, C. T., "Freedom and the Limits of Social Behaviorism: A Comparison of Selected Themes from the Works of G. H. Mead and Martin Buber," *Sociology*, 9: 29-47.
- 1980 Goff, T. W., *Marx and Mead: Contributions to a Sociology of Knowledge*, Routledge & Kegan Paul.

- 1960 Gompertz, K., "The Relation of Empathy to Effective Communication," JQ,37: 533-546.
- 1968 Gordon, C. & Gergen, K. J., eds., *The Self in Social Interaction, Vol.1: Classic and Contemporary Perspectives*, John Wiley & Sons.
- 1979 Gumperts, G. & Cathcart, R., eds., *Inter/Media*, Oxford University Press.
- 1975 春木豊・岩下豊彦編著『共感の心理学：人間関係の基礎』川島書店.
- 1975 春木豊「共感の研究」, 春木豊・岩下豊彦編著, 1975, 1-9頁.
- 1974 Hayes, J. R. and Petras, J. W., "Images of Persons in Early American Sociology, Part III : The Social Group," *Journal of the History of the Behavioral Sciences*, 10: 391-396.
- 1955 Hofstadter, R., *Social Darwinism in American Thought*, rev. ed., Beacon Press, (1973) 後藤昭次訳『アメリカの社会進化思想』研究社.
- 1967 Homans, G. C., *The Nature of Social Science*, Harcourt Brace Javanovich, (1981) 橋本茂訳『社会科学の性質』誠信書房.
- 1953 Hovland, C. I., et al., *Communication and Persuasion*, Yale University Press, (1960) 辻正三・今井省吾訳『コミュニケーションと説得』誠信書房.
- 1973 Huber, J., "Symbolic Interaction as a Pragmatic Perspective: The Bias of Emergent Theory," ASR, 38: 274-284.
- 1973 Huber, J., "Reply to Blumer: But Who Will Scrutinize the Scrutinizers?," ASR, 38: 798-800.
- 1974 Huber, J., "The Emergency of Emergent Theory (Reply to Schmitt, Reply to Stone et al.)," ASR, 39: 463-467.
- 1963 今田恵『心理学史』岩波書店.
- 1975 稲葉三千男『現代コミュニケーションの理論』青木書店.
- 1973 稲葉三千男・滝沢正樹「解説」, 稲葉三千男・滝沢正樹・中野収訳『精神・自我・社会』349-388頁, 青木書店.
- 1975 岩下豊彦「共感の社会心理」, 春木豊・岩下豊彦編著, 1975, 121-170頁.
- 1891 (1952) James, W., *The Principles of Psychology*, (Vol.53 of *The Great Books of the Western World* series), Encyclopaedia Britannica, Inc.
- 1892 (1948) James, W., *Psychology: Briefer Course*, (1948) 今田寛訳『心理学』(上・下) 岩波書店.
- 1904 James, W., "Does 'Consciousness' Exist?," *Journal of Philosophy*, 1: 477-491.
- 1971 加藤春恵子「記号行動へのアプローチ」, 『放送学研究』23, 27-53頁.
- 1973 加藤春恵子「社会関係としてのコミュニケーション」, 内川芳美・岡部慶三・竹内郁郎・辻村明編「講座・現代の社会とコミュニケーション」第一巻『基礎理論』, 77-101頁.
- 1974a 加藤春恵子「人間コミュニケーションの二側面」, 『思想』595, 80-100頁.
- 1974b 加藤春恵子「コミュニケーションと自我」, 東大新聞研究所編『コミュニケーション』39-62頁, 東京大学出版会.
- 1980 木田元他編『講座・現象学第4巻 現象学と人間諸科学』弘文堂.
- 1960 Klapper, J. T., *The Effect of Mass Communication*, Free Press, (1966) NHK放送学研究室訳『マス・コミュニケーションの効果』日本放送出版協会.
- 1944 (1978) Kolb, W. L., "A Critical Evaluation of Mead's 'I' and 'Me' Concepts," in Manis & Meltzer eds., 3rd ed., 1978: 191-196.

- 1972 駒井卓『人類の遺伝学』培風館。
- 1972 Korte, C., "Pluralistic Ignorance about Student Radicalism," *Sociometry*, 35: 576-587.
- 1964 (1967) Kuhn, M. H., "Major Trends in Symbolic Interactionism in the Past Twenty-Five Years," in Manis & Meltzer, eds., 1st ed., 1967: 46-67.
- 1954 (1967) Kuhn, M. H. & McPartland, T. S., "An Empirical Investigation of Self-attitude," in Manis & Meltzer, eds., 1st ed., 1967: 120-133.
- 1982 栗原彬『管理社会と民衆理性』新曜社。
- 1981 Lang, G. E. & Lang, K., "Mass Communication and Public Opinion: Strategies for Research," in Rosenberg & Turner, eds., 1981: 652-682.
- 1979 Lemert, C. C., *Sociology and the Twilight of Man*, Southern Illinois University Press.
- 1976 Lewis, J. D., "The Classic American Pragmatists as Forerunners to Symbolic Interactionism," *SQ*, 17: 347-359.
- 1977 Lewis, J. D., "Reply to Blumer," *SQ*, 18: 291-292.
- 1978 Lewis, J. D., "Reply to Seeburger & Franks," *SQ*, 19: 348-350.
- 1979 Lewis, J. D., "A Social Behaviorist Interpretation of the Meadian 'I'," *AJS*, 85: 261-287.
- 1980 Lewis, J. D. & Smith, R. L., *American Sociology and Pragmatism: Mead, Chicago Sociology, and Symbolic Interaction*, University of Chicago Press.
- 1978 Lindesmith, A. R., Strauss, A., and Denzin, N. K., *Social Psychology*, 5th ed., Holt, Rinehart & Winston, (1981) 船津訳『社会心理学—シンボリック相互作用論の展開—』恒星社厚生閣。
- 1909 Lipps, T., *Leitfaden der Psychologie*, dritte, teilweise umgearbeitete Auflage, (1934) 大脇義一訳『心理学原論』岩波書店。
- 1965 Lorenz, K., *Evolution and Modification of Behavior*, University of Chicago Press, (1976) 日高敏隆・羽田節子訳『行動は進化するか』講談社。
- 1963 Maletzke, G., *Psychologie der Massenkommunikation*, (1965) NHK 放送学研究室訳『マス・コミュニケーション心理学』日本放送出版協会。
- 1967 Manis, J. & Meltzer, B. N., *Symbolic Interaction: A Reader in Social Psychology*, Allyn and Bacon; (1972) 2nd ed.; (1978) 3rd ed.
- 1950 Mannheim, K., *Freedom, Power, and Democratic Plannings*, Gerth, H. & Bramstedt, E. K., eds., Oxford, 1950; RKP, 1951, (1976) 田野崎昭夫訳『自由・権力・民主的計画』潮出版社。
- 1960 Martindale, D., *The Nature and Types of Sociological Theory*, Houghton-Mifflin, (1974) 新陸人訳者代表『現代社会学の系譜』未来社。
- 1954 McKinny, J. C., "Methodological Convergence of Mead, Lundberg, and Parsons," *AJS*, 59: 565-574.
- 1972 McLeod, J. M. & Chaffee, S. R., "The Construction of Social Reality," in Tedeschi, J. T., ed., 1972: 50-99.
- 1979 McPhail, C. and Rexroat, C., "Mead vs. Blumer: The Divergent Methodological Perspectives of Social Behaviorism and Symbolic Interactionism," *ASR*, 44: 449-467.
- 1980 McPhail, C. and Rexroat, C., "Ex Cathedra Blumer or Ex Libris Mead?," *ASR*, 45: 420-430.
- 1900 (1964a) Mead, G. H., "Suggestions Toward a Theory of the Philosophical Disciplines," in Reck, ed., 1964a: 6-24.
- 1903 (1964a) Mead, G. H., "The Definition of the Psychical," in Reck, ed., 1964a: 25-59.

- 1907 (1964a) Mead, G. H., "Concerning Animal Perception," in Reck, ed., 1964a: 73-81.
- 1909 (1964a) Mead, G. H., "Social Psychology as Counterpart to Physiological Psychology," in Reck, ed., 1964a: 94-104.
- 1910a (1964a) Mead, G. H., "What Social Objects Must Psychology Presuppose?," in Reck, ed., 1964a: 105-113.
- 1910b (1964a) Mead, G. H., "The Psychology of Social Consciousness Implied in Instruction," in Reck, ed., 1964a: 114-122.
- 1910c (1964a) Mead, G. H., "Social Consciousness and the Consciousness of Meaning," in Reck, ed., 1964a: 123-133.
- 1912 (1964a) Mead, G. H., "The Mechanism of Social Consciousness," in Reck, ed., 1964a: 134-141.
- 1913 (1964a) Mead, G. H., "The Social Self," in Reck, ed., 1964a: 142-149.
- 1917 (1964a) Mead, G. H., "Scientific Method and Individual Thinker," in Reck, ed., 1964a: 171-211, (1941) 清水幾太郎訳「科学的方法と個人としての思想家」, 『創造的知性』 159-221 頁, 河出書房.
- 1922 (1964a) Mead, G. H., "A Behavioristic Account of the Significant Symbol," in Reck, ed., 1964a: 240-247.
- 1924-25 (1964a) Mead, G. H., "The Genesis of the Self and Social Control," in Reck, ed., 1964a: 267-293.
- 1926a (1964a) Mead, G. H., "The Nature of Aesthetic Experience," in Reck, ed., 1964a: 294-305.
- 1926b (1964a) Mead, G. H., "The Objective Reality of Perspectives" , in Reck, ed., 1964a: 306-319.
- 1929a (1964a) Mead, G. H., "A Pragmatic Theory of Truth," in Reck, ed., 1964a: 320-344.
- 1929b Mead, G. H., "Bishop Berkeley and His Message," *Journal of Philosophy*, 26: 421-430.
- 1930 (1964b) Mead, G. H., "Cooley's Contribution to American Social Thought," in Strauss ed., 1964b: 293-307.
- 1932 (1980) Mead, G. H., *The Philosophy of the Present*, University of Chicago Press.
- 1934 (1974) Mead, G. H., *Mind, Self and Society: from the Standpoint of a Social Behaviorist*, University of Chicago Press, (1973) 稲葉三千男・滝沢正樹・中野収訳『精神・自我・社会』青木書店.
- 1935 Mead, G. H., "The Philosophy of John Dewey," *International Journal of Ethics*, 46: 64-81.
- 1936 (1972) Mead, G. H., *Movements of Thought in Nineteenth Century*, University of Chicago Press.
- 1938 (1972) Mead, G. H., *The Philosophy of the Act*, University of Chicago Press.
- 1956 Mead, G. H., *The Social Psychology of George Herbert Mead*, Strauss, A., ed., University of Chicago Press.
- 1964a (1981) Mead, G. H., *Selected Writings*, Reck, A. J., ed., University of Chicago Press.
- 1964b (1977) Mead, G. H., *On Social Psychology*, Strauss, A., ed., University of Chicago Press (enlarged edition of Mead (1956), with a revised Introduction by Strauss, 1977).
- 1964c Mead, G. H., "Two Unpublished Papers," Miller, D. L., ed., *Review of Metaphysics*, 17: 514-556.
- 1968a Mead, G. H., *Essays on His Social Philosophy*, Petras, J. W., ed., Teachers College Press.
- 1968b Mead, G. H., "Mead on the Child and the School," Rucker, D., ed., *School and Society*, 94: 148-152.
- 1982 Mead, G. H., *The Individual and the Social Self: Unpublished Work of George Herbert Mead*, Miller, D. L., ed., University of Chicago Press.
- 1964 (1967) (1978) Meltzer, B. N., "Mead's Social Psychology," in Manis & Meltzer, eds., 1st ed., 1967: 5-24, 3rd ed., 1978: 15-27.
- 1970 Meltzer, B. N. and Petras, J. W., "The Chicago and Iowa Schools of Symbolic Interactionism," in

- Shibutani, ed., 1970: 3-17.
- 1975 Meltzer, B. N., Petras, J. W. and Reynolds, L. T., *Symbolic Interactionism: Genesis, Varieties and Criticism*, Routledge & Kegan Paul.
- 1942 (1949) Merleau-Ponty, M., *La structure du comportement* 2^e édition, Presses Universitaires de France, (1964) 滝浦静雄・木田元訳『行動の構造』みすず書房.
- 1957 Merton, R. K., *Social Theory and Social Structure*, rev. ed., Free Press, (1961) 森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎訳『社会理論と社会構造』みすず書房.
- 1973 Miller, D. L., *George Herbert Mead: Self, Language and the World*, University of Chicago Press.
- 1982 Miller, D. L., "Introduction (to The Individual and the Social Self)", in Mead, 1982: 1-26.
- 1976 南博『行動理論史』岩波書店.
- 1975 三隅一成『行動科学と心理学』産業能率短期大学出版部.
- 1970 Monod, J., *Le hasard et la nécessité*, Édition du Seuil, (1972) 渡辺格・村上光彦訳『偶然と必然』みすず書房.
- 1936 Moore, M. H., "Prefatory Note (to MT)" in MT: v-ix; "Introduction (to MT)" in MT: xi-xxxvii.
- 1934 Morris, C. W., "Preface (to MSS)" in MSS: v-vii; "Introduction (to MSS)" in MSS: ix-xxxv.
- 1938 Morris, C. W., et al., "Preface (to PA)" in PA: v-vi; "Introduction (to PA)" in PA: vii-lxxxiii.
- 1976 Mueller, R. H., "A Chapter in the History of the Relationship between Psychology and Sociology in America: James Mark Baldwin," *Journal of the History of the Behavioral Sciences*, 12: 240-253.
- 1973 Mullins, N. C., *Theories and Theory Groups in Contemporary American Sociology*, Harper & Row.
- 1979 村上泰亮・公文俊平・佐藤誠三郎『文明としてのイエ社会』中央公論社.
- 1982 村松泰子「マス・コミュニケーションの内容」, 竹内郁郎・児島和人編, 1982, 167-197 頁.
- 1932 Murphy, A. E., "Preface (to PP)" in PP: vii-viii; "Introduction (to PP)" in PP: xi-xxxv.
- 1982 中井久夫『分裂病と人類』東京大学出版会.
- 1956a (1973) Natanson, M., *The Social Dynamics of George H. Mead*, The Hague.
- 1956b Natanson, M., "Phenomenology from the Natural Standpoint: A Reply to Van Meter Ames," *Philosophy and Phenomenological Research*, 17: 241-245.
- 1975 O'Gorman, H. J., "Pluralistic Ignorance and White Estimate of White Support for Racial Segregation", *POQ*, 39: 313-330.
- 1976 O'Gorman, H. J. and Garry, S. L., "Pluralistic Ignorance — A Replication and Extension," *POQ*, 40: 449-458.
- 1968 岡部慶三「社会心理学」, 波多野完治・藤永保編『心理学のすすめ』245-276 頁, 築摩書房.
- 1969 岡部慶三「社会的行動の理論」, 『今日の社会心理学2』3-113 頁, 培風館.
- 1973 岡部慶三「コミュニケーション論の概観」, 内川芳美・岡部慶三・竹内郁郎・辻村明編, 1973, 3-31 頁.
- 1977 岡田直之「マスコミ研究ノート」, 『新聞学評論』26号, 106-126 頁.
- 1968 O'Toole, R. and Dubin, R., "Baby Feeding and Body Sway: An Experiment in George Herbert Mead's 'Taking The Role of The Other,'" *Journal of Personality and Social Psychology*, 10: 59-65.
- 1956 Parsons, T. and Bales, R. F., *Family: Socialization and Interaction Process*, Routledge & Kegan Paul, (1981) 橋爪貞雄・溝口謙三・高木正太郎・武藤孝典・山村賢明訳『家族』, 黎明書房.
- 1966 Parsons, T., *Societies: Evolutionary and Comparative Perspectives*, Prentice-Hall, (1971) 矢沢修次郎訳『社

会類型—進化と比較—』至誠堂.

- 1971 Parsons, T., *The System of Modern Societies*, Prentice-Hall, (1977) 井門富二夫訳『近代社会の体系』至誠堂.
- 1978 Patterson, C., *Evolution*, British Museum, (1982) 磯野直秀・磯野裕子訳『現代の進化論』岩波書店.
- 1973 Pearce, W. B. and Stamm, K. R., "Coorientational States and Interpersonal Communication," in Clark, P., ed., 1973: 177-203.
- 1980 Pearce, W. B. and Cronen, V. E., *Communication, Action and Meaning*, Praeger.
- 1964 Perry, H. S., "Introduction (to Sullivan, 1964)" in Sullivan, H. S., 1964: xiii-xxxii.
- 1968 Petras, J. W., "Psychological Antecedents of Sociological Theory in America: William James and James Mark Baldwin," *Journal of the History of the Behavioral Sciences*, 9: 132-142.
- 1950 Piaget, J., *Introduction à L'épistémologie Génétique, Tome III, La Pensée Biologique, la Pensée Psychologique, et la Pensée Sociologique*, Presses Universitaires de France, (1980) 田辺振太郎・島雄元訳『発生論的認識論序説, 第三巻, 生物学思想, 心理学思想, および社会学思想』三省堂.
- 1957 Popper, K. R., *The Poverty of Historicism*, Routledge & Kegan Paul, (1961) 久野収・市井三郎訳『歴史主義の貧困』中央公論社.
- 1964a Reck, A. J., *Recent American Philosophy: Studies of Ten Representative Thinkers*, Pantheon.
- 1964b Reck, A. J., "Editor's Introduction (to SW)" in SW: xiii-lxi.
- 1980 Reiley, M. W. and Merton, R. K., eds., *Sociological Tradition from Generation to Generation*, Ablex.
- 1973 Reynolds, L. T. and Meltzer, B. N., "The Origins of Divergent Methodological Stances in Symbolic Interactionism," *SQ*, 14: 189-199.
- 1952 Roback, A. A., *History of American Psychology*, Library Publishers, (1967) 堀川直義・南博訳『アメリカ心理学史』法政大学出版局.
- 1981 Rogers, E. M. and Kinkaid, D. L., *Communication Networks*, Free Press.
- 1962 Rose, A., ed., *Human Behavior and Social Processes*, Routledge & Kegan Paul.
- 1962 Rose, A., "A Systematic Summary of Symbolic Interaction Theory," in Rose, ed., 1962: 3-19.
- 1981 Rosenberg, M. and Turner, R., eds., *Social Psychology: Sociological Perspectives*, Basic Books.
- 1969 Rucker, D., *The Chicago Pragmatists*, University of Minnesota Press.
- 1963 佐藤毅「コミュニケーション社会学の問題」, 山田宗睦編『現代社会学講座Ⅲコミュニケーションの社会学』, 1-64頁, 有斐閣.
- 1972 佐藤毅「プラグマティズムのコミュニケーション論」, 北川隆吉他編「講座・日本のマス・コミュニケーション」第1巻『コミュニケーション論』, 150-193頁, 青木書店.
- 1966 Scheff, T. J., *Being Mentally Ill: A Sociological Theory*, Aldine, (1979) 市川孝一・真田孝昭訳『狂気の烙印: 精神病の社会学』誠信書房
- 1978 Schellenberg, J. A., *Masters of Social Psychology*, Oxford.
- 1974 Schmitt, R. L., "SI and Emergent Theory: A Reexamination (Comment on Huber's Paper)," *ASR*, 39: 453-456.
- 1952 Schramm, W., "How Communication Works" , in Schramm, ed., 1955: 3-26.
- 1955 Schramm, W., ed., *The Process and Effects of Mass Communication*, University of Illinois Press.
- 1971 Schramm, W., "Nature of Communication Between Humans," in Schramm and Roberts, eds., 1971: 1-53.

- 1971 Schramm, W. and Roberts, D. F., eds., *The Process and Effects of Mass Communication*, 2nd ed., University of Illinois Press.
- 1973 Schramm, W., "Channels and Audience," in Gunperts, G and Cathcart, R., eds., 1979: 160-174.
- 1945 Schutz, A., *On Multiple Realities*, in Gordon And Gergen eds., 1968: 61-70.
- 1970 Schutz, A., *On Phenomenology and Social Relations*, Wagner, H. R., ed., University of Chicago Press, (1980) 森川真規雄・浜日出夫訳『現象学的社会学』紀伊国屋書店.
- 1977 (1978) Schutz, A. and Parsons, T., *Zur Theorie sozialen Handelns: Ein Briefwechsel*, Sprondel, W. M., ed., Suhkamp, *The Theory of Social Action: The Correspondence of Alfred Schutz and Talcott Parsons*, Grothoff, R., ed., Indiana University Press, (1980) 佐藤嘉一訳『シュッツ＝パーソンズ往復書簡：社会理論の構成』木鐸社.
- 1967 Sears, D. O. and Freedman, J. L., "Selective Exposure to Information: A Critical Review," *POQ*, 31: 194-213.
- 1978 Seeburger, F. F. and Franks, D. D., "Husserl's Phenomenology and Meadian Theory, Comment on Lewis," *SQ*, 19: 345-347.
- 1970 Sereno, K. K. and Mortensen, C. D., *Foundations of Communication Theory*, Harper & Row.
- 1966 Shibutani, T., *Improvised News: A Sociological Study of Rumor*, Bobbs-Merrill.
- 1968 Shibutani, T., "A Cybernetic Approach to Motivation," in Buckley, ed., 1968: 330-336.
- 1970 Shibutani, T., ed., *Human Nature and Collective Behavior: Papers in Honor of Herbert Blumer*, Prentice-Hall.
- 1950 Simpson, G. G., *The Meaning of Evolution*, 4th ed., Yale University Press, (1962) 阿部精一・平沢一夫訳『生命の歴史，進化の意味』山本書店.
- 1974 新明正道『社会学における行為理論』恒星社厚生閣.
- 1931 Smith, T. V., "The Social Philosophy of George Herbert Mead," *AJS*, 37: 368-385.
- 1967 Stevens, E., "Bibliographical Note: G. H. Mead," *AJS*, 72: 551-557.
- 1967 Stone, G. P. and Farberman, H. A., "Further Comment on the Blumer-Bales Dialogue Concerning the Implications of the Thought of George Herbert Mead," *AJS*, 72: 409-410.
- 1970 Stone, G. P. and Farberman, H. A., eds. *Social Psychology through Symbolic Interaction*, Ginn-Blaisdell.
- 1974 Stone, G. P., Maines, D. R., Farberman, H. A., Stone, G. I., and Denzin, N. K., "On Methodology and Craftsmanship in the Criticism of Sociological Perspectives (Comment on Huber's Paper)," *ASR*, 39: 456-463.
- 1977 Strauss, A., "Introduction (to Mead, 1964b)," in Mead, 1964b: vii-xxxi.
- 1980 Stryker, S., *Symbolic Interactionism: A Social Structural Version*, Benjamin-Cummings.
- 1981 Stryker, S., "Symbolic Interactionism: Themes and Variations," in Rosenberg & Turner, eds., 1981: 3-29.
- 1947 Sullivan, H. S., *Conceptions of Modern Psychiatry*, Norton, (1976) 中井久夫・山口隆訳『現代精神医学の概念』みすず書房.
- 1964 (1971) Sullivan, H. S., *The Fusion of Psychiatry and Social Science*, Norton.
- 1961 (1967) Swanson, G. E., "Mead and Freud: Their Relevance for Social Psychology," in Manis & Meltzer, eds., 1967: 25-45.
- 1978 竹下俊郎『マス・コミュニケーション効果の再検討』（修士論文）.

- 1977 竹内郁郎「マス・コミュニケーション研究の課題と現状」, 『新聞学評論』26, 1-6頁.
- 1982 竹内郁郎「受容過程の研究」, 竹内郁郎・児島和人編, 1982, 44-79頁.
- 1982 竹内郁郎・児島和人編『現代マス・コミュニケーション論』有斐閣.
- 1976 滝沢正樹『コミュニケーションの社会理論』新評論.
- 1972 Tedeschi, J. T., ed., *The Social Influence Process*, Aldine-Atherton.
- 1918 (1958) Thomas, W. I. and Znaniecki, F., *The Polish Peasant in Europe and America*, vol.1, Dover.
- 1957 富永健一「行動の社会学理論」, 福武直・日高六郎・高橋徹編『講座社会学』第1巻, 66-108頁, 東京大学出版会.
- 1981 友枝敏雄「社会進化論」, 『基礎社会学V 社会変動』125-153頁, 東洋経済新報社.
- 1982 友枝敏雄「社会システムの変動と進化」, 『思想』693, 36-53頁.
- 1946 (1967) Troyer, W. L., "Mead's Social and Functional Theory of Mind," in Manis & Meltzer, eds., 1967: 303-310.
- 1976 鶴見俊輔『[新版] アメリカ哲学』(上・下), 講談社.
- 1978 Turner, J. H., *The Structure of Sociological Theory*, rev. ed., Dorsey Press.
- 1979 Turner, J. H. and Maryanski, A., *Functionalism*, Benjamin-Cummings.
- 1956 Turner, R. H., "Role-Taking, Role Standpoint, and Reference Group Behavior," *AJS*, 61: 316-328.
- 1962 Turner, R. H., "Role-Taking: Process Versus Conformity," in Rose, ed., 1962: 20-40.
- 1973 内川芳美・岡部慶三・竹内郁郎・辻村明編『講座・現代の社会とコミュニケーション』東京大学出版会.
- 1968 上山春平『第二版・弁証法の系譜—マルクス主義とプラグマティズム』未来社.
- 1971 宇賀博『社会学的ロマン主義』恒星社厚生閣.
- 1968 Vaughan, T. R. and Reynolds, L. T., "The Sociology of Symbolic Interactionism," *American Sociologist*, 3: 208-214.
- 1967 Wallace, D., "Reflections on the Education of George Herbert Mead," *AJS*, 72: 396-408.
- 1930 Watson, J. B., *Behaviorism*, rev. ed., Norton, (1968) 安田一郎訳『行動主義の心理学』河出書房新社.
- 1925 Whitehead, A. N., *Science and the Modern World*, McMillan, (1981) 上田泰治・村上至考訳『科学と近代世界』松籟社.
- 1967 Woelfel, J., "Comment on Blumer-Bales Dialogue Concerning the Interpretation of Mead's Thought," *AJS*, 72: 409.
- 1961 Wrong, D. H., "The Oversocialized Conception of Man in Modern Sociology," *ASR*, 26: 183-193.
- 1916 Wundt, W. M., *Elements of Folk Psychology*, Schaub, E. L., trans., (1959) 比屋根安定訳『民族心理学：人類発達の心理史』誠信書房.
- 1974 Wylie, R. C., *The Self-Concept, rev. ed., vol.1: A Review of Methodological Considerations and Measuring Instructions*, University of Nebraska Press.
- 1980 山口昌男「文化人類学と現象学」, 木田他編, 1980, 153-178頁.
- 1957 山本晴義『プラグマティズム』青木書店.
- 1968 安田一郎「訳者あとがき」, 『行動主義の心理学』(Watson 1930 邦訳) 375-385頁.
- 1967 吉田民人「情報科学の構想」, 『今日の社会心理学4』1-287頁, 培風館.